
トライアングル・スクランブル

楽生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トライアングル・スクランブル

【ISBN】

N4883X

【作者名】

樂生

【あらすじ】

高校一年の少女と、向かいの家に住む少々強引な幼馴染。
この二人の様子を中心に、様々な人間関係と恋愛が交錯してゆく青

春群像系物語

人物紹介

倉沢 桃乃

力ノンに通う高校一年生。

性格は幼い頃引っ込み思案だつたせいか、今もどちらかというとおとなしめ。

向かいに住む冬馬とは幼稚園時代からの幼馴染。黒髪と大きな黒い瞳の少女。

西脇 冬馬

力ノンに通う高校一年生。

性格はどちらかといつと単純で熱血系。運動神経に非常に優れており、バスケが得意。身長178センチ。スッキリとした顔立ちの少年。

カノンの生徒

南 沙羅

桃乃のクラスメイト。

父が日本人で母がイギリス人のハーフ。性格は落ち込むことを知らない元気少女。

柴門 要

冬馬のクラスメイト。

表面上はクールを装っているが実は寂しがり屋な性格。少々ナルシストな面もある。

笹目 梨絵

桃乃のクラスメイト。

なぜか入学してから一度も体育に出席せず、その為に学審会にかけられそうになる。

力ノンの教師

柳川 緑

力ノンで一年英語を担当するグラマラスな女教師で冬馬や要のクラス担任。

矢貫 誠吾

力ノンで一年体育を担当する教師。桃乃や沙羅のクラス担任。

黒岩 秀樹

力ノン慈愛学園理事長。規則第一主義者。

家族・その他

西脇 衍人

冬馬と5歳違いの兄で大学生。

長身に甘いマスク、人当たりの良さで幅広い層の女性達に好かれる。

弟思いな所があり、冬馬の恋が成就するように立ち回ることがある。

倉沢 葉月

桃乃の4歳下の妹で現在小学6年生。

ませて いるため恋愛関係の空気を読むのが早い。向かいに住む衍人が大好きで

夢は衍人のお嫁さんになること。

倉沢 雅治

桃乃の父親。娘一人の父親のせいしか々心配性。

倉沢 千鶴

桃乃の母親。おつとりとした優しい性格。

西脇 啓一郎

冬馬の父親。真面目で堅物。

西脇 麻知子

冬馬の母親。ボーカリスト＆アクティブな性格。

加賀美 孝太郎

衍人と同じ大学仲間で無二の悪友。

大学内にとどまらずプライベートでもよく行動を共にしている。

安部 桜子

衍人と同じ大学で一つ年下。性格はかなりきつめて超強気。
社交的な性格なので交友関係はかなり広い。

楠木 真里菜

衍人と同じ大学で一つ年下。性格は行儀が良く、深窓のお嬢様
タイプ。

中高一貫で女子校だったため男性に対して少々身構えてしま
うところがある。

この作品は自サイトにも掲載中です

プロローグ

緑に囲まれた小高い丘の一角に建つ『カノン慈愛学園』。

その丘の下に小さな港を一望できる抜群のロケーションと、まるでヨーロッパの建物のようなモダンな外観で人気の私立高校だ。学生には「カノン」という通り名で親しまれている。

カノンの意味は『規範』。

この高校はその学園名がすべての特徴を物語つており、校則がかなり厳しいことで有名な高校だ。

共学高校ではあるが、クラスは男子と女子に完全に分けられており、尚且つ校舎も広い敷地内に大きく離されてそれぞれ建てられている。

しかもグラウンドまでも男子専用グラウンドと女子専用グラウンドが用意されていて、同じ学園内にいても昼食時以外はお互い異性の姿を見かけることはほとんどなかつた。

クラスは男女共に一学年六クラス、各クラス二十名足らずの小人数制。

それに加え、徹底しているこの学園の規律の厳しさが、我が子の学力向上と異性関係を心配する父兄達の絶大なる支持を集め続いている大きな要因の一つでもあつた。

この学園は慈愛、博愛をモットーとするスクールカラーが売りの一つである。

そのため、入学前の個人審査で本人や親がボランティア活動などを行っているかを学園側は必ず問う。

だがそれまで特にそれらの活動に携わる経験が無かつたとしても、学力と素行、それに家庭環境に特に大きな問題が無ければ学園への入学は許可されることが多い。

が、是が非でも我が子をカノンへ入れたいと真剣に願う親の中には面接前に熱心にボランティア活動に従事し、その活動の詳細を面接で得々と語る者まで現れるらしい。

この学園が保護者にとって魅力の高い高校だということがそこからも容易に伺うことができた。

昨日は新入生の親も来校しての入学式が厳粛に執り行われ、新入生にとっては今日が初めての登校日だ。桜の蕾が少しずつ芽吹き始めるこの季節、丘の上に建つ白亜の高校に向かって歩く少女が一人。

少女の名は倉沢桃乃。
くらさわももの

肩を少し越したセミロングの濡れるような黒髪と、同じように大きな黒い瞳が特徴の、細身で比較的おとなしい性格の少女だ。

学力は現時点では中の上。

上位ベストランクには入っていないが下位ランクで目立つこともない、ごく普通の学力だ。

しかしそれはあくまでカノンの中のランクであって、カノンの偏差値は他の近隣の私立高校よりも高水準のため、桃乃の学力は決して低いものでは無かつた。

憧れのカノンの制服を身に着けられた嬉しさで、桃乃はウキウキしながら歩いていた。長い黒髪がその度に大きく揺れる。

カノン女子の制服は有名なデザイナーブランドの一つで、群青色のジャケットにネクタイ、そして膝上十センチのブラウンチェックタイプのスクールスカートだ。

男子も上のジャケットとネクタイは女子と同じ物で、ボトムは濃いグレーで一番細いスケータータイプ。靴は男女とも黒のローファーだ。

こここの制服で特に桃乃の一番のお気に入りは、今自分の胸元で鈍く光っている青いネクタイだ。

深い海のような鮮やかな色のジャケットの胸元を引き締めるネクタイは、ブルーにほんの少しの光沢が入つていて太陽光の当たる角度によつて鈍く輝く。

「あ、あの子カノンの生徒よ」

今朝の電車内に差し込む光でそのネクタイがわずかに光り、それに気付いた他高の生徒がヒソヒソと後ろで噂していたのがたまらなく快感だつた。

嬉しさのあまり今にもスキップしそうな歩き方をしていた桃乃の小さな頭に、突然、ポンッと大きな何かが乗せられる。

「きやつ！？」

頭頂部に感じる「ゴツゴツした感触。誰かの大きな掌のようだ。驚いた桃乃は身を翻して後ろを振り返る。

「……なあ桃太郎、お前なに朝からそんなに浮かれているワケ？」

長身で肩幅のある男子が、うつすらと両目にかかる長い前髪を空いている片手で邪魔そうにかきあげ、桃乃を見下ろしている。

桃乃は一瞬息を呑んだ後、その少年に向かつて怒りをぶつけた。

「とつ冬馬……！ もう、いきなりなにするのよ！ ビックリしたじゃない！」

桃乃に「冬馬」と呼ばれた少年、西脇冬馬にしづきとうまは桃乃の頭を軽く叩いた大きな右手を広げながらヘッと屈託の無い笑顔を見せた。

「だつてよ、お前今にも踊り出しそうな歩き方してたぜ？ 公衆の面前で恥かかないように俺が止めてやつたんじゃねえか。感謝してほしいね」

「か、感謝……？」

いきなり驚かせて謝るどころか感謝しろ、と言い出す冬馬に桃乃是啞然とする。

「なあそれよりよ、なんでお前今朝さつやと一人で行つちまうんだよ？ 一緒に行こうと思つて朝お前んちに寄つたんだぜ？」

「なつなんで私が冬馬と一緒に登校しなきゃいけないのよ？」

「なんでつて……同じガツコじやねえか。家だつて真ん前だしよ」

桃乃の家と冬馬の家は昔からお向かい同士の「近所さんで二人は幼馴染の間柄だ。

「あつ、わーかつたつ！ 俺、分かつちやつたよ！」

身長百七十八センチの冬馬は急に相好を崩すと、すかさず長身を折り曲げて二十七センチ下にいる桃乃の顔をグイッと覗き込む。

その拍子に冬馬の前髪が自分の前髪に微かに触れ、反射的に桃乃は半歩身を引いた。

「お前わー、嬉しさのあまり恥ずかしいんだろ？ この俺と歩くのがさ」

「バツ、バツカジやないの！？」

桃乃はそう言い放つとブイと顔を背け、さつやと先に歩き出した。

普段はおとなしい桃乃だが、幼馴染の冬馬の前では最近よくこんな態度になってしまつ。

後方から冬馬の大声が響く。

「おーい桃太郎～。図星だからってそんなにむくれるなよ～！」

桃乃はなんとかこの幼馴染を振り切ろうと足を早めた。

が、今の一人の歩幅は約倍ほども違うので、すぐにあつさりと追いついてきた冬馬は桃乃の横に並ぶとさりげなく自分のペースを落す。

しかし歩幅を合わせてもらつてることに気が付いていない桃乃は、右斜め上の冬馬の顔を見上げて一旦足を止め、再び強い口調で切り出す。

「冬馬つ、いいかげんに私のこと桃太郎つて呼ぶのは止めて！」「は？ だつて桃太郎じやん？」

「だから止めてつてば！」

幼い時は桃乃のことを「ももちゃん」と呼んでいた冬馬だが、成長するにつれて小学校高学年になつてからは「桃乃」、そして中学一年以降はなぜか「桃太郎」と呼ぶようになつっていたのだ。

「ま、そんな細かいことにイチイチこだわるなつて。どーセどっちも大して変わんねえじゃん？」

冬馬は桃乃から視線を外し、前方を見たままハハハッと快活な笑い声を上げた。

そんな冬馬を横目にまた歩き出した桃乃は、（昔はこんな奴じゃなかつたのに……）とイライラしてくる気持ちを心の中だけでなんとか抑えることに腐心する。

幼い頃は桃乃より背が低く、「モモちゃん、大きくなつたらボクのお嫁さんになつてよね」なんて可愛らしいことを言つていた冬馬だったのに、気が付けばいつのまにか背もこんなに大きく追い抜かれて桃乃はさつきみたいに「桃太郎」と呼ばれ、いつもからかわれ

るようになつてしまつていたのだ。

カノンに近づくにつれ通学する生徒の数も少しづつ増え出し、桃乃はできるだけ冬馬と並ばないように歩こうと必死に努力を続けた。だが元凶の冬馬が「なあなあ桃太郎。この間のさ……」などとあれこれと話しかけてくるため、結局その努力はすべて無駄に終わってしまった。

よつて今の桃乃に残されたせめてもの抵抗は、冬馬の呼びかけに一切返事をせず、一度と右側に顔を向かないで競歩のようなスピードでスタスターと歩くことだけだった。

ようやくカノンの正門が見えてくる。門柱横に一人の若い女性が立っていた。

グラマラスな体を黒いスースで包んだ魅惑的な容姿のその女性は、桃乃達の方にゆっくりと視線を向ける。

「おはよう

年は二十代半ば辺りだろうか。女性の発した声はよく通るソプラノ声だ。

「お、おはよひじやいします」

「おはよっす」

初めて会つ女性だつたが、たぶんこのカノンの教師なのだつ。

その女性は開いていた名簿を一度閉じ、意味ありげに呟く。

「へえ……新入生が初日からカッフルで登校するの、久しぶりに見たわ

毛先を柔らかくカールさせたロングヘアに唇に綺麗にひかれたパールピンクのリップが艶かしい。

「わつ、私たちそんな関係じや ありません！」

桃乃は赤くなつて慌てて否定をした。一方、冬馬は否定も肯定もせず、黙つて立つている。

「あなた達新入生ね？ 名前教えてもらえるかしら？」

「は、はい。倉沢桃乃です」

「……西脇冬馬ツス」

「倉沢さんに西脇くんね……」

その女性は右手に持つていた「新入生名簿」と書かれた名簿を再び開き、パラパラとページをめくつて中に一人の名前が記載されていることを確認する。

「ね、どっちでもいいけど仲良く登校はここまでよ。ウチは男女交際の規律が厳しいの知ってるわよね？ この先、女の子は左、男の子は右の校舎に行つてね」

グロスのせいで濡れたような唇の女性はそう言つとそれぞれ進む方向を指差す。

「分かりました」

桃乃はそう返事をすると冬馬の方を一切見ないまま左の校舎の方へ歩いて行く。

正門前でまだその桃乃の後ろ姿を見送っていた冬馬に女性がフフツと笑いかけた。

「ねえねえ君、もしかして振られちゃったの？」

感情がすぐ表情に出る性格の冬馬は途端にムツとした表情を浮かべる。

「……そんなんじゃないツスよ」

そして不機嫌な顔のまま、サッと身を翻すと右側の校舎に走り去つていった。

カノンで英語の教科を担当する女性教師、柳川緑やながわみどりは好奇心の混じ

つた目で冬馬の後姿をしばらく田で追つた。そして唇の右端を小さく上げて笑うと、新入生名簿を再び開く。

白く細い指が名簿の上をなめらかに滑りはじめた。

やがてその指は静かにその動きを止めたが、その指がさした先は冬馬の履歴表が載っているページだった。

(まつたく冬馬つたら……！)

カノン登校初日の浮かれた気分も、あの憎たらしい幼馴染のせい
で一気に台無しになってしまった。

イライラした気分を抱えたまま左側の白い校舎に入る。
玄関を抜けたすぐの場所に大きなホワイトボードが設置してある
のが見えた。

ボードに大きな紙が貼られてある。

その前でキヤー キヤーと騒ぐ女子生徒達の大群。

どうやらクラス分けの名簿が貼られているらしい。

田の前で揺れ動き続ける大勢の人の波は一向に静まる気配が無く、
身長百五十八センチの桃乃はなかなかその名簿を見ることが出来なかつた。

「Wao！ すつごい人だかりね！」

頭頂部上空から大きな声が振ってきた。

桃乃がその声の方向をチラツと見上げると、ツインテールの亜麻
色の髪がまず最初に目に飛び込んできた。

背が高く、少し青みがかつた瞳に抜けるような白い肌、そして微
かなそばかす顔の少女は振り返った桃乃と目があうとにこやかに笑
いかけてくる。

「Hi！ あなたのクラスは？」

いきなり話しかけてきたその人懐っこいそうな少女は桃乃に向かってワインクをする。

「えっ、まだ分からないの。……よく見えなくて」

「じゃ、あたしが見てあげるー。あなた名前は？」

「倉沢桃乃だけど……」

「OK！ ちょっと待つててね！」

桃乃より頭一つ分以上は優にあるその高身長を活かし、ツインテールの少女はボードを上から順に丁寧に田で追つていった。やがて少女の口から感嘆の声が上がる。

「モモ！ あなた二組よ。あたしと一緒に！」

いきなり自分の名前を略称で呼ばれて桃乃は少々戸惑つたが、同時にこの底抜けに明るそうな少女にぐいぐいと惹かれだしていた。

「ねつ、一緒に教室に行こうよー！」

少女が桃乃を誘う。桃乃は慌てて頷いた。

ボード前の喧騒から逃れると二人は並んで歩き出す。

桃乃が訊くよりも早く、その少女は自己紹介をした。

「あたしみなみさら南沙羅。沙羅って呼んでね！ 桃乃ってちょっと呼びづらいからモモって呼んでいい？」

「うん、いいよ。ね、沙羅さん、あなたって……」

「あ！」

そう叫ぶと急に沙羅は顔の前で大きく右手を何度も横に振り、桃乃の言葉を遮る。

「モモ！ だから“さん”はいらんってばー！」

大振りのジャスチャーであまりにもキッパリと言われたので、桃乃は訊きたかった事を言つ前にあらためて沙羅の名前をもう一度呼び直した。

「さ、沙羅

「なに？」

「あのね、あなたって、ハーフなの？」

一瞬の沈黙。

それまで「一二一」していた沙羅の表情が固まつたように見えたので桃乃は慌てて謝った。

「「」「ごめんね。もしかして訊いちゃいけなかつたかな……？」

「ううん、ぜーんぜん！」

沙羅は再び大きく笑顔を見せる。

「うん、ハーフだよつ。パパは日本人でママはイギリス人なんだ」

「やっぱり。あなた色がとつても白いものね」

桃乃も幼い頃から色白な方だったが、肌の白さでは沙羅の方が明らかに上だつた。

「でもさーモモ、その白さのせいでホラ見て！」

と沙羅は自分の頬を指差す。

「「」んな風にそばかすが田立つちやつのはよ。結構困つてるのよね～

大袈裟に肩を竦めると沙羅は大きくため息をついた。

そのいかにも外国人的なオーバーリアクションがおかしくてつい桃乃はクスクスと笑つてしまつた。

「モモー、ここは笑うところじゃないよ？ 女の子の美容の悩み話なの！」

そう言いながら沙羅は腕組みをすると頬を小さく膨らませ、わざと膨れた真似をする。

「「」「ごめんなさい。沙羅のその身振りがちょっとおかしかつたの」

「あーなるほどね！ うちのママが普段から大振りのジェスチャーをよくするからついつつちやつの一！」

膨れつ面を止めた沙羅は、組んでいた両腕を外して背中に回して快活に笑う。

登校当日にこんなに明るくて楽しい女の子と友達になれてなんて嬉しいな、と思いながら桃乃是沙羅と一緒に一年二組の教室に入る。

ついたままであんなにイライラしていた気持ちはすでに遠くに吹き飛んで桃乃の脳裏から完全に消え去っていた。

一方その頃、冬馬も自分が四組だということを確かめて教室に入った所だった。

教室内に一歩入ると男・男・男の光景。

例え教室内の壁は真っ白でも中学の時とはまつたく違うこの男臭い空気までは変える事が出来ない。

一切の華が無いそのままのむれぐれしきで冬馬はため息をついた。

「ヤ」行くのは『シワトの星』じゃないか?」

冬馬の背後からややからかい氣味の声がかかる。「シワト」とは冬馬や桃乃が通っていた白杜中学のことだ。

かかった声の方角に冬馬が目をやると、長髪をみでかなり細身の男が両足を机の上に上げてニヤニヤとこちらを見ていた。

「やつぱりシワトの星だ。西脇冬馬だろ?」

「……誰だお前」

腕組みをしながら薄ら笑いを浮かべて自分を見ている、この端正な顔のヤサ男が気に入らなくて冬馬はぶつきばつな返事をした。
「おじおじ、出会い頭にそんなに睨むなよ。俺は柴門要。七海中だ」

さくもかなめ
なみ

「七海……」

七海中学は冬馬が白杜中学で所属していたバスケ部でよく対抗試合をしていた中学だ。

「白杜のバスケ部がこっちに来て練習試合をしてた時、よく見に行つてたんだ。お前、ここでもまたバスケやるのかよ?」

「あ? 別にお前には関係ないだろ」

「冷たいねえ。これからは同じクラスメイトだぜ? 仲良くなれりや」

切れ長の目にかかり気味な前髪を搔きあげると要は挑戦的な眼で冬馬を見据え、もう一度ニヤッと笑う。

その時、廊下の奥から甲高い靴音が響いてきた。

靴音は四組の前でピタリと止まり、同時に教室の扉がガラツと開く。

そして再びハイヒールの音を高らかに響かせて一年四組の教室内に一人の女性が入ってきた。

教室に入ってきたその女性が、今朝方、正門前に立っていた教師だったことに冬馬は気付く。

むさくるしいこの男ばかりの教室にいきなり匂い立つような色香をふりまく女性が入ってきたので教室内は一時騒然となつた。

そんな男子生徒達のざわめく様子を肌で感じた縁は満足そうに微笑みながらカツカツと足音高く教壇に立つ。

「じゃあ皆どりあえず適当に座つてね。後で改めて席を決めるから」

そして縁は後ろの黒板に一旦体を向けると赤いチョークで「柳川縁」と書いた。

「ハイ、これが私の名前。柳川縁です。今日から私が君達の担任です。じゃあ一年間よろしくね」

縁がそう発言し終わつた瞬間、教室の後ろの方から教壇に向かつて声がかかる。

「先生は彼氏いるんですか?」

発言をしたのは要だ。

「彼氏? 今はいないわよ。一応募集中って所かしらね」「縁はあつたとやうづくめ、そのノリのいい発言に畠座に教室中が

湧きかかる。

「先生ーー! 僕と付き合つてーー!」

「先生ー、美人ッ!」

「ミドリ、愛してるーー!」

一年四組の男子生徒達はたちまち悪ふざけをはじめた。

「ちよつとちよつとーー!」

リップと同じパールピンクの長いネイルがピンと立ち上がる。「私、これでも結構面食いなんだからね。先生にも選ぶ権利あるわ

よ?」「じゃ、俺はどうですか、先生?」「

また要が口を開く。

「…………そうね…………」

と縁は咳き、一番後ろの席にでると座つてこる要の前にまでゆつくつと歩いてきた。

黒のタイトミニからあらうと伸びる白い脚の動きに教室内の熱い視線が一斉に注がれる。

縁は要の横にまで来ると細い腰に手を当つて、その顔を上から遠慮無く眺めた。

「……ウン、悪くないかも。君、なかなかいい男じゃない」「

「そりゃあどいつも」

要は自分の姿勢を整められても眉ひとつ動かさずに対話をした。自分の姿勢には相当の自信を持つているようだ。

「でもね……」

と言いながら縁は腰の手を離し、机の上に乗せたままの要の両足をグイと掴みあげると自分の手前に引き寄せ、勢よく放した。

「！？」

ダンツと大きな音と共に要の両足が床に着き、要の顔に一瞬驚きの色が走る。

「いい男はマナーもキチンとしてないとね。残念だけどあなたはまだ二流みたいね」

要が自分をからかっていることにとっくに気付いていた縁はそう切り返す。「二流」と言われた要の顔が一瞬険しくなった。

縁はそんな顔の要を見下ろすとフフッと満足そうに小さく笑い、そして教壇に戻りがてら、冬馬の横に来ると足を止めて急に身をかがめる。

「ね、君もなかなかイイ線いつてるわよ？」

いきなり耳横で話し掛けられた冬馬は驚いて椅子の上で身を引いた。縁は冬馬にしか聞こえないぐらいの声で更に囁く。

「……彼女から私に乗りかえる、なんてどうかしら？」

「ハア！？」

たじろぐ冬馬に縁はフフッと微笑み、教壇へと戻る。再び教壇に立つた縁はもう完全に教師の顔に戻っていた。

「ハイ、じゃあまず出席を取ります。その後、クラス委員を決めますからね。私は愚図愚図するのが嫌いなの。さつさとやつちやいましょう。じゃあ、安藤卓くん……」

縁の点呼の声が一年四組の教室内に響く。冬馬は今しがた耳横で縁から言われた台詞にまだ動搖していた。

(なんなんだあの先生は！?)

腕組みをした要が氷のような冷たい目つきで前方を見ている。

その視線の先は冬馬の背中だった。

だが自分の背中に要の冷たい視線が突き刺さつていることをこの

時の冬馬はまだ知らなかつた。

その後、最初のホームルームを無事終えた縁はいつも通りヒールの音を高らかに鳴らしながら職員室へと戻る。

入学式後最初のホームルームなので戻つてきている教師はまだ一人しかいなかつた。

縁は職員室に一番に戻つてきていたその教師とは視線を合わさないようにして自分の席につく。

すると縁の左隣の席のその教師が待ちかねていたように声をかけてきた。

「お疲れ様です！ 柳川先生のお戻り、俺にはすぐ分かりますよー！ ところどころどうでしたか、今年の先生のクラスの新入生達は？」

隣席の一年体育担当の矢貫誠吾^{やぬき せいご}は、今から二年前にこのカノンに赴任してきた教師だ。

鋭い目つきのその精悍なマスクとは反対に、あけっぴろげで気さくな性格で女生徒を中心に数多くの生徒に慕われている。

縁は左側をチラッと一瞥するとすぐに視線を手元に戻す。

「そりやあ私の足音はつるといですからね。矢貫先生じゃなくとも誰でも分かりますわ」

「おっ、なんだか今日は」機嫌斜めのようですね？ ホームルーム

で何があつたんですか？」

誠吾は団扇で自分に風を送りながら身を乗り出していく。暦はまだ四月になつたばかりだが、普段から暑がりの誠吾に団扇は必需品なのだ。

「あの矢貫先生、団扇をお使いになるのは結構ですけど、ひやりにまでばさばさと風を送らないでいただけます？」

「おお～っ、どうやら今日の縁姫は本格的に機嫌が悪いようですね」

「……いつも言つてますわよね。そのふざけた呼び方止めていただけません？」

「はいっ、それはそれは失礼つかまつりました！」

誠吾は顔の横でビシッと敬礼をすると、椅子に座つたまま芝居がかつた口調で大仰に頭を下げる。

これ以上相手にする氣も無くなつた縁は誠吾を無視して携帶用の眼鏡をかけると、さつさと次の授業の準備に入りはじめた。

あつさりとつれない態度をとられ、まだ縁と会話をしたかつた誠吾は仕方なく縁の姓を呼ぶ。

「あの～柳川先生、今年の先生の坊主クラスはどうですか？ 先生をてこずらせそうな悪ガキはいますか？」

縁の脳裏につい先ほど涼しそうな顔で自分をからかつた柴門要の顔が一番に浮かぶ。

「さあ、まだ分かりませんわ」

「反抗しそうな奴がいたら遠慮せずに俺に言つて下さい！ 姫をてこずらせそうな奴は俺がビシッとシメときますから！」

また誠吾が自分のことを「姫」と呼んだので縁は手を止め、眼鏡越しにジロッと誠吾の顔を見た。

縁に睨まれてまたうつかり「姫」と呼んでしまつたことに気が付き、誠吾は頭を搔く。

「す、すみません柳川先生……」

そう謝つた後、誠吾は嬉しそうな口調に戻つて話を続ける。

「俺の担当クラスはお嬢の一年一組なんですけどね、皆可愛いくていい子達ばかりですよ！」

誠吾の言つ「お嬢」とは“女子校舎”と言つ意味で、職員間での隠語のようなものだ。緑は抑揚の無い声ですかさず今の誠吾の言葉に応じる。

「良かったですね。矢貫先生は幼くて可愛らしい子が特に好きですね」

「せ、先生！ ちょっと待つて下さいよ！」

途端に誠吾が目をむいて反論する。

「その言い方はちょっとないんじゃないですか！？ まるで俺が口リコンみたいに聞こえますよ！？」

「あらそりでしたの？ 私てつきりそりだと思つていましたけど」

団扇の動きがピタリと止まる。容赦の無い緑の言葉に誠吾が一瞬たじろいだのだ。

「……ひつ、ひどいな先生は！ あんまりですよ！ 俺、今年の夏で二十七になるんですよ？ 一回りも年の離れた女の子達にそんな感情持てないですよ！」

「あらそうですか。それは失礼しました」

緑は表情を変えずに冷たい声でそう答えるとまた授業の準備を始めた。

誠吾は納得のいかない顔で緑の横顔を見ていたが、やがて渋々自分が机に向き直った。

二人の間に沈黙が訪れる。

しばらくの間エアコンの作動する微かな音だけが職員室内を占領したが、誠吾は急にまた緑の方に向き直ると憤りを含んだ大声を出した。

「だつ大体ですねツ！..」

「キャツ！？」

いきなり誠吾が大声を出したので縁は驚いて持っていたボールペンを床に落としてしまった。

ボールペンは一度床で大きく跳ねた後、二人の後ろの方に転がつていく。

縁が驚いた様子を見た誠吾は憤りを腹の底に押し込んで声の音量を下げる。

「……大体、教師と生徒の恋愛はここの一一番の禁止事項じゃないですか？……！」

ありとあらゆる細かい規則があるカノンでは「職員と生徒の恋愛」は当然の如くタブー中のタブーだった。

誠吾は椅子からゆっくりと立ち上ると後ろに転がったボールペンを拾い、それをスッと差し出しながらじっと縁を見つめた。

何かを言いたそうな誠吾の様子に気付かないフリをした縁は、ボールペンを受け取ると「済みません」とだけ礼を言い、静かにまた机に向かう。

そんな縁の態度に誠吾はあらためて念を押すように言った。

「柳川先生、先生だつてもちろん分かってらっしゃいますよね……！？」

しかしそれに対する返事は無く、ただサラサラと縁がボールペンを走らせる乾いた音だけが一人きりの職員室内に静かに流れ続けていた。

力ノンの登校初日が無事に終了した。

「ね、モモ、途中まで一緒に帰ろうよー。」

スクールバッグを片手に沙羅が桃乃を誘う。今日半日で沙羅とだいぶ打ち解けることができた桃乃は「うん！」と軽やかに返事をした。

「モモの家って何人家族なの？」

「うちは四人家族よ」

一緒に下校しながら一人はお互いの事や家庭の事などを色々と教えてあう。

桃乃の家庭は父親と母親、そして四つ下の妹がいる四人家族だ。
父親の倉沢雅治は出版社に勤務する編集者で、母親の千鶴は専業主婦。妹の葉月は来年中学生になる。

沙羅の父親の南聰志は航海士で一年のほとんどが海の上であります。沙羅の父親の南聰志は航海士で一年のほとんどが海の上であります。会えないため、今は母親のエリザと二人暮しなのだと沙羅は語った。

「あーあ、いいなあ姉妹つて。あたしもお姉ちゃんか妹欲しかった

」

一人っ子の沙羅は姉妹のいる桃乃のことをとても羨ましがる素振りを見せる。

「でもいたら口ゲンカばかりになるかも。最近妹すゞく生意気になっちゃって」

「だけじゃつぱり羨ましいよ。ホラ、 “ Blood is th

icker than water”って言つてしまふ？」

「んつと、血は水よりも濃いつてことね」

「ううう」

「沙羅、中学で英語のテストなんかいつも満点だつたでしょ？」

「うん、まあね。でも単純なスペルミスは今でもしょっちゅうだよ。話すのはいいんだけど書くのは苦手なんだよね~」

「いいなあ、私あんまり英語得意じやないの。でも物理よりはたぶんマシだと思うけど……」

「あつ、あたしも物理は大嫌い！　だつてこの間教科書見て眩暈がしたもん！　だからきっとこの先、物理の試験前夜は徹夜で公式暗記することになりそうだよ」

「あつ、沙羅も？」

「うん！　でもあたし、一夜漬けには結構自信があるからノープロブレム！」

楽しそうに笑い会う二人の姿は今日初めて知り合つたばかりとはとても思えない。

木立の通学路を抜けると駅はすぐだ。

「モモの家はどうちの方？」

カノンがある谷内崎駅から東へ行くルートは県内やあわいで、西は中和泉なかいいずみになる。

「私は県内」

「なーんだ反対かあー。あたしは中和泉なんだ。じゃあここまでだね。また明日ね！」

沙羅は右手を振りながら明るい声を出す。

「ねえモモ。今度私の家に遊びにいでよ！　モモをママに紹介したいんだ。『高校に入つて最初のベストフレンドだよ』って！」

「うん、今度遊びに行くねっ」

近いうちに家に遊びに行く約束をした桃乃はそこで沙羅と別れて

家路に着いた。

桃乃の降りる駒平駅（こまだいらえき）は谷内崎から四つ田の駅で、その駅から十分

もかからない場所に桃乃の自宅はあった。通学がかなり楽なのも桃乃が力ノンを目指した理由だ。

「ただいま～！」

三年前に外壁を塗り替えたばかりの家の玄関を開けると家のなか
ら桃乃の母親、千鶴の声が聞こえてくる。

「おかえりなさい、桃乃。制服を着替えたらずぐに下にいらっしゃ
い」

「はーい」

桃乃が一階の自分の部屋で私服に着替えて一階に下りていくと、
リビングいっぱいに甘い香りと深煎りされたコーヒー豆の香ばしい
香りが混じりあって漂っていた。

「あら、ちょっと焼きすぎちゃったかも……」

専業主婦の千鶴の趣味はお菓子作りだ。今日のお菓子はココナッ
ツをふんだんに使ったクッキーらしい。

白いフリルのエプロンにロングウェーブの髪が揺れる。

二十一で結婚しそのまま専業主婦になった千鶴は今年で三十九歳
になるが、今まであまり苦労を経験していないせいもあって実際の
年齢よりはるかに若々しく見える。

桃乃はダイニングテーブルの席につき、大きな器に盛られている
焼きたてのココナッツクッキーを一口食べてみた。

「ううん、美味しいよ、お母さん」

「そう？ で、どうだったの、学校は？」

「うん、早速友達も一人出来たし楽しくなりそう。葉月はもう塾に
行つたの？」

「ええ、ついやつた。でもよかつたわねえ」

桃乃の前にジノリの「コーヒーカップが置かれる。

「ねえ桃乃、昨日の入学式は本当に素敵だつたわよね」

「もうお母さんたら卒業式でもないのに泣いてるんだもん、恥ずかしかつた……。あの時泣いていたのお母さんだけだったんだからね？」

「だつてカノンの制服着て座つている桃乃や冬馬くんの姿を見たらつい感動しちゃつたんだもん。ああそうだ、それで思い出したわ。あのね桃乃。今朝冬馬くんがあなたを迎えてくれたのよ？」

「……知つてる」

桃乃は苦々しい顔で「コーヒーを啜つた。

「あら、「コーヒー濃く淹れすぎたかしら？」

娘の苦虫を噛み潰したような顔が「コーヒーを濃く淹れたせいだと思つたのだ。

「明日から一緒にカノンに行くんでしょ？ 冬馬くんと」

「だつ誰が！？」

その桃乃の剣幕に気圧され、おつとりタイプの千鶴は娘にそつくりな大きな目をパチパチとさせる。

「だ、だつて冬馬くん、また明日も迎えに来るつて言つてたわよ？」

「えつ、お母さん、それホントッ！？」

ソーサーに戻した「コーヒーカップが勢い余つたせいでガチャンと盛大な音を立てる。

カノンへの通学路中、ずっと横で冬馬に「桃太郎」なんて呼ばれるのは真つ平ごめんだつた。

明日は早く家を出よう、と思いながら桃乃が再び「コーヒーを飲んでいると千鶴が自分にもコーヒーを淹れながら独り言のよつに呟く。

「でも冬馬くんもいつのまにかあんなに背も伸びて本当に凛々しくなったわよね。昔は“ももちゃん一緒にあそぼ！”って桃乃をよく誘いに来てくれたちっちゃい男の子だったのにね」「お母さん、違うわ。凛々しくなったんじゃなくて憎たらしくなつただけよ！」

桃乃のその言い方に千鶴はクスクスとおかしそうに笑つた。

「なに？お母さん。何がおかしいの？」

「んーん、別に」

千鶴は「コーヒーを一口飲むとフツと遠い目をした。

「そういえば桃乃もいつの間にかコーヒーをブラックで飲むようになつてるのね……」

「え？」

「だつて桃乃、前はお砂糖一杯も入れてコーヒー飲んでたじやない？」

「だつて太つちゃつたら困るもん」

桃乃のその答えに千鶴は優しく笑つた。

「じゃあ今日はお母さんが久しぶりにお砂糖入れて飲んでみようかな」

千鶴はシュガーポットから一杯の砂糖をすくうとそれをジノリのコーヒー カップに入れてティースプーンで搔き回した。

一口飲んでみるとさつきとは違つた甘くて少しほろ苦い味が千鶴の口中にゅつくつと広がる。

「そうよね、皆いつの間にか大きくなつているんだもんね……」

今の千鶴の呟きの意味が分からなかつた桃乃は、大きな目を何度も瞬きしながら不思議そうに母親の顔を見る。

「えつ？お母さん、それどういう意味？」

「なんでもない。お母さんのひとり言です」

娘の質問を「ひとり言」という言葉でうまくはぐらかし、暖かいコーヒー・カップを両手に包んだ千鶴はゆつたりと微笑んだ。

その後、夕食を終えて入浴も済ませた桃乃は、予習をするために自室へと戻る。

明日の授業で苦手な物理の予習をしようと思つた桃乃だったが、ふと机の上に置いたままのカノンの年間行事予定パンフレットが目に入つてしまつた。

何気なくそのパンフレットを手に取り、中を見ると毎月に何かしらの行事が書かれている。

確認のために今月の予定行事をもう一度調べてみたが、四月は一大イベントの入学式を除いてはオリエンテーリング以外に大きな行事はなかつた。

せりにバラバラとページをめくると向ページにも渡つて部活の紹介ページがあつた。

(やつにえば部活じつけかな……)

中学時代はテニス部にいた桃乃だが高校では違う部活にしてもいいなと考えていた。

沙羅はどうするのか明日聞いてみよう、と思いながら次のページ

をめぐる。

現れたページはバスケ部の紹介ページだった。

男子と女子でそれぞれ部があるらしく、トップの紹介写真では長身のプレイヤー達が汗を飛び散らせながらショートをきめようとしている。

男子バスケ部紹介写真の中で背番号4をつけ、右拳を振り上げてガツツポーズをしている黒い短髪の少年の背中が映っていた。その少年を見た桃乃の脳裏に冬馬の姿がよぎる。中学三年時の冬馬が背負っていた番号も同じ番号だったのだ。

広い体育館で得点が動く度に湧き起つる歓声。

ゴールを決めた選手の名のショープレヒゴールと高らかに鳴り響くハイスクル。

床に立っている足に直接響いてくるドリブルの強い振動。

綺麗な弧を描き、ゴールに吸い込まれていくバスケットボール。

一

白杜中学に入学したばかりの頃、バスケ部に入部して背番号12をもらった冬馬は当時の桃乃にこんなことを話していたことがある。

「桃乃、俺一番が好きなんだよ。特に自分が好きなものには絶対に一番になりたいんだ。今はまだ実力足りないけどさ、そのうち必ず白杜で一番の選手になつてやる」

そして一年後、冬馬はその実力を認められ、見事キャプテンに指名されたのだ。

(アイツって昔から自分で決めたことは必ず初志貫徹するよね……)

昔のワンシーンを思いだし、桃乃はほんの一瞬だけ心の中で冬馬のことを見直した。

しかしすぐにその気持ちを強引に頭から追い払う。

(……って私、何アイツのこと見直してんのよー。今は私のこと「桃太郎」なんて呼んでバカにする奴なのにー。お母さんが今日あんな変なこと言い出したからね。きっと……)

桃乃はパンフレットから手を離すとベッドにバフッと倒れ込んだ。同時に桃乃の部屋を「ンン」と可愛らしくノックする音がある。

「なあに?」

起きあがった桃乃がそう返事をするとドアが力チャリと開いて、首を覗かせたのは妹の葉月だった。

「おっ邪魔しまあーすつー！」

妹の葉月は現在小学六年生。でも四つ離れた姉の桃乃がいるせいかその年よりもかなり大人な思考回路を持つ。

葉月はベッドに座っている桃乃の隣に腰をかけるとキラキラした瞳で喋り出した。

「ねえねえお姉ちゃん、カノンはどんな感じだった？ 教えてー！」

まだ四年も先の話しだが葉月もカノンへの進学を夢見ているらしい。自分の希望校に桃乃が合格して以来、葉月は姉を羨望の眼差しで見ていた。

「まだ一日田だしよく分かんないわよ」

「ね、ね、カツコイイ先生いた?」

ませている葉月には同年齢の男の子は子供に見えるらしく、好きになるのは必ず年上の男性だ。

そしてそれに関しては二人の父、雅治も男親ならではの極端な心配性ぶりを發揮して妻の千鶴にいつも笑われている。

「カツコイイ先生……?」

桃乃は今日一日で出会った男性教師の顔を思い出してみた。

化学や物理、数学の教師は男性だったが全員四十歳以上と思われる風貌で、しかもどうお世辞を見繕つてもカツコイイとは言えなかつた。

「二十代でね！」

と更に葉月の細かい注文がつく。

「あ、そういうえば私の担任の先生って二十代の男の人だよ」

「えー、幾つ幾つ?」

「んつと、確かに今は二十六歳つていつてたよつな……」

「カツコイイ? 何教えてるの?」

「体育」

「体育の先生? ジャスポートマンだ! いいカンジー! 芸能人

とかでいえば顔は誰に似ているの?」

「どうやらかなり興味が湧いてきたらしい。」

「……そうね……顔……。どうだつたかなあ……」

桃乃是担任の矢貫誠吾の容姿を思い出そうとしたが、なぜか脳内のイメージがぼやけてしまう。

なかなか担任の容姿をはつきり思い出せない桃乃の様子を見て、葉月が面白そうに茶化した。

「ねーお姉ちゃん。あたし達つてお向かいのお兄ちゃん達をずっと見てきているからさ、他の男の人でちょっとぐらい顔が良くなつてなかなかカッコイイな、って思えなくなつてなーい?」

ベッドに座つてゐる葉月はそつと足を揺らしながら上へとおかしそうに笑う。

桃乃は葉月の言葉に内心は少し同意しながらも、引き続きなんとか誠吾の顔を思い出そうと努力した。

「……そうだ、思い出した。顔はちょっと目が鋭い感じで……うん、まあまあカッコイイかも。体育の先生だから色黒で筋肉質体型なの。気さくな先生みたいだから男の子にも女の子に人気のある先生らしいわ」

「わあ～さつすがカノンね！」

葉月はウットリとした顔で感嘆の声を漏らす。

「でもさ、葉月が入学する頃にはもうその先生いないかもよ？」

「あー！　お姉ちゃん、どうしてそんなイジワル言つのよー！」

「だつて四年も後のことでしょう？　どこか違う高校に赴任しちゃつてる可能性だつてあるじゃない」

「つ……」

葉月はグッと返答に詰まつた。そんな妹を姉がさらにからかう。「それに葉月がカノンに無事合格できるかどうかまだ分からぬないしね？」

「じつ、合格するもんっゼッタイ……」

葉月は母や姉と同じ大きな目をぱちくりさせて大声で叫ぶ。

「あたし塾に行き始めたの知つてるでしょ？　絶対、絶対、絶対合格するもーんだ！　なにさ、お姉ちゃんだつて冬馬兄ちゃんと同じ学校行きたくてカノン田指したんでしょう！？　それだつて不純な動機じやん！」

今度は桃乃が大声で叫ぶ番だった。

「だつだつ誰が冬馬と一緒に学校に行きたいなんて！？」

「アレッ、違うの？」

「あつたり前でしょっ！－ 一体何を根拠にそんなことを思つてたのよー？」

「だつてさー、冬馬兄ちゃんつてカツコイイじゃないー。」

腰まである白髪のロングの黒髪を一束手に取ると、葉月はベッドに腰掛けたままで熱心に枝毛チェックを始めた。枝毛チェックをしながらも葉月の口は器用に動く。

「それに冬馬兄ちゃんつてすごくモテるしねー。あ、そうだ！ あたし、お姉ちゃんにこの話してたかな？ あのね、今年のバレンタインの日に友達と家の前で遊んでたら、女の人が何人も来て冬馬兄ちゃんの家にチョコ置いていったの。そのうちの何人かはどうしても勇気出せなくて、あたしにチョコ渡すの頼んだ人もいたんだよー！」

桃乃は黙つて妹の話を聞いていた。

今年のバレンタインに冬馬にチョコを渡そと、学校だけではなく家にまで押しかけた女生徒達がいた事は桃乃も知つていた。その次の日、クラスメイトが冬馬に合計幾つチョコを貰つていたかをしつこく訊ね、冬馬がそれをばぐらかしていた光景を思い出す。

葉月はふと枝毛チェックの手を止めた。

「そういえばお姉ちゃん、確か去年から冬馬兄ちゃんにチョコあげてないんだよね？ ね、どうしてなの？」

確かに桃乃是去年から義理ではあつたが、冬馬にチョコを渡さなくなっていた。

それは冬馬が自分のことを急に「桃太郎」と呼ぶようになったの

でそれが嫌で仕方のない桃乃はその次の年からチョコをあげるのを止めたのだ。

「お姉ちゃんがその気ないんだつたらあたしが冬馬兄ちゃん貰つちやおうかな～？」

「ふ～ん、そうすれば？」

ややふざけ氣味の葉月の挑発を桃乃は適当に流した。

「ん～、でもなあ～……」

毛先を自分の人差し指にクルクルと巻きつけながら葉月は小さく眉をひそめる。

「冬馬兄ちゃんは優しいしー、カッコイイしー、スポーツマンだしー、確かに彼氏にするにはいいんだけどさ……」

自分が適当に打つた相槌に本気で真剣に答えていた十一歳の妹を見て、桃乃は笑いを堪えるのに苦労していた。

「でもちよつとまだ子供っぽい所があるからなあ……。だからやっぱりあたし、 術人兄ちゃんがいい！」

桃乃はここで我慢できずにとうとう吹き出した。

「あ～！ なんで笑うのよお姉ちゃん！」

「だつて葉月、あなたと術兄イ、一体何歳離れてると思つてるのよ？」

？

西脇 術人にしづき ゆきとは冬馬と五歳違いの兄だ。

柔軟な顔立ちでスラリと背が高く細身の術人は、男性ファッション誌の表紙モデルを務めてもおかしくない容姿を持っている。

「たつた九つしか違わないじゃん！」

と葉月が口を尖らせる。

「だつて術兄イは今年で二十一になるのよ？ 葉月みたいなまだ小さな子供を相手にするわけないでしょ」

「そんなことないもん！ だつてこの間も術人兄ちゃんさ、『葉月

ちゃんが大きくなつたらお嫁さんにもらいたいな』って言ってくれたもん！」

「葉月、それはね、衍兄イお得意のリップトークなのよ」

衍人は綺麗な女性とあらば誰彼かまわず優しくせまり声をかける、所謂プレイボーイだ。

今まで桃乃が見てきた中で、衍人の側に寄り添う女性が同じ女性だつたことはほとんど無いといつてもいいほど、衍人の姿を見かける度にその横にいる女性は大抵違う女性だった。

「ううん違うつてば！ 他の女人にはそうだけどあたしのは違うのツ！」

しかしそう叫んだ後でなぜか葉月の声のトーンが落ちる。

「……うん……。でも確かに衍人兄ちゃんつてさ、女人に優し過ぎるよね……。そこが衍人兄ちゃんのたつた一つの、最大の短所かもしれないね……」

葉月は小さな手を片頬につけ、はあ、と小さくため息をつき、その大人びた仕草に桃乃は再び苦笑した。

その時、階下から千鶴の声が聞こえてくる。

「葉月、まだ起きているの？ もう遅いから早く寝なさいね」
桃乃の部屋の壁時計の針はすでに十時半を回っている。

「いけない！」

葉月は慌てて立ち上がり「じゃお姉ちゃんお休み～」と言しながら部屋を出でていった。

部屋に一人残つた桃乃是教科書もノートもまだ用意していない机に向かい、小さく息を吐く。

もう今夜の予習をする気持ちは吹き飛んでしまつていたが、なんとか気持ちを奮い起こして物理の教科書を広げる。

(もういえば冬馬つて理数系に強いから、物理つて得意そつ……)

ハツと我に返る。

また無意識に冬馬のことを考えてしまった桃乃は慌てて一三度頭を振つて冬馬を意識の外に追いやつた。

今日家に帰つてきてから頭の中に何度も冬馬が出てきただろひ。しかし意識の隅へ追いやつても、桃乃の頭の中にはすぐにまた冬馬の姿が現れる。

いつも気付くとまるでそれが至極当たり前の光景のよう、冬馬はいつも側にいた。

最近、ふとしたきっかけですぐに冬馬のことを考えてしまうのは“昔からの幼馴染だから”、そして「桃太郎」と呼ばれ正在ことでイライラさせられているから。
きっとそのせいなんだ、と桃乃は思った。
しかし心の奥底から声にならない声がする。

…………本当にそれだけ？

自分の気持ちなのになぜかよく分からなかつた。

(結局、今日はお母さんのあの言葉が発端だつたなあ……)

その後約一時間机に向かつて熱心に予習を続けた桃乃は、枕元の目覚ましをかけると急いでベッドにもぐり込んだ。

オレンジのクロスバイク 【前編】

力ノン登校一田田の朝は昨日よりさらに快晴だった。
桃乃は一通りの身支度を済ませるとバッグを持って一階へと下りる。

「おはよう 桃乃」

フリルのついたエプロンを身につけた母の千鶴が、サラダボウルをテーブルの中央に置きながら桃乃に声をかける。その少女趣味的なエプロンは夫、雅治の好みだ。

「おはよう、お母さん。ね、お父さんなんであんなとこで寝ているの？」

桃乃是父のいる場所をそっと指差した。雅治はリビングのソファに横たわり、手足を縮めてぐっすりと眠り込んでいる。

「お父さんね、明け方に帰ってきたばかりなのよ。今仕事がすゞく立てこんでいるみたい。だから今は少し寝かせてあげて」

桃乃是眠りこけている父の姿をもう一度見る。

髪はくしゃくしゃで髭も少し伸びはじめていたが普段は滅多に外さない、その眼鏡を外した父の寝顔見るのは久しぶりだった。

「ねえお母さん、お父さんて眼鏡外すとちょっとカツコイインじゃない？」

「あらなに言ひてるの、お父さんは眼鏡かけてても充分カツコイわよ」

「あーはーはーい、そうでした……」

学生時代、大恋愛の末に結婚した雅治と千鶴は今でも超がつくぐらこのおじびり夫婦だ。

朝から親のノロケを聞かされた桃乃は少々げんなりしながら口一
ルパンを一口頬張る。オープンで焼き上げたばかりの熱々のパンは
中はしっかりとしていてとても香ばしく、思わず頬が緩んだ。

「ん~！ やっぱり焼きたてのパンって美味しい！」

「はいこいつもどうだ」

絶妙のタイミングでベーコンホッピングの皿が桃乃の前に置かれる。
ベーコンはたつた今までフライパンから戻されていた熱でまだパ
チパチと弾ける音がしている。

「サラダもちゃんと食べるのよ？」

「分かつて。もう子供じゃないんだからこちこちちゃんとこと言わ
ないで」

「フフフ、そうだったわね。桃乃は子供なんだけど実はもう子供じ
やないのよね」

「……お母さん昨日からなんかへんだよ？」

「気にしない気にしない。お母さんのひとつと言ひよひとつと言ひ」

千鶴はそういう歌うように口ずさむと、次に起きてくる葉月用のベー
コンエッグを作りにキッチンへと戻つていった。

(今日は少し早く出なくつたわや……)

桃乃はサラダを食べながら壁掛け時計を見る。家を早く出るのは
もちろん玄関先で冬馬とかち合わないためだ。やがて一階からバタ
バタと騒々しい足音が聞こえてくる。

「あら葉月ね……。もひ、お父さんが起きちゃうわ」

下の娘をたしなめようと千鶴がキッチンから急いで出てきたが、
一瞬早くコンエッグの扉がバタンと大きな音と共に勢いよく開く。

「おひさまっ！」

「こつものように元気よく朝の挨拶をしながらリビングに入ってきた葉月だったが、母と姉が自分の方を見て唇に人差し指を立てているのを見ると不思議そうに首をかしげた。

「……どうしたの？　お母さんもお姉ちゃんも」

「葉月、今お父さんが寝ているのよ。だから静かにしてね」

「え？　あ～ホントだ。お父さん、今日朝帰りしちゃったんだねっ

「ちょっとと面葉の使い方が違うような気がするけど……」

千鶴は笑いながら葉月の席の椅子を軽く引く。

「や、早く」「ハノン食べなさい」

「はーい」

今朝葉月が出した騒音にも雅治はほんの少し体を動かしただけで相変わらずグッスリと眠っていた。よほど疲れているらしい。

桃乃は最後のロールパンの切れ端を食べ終わるとさつさと席を立つた。

「あれお姉ちゃんもう行くの？　今日は昨日より早いんじゃない？」

「そうね、今日学校で何かあるの？」

「ん、ちょっと用事があるから……」

桃乃は食べ終わった食器を台所に下げながら母と妹に適当な返事をし、洗面台に向かった。もう一度歯を磨き、唇に保湿タイプのリップクリームを薄く塗つて玄関へと急ぐ。その途中でもう一度リビングに顔を出し、千鶴と葉月に小声で「行つてきます」と声をかけた。

「行つてらつしゃい」

「お姉ちゃんに行つてらつしゃいー」

玄関から一步外に出た桃乃は、急いで向かいの「西脇」と表札の

かかっている家に目をやる。

西脇家の玄関付近に冬馬の姿が無いことを確認した桃乃は安心して早足で駅へと急いだ。

駅に着き、腕時計を見る。このままだと学校に着いてもだいぶ時間が余りそうだった。一時限目の予習でもしていようかな、と思いながら電車に揺られてカノンへと向かつ。

カノンのある谷内崎駅へ着く。

電車を降り、桃乃はスクールゾーンを歩き出した。

周りは緑に囲まれ小高い丘まで続くこの道は人通りが少ない。朝早くこの木立の道を歩いているのはほぼカノンの生徒か関係者だといつてもいいくらいだ。そして今この道を歩いている生徒は桃乃以外見当たらない。

(う~ん 気持ちいい……)

朝から緑でいっぱいの木々の間を歩くのはとても気持ちがよかつた。気のせいか空気までもがおいしく感じられる。鳥のさえずりがたまに聞こえるこの道を時間に余裕のたっぷりある桃乃はゆっくりと散歩気分で歩いていた。

その静かな空氣の中、桃乃の後方から何かが回転している金属音のような音が微かに聞こえてきた。

なんだろう、と思った桃乃が振り返ろうと思つたその瞬間、わざとキキーッと派手な音を鳴らして一台の自転車が桃乃の前に強引に割り込んで止まる。

その自転車の主を見た桃乃が叫ぶ。

「冬馬！？」

オレンジに輝く車体の上にはスクールバッグを背負つてニッヒと笑

「う冬馬がいた。

「おい、なんでお前今日も先に行つちまうんだよ。なにかの用事があるみたいよ、つておばさんが言つてたけどさ、用事つてなんなんだよ?」

「別に冬馬には関係ないでしょ?」

(冬馬に会わないようにする用事よつ)と桃乃は心の中で呟く。

「せつからく今日はこれでお前を送つていいと思つてたのによ」

口を尖らせた冬馬の額にはうつすらと汗が滲んでいた。息も少し弾んでいる。

「そういうえば桃太郎は一組なんだってな。今朝おばさんに聞いたぜ」

「だからその名前やめてつてば!」

「俺、四組だからな。覚えておけよ?」

「知らないいつ! 冬馬が何組でも私には関係ないもん!」

自分から完全に顔を背けた桃乃の様子を見た冬馬は、さりげなく話題を変える。

「なあ、このクロスバイク、カノンに合格したお祝いに買つてもらつたんだぜ。見てみ? すげえカッコイイだろ?」

桃乃は横目で買つたばかりらしいそのピカピカの自転車を眺める。確かに冬馬が乗っているこのクロスバイクは安価な量産タイプの自転車よりもデザイン性に優れ、ストレートなハンドルから車体に続くフォルムがとても綺麗な自転車だった。

だが、その車体の後ろにはなぜか鮮やかなオレンジ色のボディとはまったく違う銀色の荷台が取り付けてあり、そこに少々ちぐはぐさを感じる。

「その荷台、ついてないほうがいいんじゃない? 自転車の色と合つてなくて何かヘン」

「これは後からつけ足したからな。カッコはちょっと悪くなっちゃま

つたけど必要だから仕方ねえよ

冬馬は「ほり」と言つとその荷台にポンと手を置く。

「え?」

「早く乗れよ

「イ、イヤよ! なんで私が冬馬の自転車の後ろに乗らなきゃいけないのよ?」

「いいから乗れって。これ快適過ぎてさ、全然トレーニングにならねえんだよ。後ろに五十キロの重り乗せたら少しはトレーニングになるからさ」

「なつ……、誰が五十キロよつー!」

「桃太郎、五十キロないの?」

「ないわよつ!」

桃乃は正面の幼馴染に向かつて怒鳴る。

「ふうーん……」

クロスバイクに乗つたままでそう呟くと、冬馬の視線は桃乃の頭のてつぺんからつま先まで何度も往復をしあげる。

「ちょっと、そんなにジロジロ見ないでよ……!」

上から無遠慮に自分の体をつぶさに眺められて桃乃の両頬が赤らむ。

恥ずかしさでいたたまれなくなつた桃乃はクロスバイクの横を擦りぬけて先へ行こうとしたが、すかさずその細い左腕を冬馬がガシツと掴んだ。

「い、痛いってば! 離してよ冬馬!」

「いいから後ろに乗れって」

冬馬は桃乃の腕を掴んだままで続ける。

「……乗るまで離さねえぞ?」

キツと顔を上げて桃乃は冬馬を睨んだが、自分以上に冬馬の目が真剣だつたため、やがて桃乃の目から抵抗を示す強い光がゆっくり

と消えてゆく。

「の、乗ればいいんでしょう、乗れば」

「ああ」

渋々と桃乃は後ろの荷台に横座りをして腰をかける。しかし冬馬はまだペダルに足をかけずに肩越しに桃乃を見た。

「ほらちゃんとつかまれよ」

「つかまるつてどこに?」

「ここに決まつてんだろ」と冬馬は自分の腰を軽く叩く。

「イ、イヤよ!」

再び自分の頬がほんのりと少し熱を帯びてきたことを感じた桃乃は冬馬から視線を逸らした。

「ここから坂道なんだぞ。つかまってねえと危ねえだろ」

「だつ、だつてバッグあるもんつ」

「ちょっと貸せ」

冬馬は桃乃のスクールバッグを取り上げるとそれを左のハンドルと一緒に握った。
「ほらつかまれよ

最早これ以上拒否する理由も思いつかなかつた。

仕方なく桃乃は冬馬の体に遠慮がちに手を伸ばしそつと掴まる。

「いいか?」

その言葉の後、オレンジのクロスバイクは桃乃を乗せて走り出した。

風がどんどんと横に流れしていく。

前を見ると冬馬の大きな背中と風になびくカノンの青いブレザーが目に入った。

桃乃はその背中を見上げながら、つい先ほど額に汗を滲ませ息を切らして自分の前に現れた冬馬の様子を思い出す。

(冬馬……もしかして私に追いつくためにあんなに必死になつて飛ばしてきたのかな……?)

さつきはこの自転車に乗るのを嫌がつたが、そう思つと少しだけ胸に微かな痛みを覚える。

「おっ、やっぱり後ろに重りがあるといいなー。ペダルがグンと重くなつた!」

桃乃に乗せているだけではなく、上り坂のせいもあって今のペダルは相当重く感じられているはずなのになぜか冬馬の声はとても弾んでいる。

「お、重いなら下りるわよー!」

「いいんだ、それがトレーニングになる!」

冬馬は後ろを振り返り、そう叫ぶとさらにグイグイとペダルを力強く踏みしめる。

「……へんな冬馬」

「あ? なにか言ったか?」

「……うつそ、別に……」

浮かれた冬馬が思い切り飛ばすせいで、大して時間もかかりずにカノンの正門が見えてきた。

「げつー! またあの先生かよ……」

クロスバイクのペースが突然ガクンと落ち、冬馬はうつござりとした声を出した。

桃乃も体をひねつて冬馬の影から前方を見る。すると昨日と同じように正門前に縁が立っているのが見えた。昨日は黒だったが今日は淡いピンク系のスースを着ている。

冬馬が正門前で一旦クロスバイクを止めると桃乃は慌てて後ろの荷台から下りた。

「おはよっス」

「お、おはよーいります」

「おはよー。あらあらあなた達、一一日連続で一緒に登校ね？」

その言い方は明らかに裏に何か含むような言い方だつた。昨日に引き続いてのそんな態度に我慢できなくなつた冬馬が緑に食つてかかる。

「一緒に登校するのが悪いってんですか！？」

「ええ今田はね。残念ながらよくないわよ？」

緑はなぜか余裕たっぷりの表情で受け答える。

「なんでだよー。こここの規則がかなりうるさー」とは知つてゐけども、男女が一緒に登校するのを禁止するなんて規則はないはずだ！

憤る冬馬を眺める緑はフフッと妖艶な笑いを浮かべると、昨日とは違つ色のパール系のネイルでトン、と軽く冬馬の胸を突く。

「君、本当に可愛いわね」

「いッ！？」

いきなり胸を小突かれて冬馬はおかしな奇声を上げ、桃乃は緑のその行動に驚いて口に手を当てて啞然とした。

「ねえ西脇くん、自転車は軽車両でしょ。一人乗りは道路交通法上、立派な違反行為なのよ？」

「あつ」

冬馬はそつちの方か、という顔をする。

「今日は見逃してあげるけどもう一人乗りしちゃダメよ。分かった？」

「……うーつす」

冬馬は仕方無さそうに頭を搔いた。緑は今度は桃乃の方を見る。

「ね、あなたも“乗せて”なんでもう言つちやダメよ」「違います！」「こいつは悪くないです！俺が無理やり乗せたんですよー！」

冬馬は慌てて口を挟むと、「ほら」と預かっていたバッグを桃乃に返した。緑は再び冬馬のほうに視線を移す。

「この子を庇つてるの？ 西脇くんって優しいのね。私ますますあなたのこと気に入りそう」

緑は冬馬の方にグイと左肩を寄せ、それと同じ距離分、冬馬は慌ててクロスバイクの上で身を仰け反らせた。

「しつ、失礼しますっ！ ジャンツ！」

冬馬は最後のセリフを桃乃に向けて言つと、あつという間にクロスバイクで男子校舎の方に去つて行つてしまつた。

正門前に緑と桃乃の二人だけが残される。

「し、失礼します……」

氣まずい雰囲気の中で桃乃もそそくさと女子校舎の方へ行こうとする、「ちょっとお待ちなさい」と声がかかり、緑に引き止められた。

「あなた、倉沢さんだつたわよね

「は、はい」

「ねえ、西脇くんとはお付き合いしているの？」

「つ、付き合つてません！」

「あらつ、ふうん、そうなの……」

自分の質問に慌てて否定をしてきた桃乃に緑は意外そうな顔をし、一時桃乃から視線を外すと何かを考えているようだった。

「あの……、先生は毎日ここにいらっしゃるんですか？」

「えつ？」

考え方の最中に桃乃からいきなりそう訊かれ、緑は一瞬驚いた様子を見せる。

「いいえ、ここにいるのは今週だけよ。この正門には毎朝教師が一名必ず立つて不審者が校内に入らないようにチェックしているので、今週は私が当番つてわけ」

縁は桃乃にそう説明すると、もう一度同じ質問を投げかける。

「それよりあなた、西脇くんとは本当にお付き合いはしていないのね？」

「は、はい」

「そう」

桃乃の返事を聞いて縁は満足そうに微笑んだ。

「分かったわ。それならいいの。引き止めちゃって『めんなさいね』

「い、いえ……」

そう語尾を濁して返事をすると桃乃は再び女子校舎の方に足を向ける。正門前に縁を残し、桃乃は校舎の中に入つた。自分の靴箱に外靴を片付けながら今の縁の様子を思い返す。

(あの先生、もしかして冬馬のこと……?)

なぜか心がざわついた。

そしてその日一日、パールの粒がきらきらと輝くネイルで冬馬の胸をツンと突いたあのシーンは忘れようとしても桃乃の脳裏にいつまでもこびりついて消えなかつた。

オレンジのクロスバイク【後編】

疾風の勢いで縁の前から逃げた冬馬は、校舎横に設置されている自転車置き場へ向かつた。クロスバイクの前輪を車止めに置いてチーンをかけていると、昨日初めて教室に入った時とまったく同じように背後から声がかかる。

「よつ、色男の！」

冬馬はしゃがんだまま振り向く。そこには同じクラスの柴門要が立っていた。

「……またお前か」

この男が自分を嫌っていることを昨日初めて顔を合わせた時から薄々と感じていた冬馬は、チーンをかけ終わると冷たい声で立ち上がる。

「今、たまたま正門の近くにいて見ていたけどよ、お前モテるんだなあ。早速あの色気ムンムンの担任となかなかイイ雰囲気だつたじやん。なあなあ、お前って年上もイケるクチなわけ？」

ポケットに両手を突っ込んだまま話す要を無視し、冬馬は校舎の中に入ろうとする、だが要是素早い身のこなしですかさず冬馬の前に回りこみ、その行く手を遮った。

「……どかよ」

要より背の高い冬馬は相手を見下ろして低い声で牽制した。しかし要は威嚇混じりのその声にもまつたく動じる素振りすら見せない。

「まあ待てよ、まだお前に聞きたいことがあるんだ」

要はニヤリと笑うと今度は女子校舎の方角を顎で指し示す。

「今の女の子、お前の彼女か？」

「お前に何が関係あるんだよ」

「いや今見たらかなりの可愛い子だつたなあと思つてさ。俺、ああいう清純そうなタイプ、次の獲物で狙つてるんだ。でも、あの子の名前とクラス、教えてくれよ？」

冬馬の目の色がはつきりと変わる。

「あいつに変な真似したらただじやおかねえからなつ！？」

冬馬はそう叫ぶと要の制服の胸倉を掴みあげた。しかしそれでも要はまだ平然とした態度を崩さない。それどころかその顔には嘲るような笑みさえ浮かんでいる。

冬馬が乱暴に手を離すと要は乱れたネクタイをほどきながらからかうように言つた。

「なあそんなに大事なのか、あの娘？」

しかし冬馬は返事をせずに無言で数秒間要を睨みつけた後、そのまま校舎の中へ入つていつてしまつた。薄ら笑いを浮かべてその後姿を見送つた後、要はほどいていた自分のネクタイを一気に外す。

「やつぱあつちの方か……」

そう独り言を呴き外したネクタイを弄びながら、要は「侵入禁止」と札の置かれてある薄暗い裏道の方へ向かう。その道の途中には高さ一メートルほどの金網が張り巡らされてあつた。そのフェンスに足をかけ軽々と乗り越えると、要はネクタイを結び直しながら女子校舎へと続く未知の区域に侵入し、そのまま裏道を足早に進んでいった。

その頃、桃乃はまだ誰も来ていない一年二組の教室にいた。自分の席にストンと腰をかけ、バッグの中の教科書類を机の中に入れはじめる。

その時ふいに教室の後ろの扉がコンコンとノックされた。
椅子の上から後ろの方を見ると扉はもうすでに開いており、端正なその顔に小さな笑みを浮かべた要が扉に寄り掛かったままで桃乃の方をじっと見ていた。

今、この女子校舎に男子がいる事実が信じられなくて、桃乃はしばらくポカンと口を開けて要の顔を見つめる。
要は微笑みながら桃乃に向かつて小さく手を上げた。

「おはよう。君、名前は？」

しかし桃乃はまだ啞然としたままでいきなり現れた要の顔を見ている。

「あ、そつか。女の子に名前聞く前にまずこっちが名乗んないとね。俺、柴門要つていうんだ」

要は扉から離れると桃乃にゆっくりと近づく。桃乃は思わず椅子から立ち上がりて左側を指差した。

「こつこには女子校舎よ！？」　男子校舎は反対！」「ん？　知ってるけど？」

「エツ……」

要にあつせりとそつ返されて桃乃はその先の言葉を失う。
「俺、君に用事があつてきたんだ。君の名前知りたくってさ」「あ、あなた誰？」
「だから柴門要だつて。あ、クラスは一年四組ね」

(夏馬と同じクラスだ……)

と桃乃は即座に思つた。

「 キミさ、西脇冬馬とはどういつ関係なの？」

要は矢継ぎ早に質問を続ける。

「 さつき君と西脇が一緒に登校するの見てさ、西脇に “ 今の女子すく可愛いな ” って言つたら “ じゃあ直接行つて会つてこいよ ” って言われたんだ」

「 えつ、夏馬が……？」

「 うんそう。会つてこい、なんて言われたしさ、まさか君、西脇の彼女じやないよね？ それとも彼女？」

「 ち、違うわ」

「 そつか、じやあ俺にもまだ望みはあるわけだ」

要は教室内隅々にまで響くぐらいの明快な音で指を鳴らす。

「 君、すく可愛いから俺気に入っちゃつたんだよね」

「 ……！」

男子から面と向かつてこれだけ強烈にアプローチされた経験の無い桃乃是赤くなつて俯いた。

「 ね、名前教えてくれるかな？」

「 ……」

「 あれ？ 別に警戒しなくていいんだよ？ 俺、これでもマナーのいい紳士なんだからさ」

ニッコリと微笑むその口元から真っ白で綺麗な歯並びがのぞく。しかし桃乃是赤くなつて黙り込むばかりだった。

返事が戻つてこないので内心舌打ちをしながら何気なく要は桃乃の机の上に目をやる。

そしてそこに自分の知りたい答えがあるのを見つけた。

「 へえ、倉沢桃乃つていうんだ？」

名前を言われた桃乃は驚いて要の視線の先を見る。

すると机の中にしまおうとしていたノートの表紙に自分の名前が

書いてあるのが見えた。

「名前も可愛いじゃん！ あのさ、今度一緒にお昼でも食べない？」

「……」

だがそんな誘いの言葉をかけたくせに、要は桃乃の返事を待たず

にスウツと教室の扉の方に戻る。

「じゃ、こんなところにいるの見つかるとヤバイから俺、そろそろ
あっちに帰るわ。楽しみにしてるよ」

要はもう一度微笑みながら桃乃に向かつて小さく手を振ると、風
のよう教室の外に出ていった。

桃乃はしばらく睡然としていたが、やがて要が出ていった扉に駆
け寄るとそこから上半身を出して廊下を見渡す。

しかしもう要の姿はとっくに消えていた。

整った顔立ちの要からいきなり強烈なアプローチをつけ、赤く上
気した頬で桃乃は要が去った廊下の先をしばらく見つめる。

(今の男の人……なんだつたの？)

その頃、先ほどの要の態度で冬馬の頭には完全に血が昇りきつた
状態だった。

とりあえず教室に入つたものの、気持ちが落ち着かない。

そこで少し冷静になるべく、ホームルームが始まる時間まで校庭
に設置されるゴールポストでシュートの練習でもしようと、教

室の備品のバスケットボールを手に冬馬は廊下に出た。するとその廊下の先から要がこすり歩いてくるのが目に入る。

要は冬馬の姿に気付くとサッと視線を逸らした。

冬馬も苛立つ気持ちを抑えながらお互いそのまま黙つてすれ違おうとした瞬間、要が低い声でボソリと呟く。

「なにつー？」

低く響いてきた今の言葉に、険しい表情で冬馬が振り返る。

相手の焦る気配を素早く背中で感じた要はフツと乾いた笑みを漏らし、悠々と四組の教室内へと消えていく。たった今すれ違いざまに要に投げ捨てられたその言葉に衝撃を受けた冬馬は、廊下の中央で愕然と立ち尽くした。

「……俺、お前の大好きなあの桃乃ちゃんと今度お昼の約束しちゃつたぜ？」

要の勝ち誇ったような声が何度も脳内をリフレインする。

右手の甲に青く太い静脈がくつきりと浮き上がり、バスケットボールを握んでいる五本の指がギリギリと悲鳴のような音を立てていたことにすら気付かず、再び冬馬の頭に急激な勢いで血流が沸騰し始めていた。

すれ違つた心 <1>

「衍人！ いつまで寝てるつもり！？ せつせと起きなさい！」

時刻はもうすぐ午前十時。

夜遊びが長引き、明け方に帰宅してグッスリと眠っていた衍人の頭上から大声が降ってきた。

「…………母さん……、頼むからもうちょっと寝かせてくれよ…………。

今日の授業午後からなんだからさ…………」

「なーに言つてんの！ 每晩毎晩夜遊びばかりして！ 少しは冬馬を見習いなさい！」

冬馬と衍人の母、西脇麻知子にしづきまちこは大声で衍人を叱ると部屋のカーテンを全部開け放つた。男の子一人を育てたせいか見かけも性格もボーリッシュな所がある女性だ。

「…………だから母さん、昨日は大学の授業で遅くなつたんだつて…………」

部屋中に一気に差し込んできた朝田の容赦ない眩しさに、衍人は顔の前に手をかざして目を細める。

その返事を聞いた麻知子はベッドの側にツカツカと歩み寄つてくると、衍人の頬を一瞬だけ軽くムニッヒとつまみあげた。

「どこの世界に朝帰りまでする授業があるつていうの！？」

「あるよ？ 今世紀に生きる人類の、深夜繁華街におけるそれぞれの行動パターンをゼミで調査しているんだ。その調査で出た傾向を詳細なレポートにまとめて……」

「いいからバカなこと言つてないでさつせと起きなさいっての！」

言い訳を諦めた衍人はベッドから一気に起きあがると、母親につ

ままた自分の頬を労わるようにさすった。

「母さん、頼むから顔つまむのはやめてくれよ。俺の顔が崩れたら何人の女の子が悲しむことか」

「あーあー、崩れなさい、崩れなさい。逆にそのほうが勉強に集中できていいいんじゃないの？」

「ひどいな、母さんは……」

「冬馬を見なさい。朝は早くから起きて学校に行つて、夜はちゃんと予習もやって……。 術人みたいに女の子のお尻ばっかり追つかけてないわよ?」

即座に術人の右手が軽く上がる。

「おつと母さん、そこは異議ありだね。俺は女の子のお尻なんて追つかけてないよ? 女の子達が俺を追つかけてくるの。それにさ、女の子を追つかけているのは俺じゃなく冬馬のほうだよ?」

「えつ冬馬が? まっさか~!」

麻知子は術人の今の言葉を全然信用していない様子でアハハと笑う。

「あれつもしかして母さん知らなかつたの?」

長身の術人はベッドから降りるとウーンと大きく伸びをする。上に大きく上げられた両手はあと十センチ足らずでグリーンのクロス貼りの天井に届きそうだ。

「あいつ、桃乃ちゃんにベタ惚れなんだよ。いつも桃乃ちゃんの後ばつか追つかけてるじやん」

「あー……」

桃乃の名前を聞いた麻知子は何か思い当たつたような表情になる。

「じゃあやつぱりそうなのね。冬馬が桃乃ちゃんの所によく行くの

は高校もまた一緒になつたし、幼馴染だからかなーとも思つてゐた
んだけど……」

「違う違う。甘いな、母さんは」

母親の鈍感さに衍人が笑う。

「あいつはね、もうずーっと昔から桃乃ちゃん一筋なんだよ」

「そういえば冬馬つてばさ、昨日の朝、倉沢さんの家に寄つて桃乃
ちゃんと一緒に学校に行こうとしたみたいなのよ」

「な。たぶん今朝も誘いに行つたんじゃないかな。あの新品のクロ
スバイクでさ」

「でも今朝は一人で乗つて行つたみたいだけどね……。ね、桃乃ち
ゃんは冬馬のことなんとも思つてないのかしら?」

「ん~、実は俺もその辺がまだよく見極められないんだよな。最
近の桃乃ちゃんつてどうも冬馬を避けているような感じがするしさ」

「あら、そういう事を見抜く能力しかないのに、さすがの衍人も分
からないんだ?」

「……母さん、そこまで言ひづ~。」

いつもは穏やかな顔を少々崩し、心外だと言わんばかりの顔で衍
人が反論する。

「確かに俺は冬馬と違つて遊び人だけどね、冬馬ほどじやなくとも
俺だつてそこそこの学力はあるつもりだよ」

「はいはい。じゃあそれを証明するためにも少しは夜遊びを控えて
勉学に励みなさいつていうの!」

「はは、そうきますか……」

母親の切り返しの早さに感心しつつも、衍人は自分に不利なこの
話題を自然に変える。

「じゃあ俺がさ、今度桃乃ちゃんにさりげなく聞いてみるよ」

「えつ冬馬のこと?」

「うん。血を分けた、たつた一人の可愛い弟だしな、できれば好きな娘と上手くいってほしいじゃん」

「そうね、桃乃ちゃんはいい子だしねえ……。そうだ！ もし桃乃ちゃんがお嫁さんに来てくれたなら相手のお家は倉沢さんだもの、千鶴ちゃんとは気心も知れているし、親戚付き合いも肩肘張らなくていいわよね！」

「母さん、さすがにそれは気が早過ぎだつて」

麻知子の発想の突拍子さに衍人は苦笑する。

「じゃ母さん、着替えるからちょっと出てつてくれない？」

「なによー、別にいいじゃん。恥ずかしがる事ないでしょっ、実の親子なのに今更ー！」

「実の親子でもプライベートがあるの！」

麻知子を強引に部屋から追い出すと衍人はクローゼットを開けた。シャワーはつい数時間前にホテルで浴びてきたばかりだ。

(そろそろ本気で車の事を考えなきゃなあ……)

女と夜遊びするにはやはり自分の車が必要だと最近の衍人は考えていた。

今日は午後からのゼミで衍人が研究発表をする番だ。今密かに狙っている娘が自分と同じゼミを受けているのであの娘に今日はいい所を見せなくつちゃな、とついつい気合も入る。

しかし真剣に服を選びながらも、器用な衍人は頭の中で同時にまたたく別の事を考えていた。

(ん~桃乃ちゃんをいつ誘つて訊き出そうかなあ……)

衍人に部屋を追い出された麻知子は階段を下りながらもう一人の息子のことを考えていた。

（そつか……冬馬ももう何うつ年頃なのねー……）

結婚してすぐに衍人を身ごもり、五年後に冬馬を産んだ麻知子は現在四十五歳。

一人の子供が段々と自分の手から離れ始めているのを最近の麻知子は特に強く感じるようになっていた。それを認めたくないせいなのか、麻知子は衍人はともかく、冬馬はまだまだ手のかかるやんちゃな男の子だといこもうとしていた。

だが、冬馬の桃乃に対する気持ちを衍人から聞き、いよいよどちらの我が子も自分の元から巣立っていく準備が始まっている事実を知った麻知子はほんの少しだけだが淡い寂寥感を感じずにはいられなかつた。

しかし倉沢家の一家は皆とても良い人達だし、今までいいご近所づき合いをさせてもらつていてる。そして向かいに住む者として倉沢家の子供達を小さい時からずつと見てきている麻知子は、自分や夫の親戚の子ども達よりも、桃乃や葉月のことを可愛く思つていた。

（桃乃ちゃんならいいわ 安心して冬馬をまかせられるもんね）

常に物事を前向きに考える麻知子はあっさりと頭の中を切り替え
る。そして一階に下りると、衍人に言い忘れたことを思い出して二

階に向かつて叫んだ。

「 術人！ 母さん、千鶴ちゃんと婦人会の集まりに行つてくるからね～！ 出かける時、ちゃんと家の鍵かけて行つてよ～？」

「了解」！

二階から鼻歌まじりの声が聞こえてくる。

麻知子は手早く出かける支度をすると向かいの倉沢家に千鶴を迎えに行つた。

倉沢家の玄関へと入ると麻知子はインターフォンを押す。押していくに千鶴のおつとりとした声が聞こえてきた。

「はい。どちら様ですか？」

「私よ、千鶴ちゃん」

「あ、麻知ちゃん？ いけない、もう行く時間ね。ちょっと待つてね」

ブツリ、ヒインターフォンが切れる。

麻知子は玄関先で千鶴が出てくるのを待ちながら倉沢家のミニガーデンを見ていた。

わずかなスペースながらも綺麗に手入れされ、季節の花が咲き誇る倉沢家の小さな花壇は花好きな千鶴の性格が如実に表れている。

(私ももうひとつ千鶴ちゃんを見習つてこうことしなくつちやね……)

麻知子は自分の家の玄関先を振り返りため息をついた。

自宅の玄関先はとりあえず、という感じで大きめのパキラが一鉢とリビングにポトスを二、三個置いてあるだけで、それも麻知子が花よりも観葉植物が好きだからというわけではなく、ただ単に頻繁に手入れをしなくてもなかなか枯れないから、といふにささか情けない理由だ。

元来のさっぱりとした性格と子供が一人とも男の子だつたせいで、どうしても麻知子は千鶴のようにフリルのエプロンをつけたり、花を愛でたりという女らしさに欠けているところがあった。

そしてそれは麻知子自身もよく自覚していて、千鶴のように髪を伸ばしてウェーブでもかけても「少し女らしくなるべく」と何度もか一念発起したこともある。

しかし、いざ自分の髪が肩に届く頃になるとどうしてもそれが邪魔に感じられ、結局最後は美容室に駆け込んで思いきり明るめのブラウンのカラーを入れて元のベリーショートにして戻してしまうパターンの繰り返しだった。

自分は自分、人は人、と思っていても身近で千鶴のようなおつとりとして女らしい女性を見ると、やっぱりこれでいいのかしら、と今も麻知子は思い悩むことがある。

（たぶんウチの子達がいかにも女の子らしい子が好きなのは、きっと私の姿を見てきているからなんだろうなあ……）

術人がいつも連れている女性達のタイプや、千鶴によく似ている桃乃を見ると、殊更に麻知子はそう思わず心を得なかつた。

そう考えた麻知子がなんとなく気分が落ち込みがちになつた時、ガチャリと玄関の扉が開きかける。千鶴が出てきたのかと思い、麻知子はふざけた口調で「もう、遅いわよー！」と声をかけた。

しかし次の瞬間、麻知子は「あっ…！」と口を開けて絶句する。

「いやあ～お恥ずかしい。ちょっと寝過ごしてしまってね、こんな時間になつてしましました」

玄関から出てきたのは千鶴ではなく雅治だったのだ。

「いっいいえ！ そんなつもりで言つたんじゃないんです！ 済みませんっ！」

麻知子は真っ赤になつて雅治に謝つた。少し遅れて千鶴も玄関先に姿を現す。

「あら、どうしたの？」

「あつ千鶴ちゃん！ わ、私千鶴ちゃんが出てきたのかとばっかり思つて……！」

慌てて弁解しようと麻知子を見て、雅治の眼鏡の奥が何かを思いついたかのようにキラリと光つた。

「いえいえ、元はと言えば僕ごときが重役出勤の真似なんかするからいけないんです。……ねえ、麻知子さん？」

「ど、とんでもないですッ！」

麻知子は、ぶんぶんと豪快に首を横に振る。

「もう雅治さんたら、麻知ちゃんをからかうのはやめてちょうだい」

恐縮しまくる麻知子を見て千鶴は夫をたしなめた。

雅治は悪戯をし終わつた少年のように満足げにニコッと笑うと、千鶴と麻知子に「行つてきます」と言い車に乗り込む。

クラクションを小さく一度、そしてマフラーの排気音を大きく鳴らしながら雅治が出かけてしまつと麻知子はフウッと大きく息を吐いた。その安堵のため息を聞いて千鶴が申し訳なさそうに謝る。「ごめんね麻知ちゃん。ウチの人、時々ああやつてわざと人をからつたり困らせたりするところがあるの」

「つうん。間違えたとはいえ失礼なことしたのは私だし。じゃ、行きましょー！」

今日は千鶴達が住む町内の主婦を対象にした、二ヶ月に一度の婦人会が開催される日だ。千鶴と麻知子は婦人会の行われる会館へ並んで歩きがてら、早速たわいのないお喋りを始める。

「ねえ、千鶴ちゃん、雅治さん今日どうしてこんな時間に出勤しているの？」

麻知子は千鶴より六つ年上だが、お互い子供の年も近く、この土地に同時に越してきた時からの付き合いのため、二人はいつの頃からそれぞれお互いを下の名前で呼ぶようになっていた。

「雅治さん、明け方に帰ってきたのよ。なんでも今度新しく創刊される雑誌の準備で今、仕事が大忙しみたいなの。さつきまでリビングで仮眠取ってたのよ」

「じゃあろくに睡眠取らないでまた会社に行つたの？」

「ええ」

「まさに企業戦士つて感じね。ウチの旦那にも見習つてほしいわー。ウチなんて毎日朝八時に家を出て夜六時にきつかり帰つてくるのよ。いやんなっちゃう」

「いいじゃない。毎日きちんと同じ時間に帰つてくるなんて。羨ましいわ」

冬馬と衍人の父で、麻知子の夫でもある啓一郎は役所に勤める公務員だ。

「そういえば麻知ちゃん、今日雅治さんね、明け方帰つてくる時にお家の前で衍くんに会つたつて言つてたわよ？」

「衍人の奴、今日朝帰りしたのよ」

麻知子は大袈裟にため息をついてみせる。

「大学に行くよになつてからもう遊んでばかり。ちゃんと勉強してるんだか……」

「衍人くんなら大丈夫よ。昔からやる時はちゃんとやる子だつたじ
やない」

「そりだといいんだけどね」

肩を竦め、そう相槌を打つた麻知子は「いじである」とふと思いついた。

「……ねえ千鶴ちゃん。今朝、もしかしてまた冬馬そつちにお邪魔
した?」

「ええ来たわよ。素敵なお自転車に乗つてね」

「やつぱりか……」

どうやら衍人の言つていた事は本当らしいわね、と麻知子は内心
で思つた。

「冬馬くん、今日も桃乃を迎えてくれたんだけどね、桃乃なに
か用事があるみたいで朝早く出ちやつてたのよ。ごめんなさいね」「
千鶴ちゃんが謝ることないわよ。ウチの息子が勝手なことしてる
んだから。こつちのほうこそごめんね」

「ううん。今日桃乃が帰つてきたら言つておくわね。明日は冬馬く
んと一緒に学校に行くと思うわ」

「……ん……」

今の千鶴の言葉にびつ返事をすべきか迷つた麻知子は曖昧な返事
をしてしまつた。

もし桃乃が冬馬との登校を嫌がつて先に出かけていたとしたら桃
乃に申し訳ないし、しかし母親として冬馬が桃乃と通学したがつて
いるのならさせてやりたいという親心もあつたせいだ。

「で、でもね千鶴ちゃん。もし桃乃ちゃんが少しでも嫌がつてるみ
たいなら無理に言わないでね? 絶対よ?」

千鶴は何を言つの、と言わんばかりの笑顔で微笑んだ。

「桃乃が嫌がるわけないじゃない。幼馴染の冬馬くんなのに」

(やうだといいんだけど……)

麻知子は心配する気持ちを隠し、千鶴に会わせて表面上は笑顔を見せた。

すれ違つた心 ▶2◀

「モモー、お食こじよひつよー。」

四時限目の中古文が終わり楽しい昼休みの時間だ。

桃乃は沙羅と机を合わせ、教室で一緒にお弁当を広げる。

「あ～モモのこれ何？ 美味しそう…」

「これ？ 厚揚げじゃないかな」

「ね、あたしのこのマスターードチキンと一個交換しない？」

「うん、いいよ」

沙羅は桃乃と交換した厚揚げをパクッと頬張る。

「すっごく美味しい！ よく味が染みてて！」

「ウチのお母さん料理得意なの」

「へえ～。ウチのママ、和風料理はあんまり得意じゃないんだよね。どうしても洋風に偏っちゃうのよ。あ、もしかしてママの作る料理は大好きなんだけどね」

そう言つと沙羅は手元のカラフルな弁当箱に視線を落とした。

「高校生になつたんだし、そろそろお弁当ぐらいは自分で作らなきゃダメかなあ。でもあたし、朝は弱いし……、そういうえばモモって朝何時頃学校に来ているの？」

「んつと、今日は七時半前だつたかな」

「そんなに早く…？ まだ部活も始まつてないのにどうしてそんなに早く来ているの…？」

冬馬のことを知らない沙羅に、幼馴染と顔を合わせたくないくて早く家を出たことを話せるわけもなく、桃乃は無難な返事をする。

「だつて満員電車嫌いだし……」

「そんなに朝早く来てたらヒマじやない?」

「う、うん、そななんだけど……」

と答えながら桃乃は今朝、自分の身に起きたあの出来事を思い出す。

「ねえ沙羅

「なに?」

「今朝ここに男子が入ってきた、って言つたら信じる……?」

「この教室に?」

「うん」

「W a o ！ ス「Y - I - だつて女子校舎に男子が入るの?」この規則では禁止されてるよね?」

「そう。だから私もビックリしちゃって……」

「その男の子と話したの?」

桃乃はもう一度頷く。

「ねつ、ねつ、どんな感じの男子だったの? 一枚目? カツコイイ?」

沙羅の反応は昨日の葉月とまったく同じで、桃乃は思わず噴き出しそうになつた。

なんとかそれを堪えて朝に出会つた要の姿をもう一度思いで見て見る。

どちらかといふと細身で纖細な感じのする要の雰囲気は向かいに住む術人の持つ雰囲気に近いものがあつた。

「ん……カツコよかつた、かも……」

「見たか?たゞ! ……でもその人、何しにこっちに来たんだろうね? もし先生にでも見つかつたら大変なのに、こっちによっぽど大切な用事でもあつたのかな」

「さ、さあ……」

要が禁を犯してこちらの校舎に侵入してきたのは自分の名前を聞きにきたということを知っている桃乃はその沙羅の言葉を聞いて赤くなつた。その赤面した顔を見て沙羅が不思議そうに尋ねる。

「なんでモモ、赤くなつてるの？」

「な、なんでもない！　なんでも！」

頬の熱を冷ますために手にしていたノートで自分の顔を仰ぎ始めた時、表紙に書かれている自分の名前が目に入った。

(へえ倉沢桃乃つていうんだ)

自分の名を呟いた要の声が頭の中で流れる。

再び顔が熱くなつてきたのを感じた桃乃は、沙羅に気付かれないよつ、ノートで仰ぐスピードをわずかに早めた。

その日の夜、倉沢家のインターフォンが鳴った。

いつもは雅治の帰りが遅くてなかなか一家団欒の夕食が取れない倉沢家だが、今夜はその雅治が久しぶりに早く帰ってきたので和やかな夕食がちょうど終わつた時だつた。

「あー、こんな時間に誰かしら

と千鶴が呟きインターフォンの受話器を取る。

「はー、どちら様でしょつか？……あら冬馬くん？　どうしたの

?　え、桃乃？　いるわよ、ちょっと待つてね

千鶴は通話ボタンを切るとキッチンに食器を下げている途中の桃乃を呼ぶ。

「桃乃！」

「なあに、お母さん？」

キッチン入り口のビーズ暖簾を片手で避け、その隙間から桃乃が顔を出す。

「今冬馬くんが来ているのよ。桃乃にちょっとお話があるんだって。冬馬くん玄関で待っているから早く行きなさい」

「エッ、冬馬が！？」

「もしお話長くなりそしたら上がつてもらいなさいね

「い、いいわよ！」

姉に続いて食器を下げていた葉月が茶々を入れる。

「何も恥ずかしがることないのに、お姉ちゃんってばや」

「どういう意味よそれ？」

「ほり桃乃、早く行きなさい。冬馬くん、外で待っているんだから」「千鶴の催促に桃乃は仕方なくリビングを出て玄関に向かう。サンダルを履いて玄関に出ると、上下真っ白のジャージを着た冬馬が玄関前の階段に座っていた。

振り返った冬馬の額には玉のような汗が流れていて息も少し荒い。

「……また走ってるの？」

桃乃は座っている冬馬の後ろに立つたままでそう呟く。

「ああ、一月に入つてから受験であまり運動してなかつたからな。久しぶりに走つてみたら思いつきつくなつてんの。体、メチャクチャ鈍つてる」

冬馬は再び前を向くと首にかけていたブルーのスポーツタオルで汗を乱暴に拭いた。

「部活も冬になつてからほとんどやつてなかつたもんね」

「夏の大会が終わつちまえ、三年は実質引退みたいなもんだからな」

「うん」

その後しばらぐ会話が途絶え、冬馬の荒い息が少しづつ收まりはじめる頃、桃乃が先に口を開いた。

「……で、用事つてなに？」

冬馬は一瞬その返事を遮らせると、桃乃に背を向けたままで訊いた。

「お前、今日柴門要つて奴に名前教えたのか……？」

自分から積極的に教えたわけではないが、それをどのように説明すればいいのか分からなかつた桃乃の返答が一瞬遅れる。

「教えたのか？」

冬馬が背中を向けたまま再び訊く。

「か、勝手に見たのよ。私のノートに書いてあつた名前を」

「一緒に昼飯食う約束もしたんだつて？」

「ちゃんと約束したわけじゃ……」

桃乃がそう言いかけると冬馬はそこでいきなり立ち上がり、階段に片足をかけると桃乃の方を振り返つた。

その冬馬の形相を見て驚いた桃乃は先の言葉を失う。

冬馬は恐いくらいに真剣な顔で桃乃の顔を見つめ、激しい口調で言った。

「いいか!?　あの柴門要つて奴には絶対近づくな！　分かつたなツ!？」

鬼気迫る冬馬の様子に少し臆しながらも桃乃は精一杯反論する。「ど、どうして冬馬にそんなこと命令されなきやいけないのよ！？」

「どうしてもだ！」

「そんなの理由になんないもん！」

不意に肩に痛みが走った。

冬馬が急に凄い力で桃乃の両肩を掴んだのだ。

「お前のために言つてるんだぞ！？」

冬馬の大きな掌は桃乃の細い肩を何度も揺さぶる。

「痛い！ 痛いってば！」

「分かつたなッ！？」

桃乃は全身の力を入れてやつと冬馬の手を振り払った。

「冬馬のバカッ！！」

桃乃はそう叫ぶと玄関に飛び込み、扉をバタンと勢いよく閉める。

「あら桃乃、冬馬くんには上がつてもらわなかつたの？」

リビングから千鶴の声が聞こえてきたが、桃乃はそのまま階段を上がつて自分の部屋へと戻つた。

部屋に入るとゆつくりとベッドの淵に腰をかける。

掴まれた時の鈍い痛みがまだ両肩に残つていてを感じ、そつとカーディガンを脱いでみる。するとまるで淡い桜の花びらのように、うつすらと赤い痣が冬馬の指の跡の形そのままに肌の上に散つていた。

(ちくしょう、あんな風に言つつもりなかつたのに……)

桃乃を怒らせてしまつた冬馬はタオルで口元を覆うと黙つて自宅

へと戻る。

あんな乱暴なやり取りで桃乃がちゃんと分かつてくれたかどうか
が冬馬には気がかりだった。

本当はもつと順序良く筋道を立てて、要の「こと」や、要と自分の衝突を上手く桃乃に伝えるつもりだった。しかし「ざ」「要に名前を教えたのか」と訊いた後、冬馬は自分で自分を抑えられなくなってしまったのだ。

ふと月明かりの下で自分の大きな手を見てみる。

桃乃の肩を掴んだ時、自分のこの掌に桃乃の両肩がすっぽりと収まっていたことに今更ながら冬馬は軽い驚きを覚えていた。

見つめていた自分の掌に思いきり力を入れて握り拳に変える。

理由は分からぬが、要が自分を見る眼には憎しみがこもっている。そのせいで桃乃が傷つくような事態が起こることだけはなんとしてでも避けなければならない。

冬馬はそんな暗澹とした気持ちを抱えたまま、足取り重く自宅の扉を開けた。

すれ違つた心 <3>

一夜が明けた。

冬馬によつて両肩につけられた桜色の痣はさらに薄い色に変化し、この分なら今日中にはほとんど田立たなくなるくらいにまで回復しそうだつた。

部屋の壁に取り付けてある大きな姿見に映るその痣が、昨夜の冬馬の異様な様子を桃乃の記憶から呼び覚ます。しかし、真っ白いカツターシャツに袖を通し痣が完全に隠れてしまつと、昨夜の出来事は本当にあつたことなのだろうかといつ半信半疑の気持ちに変わつていた。

(そりいえばあんな冬馬の顔、初めて見た……)

壊れそくなぐらいの力で桃乃の両肩を掴み、柴門要に近づくなと叫んだ冬馬の顔は、今までずっと近くにいた幼馴染の桃乃ですら見たことがない表情だつた。

朝食を取り、身支度を整えた桃乃は昨日と同じように家族に岀かける挨拶をして玄関の外に出る。

家を出てすぐに桃乃の顔が強張つた。

玄関先の道路に冬馬がいたのだ。

「……おつす……」

今朝の冬馬の声はいつのも声とは明らかに違う、気落ちした声だつた。桃乃が出てくるのを待つていたらしく、クロスバイクに乗つている。

昨夜のことは本当にあつたことではないかといつ気持

ちでいた桃乃だったが、申し訳なさそうな冬馬の視線がその気持ちを打ち碎いた。

「……おはよ

型通りの挨拶を返し、玄関の門を開けて道路へと出る。

そのまま駅の方向へと歩き出さうとした桃乃を謝罪の言葉が引き止めた。

「昨日は悪かった」

一瞬だけ足を止め、感情を押しとどめた声で答える。

「……いいの、もっ」

感情の起伏がまったく感じられないその返事を聞き、冬馬の顔に浮かんでいる後悔の色がより一層濃くなる。

「あ、あのさ、駅まで送つていいくよ」

「いいの。歩いていく」

「昨日の詫びの代りに……そ。な……？」

もう一度、「いいの」と冬馬の申し出を断ろうとした桃乃だったが、リビングの窓から千鶴が微笑みながら見ているのに気付くと断るのを止めた。昨日、千鶴から「明日もし冬馬くんがまた迎えに来てくれたら今度はちゃんと一緒に行きなさいね。せっかく毎日来てくれるているのに」と言われていたからだ。

家中から手を振っている千鶴に不信に思われないように作り笑いを浮かべ、一度だけ手を振り返すと桃乃は仕方なくクロスバイクの荷台に腰をかける。そして「駅までいいからね?」と小さな声で念を押した。

「……あ、ああ」

本心はカノンまで一緒に行きたい冬馬だったがこうやって素直に後ろに乗ってくれただけでも良かったと思い直し、駅に向けてクロ

スバイクは走り出した。

二人の家から駒平の駅は自転車なら五分ほどでついてしまう距離だ。

小さな抵抗の返事を一つしただけで後はおとなしく後ろに乗った桃乃の気持ちを推し量るかのように、クロスバイクはゆっくりと低い速度で移動する。

冬馬が反省しているのは充分に分かっているのに、クロスバイクの後部で揺れに体を任せながらポソリと桃乃は呟いた。

「……冬馬、変わったよね」

思わず冬馬は荷台の方を振り返る。

「変わった……？ 僕が？ どういうことだよ？」

桃乃は冬馬の問いかには答えずにもう一度同じことを口にした。

「変わったよ、冬馬」

たぶん昨夜自分が取り乱してしまった事を言つていると確信した冬馬は、それ以上追求せずにまた前方に視線を戻した。

沈黙の中、クロスバイクは走り続ける。

しばらくの間二人の間に起つた音らしい音といえば、クロスバイクの車輪が低速で回転する音だけだった。

やがて駒平駅の前に着くと冬馬はブレーキをかけて桃乃の願い通りに一旦クロスバイクを止める。そして桃乃が急いで荷台から降りる前にまるで宣言するように言った。

「俺は何も変わっていないぜ？」

それを聞いた桃乃は肯定も否定もしない。

代りに荷台から降りて礼を言った。

「送ってくれてありがとう」

桃乃からお礼を言われた冬馬はまたためらいがちな声に変わる。

「な、カノンまで乗つていかないか？」

「ううん、ここでいい」

「桃太郎はまだ怒ってるんだな……」

クロスバイクに跨つている冬馬は明らかに落胆していた。その言葉を聞いた桃乃は、今まで聞きたくても聞けなかつた事を今ここで思い切つて聞くことにする。

「怒つてないけど、一つだけ教えてほしいことがあるの」「要との事をもう一度改めて説明したかった冬馬は安堵の様子を見せる。

「答えたら後ろに乗つていくか？」

「……考えてみる」

とだけ答え、正面から冬馬に向き直る。

「聞きたいことって昨日の話のことだる？」

「ううん、違う。冬馬、どうして私のことを桃太郎って呼ぶの？一年前まではちゃんと私の名前呼んでくれていたのに」

自分の予想とは全然違つたその質問に冬馬の顔に驚きの色が走る。

「教えて。そしたら昨日のことは忘れるから」

しかし冬馬はクロスバイクのハンドルを握つたまま微動だにせず、その質問に答えなかつた。

そんな冬馬にしびれを切らした桃乃は自分の想像している答えを口に出す。

「……私のことバカにしてそう呼んでるんでしょ？」

冬馬はハンドルから手を離し、慌てたように叫んだ。

「ちっ、違うッ！」

「じゃ、どうして？」

再び冬馬は沈黙した。

黙つて向かい合つ二人の横を通勤や通学の人々が足早に通り過ぎていく。

「言いたくないならいい……。冬馬、もう朝に私を迎えてこないでね？」

最後にそれだけを一方的に伝えて、桃乃は冬馬に背を向ける。そして一度も振り返らずに改札口を通り、駅構内へと消えていった。答えを言えない以上引き止めることも出来ず、冬馬はクロスバイクに跨つたままで離れて行く桃乃の背中を見送る。

やがて揺れる艶やかな黒髪が自分の視界から完全に消えると、桃乃の知りたがつていたその答えを自分自身の胸の中だけで呟いた。

（お前を意識し過ぎていて気恥ずかしいからだよ）

この答えはどうしても言えなかつた。

しかし桃乃の事を「桃太郎」と呼ぶようになつてから、自分達の間にすれ違ひの溝が出来ていることは間違ひのない事実で、このまでは自分は桃乃から完全に嫌われてしまつ、といつ小さな焦りの芽がこの時初めて冬馬の中で生まれる。

桃乃を乗せた電車が目の前を走り去つてゆく。

それをじつと見つめながら、冬馬は自分に決断の時が訪れているのを感じていた。

車内の窓から冬馬がこの電車を見送っているのが見える。つり革に掴まっている桃乃の胸がチクチクと痛み出した。「カノンまで送る」という冬馬の誘いを冷たく断つた自分がとても非情なように思えたからだ。

なぜ自分のことを「桃太郎」と呼ぶのか、その理由は分からなかつたが、少なくとも昨夜の事に関しては冬馬はきちんと謝罪し、充分に反省している様子だった。

それなのに「明日から迎えに来ないで」などと冬馬を思いきり傷つけるような台詞まで置いてしまったことを考えると桃乃の胸の中には後悔の気持ちが湧き起こり始める。

もし時間を戻せるとしたら、素直にカノンのすぐ側まで冬馬に送つてもらっていたらうなと思いながら桃乃はつり革を握り直す。

その後悔の念は電車が一駆進む毎に大きくなり、は出来ることならすぐにでも先ほどの言葉を撤回し、今すぐ冬馬に謝りたくなつていた。毎朝、自分を迎えてくれていたことに決して他意はなく、純粹な厚意だということを桃乃自身がよく分かつていたからだ。しかしすでに走り出してしまっている電車は今の二人の距離を縮めるどころか、逆に遙か彼方に引き離してしまつている。

谷内崎駅に着くと、カノンまでの道のりを桃乃はいつも以上にゆっくりとしたペースで歩き始めた。

あのオレンジの自転車のペダルを漕ぐ持ち主が自分に追いついて

くれるよ。つい。

カノンの正門がもうすぐ見えてきてしまう。しかしそまだ冬馬は現れない。

後ろを振り返ってみても通ってきた早朝の通学路には誰もいない。またしばらくの間、ゆっくりと歩いた。そしていつそのこと、この場所で冬馬を待つてしようかと思つた時、やつと背後から自転車の音が聞こえてきた。

なぜその音が聞こえてきた時にすぐに振り返らなかつたのだろう、そしてどうして声をかけなかつたのだろう、と桃乃はすぐに後悔することになる。

冬馬の方からきつとまた声をかけてくれる、そう思つていた桃乃は、後ろからクロスバイクの車輪の回転する音が聞こえてきているのに、前を見たまま気付かぬふりをして歩き続けていたのだ。

真横を通り抜けた風に、桃乃の髪がフワリと広がる。

風を巻き起こしたクロスバイクは一瞬で桃乃を抜き去り、ペダルを漕ぐ冬馬の大きな背中がみるみる内に遠ざかつてゆく。

自分に声をかけずにそのまま追い越していくその姿を呆然と見つめる中、朝日に照らされたオレンジの車体はあつと/or>うまに視界から消え去つて行つた。

さつきよりも大きく胸がズキンと痛み、そしてやつと桃乃は気が付く。

後ろからクロスバイクの音がどんどんと近づいているのに一度も振り返らなかつた自分の背中が、冬馬から見ればそれがたぶん“無言の拒絕”に見えていたこと。

あなたを信じられない

定例会議がまもなく始まる時間だ。会議開始の合図の音楽が校内に流れ出す。

カノンでは隔週金曜日の午後四時半から教職員全員が集まってそれぞれ授業内容が予定通りに進んでいるか、何か問題を起こしそうな生徒はいかないかを報告し合う会議がある。

この会議は必ず全職員が出席することが義務づけられており、欠席することは許されなかつた。

定例会議はカノンの理事も出席し、理事長の黒岩秀樹くろいわひできが毎回議長を務めている。その恰幅のある見かけ通りの威厳ある声で、第一会議室に黒岩の第一声が響いた。

「皆さんお疲れ様です。では定例会議を始めたいと思います。今学期も新入生が入学して早一週間が経過したわけですが、先生方の方で何か問題が発生していることはありませんでしょうか？」

黒岩はこの自分の発言の後、会議室全体を見渡して教師一人一人の顔を見た。

会議室はシンと静まり返り、誰一人黒岩の発言に返答するものはない。

「……特にないよつですね。ではまず一年担当の先生方から報告していただきましょう。矢貫先生、お願ひ致します」

「はつはいッ！」

最初に指名された誠吾はガタガタと大きな音を立て、慌てて椅子から立ち上がつた。

会議室の全員の目が誠吾に向けられる。

（あーあ……、俺、どうもこの雰囲気にはいまだに馴染めないんだよな……。しかもなんでわざわざスーツを着なくちゃいけないんだよ……）

この定例会議には全員スーツ着用で出席することが義務付けられている。

いつも愛用のジャージを渋々脱いで堅苦しいスーツを着なければならぬこの会議は、誠吾にとつてはかなり憂鬱なことだった。

「規則」という絶対的な権力を得た縦縞のネクタイは、誠吾の首元を容赦無く力任せにグイグイと締めつけてくる。とにかく一刻も早く「コイツを外したい、そう思いながら誠吾は担当教科の進捗状況を報告し始めた。

「え、え、で、ではわたくしの一年の体育のほうですが、現在のところは特にどのクラスも授業の遅れは出ておりません。生徒の授業への参加状況も良く、ほぼ全員参加しております」

即座に黒岩の鋭い指摘が飛ぶ。

「……ほほ？　ということは参加していない生徒が若干名いるということですね！？」

「あー、え、その、そうですね……まあそういうこと……ハア……」

「……」

誠吾の隣の席に座っていた縁は、その情けない狼狽ぶりを横から見上げて小さくため息をついた。

「矢貫先生。体育の授業をボイコットしている生徒は一体何名いらっしゃるのですか？」

「い、いえ！　ボイコットではないです！」

誠吾は大声を出し、何度も手を振つて黒岩の発言を必死に否定した。

「じ、実は一年二組の女子クラスの生徒で笹田梨絵ささめりえという女生徒が

いるのですが、どうやら体が弱いようで体育の授業はいつも見学しているんです」

「……当学園では入学前、事前に生徒達の健康診断を行つております。その女生徒の個人履歴書に身体上の何らかの疾患が記載されましたか?」

誠吾は痛い所を突かれた、という表情になった。

「い、いえ、ありませんでした」

「ではその女生徒が体育の授業を受けていないのは立派なボイコットではありませんか?」

黒岩は咎めるような口調で更に誠吾を責める。

「そ、それは……」

「矢貫先生、来週の定例会議までにその生徒になぜ授業を受けないのかを問い合わせ下さい。場合によつては学審会にかけますので」「ちょっと、ちょっと待つて下さい! まだ新学期が始まつてから一週間しか経つてないんですよ? たまたま体の調子が悪かつただけかもしれないじゃないですか! それをいきなり学審会にかけるだなんて……!」

「学審会」とは「学生審問会議」の略称で、授業を受ける際に著しく態度の悪い者がいた場合、その生徒を呼び出してその理由を問い合わせ、素行を正す会議のことだ。この学審会で注意を受けても態度を更正しない生徒には、停学や退学への最後通知を言い渡す一つ前の勸告のような意味を持つ会議でもあった。

「ですからその前に矢貫先生からアクションを起こして下さいと言つているのです。当学園は伝統と規律を重んじる学校法人です。素行に問題のある生徒がいた場合は速やかに対処し、場合によつてはその危険分子を排除しなければなりません」

「きつ、危険分子だなんて……！」

誠吾の額にサツと青筋が立つた。

理由もろくに確かめずに生徒を危険分子呼ぼわりした黒岩に向かって怒鳴りつけようとした瞬間、誠吾のスーツの上着のすそがグッと力強く引っ張られる。

「！？」

驚いた誠吾が上着を引っ張られた左隣を見ると、シレッと素知らぬ顔で縁がわざと誠吾から視線を外した。

何かを言いかけた誠吾が結局何も発言しなかつたので黒岩はそのまま言葉を続ける。

「矢貫先生、来週の定例会議でこの件についてまた報告して下さい。では次に柳川先生、お願ひ致します」

次に黒岩に指名された縁はスクツと立ち上がった。

誠吾は仕方なく渋々と着席する。

「では報告させて頂きます。私の英語ですが、男子の一年三組がわずかに遅れています。ですが、これは来週前半には充分追いつく範囲内です」

「柳川先生、一年三組の授業が遅れるような原因が思い当たりますか？」

縁は黒岩の質問に落ち着いて答える。

「はい。昨日の授業中に生徒の一人が腹痛を訴えた後、少量ですが教室内で嘔吐しました。生徒を保健室へ連れていった後、教室内の後始末をした為に授業に遅れがでました」

「そうですか。来週中には遅れを取り戻せるのですね？」

縁はもう一度「はい」と自信に満ちた返事をし、続けて発言する。

「それと先週、私が正門前のチェック担当だったのですが、新入生の中で異性同士で一緒に登校してきた生徒達がいました。この学園は異性の交流に関しては厳しい規則があります。男子生徒の方は私の担当クラスの生徒でしたので、引き続き指導していきたいと思つ

ております

「」の縁の発言に会議室が少しそわついた。

そんなざわめきの中、誠吾の耳に「さすがは破壊魔ですね」と誰か他の教職員がこつそり呟く声が聞こえてきた。学園内で交際する生徒達を独自の強引な指導で幾度と無く壊してきた縁は、密かに職員の間でそんな影の名をつけられているのだ。

「分かりました。授業の方は問題は無い、ということですね。その生徒達の指導もよろしくお願ひします。それとこれは私の個人的な意見なのですが……」

黒岩は眉をしかめて縁の全身に視線を走らせた。

「私から見ると柳川先生の服装は教職者としては少々過激すぎるよう位に思えるのですがね？」

会議室の視線が一気に縁に集まる。

縁の豊かなEカップの胸を覆うスーツはいつもボディーラインにピツタリと添つており、下のスカートはいつもタイトミニード。

「もう少し若者を指導する教職者としてふさわしい服装をしていただけませんか？」

縁の左眉がピクリと小さく反応した。

「柳川先生、どうですかね？」

黒岩はすかさず畳み掛ける。

その言い方はあくまで丁寧にお願いをしている形だが、実際は有無を言わせない命令だといつことは会議室の職員全員が周知の事実だ。

「……わかりました。善処します」

渋々だが縁はそう言わざるを得なかった。

「結構です。では次の方にいきましょう」

そして黒石は次の教師を指名したので縁は再び席に腰を下ろす。隣席の誠吾が会議中ずっと何かを言いたげに何度も縁のほうをチラチラ見ていたが、縁はそれをすべて最後まで無視した。

一時間半後、やっと定例会議が終わり、やれやれと声こいたげに教職員達は第一会議室を後にしあじめる。

「柳川先生！」

その波に乗つて会議室から出てこいつとした縁を誠吾は呼び止めた。

縁は誠吾を見ると黙つて足を止める。誠吾は急いで縁の側に近寄つた。

「ちょっとお話をあるのですが……？」

まだ大勢の教職員達が残る会議室を見渡すと縁は誠吾だけに聞こえる音量で言つた。

「……三十分後、屋上で」

それだけを告げると縁はサッと身を翻し、会議室を出ていった。

カノンには男子校舎、女子校舎の他にもう一つ建物がある。

その建物は「中央塔」といい、男子校舎と女子校舎を繋ぐほぼ中間地点に建つてゐる建物だ。

つい今しがたまで定例会議が行われていた第一会議室はこの中央塔の四階にある。

一階には教職員や学生が利用できる食堂や購買があり、二階が教職員室、三階が理事長室で四階から五階が会議室だ。屋上はさらにその上の六階部分に位置している。

誠吾はわざと少し遅れて一番最後に会議室を出るとそのまま屋に向かつた。

中央塔の内部は職員室や会議室が中心でこの建物にはいつも大勢の職員がいるので、この塔の屋上に生徒が上ってくることはほとんど無い。

その代わり男子、女子、どちらの校舎の屋上も常時施錠はしないので、男子は男子校舎の屋上、女子は女子校舎の屋上で休み時間などにそれぞれむらついているらしい。

ネクタイの結び目に指を突っ込んで襟元を大きくグイッと緩め、スーツの袖を大きく捲ると、誠吾はスーツの内ポケットから煙草を一本取り出して口に咥えた。

年季の入ったジッポーライターの蓋をカチッと鳴らし、火をつけた。

段々と濃くなる赤い夕暮れ空に紫煙がゆっくりと立ち昇つていくのを見上げながら、誠吾は屋上で一人、ボーッと緑を待つた。

六本目の煙草に火をつけた時、屋上の重い鉄の扉が軋んだ。
そして扉を大きく開けたせいで、一瞬だけ自分に向けて強く吹き

込んできた突風に少し驚いた様子の縁が現れる。

「……やつ矢貫先生！ こんなところで煙草なんか吸わないで下さ
い！」

扉を開け、誠吾の姿を見た縁は開口一番で注意を放つ。

(俺、いつもこの女に怒られるよな)
ひと

誠吾は心の中だけでそう思い、苦笑した。

「なにをニヤニヤしているんですか！？ 人を呼び出しておいてま
つたく……」

縁は文句を言いながら誠吾の側に来ると腰に手を当てた。縁お得
意のポーズだ。

誠吾は今火をつけたばかりの煙草を指に挟み、縁にかかるないよ
うに顔を横に向けて風下の方にゅっくつと煙を吐き出す。

「……先生、わざなんで俺の背広引っ張ったんですか？」

「当たり前じゃないですか！ あなたあの時、黒板理事長に歯向か
うつもりだったでしょ！？」

「だつて先生！ 理事長のヤロー、俺の担当クラスの生徒に向かつ
て“危険分子”なんて言いやがったんですよ！？ 許せ
ますか！？」

「だからってあの時感情にまかせて怒りを爆発させいたら、あな
た今頃どうなつていたか分かつてるの！？」

縁は眉を吊り上げて誠吾を睨む。

「あの理事長を怒らせたらどうなるか、あなたが一番よく分かつて
るはずよ！？」

それを言われた誠吾は昔の自分のある失敗を思い出してグゥツと
言葉に詰まった。

それは今から一年前、誠吾がこのカノンに赴任してきたばかりの頃、誠吾をはじめとする、その年赴任してきた教職員を迎える歓迎会が行われた席のことだ。

元々陽気な誠吾は酒を飲むとさらにその性格に拍車がかかる。

その歓迎会の席で泥酔し、酔いに任せてある失態を演じてしまつた誠吾は、次の日、黒岩から理事長室に呼び出されてその場で厳重戒告処分を受けたことがあるのだ。

「あ、あの時は先生にも本当に迷惑をおかけしました……」

縁はフイツと顔を背けるとそのまま扉の方に体を向ける。

「とにかく、矢貫先生はもう少し自分の猪突猛進な性格を直して自重なさることね。じゃあ私はこれで」

縁が屋上から立ち去ろうとしたので、誠吾は慌ててまだ火をつけたばかりの長い煙草を手にしていた携帯灰皿に押し込むと縁の肩を掴んだ。

「柳川先生！」

肩を掴まれた縁は迷惑そうに振り返った。

「まだ何か？」

「せ、先生、あの、その、今田良かつたら一緒に食事でも……」

「結構です！」

肩に置かれた浅黒い手を縁は強く払つた。手を払われた誠吾の顔つきが急に変わる。

「キヤツー？」

誠吾に両手首を掴まれ、屋上扉の横の壁に強引に体を押し付けられた縁は叫んだ。

「なつ何をなさるんですか、矢貫先生ー？」

誠吾は緑の顔のすぐ前にまで自分の顔を近づけた。ヘビースモーカーの誠吾の体に染み付いた煙草の香りが漂う。

「……あの生徒達に何かするつもりですか……？」

誠吾の押し殺した声に緑の背筋にゾクッとしたものが走る。

「あ、あの生徒って……？」

「俺のクラスの倉沢桃乃と、先生のクラスの西脇冬馬のことですよ」

緑はハツと息を呑んだ。

「な、なぜ先生がその子達の事を知っているの！？」

「俺、先生が正門チェックの週は早く来てるんです。先生は知らなかつたでしょ？」

そう言いながら誠吾は握り締めている両手に更に力を入れる。

「やつやめて下さいっ 矢貫先生！」

「……さつきも会議で先生言つてましたよね？ “ 生徒達を引き続き指導していく ” つて。また生徒の仲をぶつ壊すようなことをするつもりなんですか！？」

「わ、私は別に壊そようとなんてしてません！」

「柳川先生、他の教師の奴らが先生になんてアダ名をつけているか知つてますか！？ “ 破壊魔 ” つて呼んでるんですよ！？」

緑の目が驚きで一瞬大きく見開かれる。

「そんな馬鹿げた名前をつけられてるんですよ！ 大体、先生はその気もないのにわざと男子生徒に親しく声をかけたり、厳しく指導をしたりとか、生徒達の仲をわざわざ壊しにいくような真似はもう

止めて下さい！ 確かにここは規則で異性間交流は事細かに決められてますがお互いの校舎に入るな、とか男女が校内で顔を合わせるのは休み時間はダメで昼ならいい、とかそんなたわいもないもんでしょう？ 柳川先生の指導はやり過ぎだし、何より間違っています！」

大声で誠吾にはつきりとそう指摘され、手首を掴まれた状態の緑は黙つて俯く。

「だからもうお願ひですから止めて下さい……。俺、先生見ているとなんだか危なっかしくって……」

「あつ危なっかしいのはあなたのほうでしそつ！」

キッと顔を上げ、負けじと緑も大声を出した。

「さつきだつて私が助けを入れなきやどうなつてたかしらー？」

「そ、それは感謝します」

誠吾は素直に礼を言った。

「じゃもういいでしょ！？ 矢貫先生の仰りたいことは分かりましたからこの手を離して下さい！」

しかし誠吾は緑の顔を黙つて見下ろしたままで、まだその手を離そうとしなかつた。

「離して下さい！」

と緑がもう一度そう叫んだ次の瞬間、緑の唇を誠吾は乱暴に奪つた。

「ツー？ ット……！」

緑は必死に抵抗したが両手首をガツシリと抑えこまれていて身動きが取れない。

息苦しさで小さく開いた緑の唇にすかさず誠吾の舌が差し込まれた。

「んんっ……！」

口中に一コチンの苦い味が一気に流れ込んでくる。

たじろぐ緑の一瞬のスキについて、誠吾は緑の舌に素早く自分の

舌を絡ませた。

その舌を自在に動かして、誠吾は緑の口中を器用に舐り続ける。

「んつ……んつんつ……」

ねつとつと絡み付くよつた誠吾のティープキスに緑の体の中心は痺れた。

緑の舌を散々舐った後、よつやく誠吾は口を離した。

そしてハアハアと息を切らしながら一人は互いの顔を見つめ呟う。

「好きです」

誠吾は緑の手首を離さないままで告白した。

「俺、前からずっと先生のこと……」

「止めて ッ！」

緑は絶叫した。

「あつあなたのことなんか信じられないわ！」

緑はそう叫ぶと掴まれていた両手を強引にふりほどき、逃げ出すよつに誠吾の側から離れた。

屋上扉が再び開けられる音が響き、誠吾が緑を引きとめたよつと云ふ。

「柳川先生！」

しかし無常にも屋上扉は大きな音と共に閉じられる。

一人残されてしまった誠吾はその扉を見つめ、黙つて立ち尽くした。

大きな失意を抱えた誠吾はやがて壁に背を預けて寄りかかると、
するするとコンクリートの上に足を投げ出して座り込み、また内ポ
ケットから煙草を一本取り出して火をつけた。

大きく煙を吸い込み、赤から紺色に変わりつつある夜空に向かつ
てため息と共に吐き出す。その時、誠吾は指に挟んでいる煙草の吸
い口がほんの少しだけ紅くなっていることに気がついた。

吸い口に残された置き土産を誠吾はしみじみと眺め、やがてそれ
をそっとまた口に咥える。

その後、屋上から夜空へと立ち昇る一筋の紫煙はしばらくの間途
絶えること無く、いつまでも ゆらゆらとたなびき続けていた。

彼が呼ばなくなつた理由 【前編】

桃乃達がカノンへ入学してから一週間半が過ぎた。

そろそろ部活を決めなくつちや、と思いながら帰宅した桃乃是自家の門鍵を外し、玄関前の階段を軽やかに上がる。

同じ部活に入ろうね、と沙羅と決めたのはいいのだが、お互いこれといって絶対やりたい部活があるわけではなく、特に気の多い沙羅が、

「ね、バレーとバスケだったらどっちがいい？」

「やっぱり琴つていうのもいいなあ！」

「うーん、でも放送部も捨てがたい……」

などと毎日意見が「口口口口変わるのでもだ決められずにいたのだ。

玄関前の階段を上り切った桃乃は、家の中に入る前にそつと冬馬の家を見る。

(冬馬、またバスケ部に入ったのかな……)

駒平の駅で「もう迎えに来ないで」と冷たく言い放つたあの日以来、冬馬は姿を見せなくなつていた。もし冬馬に会つたらあの時の言葉を取り消して謝りたかったのに、今はまだそのきっかけすら見つけることが出来ていない。

そして冬馬との間がおかしくなつた原因の要も、女子校舎内ではつた以降、昼食の誘いにまだ現れない。一体あの男の人と冬馬に何があつたんだろう、と考えつつ桃乃は家の中に入った。

「桃乃？ お帰りなさい」

「お姉ちゃんお帰り～」

リビングを覗いてみると千鶴と葉月がお茶の真っ最中だった。
焼きたてのスコーンのいい香りがする。

「ただいま」

「紅茶淹れておくから早く着替えてらっしゃい。ダージリンティーとバニラティー、どちらがいい?」

「ダージリンにしようかな」

「はいはい」

桃乃が制服を着替えに一階へ行つてしまつと、美味しそうにスコーンにかぶりついていた葉月がその動きを止める。

「ねえお母さん、そういうえば最近のお姉ちゃんってあんまりお母さんのお菓子食べなくなつてない? あたしの気のせい?」

「桃乃はね、少し甘いもの控えるようにしてるんだって」

「へー! お姉ちゃんてばダイエットしてるんだ!」

葉月の瞳が途端にキラキラと輝きだす。

「負けてらんないわ、あたしもする!」

皿に戻したかじりかけのスコーンが、バランスを崩して口ロンヒ横たわる。

「まあ葉月、あなたまだ小学生なのよ? 今からヘンにダイエットなんかしたら体壊しちゃうんだからね?」

千鶴にたしなめられた葉月は頬を膨らませる。

「イヤ! 絶対するもん! お母さん、今日の晩御飯はあたしこいつもの半分でいい!」

「まあ困った子ね……」

千鶴はしばらく思案顔をしていたがやがて優しく切り出した。

「葉月、いいこと教えてあげましょうか? この間麻知ちゃんが言つていたんだけどね、冴くんの好きな女の子のタイプってただ瘦

せているんじゃなくて、部分部分に適度にお肉のある女の子なんですって」

「ええっ 術人兄ちゃんが！？ それホントッ！？」

勢い込んで尋ねてくる葉月に千鶴は笑った。

「葉月は本当に術人くんが好きなのね……」

「うん！ だつてあたし将来術人兄ちゃんのお嫁さんになるから！」

「フフシ、そうなるといいわね」

「なるもん！ まかせてといてお母さん！」

下の娘の無邪氣な言葉に微笑みながらも、千鶴はふと思った。

(葉月と術人くんはまあありえないだろ！けど、桃乃と冬馬くんてどうなのかしら……？)

もしそうなつたら西脇家が親戚になるということだ。

向かいの麻知ちゃんとはとても仲がいいし、そうなつたらいいのにな、と千鶴は思ったがふと自分の発想の豊かさにクスッと一人で笑う。

(こくらなんでも気が早過ぎるわね)

「お母さん？ どうしたの急に思い出し笑いなんかして？ なにに？」

「内緒！」

千鶴はそう答えるとティーサーバーに手を伸ばした。
いいタイミングで着替えた桃乃がリビングに下りてくる。
すぐに熱いダージリンが注がれたティーカップが差し出された。

「はい、桃乃」

「ありがとうお母さん」

「ねえねえお姉ちゃんはスコーン食べないんでしょ？」

葉月の探るような言葉に桃乃はあつたりと答える。

「食べるわよ？」

「えつ食べるのーー？」

「何よ、食べちゃダメなの？」

「そういうわけじゃないけどさ、お姉ちゃんダイエットしてるんでしょ？」

「ダイエット？ そこまで真剣にはやつてないってば。少し甘いもの控えているだけ。だからこのスコーンも一個だけね」

桃乃はまだホカホカと暖かいスコーンを手に取り、一口分を口に運ぶ。

「お母さん、コレとつても美味しい！」

「ほりね、葉月。確かに食べ過ぎもいけないと思つたけど、何事も程々がいいのよ。分かつた？」

千鶴にそう言われ、葉月は少し複雑な顔をしながら半分口をつけたスコーンにまた手を伸ばした。

「それに一人がお母さんのお菓子を食べてくれなくなつたら寂しいなあ」

「だ、大丈夫！ 食べるよ食べるーー！ お母さんのお菓子つて本当に美味しいもん！」

慌てた葉月は大きな口でパクッとスコーンを頬張つてみせた。その様子を見て千鶴が微笑んだ時、外からけたたましい車のクラクションが聞こえてきた。しかしだだ強く鳴らすのではなく、何かに呼びかけているようなリズム音に葉月が一番に反応する。

「今の何かの合図っぽくない？」

間もなくインターフォンが鳴った。興奮した声で葉月が叫ぶ。

「ほりー！ やつぱりうちだよー！」

葉月のその言葉にいつもはおつとりしている千鶴もつい感化され、

インターフォンに駆け寄った。

「はい、どちら様ですか？……あらっ、 衍くん？」

訪問者を知つた葉月が弾んだ声を出す。

「衍兄ちゃんなの！？」

「ええ、いるわよ。今行かせるわね」

「あたしでしょ！？ 行つてくる！」

椅子から立ち上がつた葉月に受話器の送信口を手で押さえながら慌てて千鶴が引き止める。

「あ、ちょっと待つて葉月。 衍くんが用事あるのは桃乃なんですつて」

「ええ つ！？ デラしてあたしじゃないの……」

千鶴は心底落ち込む葉月を気にかけながら桃乃を促した。

「ほら桃乃、玄関に出て」

「う、うん」

(衍兄イが私になんの用事かな?)

桃乃が外に出でみると、玄関前には燐然と黄緑色に輝く車と、それ以上に輝く満面の笑みでその横に立つて居る衍人がいた。

「やあ桃乃ちゃん！」

「衍兄イ、この車どうしたの？」

「買つたんだ～！」

衍人は本当に心から愛しそうな目で車を見る。

「どうどう？ カッコイイでしょ？」

「うん。かつこいいオープントンカーだね」

それを聞いた衍人はしたり顔で細くて長い人差し指を横に振つた。

「ノンノン、桃乃ちゃんちょっと違うなあ。オープントンカーじゃなくてカブリオレと言つてくれない？」

「車のことなんてよく分かんないもん」

「ま、それもそうだ。男の車にかける壮大なロマンは女性には分からぬもんだからなあ」

衍人はそう言ひと優雅な身のこなしで助手席のドアをスマートに開ける。

「さあどうぞお嬢様」

「な、何？」

「素敵な王子がこのグリーンの馬車でやつて参りましたのでどうかしばしお付合い下さい」

「え、衍兄イの運転で？ 惨い……」

おどけていた衍人は途端にガツカリした顔になる。

「お、おい、そりやないだろ桃乃ちゃん！ 僕、免許取つてもう丸二年経つてるんだぜ？ いつもオヤジの車運転してたんだから大丈夫だつて！」

「でも……」

渋る桃乃に、衍人は片手を顔の前に出して必死に押む。

「ね、お願ひ！ ちょっとこの辺一周するだけだからさ！ この車今日納車されたばかりなんだよ。この間から車が来たら冬馬が乗せろ乗せろつてうるさくつてさ。納車後の最初の同乗者が男なんて冗談じやないつて。縁起悪いどころじやないよ。事故つたらどうすんだつて。桃乃ちゃんもそう思つだろ？」

桃乃は大真面目に語る衍人を見て吹き出した。

「へんな衍兄イー！ そんなことぐらいで事故るわけないでしょ？」

「いやいや、俺つて結構そういうの信じてるんだよ。だからほら、一種のゲンかつきみたいなもん？ 俺のこの車で一番最初に助手席に座るのはやっぱり可愛い女の子じゃないとね

「じゃあ別に私じゃなくてもいいじゃない。衍兄イには女人がい
つぱいいるんだから」

「あの桃乃ちゃん? その言い方、お兄さんは地味に傷つくんです
けど」

「だつて事実じゃない」

「そりやあ女友達は沢山いるけど、実は今本命がいないんだよね
……」

衍人はキーを指にかけてため息をついた。

「狙ってる女の子はいるんだけど落とすにはもうちょい時間かかり
そうだしさ、冬馬は今夜帰つて来たら乗せろ乗せろつて騒ぐだろう
し……。だから桃乃ちゃん、ここはひとつ俺を助けると思って!
ね? ね? お願いします!」

根負けした桃乃は仕方なさそうに笑った。

「……衍兄イ、安全運転してよ?」

「もちろんですよ!」

衍人が再び助手席のドアを大きく開ける。

「さあどうぞどうぞ」

階段を下りて車に乗り込むとするが、ロビングのガラス窓が物
凄い速さで開いた。

「お姉ちゃんズルイ!」

「あれ、葉月ちゃん?」

急に現れた葉月に衍人は少し驚いた表情を見せる。

「もうつ衍人兄ちゃんも衍人兄ちゃんよ! あたしというものがあ
りながらなんであたしじゃなくてお姉ちゃんを誘うの! ? お姉ち
ゃんじやなくてあたしを連れてつて!」

「あ~そつか、どうしようかなあ……」

衍人は困り顔で口に手を当てる。

「実はちょっと桃乃ちゃんに話しあつたんだよね……」

桃乃は驚いて衍人の横顔を見た。
今の今まで「話しがある」だなんて衍人は一言も言わなかつたらだ。

「葉月、だつてあなたこれから塾へ行く所じゃないの」

窓に近づいてきた千鶴が葉月をたしなめる。

しかし葉月の目がうつすらと涙目になつていて、ことに誰よりもいち早く気付いた衍人は慌てて明るい声で解決案を出した。

「じゃ、じゃあさつ、今週の日曜、葉月ちゃんと二人でドライブするよー、ね？」

「……ホント？」

「本当本当！だから葉月ちゃん日曜空けておいてくれる？」「うん！」

葉月は大きく頷き、向日葵のような笑顔になつた。機嫌を直した

葉月とは対照的に、千鶴は申し訳なさそうな顔で謝る。

「まあ葉月の我慢で……いつもごめんなさいね、衍くん」

「いえ、全然そんなことないですよー、じゃ、ちょっとだけ桃乃ちゃんお借りしてこの辺をドライブしてきますんで！」

衍人は桃乃がシートに座つたのを確認すると「シートベルト締めてね」と優しく言い、助手席のドアを閉めて颯爽と運転席に乗り込んだ。

「どうどう、桃乃ちゃん、このエンジンの回転音の上品さが分かる？ 小回りも思ったより効くし、やっぱりヨーロッパ車には日本車はないエレガントさがあるよね！」

浮かれている行人はグイグイとアクセルをふかしてエンジンを回し、そのスピードのせいで助手席の桃乃は張り付いたような笑顔で少々うんざりしながら行人の「愛車講釈話」を聞いていた。

屋根を収納してオープンにしているせいで、頬の横を風がものすごい勢いで撫でてゆく。

町内のあちこちを走りながらこの車がいかに素晴らしい性能を持っているかを熱く熱く行人は語るのだが、車に興味の無い桃乃にとってそれはまさに馬の耳に念佛みたいなものでまったくもって無意味なことだった。

「でさ、リアウイングの周辺にシルバーのアクセントを加えてるところなんかすごくスタイリッシュだろ？ 足回りはちょい硬めだけど立ち上がりの加速も思つたよりイケてるしさ、……桃乃ちゃん聞いてる？」

「うん、ちゃんと聞いてるよ」

得意満面の行人の笑顔につられて桃乃もやっと本当の笑顔が出た。

「兄兄イ、ホントに嬉しそうだね。なにせ初めて買った自分の車だもんね」

「うん、そうだよ。ほら、ウチのオヤジの車つてもろ『オジサンが乗ってる車です！』って感じの車だろ？ あれで女の子迎えに行くの恥ずかしかったんだけどもうこれからは大丈夫！ 堂々と迎えに行けますよ！」

「…… 衍兄イ、もしかして女人を迎えて行くためだけにコレ貰つたわけ？」

桃乃の鋭いツツコミにギクリとした衍人は運転席で背筋を伸ばした。

「ま、まさかまさか！ 何を言つてさ桃乃ちゃんは！ 僕、大学もちょっと遠いところだろ？ だから通学用ですよ、通学用！」

「ふーん」

それを聞いた桃乃はシラツとした顔で前方に目線を戻す。

「あれれ！？ 桃乃ちゃん全然信じてないでしょ？ ヒドイなあ～」

「ねえそれより衍兄イ、この車つて結構するんじゃない？ お金つてどうしたの？」

「もちろんオヤジから借りたよ。勤めるようになつたら分割で返す約束なんだ」

「おじさん、出してくれなかつたんだ？」

「あの堅物オヤジがそんな融通効くようなことしてくれるわけないじゃん！」

それを聞いた桃乃は衍人と冬馬の父親の姿を思い出して「そうね」と相槌を打ち、小さく笑つた。

真面目で頑固、太い黒縁の眼鏡をかけた啓一郎はまさに「堅物」という形容詞がピッタリくるような人物だ。

「まあそれでも利子をつけられなかつただけオートローンとかよりは幾分かマシだつてくらいかな」

歩道橋のある大きな十字路に差し掛かると、ワインカーを点滅させて車は右に曲がる。

「おっさすが！」これだけ大きくカーブしても地面にタイヤがしつ

かりと吸いついている感じがするよ！ 桃乃ちゃんは分かる？

「あのね、それと衍兄イにもうひとつ聞きたいんだけど」

「なにかな？」

「さつき葉月に言つてたでしょ？ 私に話しがあるって。それってなんなの？」

「あー……それね……」

桃乃は次の言葉を待つたが衍人はそのまましばらく何も言わずに車を走らせる。

衍人があまりにも何も言わないので桃乃は急かした。

「ねえあまり良くない話なの？」

「う…ん、桃乃ちゃんにとつていいのか良くないのか俺にもちょっとまだ分かんないんだよね……」

意味不明で曖昧な衍人の返事に桃乃は顔をしかめた。

「もう、はつきり言つてよ衍兄イ！」

「うんちょっと待つて、もうすぐ着くから」

車はいつのまにか急な坂道をグルグルと回りながら上つている。小さな山なので車はすぐに頂上付近にまで着いた。

「やつた、空いてる空いてる」

衍人は頂上付近の車道横にある一台しか停めることのできない小さなスペースに車を滑り込ませ、ギアをパークリングに入れた。

「ほら、見てごらん桃乃ちゃん」

桃乃はフロントガラス越しに見えるその光景に思わず声を上げた。

「ね？ ここ、ちょっと高さはイマイチだけど”ぐく見晴らしがいい穴場ポイントなんだよ。夜に来ると街のネオンが光つてもつと綺麗なんだよ」

「じゃあきつとこが衍兄イガ女人の人を落とす場所の一つなのね？」

「大当たり！」

衍人はそうおどけた後、ふと助手席の薄着の桃乃を見て心配気な顔になつた。

「桃乃ちゃん寒くない？俺、いきなり連れだしちゃったもんね。幌閉めようか？」

「え、これ屋根あるの？」

「もちろんですよ！」

と自信満々の口調で衍人はセンター コンソールのスイッチを押した。すると車の後部からメタルトップのルーフが現れ、あつという間に上空を覆いだす。

「スゴーイ！」

感動している桃乃の反応が嬉しかつたのか、衍人は得意げな顔になる。

20秒足らずでルーフは完全に閉じられ、車内は開放空間から密閉空間へと一気に早代わりした。

「さて、これで密室になつたことだし」

衍人はそこで一旦言葉を切るとシートのバックレストを少し後ろに倒し、小さく微笑みながら桃乃を見つめた。

「じゃあその話しでもしてみましようか？」

彼が呼ばなくなつた理由 【後編】

「ねえ桃乃ちゃん、そんなに緊張しなくていいよ？ なにもここで取つて食いやしないからわ」

一体何を言われるのだろうと助手席で身を固くする桃乃に、衍人が笑みを浮かべながら優しく言う。そんな衍人らしいジョークに桃乃是クスッと笑うと即座に切り返した。

「ううん、衍兄イなら分かんないよ！」

「おっそうきましたか！ ハハツ、参つた参つた！ 今ので桃乃ちゃんが普段俺をどんな目で見てるかよく分かつたよ！」

一本取られたな、と言いつつ衍人は声をあげて笑つた。そしてその笑いが収まると次は考え込むような表情に変わる。

「ん～、でもそうだなあ……、確かに桃乃ちゃんはとつても可愛い女の子だけどさ、俺にとつてはあくまで “ 可愛い妹 ” つて感じなんだよね。そう、葉月ちゃんと一緒でさ」

衍人はそこで一旦シートから身を起こすと、車内に流れていた音楽を消す。

「それに弟が好きな女の子取れないしね」

「H……ツ？」

サラリと言つた衍人の言葉に桃乃の胸は一瞬ドキッとした。

「桃乃ちゃんさ、本当はどうくに気付いてるんだろ？ 冬馬が桃乃ちゃんのこと大好きなことさ。分かるよな、あれだけしょっちゅう冬馬の奴が分かりやすいことしてればなあ。ねえ？」

衍人はダッシュボードの上にあつた外国産の煙草を取り一本口に咥えたが、桃乃の方を見て「吸わないほうがいい?」と尋ねる。桃乃がコクリと頷いたので衍人は涼やかなその水色の箱を元の場所に戻した。

「ね、桃乃ちゃんはさ、冬馬のことどう思つてるの?」

しかし桃乃是正面を向いたまま何も答えない。

「もしかして嫌い? もし冬馬のこと本当は嫌がつてて困つてるなら、俺があいつにちゃんと言い聞かせるけど……?」

桃乃是眼差しを伏せ、正面を見たままでポツリと呟く。

「……冬馬は私のこと、本当に、す、好きなの……?」

「何言つてんの。もう好きも好き、超大好きでさ、桃乃ちゃんしか見てない状態じゃん?」

「だつて、冬馬は私のことを桃太郎つて呼んでバカにしてるみたいなんだもん……」

「ああそれね……」

衍人は小さく笑うと前髪を搔き上げた。

「俺知つてるよ? なんであいつが桃乃ちゃんのこと、そつやつて呼ぶようになつたのか。これはたぶん俺しか知らないだろ? なあ」

「えつ本当! ? ねえ教えて衍兄イ!」

「うん、もちろん教えちやうよ。でも俺から聞いたことは冬馬には内緒ね? えつと、確か一昨年だよね、ウチと桃乃ちゃん家でさ、霧里高原きりさとこうげんにキャンプに行つたの覚えてる?」

「う、うん」

「冬馬と桃乃ちゃんがあの時中一で葉月ちゃんが確か九歳、俺が大学入った年だつたな。実のところ俺さ、本当はあのキャンプ行きたくなかつたんだ。冬馬はいいけど俺もう十八だつたしさ、今さら家族で仲良くキャンプなんてやってられないじゃん?」

衍人は相槌を求めるように言った。

「だから最初は行かないつもりだつたんだ。でも途中で気が変わつてね。俺その当時思つたんだよ。たぶんこれが家族最後のレジャーになるんだろうなってさ。冬馬だつてそのうち親とレジヤーや旅行になんて行きだがらなくなるだろうな、ってね」

衍人が運転席に深く座り直した時、いつも好んで使つているフレグランスの香りがフワッと車中に広がる。

「だからここは俺が少々我慢して、西脇家最後の家族全員の思い出を作つとくべきかな、つて思つたわけ。そんで結局俺も一緒に行つたわけですよ」

衍人は「ちよつとは殊勝なところあるだろ?」と言つと桃乃の方を見て笑う。

「で、あの高原にある川原でテント張つたじやん? 俺達は釣り始めてさ。桃乃ちゃんと葉月ちゃんは浅瀬の方で泳ぐ、つてことになつて。ね、この先覚えてる?」

衍人は小さな微笑みの中に悪戯っぽい表情を混ぜながらそう尋ねる。

「お……覚えてるわよ! 衍兄イと冬馬が……!」

桃乃は真っ赤になりながら衍人を思いきり睨んだ。

「そりなんだよね、俺ら見ちゃつたんだよね桃乃ちゃんのハダカ」

「裸じゃないでしょっ! ?」

完熟トマトのような顔色で桃乃は叫んだ。

「あ、失礼失礼。厳密に言えば下着姿だつたね。可愛いかったな〜、確か白のフリルついたブラだつたよね? 真ん中にちつちついリボンついててさ」

「衍兄イツ!」

桃乃の剣幕に行人は運転席で身を竦めた。

「だ、だつてあの時桃乃ちゃんいつまで経ってもテントから出でこないからさあ、どうしたのかなと思つて冬馬と覗いてみたんだよね。そしたら桃乃ちゃんちょうど着替えてたんだもん」

「だからって普通覗く！？」

「ごめん、ごめん。まあでもあの時、もう十八だった俺は中一の女の子の下着姿なんか見ても別になんとも思わなかつたんだけど、あの冬馬くんはちょっと違つたわけですよ」

当時のその光景を再び思い出した行人は、こみ上げてくる笑いを堪えながら続きを話す。

「あの後の冬馬の様子、ずっとおかしかつたんだぜ？　もう“心ここにあらず”って感じでボーッとしちやつて。釣竿に魚がかかつてもあいつ全然気付かないんだ。傍で見ていってもあれはマジで面白かったよ。でね、俺思うんだ。たぶんあの時から冬馬は桃乃ちゃんを、幼馴染の女の子から一人の女性として初めて意識はじめたんじゃないかなあ、って」

“一人の女性として意識しはじめた”という行人の言葉を聞いて、桃乃の頬は一気に赤くなり、同時に胸の中心を突かれたような衝撃を受ける。

「そ、そんなこと無いと思つ……」

「いいや、間違いないって。ね、桃乃ちゃん、思い出して『ごりんよ。あいつ、あのキャンプの時までは桃乃ちゃんのことを普通に“桃乃”って呼んでいただろ？　でも俺の知る限りではあれ以降なんだ、桃乃ちゃんのこと一切名前で呼ばなくなつたの

行人に言われて桃乃は必死に自分の記憶を手繕つてみた。

思い返してみるとそのキャンプの前までは冬馬は自分のことを普通に「桃乃」と呼んでいたような気がする。そして「桃太郎」と呼ばれ出した記憶は確かにすべてそのキャンプの後だった。

「だから冬馬は桃乃ちゃんのことバカにしてそんな風に呼んでるわけじゃないと思うよ。たぶん、あいつの一種の照れ隠しなんだとは思うんだけどね。あいつは不器用だからな。要領が悪いっていうか、そういうところ全然俺に似てないんだよね。可哀想に、ウチの堅物オヤジそっくりだよ」

車中からウインドーの外を眺めていた行人は、山道の草むらに乗り捨てられている汚れた自転車に目を留める。

「あ、そうそう、それともう一つこつそり教えて上げられることがあるな。あいつ、クロスバイクも買つただろ？　あのリアキャリア、……あ、後ろの荷台のことね、あれ、きっと桃乃ちゃんを乗せるためだけにつけたんだと思うよ。俺、あれ買いに行く時に一緒に行ってやつたんだけどさ、サイクルショップの店員達に“せっかくの綺麗なフォルムが損なわれるから止めたほうがいい”って何度も言われてもあいつ、必要だからって言い張つて頑として譲らなかつたんだ」

「……！」

あの自転車にまつわる隠された事実を聞いた桃乃は、黙つたまま膝の上に置いてある自分の手をギュッと握りしめる。

「しかもあの車体の色つてオレンジだろ？　オレンジは桃乃ちゃんが昔から大好きな色だもんなあ」

ついにこらえきれなくなり、桃乃は顔を上げ、勢い込んで行人に訊ねた。

「ねえ衍兄イ、本当にそつなの！？　本当に私のために冬馬はオレ

ンジ色の自転車を選んだり、荷台をつけたりしたのー?」

「うん、そうだと思うよ。それしか考えられないじゃん。リアキャリアなんか特にさ。普通はあんなのわざわざつける必要ないからね」

「…………」

それを聞いて再び俯く桃乃の反応を見た行人がさりげなく次の秘密情報を流す。

「冬馬の奴さ、本当は別の高校に推薦の話しあつたんだ。だけど桃乃ちゃんがカノンを目指しているのを知つてあいつ、カノンを受けることにしたんだよ。知つてた?」

「ホ、ホント……!?」

「本当本当。まああいつも健気つていえば健気だけどさ、問題は桃乃ちゃんにその気持ちが全然伝わってなかつたってことだよね。……で、お兄さんの話は以上で終了なのですが、肝心の桃乃ちゃんの気持ちはどうなのかなあ? ね、俺にだけコッソリ教えてくれない?」

しかし桃乃はそれには答えずに別のこと口にした。

「…………実はこの間冬馬とケンカしたの…………」

「あ、そうなの? ああ、それでか! いや実はね、最近冬馬の奴、なんか妙にピリピリして常に考え込んだ顔してんだよね。母さんと俺、密かに心配してたんだ。そつか、桃乃ちゃんとケンカしてたらだつたのか。そつかそつか

“妙にピリピリしている”といつ冬馬の様子を聞いて桃乃の胸が痛んだ。

「どう? この行人お兄さんでよかつたら仲直りの橋渡しするけど

?」

「ううん、いい。自分でするから……」

「そつか、桃乃ちゃんがそうしてくれるのならもちろんその方が絶

対いいよ。でも何かあつたらすぐ俺に言つてね。俺はいつでも桃乃ちゃんの味方だからさ。……あ、もうこんな時間か」

バックレストを元の位置に戻し、手馴れた様子でギアを素早くエンジすると衍人は車をゆっくりと発進させる。

「よし、じゃあそろそろお嬢様を邸宅へお返ししないとね」

自宅に送つてもううまでの帰り道、再び衍人の一方的な愛車自慢が延々と始まつていたが、もう桃乃の耳には全く届いていなかつた。車外を流れる景色を眺めながら桃乃は一人考え続ける。車窓の外はすでに暗くなり始めていて、頭の中で色々と考え事をするのには最適の環境だつた。

（冬馬がそんなに私のことを好きだつたなんて……）

衍人の声をBGMに、冬馬のことだけに意識を集中して考えてみる。

こつして思い返してみると確かに今までの冬馬の行動はすべて衍人の言う通り、色々と自分を気にかけてくれた為の行動だつたのかもしれない、と今は素直に思えるようになつていた。

過去の冬馬との会話や、冬馬が今まで自分にしてくれた様々な事。それら一つ一つを思い出す度に、その思いは搖るがない確信へと変わつていく。ただ、二年前から「桃太郎」と呼ばれるようになつたことが嫌でたまらないあまりに、自分自身がその事実に気がついていなかつただけだつたのだ。

例え変なアダ名で自分のことを呼んでいても、いつも、どんな時でも、ずっと冬馬は自分に優しかつたことに今更ながら桃乃はやつと氣付いた。

(私……、今度冬馬と会つたら一体どんな顔をすればいいのかな…
…)

冬馬と一人できちんと話しがしたい、桃乃は外の景色を眺めながらそんなことをいつまでもグルグルと考えていた。

時刻はもうすぐ夜の十一時になる。

倉沢家に桃乃を送り届けた後、すぐさま携帯で親しい女友達の一人を呼び出して一度目のドライブと洒落こんでいた衍人は上機嫌だった。

軽やかにハミングをしながら車のキーを田線の高さにまで持ち上げて足取り軽く一階へと昇る。

(そうだ 冬馬に桃乃ちゃんを車に乗せたことを話しておいたほうがいいな)

後でバレておかしな誤解をされるよりも正直に言っておいたほうがいい、と判断した衍人は自分の部屋に入る前に冬馬の部屋をノックした。

「冬馬くん、ちょっとといいかい？」

返事は無かつた。

しかし部屋の中からは確かに人がいる気配がある。 衍人はそつと冬馬の部屋のドアを開けてみた。そして中にいた弟の姿を見て思わず叫ぶ。

「冬馬！？ お前何やつてんだよ！？」

机に向かつっていた為、ドアに背を向けていた冬馬は衍人の大声でようやく振り返った。

「なんだ兄貴か」

まだ制服姿の冬馬はそう言つと再び前を向いてしまつた。
ヘッドフォンをかけて音楽を聴いていたせいで衍人のノックがよく聞こえなかつたらしい。

衍人は慌てて室内に入ると部屋のドアを急いで閉める。

「おいつ何やつてんだよ！ もしオヤジに見つかつたらどうなるか分かつてんのか！？」

「……ほつといてくれよ」

冬馬は椅子に座つて腕組みをしたままイライラしたように衍人の方を見る。

「だつてお前……あつ、それもしかしたら俺のじやないか！？」

「前から思つてたけど兄貴のこれ、旨くねえよなあ。それにキツすぎ」

冬馬は衍人の部屋から勝手に持つてきた煙草を口に咥えたままフウッと紫煙を吐ぐ。

「それよりお前早くそれ消せって！ オヤジに見つかったらヤバいつての！」

「兄貴だって高校の時にはもう吸ってたじゃん」

「俺は高校の時は隠れて吸ってたよ！ 部屋で堂々となんか吸つてなかつたぞ！？」

「いいからほつといてくれって」

「お前この頃なんかイライラしてるよな……」

「だから吸ってるんだろ。吸うと少しは落ち着くんだ」

衍人は冬馬のあまりの不機嫌な様子に困惑しきっていた。
そして今日桃乃に冬馬の気持ちを勝手に伝えたことを今言つても大丈夫だろうかと一人悩み始める。

「……兄貴、考え方してるから一人にしてくんない？」

冬馬はヘッドフォンのボリュームを上げた。

ヘッドフォンから激しいロックの音が微かに漏れ聞こえてくる。
今はやはり話すべき状況ではない、と判断した衍人は、冬馬の要求通り部屋を出ていくことにした。

「冬馬、今日はそれでも止めておけよ。スポーツマンが煙草なんか吸つてどうすんだ。それともう俺の部屋から煙草勝手に持つていくなよ。な？ 分かったな？」

冬馬からの返事は無かった。

その様子を見た衍人は小さく息を吐く。

(今日の桃乃ちゃんととのドライブの話しをしたら何されるか分かんないな……)

ピリピリとした空氣の中で制服姿のまま煙草をくゆらす冬馬の中を見ながら、衍人は廊下に出ると静かにドアを閉めた。

背後でドアがそつと閉められる音がすると冬馬はまた大きく煙草の煙を吐き出す。

冬馬が煙草を吸い始めたのは半年ほど前の頃で最初はただ的好奇心からだった。

衍人が好んで吸っているこの外国産煙草はかなり癖があり、最初のうちには紫煙をろくに肺に入れる出来なかつたが、度々衍人の部屋から一本、二本と煙草を勝手に取ってきてふかすうちにある程度は慣れてきていた。やがて煙草を吸うと妙に気持ちが落ち着くことに気がつき、今ではイライラした時にはこいつやって煙草をふかすようになっていたのだ。

しかしここ最近、煙草を吸つても少しも気持ちが落ち着かないことに冬馬自身、とつぐに気がついていた。そしてその理由も。

(七海中か……)

ヘッドフォンからは脳髄に響き渡るくらいの大音量でハードロックのサウンドがガンガンと鳴り響いている。白杜中学時代、何度か訪れたことのあるその中学を冬馬は必死で思い出していた。

「白杜のバスケ部がこっちに来て試合してた時、よくお前の試合見に行つてたんだ」

初めて教室で顔を合わせた時、要は確かにそつ言つていた。

今はかなり薄れてしまつていて自分の記憶から七海中で顔を知つている人間を冬馬は思いつく限り思い出してみる。

しかしくら記憶の底をわざつてみても七海中のバスケ部のレギュラーメンバーと自分と同学年のメンバー、そしてマネージャーく

らこしか思い出せなかつた。

あとは最初に七海中に対抗試合に行つた時に挨拶をしこきた生徒会長くらゐだ。

その記憶の断片の中にはひとつ考へても要と余つた記憶が無かつた。

気がつくと煙草は咥えているすぐ側の部分まで灰になつてゐる。冬馬はフウ、と最後の煙を吐き出すと傍らにあつた空のコーヒー缶に吸殻を突っ込む。

そのまましばらく冬馬は考え方を続けていたがやがてヘッドフォンを外すと窓際に寄り、向かいの倉沢家の二階を眺めた。そして桃乃の部屋に灯りが点いているのを見た時、心臓の中心がぎゅっと縮まつたような軽い痛みを覚える。それはあの日の朝、電車に乗つて去つていた桃乃を再びカノンの通学路で見つけた時と同じ痛みだつた。

あの時もう一度声をかけようとしたのを直前で止めたのは、振り向かない華奢な背中に気後れしてしまつたからだ。

ペダルをひと漕ぎする度、桃乃との距離が近づく。その度に胸の痛みが増していく、結局は桃乃を避けるようにクロスバイクで追い越してしまつた。声をかけずに桃乃を置き去りにしてきたあの日以来、今までのように気軽に桃乃の側に行く勇気を無くしてしまつている自分に、冬馬は焦りを感じ出していた。

(これからどうすりやいいんだよ……)

乱暴に制服を脱ぎ捨てると桃乃の部屋の灯りから視線を逸らし、カーテンを荒々しく後ろ手で閉める。そして珍しく何も予習をせずにシャワーだけを浴び、ベッドに横たわると疲れきつた顔でそのまま浅い眠りへと入つていった。

そしてあの娘はボイル海老になつた

その日は朝からかなり気温が上がっていた。

職員室でバサバサと団扇を扇ぎながら、珍しく難しい顔で考え込んでいる様子の誠吾がいる。

今日で新学期が始まって三回目の金曜日。そして定例会議の日だ。

自分の担当クラスの笛田梨絵のことを見学しているのかをまだ聞き出していた。

長に報告しなければならない。

梨絵になぜ体育をずっと見学しているのかをまだ聞き出していた。

(今日 笛田が出てくれれば問題ないんだがなあ……)

そんな一縷の望みを胸に、誠吾は次の女子一年一組と二組の合同授業に向かう。グラウンドに着くと、もう女生徒達は全員集まつており、けらけらと楽しそうに騒いでいた。

「皆揃つてるかー！ じゃあ整列！」

誠吾の掛け声で女生徒達はお喋りを止め、きちんとクラス毎に三列に並ぶ。

「さあ今日は走り高飛びをやるぞー！ お前達のピチピチパワーをこれでもかつていうぐらい目一杯見せてくれよー！」

途端に女生徒達がドッとも爆笑する。

「やだー！ 先生なんかエローい！」

「“ピチピチパワー”だつて！ 死語よ死語！」

「それにさー、矢貫先生が言つとエッチつぽく聞こえない？」

女生徒達に一斉にからかわられて誠吾は頭を搔いた。

「俺が言つとそんなにやらしくなるか？」

「なるなるー！」

「セクハラ一歩手前つて感じー？」

「あーそれ言える言える！ なんか妙にオジサン臭いのよね、先生はさ。まだ一十六歳なのにー！」

生徒達は口々に誠吾をからかうがその言葉には悪意はまったく感じられない。

好き勝手に色んなことを言つても、気をくなこの体育教師を慕つてしているのだ。

「お前らから見りや、どうせ俺はオジサンだよ！ じゃあ出席を取るぞ！ 一組！ 相田！ 安西！ 飯島！」

女生徒達全員の顔を見渡し、その中に梨絵の姿があることを確認した誠吾は出席を取り始めた。

「よし全員いるな。じゃあさつとき俺がバーを用意しといたからそつちに移動するぞ！ 駆け足！」

誠吾は首にかけている愛用の青いホイッスルを口に咥え、一定のリズムで軽快に鳴らしながら先頭に立つて走り出した。

バーのある場所へ到着すると全員を体育座りさせ、本田の予定を説明する。

「いいか、今日はまず最初に背面飛びから始めるぞ。できればベリーロールまで行くのが今日の目標だ。じゃ早速一組から飛んでもらおつか」

「先生！ その前に先生がまづお手本見せてくれなくっちゃー！」

「そうよそうよ！」

女生徒達から茶々が入り、梨絵のことでの頭が一杯だった誠吾は一人慌てる。

「お、おつか、そうだったな。よし、じゃあ見本を見せるか。全員瞬

きしないで見ておけよ。」

誠吾は一メートルほどの高さだったバーを一気に押し上げた。

「えーっ先生そんなに高くして大丈夫？」

「いいから見とけて！　じゃ背面で飛ぶぞ！」

そう叫ぶと誠吾はバーから充分な距離を取つた。

「せんせー頑張つてー！」

女生徒の応援を背に、最初はゆっくり、そしてバーが近づくにつれドンドンとそのスピードを上げて、タン、という軽やかな音と共に誠吾はバーに向かつて飛んだ。

首にかけていたホイッスルが同時にフワリと空中に舞う。その背中はバーの上を難なく超えた。

「先生スゴーイ！」

「やつたあ！」

その華麗なジャンプを見た女生徒達から大きな歓声が上がる。マットの上から立ち上がると誠吾は女生徒達を促した。

「ま、ざつとこんなもんだ。じゃあ早速順番に飛んでみる。踏み切る時は力強く、バーの上に落ちないように気をつけてな」

誠吾の指示で女生徒達はバーを元通りに低く下げ、順番にバーに向かつて飛び始めた。誠吾はしばらくその様子を見ていたが、やがてそつとその場から離れると少し離れた木陰に座っている梨絵に近寄り、その場にしゃがむ。

「篠田……今日も見学か？」

梨絵は誠吾の顔を見た。

おとなしそうな顔をしているが芯の強そうな瞳の梨絵は、小さな声だがはつきりと答える。

「はい」

「なあ 笠原。お前一度も体育に参加していないだろ？ ピービしてなんだ？」

「生理でお腹が痛いんです」

その返事を聞いた誠吾は一瞬唸り、困ったような顔をする。
「でもお前、もう二週間も経つのにずっと見学の理由はそれだろ？
俺、男だけさ、さすがにそれはおかしいと思つぜ？」

「私、生理不順なんです」

「……ん~……」

梨絵の返事に誠吾は先ほどよりも長く唸つた。

「笠原、それが本当なら病院に行つたほうがいいんじゃないのか？」

梨絵は誠吾の顔をじっと見つめる。

「先生、嘘だと思ってるんでしょ？」

「そ、そこまで言つてないけどわ……」

慌てた様子で馬鹿正直に答える誠吾を見て、固い表情だった梨絵の顔がほんの少しだけ緩んだ。

「……先生、私、妊娠してるんですよ」

「な、なにいつ！？」

「嘘です」

「おつお前、教師をからかうな！」

一瞬本気で驚いた誠吾は梨絵を叱つた。

「すみません、先生」

梨絵は再び固い表情に戻るとペコッと頭を下げた。

走り高飛びをしている方角からはキャーキャーと楽しそうな声が聞こえてくる。

誠吾は再び説得を始めた。

「なあ 笠原、今日の体育に出てくれないか？」

「…………」

「実はさ、もし今週も笹田が体育に出なかつたら来週お前は学審会にかけられることになつてるんだ」

梨絵は少し驚いた表情を見せた。肩上で切り揃えられた髪が小さく揺れる。

「学審会って『学生審問会議』のことですか？」

「ああそうだ。指導で態度を改めない生徒に限つて処罰をする、なんて建前はあるけどな、結局あの審問会に呼び出された生徒は最低でもかならず停学は食らつちまつ。お前をそういう目に遭わせたくないんだよ」

それを聞いた梨絵はなぜか挑戦的な目で誠吾を見た。

「先生、なんだかんだ言つて結局は私のためじゃなくて先生の保身のためなんでしょう？ 自分の担当クラスから停学者が出るなんて困りますもんね」

「バカ言つな。別に俺はそんなことになつても屁とも思わねえよ。だけどな、この学園で一度停学処分を食らつとその先は厳しくなるんだぞ？ どんなに筆記テストが出来てもまず間違い無く大学への推薦はして貰えない。それに次にまた何か問題を起こせば停学経験者はすぐにまた学審会への呼び出し、場合によつちや退学勧告だ」

誠吾はポンと梨絵の肩に手を置いた。

「なあ、頼むから今日は出でてくれないか。そうすればとりあえずは今日の会議でお前のことをなんとか庇えることができるんだ」

「…………」

再び沈黙した梨絵は遠くを見て何かを考えているようだった。

「な？ 笹田」

梨絵はそれまで合わせていた誠吾との視線を外し、小さく頷く。

「……分かりました。今日の体育出ます」

「そうか！」

その返事に安堵した誠吾は田焼けした手で梨絵の手を掴み、立たせる。

「よしつ行くぞー！」

梨絵は誠吾の後をついて歩きながら一瞬下腹部に手を当てた。しかし前を歩いている誠吾はそんな梨絵の様子にまったく気付いていない。

「おーい、ちょっとストップ！ 次は 笠原が飛ぶから入れてくれなー！」

今まで一度も体育に参加していなかつた梨絵が来たので、女生徒達は急にザワザワと騒ぎだす。

「ねえモモ。あの子、体が弱いわけじゃなかつたのかなあ？」

「うんそうだね……」

「コソソリ話しかけてきた沙羅に相槌を打ちながら桃乃はこひらっこ歩いてくる梨絵を見た。気のせいいか、太陽の下に出てきた梨絵の顔色はあまり優れないよう見える。

「 笠原、いいぞーー！」

嬉しそうな大声で誠吾が梨絵を促す。

梨絵は一度走り出そうとする素振りを見せたが、急に口を片手で覆い、わずかに俯いた。やがて手を外し上を向いて大きく息を吐くと、一瞬の間を置いてバーに向かつて走り出す。

バーの手前で勢い良く踏み切った梨絵の身体は宙に高く浮き、バーの上をかすることなく綺麗に飛びきった。

「よし！ クリアーだ！」

しかしそう嬉しそうに叫んだ誠吾の声に急に緊張感が走る。

「………… 笠原ー？ おいつどうしたつー？」

「う…………」

落下したマットの上で体を丸め、ボイルされた海老のよつな姿で
急に苦しみだした梨絵に誠吾が駆け寄った。

「キャーッ！ 血つ！？」

一人の女生徒の金切り声がグラウンドに響き渡る。

「さつ姫田ッ！ しつかりしろッ！」

誠吾は梨絵の身体を何度も揺さぶる。

走り高飛び用のくすんだ緑色のマットの上は、倒れている梨絵の下腹部あたりからじわじわと滲み出してきていた鮮血で真っ赤に染まり始めていた。

その日の定例会議は定刻通りに始まった。

黒岩の会議開始の挨拶を聞きながら緑は隣の席を見る。しかしその席に着なれないスーツを着て、いつも窮屈そうに座っている誠吾の姿は無い。

「もうご存知の先生方もいらっしゃるかと思いますが、本日、一年女子の体育の授業中に事故が発生したという報告を受けております」
梨絵の事故のことを知らなかつた職員達がざわめいたので、黒岩は「お静かに」と威圧感をこめた口調で場を完全に静めた。そして細めの銀縁の眼鏡を一度押し上げ、今日起きた事故の詳細をいつも沈着冷静な声で職員達に説明し始める。

「本日、走り高飛びの授業中に一人の女生徒が腰から落ちた際激し

い出血を起こし、意識不明になつたとのことですぐに救急車を手配致しました。授業を担当されていた矢貫先生はそのまま付き添いで病院に向かいました。先ほど連絡が入りましたのでもうまもなくこちらに戻つてくると思います。矢貫先生には戻り次第、ここで報告していただきます。では一年の先生方から今週の報告をお願い致します」

ゆっくりと黒岩が椅子に着席した際、いつもシンと静まり返る会議室だが今日はさらにその静寂が重く感じられた。

「で、ではまず私が……」

黒岩から一番近い席に座つていた一年物理担当の関澤寛司せきざわ かんじが萎縮しながらも立ち上がる。

「えへ、私の担当する一年物理は特に授業の遅れもなく、生徒も皆優秀ですので滞り無く進んでおります。中には物理に非常に关心がある生徒もいて、授業が終わつた後私の元に来て色々と質問してくる生徒もあり、嬉しく思つております」

「学生が勉学に熱中するといふことは彼らの本分でもありますからね。素晴らしいことです。関澤先生の教えもいいからです」

黒岩は関澤を讃めた。

「いえいえ、とんでもありません。私の教えなど……」

関澤がそう恐縮した瞬間、第一会議室の扉がガチャリと開いた。

「……遅れて済みませんでした……」

第一会議室に現れた誠吾を黒岩がギロリと睨む。

病院から戻つて会議室に直行してきた誠吾はジャージ姿のままだつたのだ。

「関澤先生ありがとうございました。では今戻つてきましたので次は矢貫先生に早速報告していただきましょう」

黒岩は関澤に向かつて手で座るように合図をした。誠吾の服装については今は不問にすることにしたらしい。

「さあ矢貫先生」

黒岩に促され、誠吾は会議室に入る。そして空いている席の椅子を引き、そのままそこに立ち入った。

その場で沈黙を続ける誠吾のせいだ、会議室内の時の流れが止まつたままかのように感じる。

緑はそつと横田で誠吾の顔を見上げたが、いつもは日に焼けて血色のいいその顔に今はまつたくと言つていいほど血の気が無かつた。

「矢貫先生、早く報告を」

黙つて突つ立つたままの誠吾に黒岩の叱責が飛ぶ。

「……りゅ、流産しました……」

会議室内で発した誠吾の第一声は少し震えていた。

「笛田梨絵は妊娠していました……。だから体育の授業にも出なかつたんです……。そ、それを俺が無理に体育に参加するように言つたから笛田は……。俺が、俺が悪いんです……！」

「矢貫先生、それは矢貫先生のせいではないでしょう。その女生徒が妊娠していたことを先生は知らなかつたのですから。授業に生徒達を参加させるのは教師の当然の職務です。それよりも問題はその女生徒が妊娠していたという事実です。矢貫先生、相手は誰か分かつたのですか？」

「……笛田が個人的に受けている家庭教師の青年だそうです……」

黒岩の尋問は素早く、そして執拗に続く。

「女生徒の『』両親のほうは？」

「……連絡を取つたら病院に駆けつけできました。『』両親も今回の妊娠のことはまったく知らなかつたようですね……」

「女生徒は今どうしていますか？」

「……まだ病院にいます……。検査のために後二、三日入院することになるかもしません……」

「結構です。分かりました。いずれにせよ、その女生徒の体調が戻り次第、学審会にかけることにいたします」

「……やっぱり笹目を学審会にかけるんですか……？」

「当前のことです。当学園で妊娠したなどという生徒を置いておけると思いますか？ 規則にのつとり学審会は行いますが、女生徒には退学していただかなければならぬでしょ？ うね」

「そ、そんな！ 退学だなんて！」

誠吾は青い顔で叫んだ。

しかし黒岩はいつも通りの冷静な声で答える。

「矢貫先生、当学園はカノン慈愛学園ですよ。カノンという名の通り、規範に沿つた行動を取れない生徒はこの学園には一切必要無いのです」

「……あんたって人は……！」

椅子が大きく後ろに倒れる音がした。

倒れた椅子もそのままに誠吾はズカズカと黒岩の元へと詰め寄ると、右拳で黒岩の机の上を壊れるぐらいの勢いで叩いた。机が割れんばかりのその激しい音に黒岩を除く職員全員がビクツと体を竦める。

「なんで……どうしてそうも規則、規則でしか物事を考えられないんだ！ 笠田は今回の流産で身も心も傷ついているんですよ！ なぜそんな可哀想な生徒を『』でも捨てるかのように弾き出すんですか！」

「規則は重要ですよ、矢貫先生」

黒岩は今の誠吾の行動にもまったく動じないで再び眼鏡の淵を押し上げる。

「社会とはすなわち規則で成り立っている世界です。そして社会の規則はこの学園の規則よりもずっと煩雑で膨大です。ここでの規則が守られないようでは、社会に出てもまともにやつていけるわけがないません。そうは思いませんか？ 矢貫先生」

「理事長ッ！ あんたの言つてることは正しいことかもしないがそんなのはただの紙の上の絵空事と同じだ！ そんな杓子定規なやり方だけでは解決できない問題だつてこの社会には一杯あるでしょう！？ それが分からなんですか！」

「……どうやらこの問題では矢貫先生と話し合いつてもいつまでも平行線のようですね」

黒岩は眼鏡の淵^{ハシマ}に誠吾に冷たい目線を向ける。

「もう結構です。では席におつき下さい。まだ会議は終わってませんので」

黒岩を見下ろす誠吾の両拳が震えていた。その拳を見た黒岩は咄嗟に立ち上がる。

「矢貫先生！ 席について下さい！ 次は私が報告いたします！」

しかし誠吾は緑のほうを一瞬チララッと見ただけで席につこうとはしなかった。

「……俺は……これで失礼しますっ！」

黒岩にそう怒鳴るように告げ、誠吾は足取り荒く会議室を出でいつてしまつた。

会議室のスリ硝子越しに足早に去つていく誠吾のシルエットが凄

スピードで移動していく。

「矢^やつ……」

今は会議中だといつゝとを忘れ、一瞬でも誠吾の後を追おうとした自分自身に緑は驚く。

会議室内は再び水を打つたように静かになつた。

（バカ……！んなことしちゃうけどある気なのよ……）

「では柳川先生、報告をお願い致します」

呆然と立っていた緑の耳に抑揚の無い声で黒石から報告を急かす言葉が響いてきた。

錯綜する恋模様 【前編】

誠吾が怒りに我を忘れて第一会議室を飛び出した頃、桃乃は沙羅と一緒に一年二組の教室にいた。

二人は今日の放課後、興味のある部活の見学に回っていたのだ。

「ねえ沙羅、もうこんな時間だよ」

「そうだね、だいぶ暗くなってきたしどのクラブに入るか相談しながら帰ろつか？」

「うん」

並んで教室を出た後、廊下を歩きながら沙羅が悔しそうに言つた。

「あ～自分の体が三つくらいあつたらしいのになあ」

「沙羅は入りたい部が多くすぎるのよ」

「だつてさ、せっかくだもん、色々なことをやつてみたいじゃない？」

「でもさ、本当にそろそろ決めようよ沙羅」

桃乃は靴箱から外靴を取り出し、気の多い沙羅を促す。

「じゃあやつぱり球技関係がいいな、あたし…」

「球技？ 球はどうしたの？」

「だつて今日の見学で足痺れちゃったんだもん！ テニスとかバレーボーとかバスケとかにしようよ…」

バスケ、と聞いて桃乃の脳裏に冬馬が浮かぶ。

行人とのあのドライブ以降もまだ桃乃は冬馬と顔を合わせてはいなかつた。

（冬馬、バスケ部に入ったのかな……）

そう思いながら沙羅と正門に向かつて歩いていると、男子校舎に

隣接されている体育館の方から微かにホイッスルの音が聞こえてきた。

それに気付いた沙羅はワクワクした声で体育館を指差す。

「モモ、ちょっと外から覗いてみようよ！」

「えつダメだよつ。そつちの校舎や体育館には入っちゃいけないでしょ？」

「入らないってば。外から見るだけだもん、全然問題ないって！ 行こ行こ！」

沙羅は桃乃の手を取り、強引に男子用の体育館の窓まで引っ張る。

「わあ～！ やつてゐやつてゐ～！ モモ、モモも見ていらさんよー！」

沙羅に何度もしつゝ言られて結局桃乃もそつと体育館の中を覗いてみた。

中では体育館を半分に分けてバレー部とバスケ部で熱心に基礎体力を上げる運動をしている真っ最中だった。規則正しく鳴り続けるホイッスルの音に合わせ、バレー部は腹筋、バスケ部は腕立て伏せをしている。

(冬馬だ……！)

体育館の中に冬馬の姿を見つけた桃乃は、心中でそう叫んだ。

背番号14をつけた冬馬は必死に腕立て伏せをしている。額から流れ落ちる汗がコートにいくつもポタポタと落ちていき、大量の汗のせいで前髪が大きく乱れていた。

桃乃は吸い寄せられるように腕立て伏せを続いている冬馬の姿だけを目で追う。

「よし腕立て終了!」

「腹筋終了!」

ホイッスルが最後に大きく鳴って止まり、バレー部とバスケ部のキャプテンの声がそれぞれ体育館に響いた。

元々地声の大きい沙羅がさらに大きなボリュームで叫ぶ。

「Wao! みんな一生懸命だね!」

「シツ、沙羅! 気付かれちゃうよ!」

桃乃は慌てて沙羅をたしなめたが、一人の部員が沙羅の声に気付いた。

「あれ? 見るよ、あんな所から見学してる子がいるぜ?」

タオルで汗を拭いていた冬馬はそれを聞き、他の部員と同じよう窓の方を見た。

その時、桃乃と冬馬の視線が完全に合つ。

汗を拭く手を止めて驚いたような顔をしている冬馬から慌てて目を逸らし、桃乃はすぐにその場から逃げるようになれた。

「あれ? モモ? どうしたの?」

正門に向かつて走り出した桃乃を沙羅は急いで追つ。

桃乃達が走り去つて行つた後の光景を見た冬馬は、片手を上げてバスケ部キャプテンの新開潤一の前に駆け寄つた。

「キャプテン!」

冬馬の呼びかけに潤一が振り返る。

「どうした西脇?」

「あの、今少しだけ抜けていいですか?」

「まだストレッチと基礎練が終わつたばかりだぞ? もうバテちまつたのか?」

「いえ、そうじゃないんスけど……すぐ戻ってきますから!」

「……おこ西脇、そういうことは練習に入る前に済ませとけよな

潤一はどうやら冬馬がトイレに行くと思つたようだ。

「すいませんっ！」

冬馬はそう言ひや否や、稻妻のように体育館から飛び出して行った。潤一はバスケットボールを手に、その様子を見て呆れたように呟く。

「……西脇の奴、相当切羽詰つてたみたいだな……」

冬馬は体育館を飛び出すと男子校舎の玄関まで必死に駆ける。胸騒ぎがしていた。

桃乃が走り去った後すぐにどこからか要が現れ、その後を追つていった所を冬馬は見てしまったのだ。

「モモー、モモってばちょっと待つてよー！」

沙羅は先を走る桃乃の名を呼び続ける。体育館から大きく離れると桃乃はやっと足を止めた。

「ふう、やっと追いついた！ ねえモモ、どうして急に走り出したの？」

「だ、だつて沙羅が大きい声出すからよつ。中の人を見つかっちゃつたじゃないっ！」

「なんで？ 別にいいじゃない。外から見ていただけだもん

正門前で桃乃と沙羅がそう言こ合つてゐるところに突然要が現れる。

「やあ」

「あつ……！」

要の姿を見て桃乃是小さく息を呑んだ。
桃乃と沙羅の前にやつて来た要是一人に向かつてもう一度笑いかける。

「久しぶりだね桃乃ちゃん」

「あれつモモ、男子に知り合いいたんだ？」

「あ、君の名前はなんていうの？俺、一年四組の柴門要。この間桃乃ちゃんの彼氏候補に立候補させてもらつたんだ」

「えへつ！ そうなのモモ！？」

沙羅は青みがかつた瞳をクリクリと動かしながら桃乃と要を交互に見る。

「そんなの全然知らなかつたー！ なんでモモ教えてくれなかつたのよ？ あ、あたしは南沙羅！ モモと同じ一年一組よ。沙羅つて呼んでくれて構わないから」

「じゃ俺のことも要でいいぜ。ちなみに沙羅ちゃん、君つて実は結構有名人なんだよ？」

「エ、あたしが！？」

「そう。今年の新入生に背が高くてハーフの美女がいるつて俺らの間でかなり噂になつてるんだ」

「ホントッ！？」

沙羅は白い肌をピンク色に染めて喜んだ。

「本当本当。結構キミのこと狙つてる奴いるから気をつけたほうがいいよ？」

要はポケットに手を突っ込んだ体勢で小さく体を揺らしながら喋り続ける。

「それよりもうだいぶ暗くなってきたしさ、良かつたら駅まで送つてつてあげようか？ 人数多い方が楽しいじゃん？」
「あたしは全然構わないけど、モモはどう？」

「私……」

桃乃は困った顔で沙羅の顔を見返した。“柴門要には近づくな”と言われた冬馬の言葉が頭に残っていたからだ。
要は足音を殺して桃乃の前にまでスゥッと近づくと、身をかがめてその顔を覗き込んだ。

「相変わらず警戒してんなあ……。俺ってそんなに悪い奴に見える？」「れども紳士のつもりなんだけど？」
「そ、そういうわけじゃないけど……」

桃乃が一步後ずさつた時、男子校舎の方角から怒号が響く。

「柴門ツ！」

聞き覚えのあるその声に桃乃が男子校舎に目をやると、バスケのユニフォームとショーツのままに息を切らした冬馬が一息りに走つてくるのが見えた。

「冬馬……！」

驚いた桃乃が口の中で呟く。冬馬は今にも掴みかからんばかりの勢いで要の前にまで一気に詰め寄つた。

「お前一体どういうつもりだ！」

「あ？ どういうつもりって言われてもなあ……。ああ！ ジヤあよ、じやうじつもりだ、って言つたらお前どうする？」

要は一ヤツと笑い素早く身を翻すと、桃乃の背後に回り後ろから覆い被さるようにその肩を抱いた。

「キヤツ！？」

驚いた桃乃が小さく叫ぶ。

冬馬の顔色が変わったのを見て、要はまるで見せつけるように桃乃の肩をしつかりと抱き、面白そうに続けた。

「おっとストップ、ストップ！ 女の子の前で乱暴なことじょうとしちゃいけないな。この娘がビックリして泣いちゃっても知らないぜ？」

「いいからその手を離せってんだよ！」

「おいおい西脇、それはお前に指図されることじやないだろ？ だってお前、別にこの娘の彼氏でもなんでもないんだからよ。その点、俺はこの間桃乃ちゃんに彼氏希望してるつことはもう伝えてるからな。ねつ、そうだよね、桃乃ちゃん？」

要は桃乃の肩を更に密着せしむりでグイと引き寄せた。

「ま、熱血少年はサッサと青春に汗を流してくれよ。俺はこれからこの娘達を駅まで送らなきゃならないんだ」

しかしそう言いつも要は更に冬馬を煽る。

「……なあ西脇、でもよ、もしあ前がどうしてもやるっていうなら今ここで相手してやつてもいいぜ？ だけど一つ言つておくがな、俺は空手の有段者だ。大怪我しても構わないんならかかってきな」

要に肩を押さえられながらも桃乃は「冬馬やめて…」と呟んだ。
「そうそう、桃乃ちゃんの言つ通りだ。この娘の前でふざまな姿晒したくなかったらサッサと尻尾巻いて行つまえよ」

「てめえ……！」

その挑発に冬馬の体内の血液が一気に逆流を始める。我慢の限界を超えたその表情はすでに憤怒の表情に変わっていた。

桃乃が再び「ダメツ冬馬ー」と叫んだのと同時に、

「ちよつヒターイム…」

と沙羅が両手を広げて冬馬の前に立ち塞がる。

「もう… こんな所でケンカなんかしたら死、あなた達すぐに学生審問会議つていうのにかけられちゃうよ！？」

沙羅は冬馬を見上げて強い口調で続けた。

「あたし、あなたのことよく知らないけど暴力で解決するなんて野蛮だわ！ モモが要と一緒に帰つてほしくないならちゃんとモモにそう言えばいいじゃない！ そつすればモモがビリするかきちんと決めるわよ。ねつモモ？」

今この四人の中で完全に主導権を握ったのはビリやり沙羅のようだ。

「ホラ、だから要もモモを離して。あなたに送つてもりづかビリかはモモに決めてもらつことにするから！」

沙羅から催促され、要は渋々と桃乃の肩から手を離すとそのまま数歩後ろに下がつた。そして今度は冬馬が桃乃の前によつくりと歩み寄る。

どんな顔で冬馬を見ていいのか分からぬ桃乃は伏田がちに視線を上げた。冬馬は桃乃を視線を合わせると、一呼吸置き、静かな声で伝える。

「桃乃……」の間は本当に悪かった……。でもあこつと一緒に帰らないでくれ。俺が桃乃をちゃんと駅まで送るから……。頼む……」

(冬馬、今ちやんと私の名前呼んだ……！?)

「桃太郎」ではなく、約一年ぶりにやつと自分の名前を呼ばれた桃乃は驚く。

つい今しがたまでの要に向かつての燃えるような叫び今は静かで

穏やかな色に変わり、冬馬は桃乃の顔を見下ろして再度懇願した。

「頼む、桃乃……」

しばらぐお互いを見つめ合っていた二人だったが、やがて桃乃が小さく「うん……」と頷いたのを見ると、沙羅は少し氣の毒そうな顔をして要の方に体を向けた。

「残念だけど今日は要の負けみたいね」

要はチツと舌打ちをし悔しそうな顔をするとクルッと背中を向けた。去るうとする要を沙羅は慌てて呼びとめる。

「あ、ちょっと待つてよ要！ どうせだからさ、あたしを送つていつてくれない？」

「…………はあ！？」

「だつてなんかあたしあ邪魔っぽいみたいだし……。エスコートするレディが一人から一人になつただけじゃない。ね？ いいでしょ？ 帰り道で愚痴のひとつも聞いてあげるから！」

沙羅はそつまくしたてる強引に要の腕を取つて引っ張る。

「ほら行こ行こ！ ジャモモ、あたしは要に送つてもううから今日はここでバイバイ！」

「えつ沙羅！？」

「じゃあねー！」

だがその要はまだ抵抗していた。

「ちょ、ちょっと待つて！ 僕はそんな……」

「いいからいいから！ 早く早く！」

結局沙羅は半ば引きずるようにして要を連れて行つてしまつた。

正門前に静寂が訪れ、思いがけず一人きりになってしまった桃乃と冬馬は恥ずかしさからお互い視線を逸らす。地面上に視線を落とした桃乃の視界に冬馬のバスケシューズが映つた。

「…………冬馬、この靴で外に出ちゃいけないんじゃないの？」

「あ、いけね！ 靴履きかえるの忘れてた！」

冬馬はそこで初めて自分がバスケシューズを履いたままなことに気がつく。

「ここで待つてくれ。部活早退してくるから」

「ダ、ダメよ冬馬！ そんなことしちゃ！」

「でもお前の友達も帰っちゃったし、こんな夜道一人で帰せねえよ。

いいから待つてろ。絶対にここにいろよ！？ 絶対だぞ！？」

そうくどいくらいに念を押し、冬馬は身を翻すと男子校舎の中に戻つてしまつた。

錯綜する恋模様 【後編】

カノンの正門前は沢山のライトが設置してあり、この場所だけは夜でもとても明るい。

一人残された桃乃は言われた通りにここでおとなしく冬馬が戻つてくるのを待つことにした。

しかし冬馬ときちんと話をしたいとあんなに思っていたのに、いざその時が近づくとどうやって話しおすればいいのか分からぬ。時を追うごとに増していく緊張と不安に、桃乃の心の中心は大きく揺れだしていた。

どきどきと鳴り続ける心臓の拍動を感じながら正門の前で冬馬を待つ桃乃の視界に、中央塔の方角から歩いてきたジャージ姿の誠吾が映る。

「あ、矢貫先生！」

「ん？ 倉沢じゃないか。こんなところでどうしたんだ？」

別の方角に去ろうとしていた誠吾が足を止める。

「今帰るところか？」

「はい」

「一人で帰るのか？ ここから駅までの夜道は人通り無くて危ないぞ？ 倉沢、俺の車で駅まで送つてやるから一緒に行こう」

「あ、あの先生……」

「ん？ どうした？」

「こ、これから送つてもうひとつところなんです……」

状況を察した誠吾はニッコリと笑うと男子校舎を親指で指す。
「もしかしてこっちの校舎の奴にか？」

「は、はい……」

誠吾はその返事を聞くとからかいつひにわざと大きな音を出して両手を叩いた。

「いやあ、結構、結構！　若者は大いに恋をしなくっちゃなー。そ
うでなくつちやー！」

その言葉で赤くなリつつも、今日の体育の事故のことで聞きたい
ことがあつた桃乃は誠吾に尋ねる。

「あの先生、笹田さんの様子はどうだったんですか？」

「あ、ああ……」

梨絵の名前を聞いた誠吾の顔が唐突に曇つた。

そんな誠吾を見て今の陽気な態度は無理をして作つていた空元氣
だつたことを桃乃は察する。

「……笹田はまだ検査の結果がでていないんだ。でもとりあえず命
に別状は無いからお前達はなにも心配するな」

「そうですか……」

本当はもつと詳しく梨絵の様子を聞いたかったが、誠吾が男性だ
といつこともあって桃乃はそれ以上深く尋ねる事を止める。

「……皆、大変だよな色々と」

「えつそれどういう意味ですか？」

「ああただの独り言だ。気にすんな」

誠吾は急に疲れきつたように大きく息を吐き、ジャージのポケッ
トから煙草を取り出すと噴水の石垣にドサリと腰をかける。

「じゃあ俺は倉沢の彼氏のツラでも見てから帰るとするか」

「あつあの、別に彼氏とかそういうんじや……」

「照れるな照れるな」

誠吾は笑いながら煙草に火をつけ、フウツと煙を吐く。

しばらくすると男子校舎の方から軽快に駆けてくる足音が聞こえ
てきた。

「待つたか？」

制服に着替え、息を切らした冬馬が現れる。そしてその場に誠吾がいることに気付くと不思議そうな顔になつた。

「あれ？ 矢貫先生、ここで何やつてんスか？」

「おう西脇か。倉沢を駅まで送つてやろうとしたらすぐなく断られちまつたところだよ。なんだ、倉沢の彼氏つて西脇だつたんだな」

縁が正門チェックをしていた間に朝早くこいつそりとカノンに來ていたことを隠し、誠吾はわざと今初めて知つたふりをする。そして冬馬を見て笑いかけた。

「なあ西脇……、お前、倉沢のこと大事にしてやれよ？ 特にお前はそんなんでかい背丈を持つてるんだ。それと同じ位、ハートもでつかく持つてろよ」

「な、なんスか先生？ もしかして酔つ払つてるんですかー…？」

誠吾は「そうだつたらいいんだけどな……」と呟くと、咥え煙草のまま立ち上がつた。

「ああそれと西脇。柳川先生をモ嫌いしないでやつてくれな

「は？」

「……じゃ、俺ももう帰るわ。一人とも氣をつけて帰れよ」

そして誠吾は職員専用の駐車場の方へゆっくりと歩き去つて行つた。

背中を丸め、どことなく哀愁を帯びたその後姿を見た冬馬が目を瞬かせる。

「矢貫先生つて授業の時と普段どじゅ全然感じ違うな……。そう思わねえ？」

「う、うん……」

とりあえずそう相槌は打つたが、それはきっと今日の体育の授業中に事故があつたせいだ、と桃乃は直感していた。しかしあの事故の内容を考え、敢えて冬馬には何も言わないで黙つておくれとにする。

救急車がけたましいサイレンを鳴らしてカノンから出でていった後、笹田梨絵は妊娠しているらしいことにつ噂はすでに今日一日で一年女子の間では公然の秘密だつたのだ。

「……つたく、なんで俺があんたを送んなきゃいけないんだよ?」

カノンを出て駅までの帰り道、要は口から出る言葉はすべて不満気な言葉ばかりだった。

「まあまあいいからホラもつと早く歩こー!」

「俺に命令すんな」

「だってのんびり歩いていたらモモ達に追いつかれちゃうよ? 要だつて今はモモ達とまた顔を合わせたくないでしょ?」

「だからってなんであんたと一緒に帰んなきゃなんねえんだつての」

沙羅は横で文句を言い続ける要をチラチラと横田で見る。

「なんだよ、ジロジロと」

「……ふ〜ん、これがきっと本当の要なのね」

「どうこいつ意味だよ」

「だつてさつきの要と今の要つて全然感じが違うもん」

「ああその通りだよ。わっかね思つたり自分を作つていたからな」

今の要は二コともしていない。

「……なあ、いつもあの子と一緒に帰つてるのか?」

「うん。入学式の次の日に知り合つてからずっと」

「俺、あの子を落とすためにこじんとこずっと正門のあたりで帰るの張つてたんだけど、全然捕まらなかつたんだよな。いつもこんな時間まで残つてたのか?」

「つうん違うよ。今日はあちこち部活の見学をしていたから遅くなつたの。こつもはホームルームが終わつたらすぐ帰つてたよ」

「じゃあ、俺が正門に行つた時にはもう帰つっていた後だつたのか?」

「。どうりで毎日張つても見つけられなかつたはずだ」

「要つてば毎日こんな時間まで待つてたの?」

「ああ」

「すうじいガツツだね……」

そういうながらも沙羅はまださりげなくと氣になつたある光景を思ひ出す。

「ねえねえ要

「なんだよ」

「あたしちょつと思つたんだけどー、要つて本当は別にモモのこと好きじゃないでしょ?」

「……なんでそう思うんだよ」

「だつてさつきモモがあの男の子と帰ることになつた時、要つてば舌打ちしてたじゃない。大好きな女の子に振られて舌打ちするなん

ておかしこもん」

いぶかしそうに沙羅を横田で見ていた要は一転して驚いた表情になる。

「へえー、あんた意外と鋭いじやん!」

「わつなによ要つてばー わつかは『沙羅ひやん』なんて猫撫で声出しだくせにー!」

要はフンとそっぽを向く。

「ね、あの男の子とモモつてどいついう関係なの?」

「さあな。今日俺があの子と話したの、西脇の奴があの子と一緒に登校してきたの見た日以来、まだ一回だしな」

「なんかお互い名前を呼んでたし、昔からの知り合いっぽいよね」「俺にとつちやそんなことはどうでもいいことだがな

その言い草に沙羅は小さく両肩を竦める。

「要つてわ、あのトーマツてこいつ背の高い男の子となんかトラブルがあるの?」

「あんたに関係ないだろ」

要はこれ以上以上ないくらいの冷たい言い方で沙羅を突き放した。しかし沙羅はそんな要の態度などまったく意に介せず明るく答える。

「だつてすつゞく氣になるんだもんつー」

予想外の沙羅の反応に要は眉間に皺を寄せた。

「なんであんたが気になるんだよ?」

「うんつ、あたしさ、要のこと気に入っちゃつた! 要はモモに振られちゃつたみたいだし、じゃあ、あたしが要の恋人候補に立候補しちゃおつかな!」

「ハアー?」

理解不能、と言わんばかりの煙の声が夜空の下で響く。

「ナレ」で要じにお願いがひとつ。あたしの「ヒトセウタ」みたいに
ちやんと沙羅つて呼んでよねー。」

沙羅はナツヒツと呆気に取られている煙に向かって明るくワイン
クをした。

「あつひゅうと好きだった

沙羅と要が去り、そして誠吾の姿も完全に見えなくなつた後、先に口を開いたのは冬馬だった。

「じゃ、帰るか」

「う、うん」

桃乃は小さく頷いたが、自分の発する言葉が少しがこかなこと気に付く。そのことを冬馬に悟られないようにできるだけ自然なを装つて話しかけた。

「冬馬、部活早退して大丈夫だったの？」

「ああ」

「そ、う。良かつた。ならいいんだけど……」

しかし実際は違つていた。

勝手なことを言い出したペナルティとして、明日の朝、体育館のコート磨きを冬馬一人でやるようにキヤプテンの潤一から言い渡されていたのだ。冬馬はその事実を隠し、心配顔の桃乃を安心させるために「全然大丈夫だつて。気にすんな」と大きく笑つてみせる。

「それよりこの道つてよ、人通りが少ないから夜は結構危ないらしいな。変質者が出るつて噂もあるらしくし気をつけるよ？」

「うん。あ、あのね冬馬……」

「ん？」

「あの……」

謝りなくせりや、心の中ではせつ思つてこむのだが言葉が出てこない。

「あ、今日は自転車で来てないの？」

結局口から出てきたのはそれとはまったく関係のない話題だった。

「ああ、昨日帰りに車の事故現場の跡を通りた時、散らばっていたガラスの破片でタイヤがパンクしちまつてさ。まだ修理していないから今日は電車で来たんだ」

「そ、そう

「もしかして後ろに乗りたかったのか？」

「えっ」

あのクロスバイクにまつわる裏話を行人から聞いている桃乃はその言葉にドキッとする。

「う、うひうひ……た、ただどうしたのかな、って思つただけ……」

「……そつか

会話はここでしばらく途切れた。

お互いこれ以上ないくらいに意識しあっているのに、言いたいことがあるはずなのに、それぞれの胸に溜めたまま二人はひたすら黙々と歩く。

先週裕人が車の中でこいつそりと教えてくれた冬馬の裏話の数々が何度も頭の中に浮かんできた。その話を思い出す度に桃乃の胸は何かにぎゅうっと掴まれたかのように苦しくなっていく。

やがて道の先に谷内崎駅の街灯が見えてくると冬馬は急に足を止めた。いきなり立ち止まつた冬馬に桃乃も足を止めて振り返る。

「どうしたの冬馬？ 学校に忘れ物？」

「……いや

「じゃ、なに？」

冬馬は一つ呼吸を置いてから言った。

「桃乃、『』の間は『』めんな……」

その謝罪にまた胸が苦しくなる。

もうこれで何度あの夜の時を冬馬は謝つてくれているのだひつ。私はあんな冷たいことを言つてしまつた事をまだきちんと謝つていないのに。

そう思い、いたたまれなくなつた桃乃は急いで口を開いた。

「冬馬、私も」

「そんで、ありがとな」

「えつ……？」

今度は感謝の言葉を言われ、思わず桃乃は言葉を止める。

「じ、実は俺や……」

冬馬は一旦足元に視線を落とした後、意を決したように再び顔を上げる。

「俺、桃乃のこと好きなんだ……！ メッチャメチャ好きなんだ！だから桃乃があいつどじやなく俺と帰つてくれて、今スッゲー嬉しいんだ！」

そして冬馬は一步桃乃に近づき、緊張気味の声で言つ。

「な、急で悪いんだけど俺のことどう思つてるとか教えてくれるか……？」

こんな場所で、しかもあまりにも突然の冬馬からの告白に桃乃は驚いて口ごもる。

「わっ、私……」

「桃乃、遠慮しないではつきり言つてくれてい。駄目でも覚悟できてる」

冬馬は真剣な表情でそう言つた。しかしその顔を直視できなかつた。

い。

(……返事しなきや………)

顔を赤らめて視線を逸らす。心臓の鼓動が激しそぎて痛いくらいだ。

祐人にすべての話を聞いてから、いや、本当はあの日の朝、クロスバイクでそのまま追い越された時の胸の痛みで、すでに自分の冬馬に対する気持ちにはとっくに気付いていた。

今の自分に必要なものはほんの一歩、前に踏み出す力。桃乃は俯いたままで精一杯の勇気を出し、自分の気持ちを伝える。

「……す、好き……よ？」

「マ、マジでッ！？」

嬉しさの余り、冬馬の声が裏返る。桃乃は小さく「クン」と頷いた。

「あの時、痛かつたる？」「めんな」

桃乃の細い肩を冬馬はそっと掴む。

「うん……。後で見たら癌になつてた……。でも、もうここに」

冬馬は済まなそうな顔でもう一度「「ゴメンな」と言つて、優しく桃乃を抱きしめる。

「それより私の方こそ」「めんなさー……」

腕の中に抱きしめられたままのせいか、伝えたい言葉が素直に出せるようになっていた。

「なんで桃乃が謝るんだ？」

「朝、駅まで送ってくれた日……『もつ迎えに来ないで』なんて私が言つちやつたから……」

「ああそのことか……。確かにあれはちょっと堪えたけど、もう少
んなことどうでもいいや！」

冬馬は明るく笑い、抱きしめている腕に力を入れる。

「なあ桃乃」

冬馬が桃乃の柔らかい髪に顔を埋めながら囁く。

「キス、していいか……？」

「……！」

冬馬の腕の中で桃乃は息を呑む。

確かに今周りに人影はまったく無い状況だが、いきなりのことでは桃乃には心の準備がまったく出来ていなかつた。しかし状況は緩やかに流れてゆく。

「田舎じり」

耳元で冬馬が再び囁く。

「ま、待つて」

冬馬から身を離そうとしたが離れた瞬間にまた強く抱きしめられた。その拍子に手からスクールバッグが離れ、地面に落ちる。「ずっとずっと好きだつたんだ。昔からお前だけを見てた」

「冬馬……」

「好きだ」

強く強く、痛さを感じるわずか一歩手前の強さで抱きしめられる。

「すっぴえ好きだ」

冬馬から「好きだ」と言われる度に体から力が抜けていく。

「冬……」

「田閉じり」

その言葉で思考までもが霧がかかつていくようにぼやけ、桃乃はおとなしく瞼を閉じ、気付くごく自然に冬馬のキスを受け入れていた。

見えないはずの桃乃の閉じられた視界の中で冬馬の姿がぼんやりと映っている。

桃乃が爪先立ちをしなくてもいこうとにその体を大きく折って、冬馬はそっと優しく背中を抱いている。

小さく震えながら体験する初めてのキス。

桃乃の心臓は壊れそうなくらいにドキドキしていた。

やがて名残惜しそうに冬馬の脣がそっと離れる。

桃乃がゆっくりと目を開けると冬馬が再び抱きついてきた。

「あー俺、今メチャメチャ幸せッ！」

冬馬はまるで無邪気な子供のように、想いが通じた喜びを体一杯に表す。

またすっぽりと腕の中に強く抱きしめられて、桃乃はあることこの気がついた。

「……冬馬の体から荷兒イと同じ煙草の匂いがする……」

それを聞いてギクリとした冬馬は慌てて桃乃から自分の体を離した。

「あつ！ そつそれはえーと……、そつだ思い出したつ！ そういうこの制服、昨日兄貴の部屋に置きつぱなしだつた！」

「それで匂いが移っちゃつたのね」

「そつそつ、マズくて……じゃ、じゃなくて！ ケムくて参るよ、兄貴の煙草はさ！」

「袴兄イの吸つてゐる煙草つて外国の煙草なんじょ？ だからなんか独特な香りがするものね」

「そ、そつそつ！」

(……もう煙草止めよつ……)

なんとかその場をごまかせた冬馬は大きく胸を撫で下ろし、煙草との決別を本気で決意した。

次の日、土曜の早朝に男子体育館の中で熱心にゴートを磨く冬馬の姿があった。

その様子を影から見てゐる人間がいる。

「あれつキャプテン、そんなどこに立つて何してゐんですか？ 今日は朝練休みの日ですよね？」

体育館の扉を少しだけ開けて潤一が中の様子を見ていたのを、たまたま別の用事で学校に来ていた一年のバスケ部員が見つけて声を

かける。その後輩の声に潤一は振り返った。

「おは、おはよ！」

「おはよひひすー！」

「いやな、昨日一年の西脇の奴が早退したいなんて言つからせ、ペナルティーとして今朝ここに来て「コート磨きを一人でやれって言つたんだよ。でもここを最後まで一人でやるのはキツイだろ」と思つて俺もさつき来てみたらほら、ちょっと見てみりよ」

潤一は扉の隙間を親指でクイクイと指した。

体育館の中では嬉しくてたまらない、といった表情で冬馬が熱心にコートを磨いている。しかも時々「ヒヤッホー！」などといつ陽気な掛け声まで出しているのだ。

「なんかメッチャ楽しそうですよね……」

潤一に言われて中を覗いた二年の部員が、潤一の言いたい事を代わりに言葉にする。

「……だろ？ 西脇もそろそろ疲れてへこんでる頃かと思つて来てみたんだが、なんであいつはあんなに嬉しそうに「コート磨きやってんだけ？」

解せない表情の潤一に一年の部員は楽天的に答える。

「なんかいい事でもあつたんじないスか？」

「そうなのかな……」

潤一は再び中を覗く。

「西脇冬馬、か……。あいつ、一週間前に入つたばかりの時はいつも眉間に皺寄せて氣難しい顔してたくせになあ……。今年の新入部員の中であいつの性格だけはまだよく分からんよ」

思案顔でそう呟く潤一の耳に、体育館の中から「ヒヤッホー！」と叫ぶ冬馬の陽気な大声が再び聞こえてきた。

忘却と決意

冬馬（とんまん）が「コード磨きに精を出している頃、誠吾は梨絵（りえ）が昨日入院した天万台病院（てんまんたい）に再び向かっていた。

（手ぶらで行くのもなんだな……）

病院の側で営業している生花店を見つけ、一旦車を停める。店内に入ると店番をしていた十代とおぼしき少女が愛想良くながれを迎えた。

「いらっしゃいませ！」

「これから病院に見舞いに行くんで何か花を持つていきたいんだ。適当に選んでくれるか？」

「お見舞い用ですね、分かりました！」

長い髪を三つ編みにした少女は手慣れた様子でキビキビとした返事をする。

「あの、お部屋に花瓶はありますか？」

「花瓶？ いやちょっとそれは分かんねえな……」

「じゃあバスケットタイプでお花作りますね」

「バスケットタイプ？」

「こんな感じになります」

少女は壁際の棚に置いてあつた商品を持ってきた。
バスケットの中に粘土のようなものが詰められていてそこに花を生ける花籠タイプのようだ。

「これでも数日はお花もちますので大丈夫ですよ」

「あ、じゃあわざわざ作ってくれなくてもそれでいいよ」

「済みません！」れ他のお客様からの「注文で用意してある商品なんです！」

「あ、そうなのか。じゃあそれと同じヤツを頼むわ」

「はい！」

早速空のバスケットとリボンが白いテーブルの上に置かれる。

「あのー、お花を贈られる方が好きな花とかご存知ですか？　もし在庫があればそのお花を入れたいんですけど」

「あー、俺全然分かんねえな……。でもそれをあげるのはちょうど君くらいの年の女の子だから君が好きな花を入れてくれよ」

「えつ私くらいの女の子に贈られるんですか？　ハイツ、分かりました！」

少女はなぜか急に嬉しそうな表情になり、テキパキとバスケットを作り出した。

色とりどりの花を美しく生け、最後に大きなピンクのリボンを持ち手の部分に絡めて作業は完了する。

「お待たせいたしました！」

誠吾は代金を払うと似合わないバスケットを抱える。

「どうもな」と言いく店を出ようとすると、少女は「ありがとうございました」と大きく礼をした後におかしなことを言い出した。

「上手くいくとこですね！」

「へ？」

少女の言葉に誠吾は振り返った。笑顔一杯な少女はウキウキした声を弾ませる。

「年が離れた恋愛って私憧れてるんです！　お客様はきっとこれから私くらいの年の女の子に告白しに行くところなんですよね？　お客様の想いが通じるように、花言葉『愛の告白』のモスローズ

をここに一本入れておきました！ ではまたお待ちしてまーす！」

「そ、そつか……ハハ……サンキューな……」

誠吾はひきつり笑いを浮かべ、この思い込みの激しそうな三つ編みの少女に軽く手を上げると花屋を後にした。

（想いが通じるようにな、か……。俺は通じなかつたけどな……）

車に乗り込み、バスケットの中央に一本だけある柔らかいピンク色のバラに目をやりながら誠吾は思う。

先週の金曜日、屋上でのあの出来事。

以前、アルコールが入った状態で縁に告白のような真似事をしたことがあつたが、素面の状態であれだけ本気で想いを告げたのは初めてだつた。

しかし結果は縁に激しく拒絶され、終わりを迎へてしまった。
でも拒絶されるのは当たり前なんだ、と思いながら誠吾はハンドルを強く握りしめる。

アクセルペダルを踏む前に助手席に置いたバスケットに再び視線を走らせるが、籠の中のモスローズがエンジンの始動で小さく震え出し始めていた。何かに脅えているようにも見えるその儚い様子に、誠吾は自分の想い人の姿を重ねる。

（……もうあの女のことは忘れよ^{ひと}う……。俺はそんな資格が無い人間なんだからな……）

梨絵が入院している部屋は四階の一一番端の個室だ。バスケットを抱え、誠吾は昨日の夜も一度訪れた部屋を再びノックする。「どうだ」という声が聞こえたので誠吾はドアを開けた。

「あつ矢貫先生……？」

午前の光が降り注ぐ病室のベッドの上に梨絵はいた。

「よお、具合はどうだ」

誠吾は梨絵の側に行くとベッドの脇にあつたパイプ椅子に座る。

「これ、見舞いだ」

「わあありがとう先生…」

梨絵はベッドから起き上がり、バスケットを受け取った。

「可愛いお花ばっかり！ 先生が選んだの？」

「いや、花屋の女の子に全部まかせてやつてもらつた」

やつぱりね、と声をうなずき梨絵はバスケットを手に小さく笑つた。

「……笛田、検査はどうだったんだ？」

梨絵は一瞬黙つたが無理に明るい表情で答える。

「はい、体の中はもう全部綺麗にしてもらつたから大丈夫です。出血が少し多かつたので鉄剤を何日か服用することになりました。あと、もしかしたらこの先赤ちゃんが出来にくい体になつたかもしれませんって言われました」

「……そつか……」

誠吾の声が沈んだ。

「矢貫先生、先生のせいじゃないんですから気に病まないで下さいね」

「でも俺がお前を無理やり体育に参加させたせいですね」

「いえ、違います。先生は私のことを思つてあの時ああ言つてくれたんでしょ？ 先生そう言つてたじやありませんか。だから後のこととは全部私が決めたことで私の責任です」

「でもな、筈田」

「いえ先生、聞いて下さい」

梨絵は誠吾の言葉を遮る。

「……先生、実はそのまま体育に参加しなくてもたぶん私流産していました。妊娠に気付いた時、彼と一緒に行つた産婦人科の先生に切迫流産の恐れがあるから家で静養するようになつて言われていたんです」

梨絵は真っ白いシーツの上に静かに視線を落とした。

「でも私はそうしなかつた……。いつも通り学校に通つてました。私、妊娠に気付いてから心のどこかで思つていたんです。このまま流産すればいいのに、って……。でもそう思つていたくせに体育への参加だけは絶対にしないでおこうと思つていました。それは自分から積極的にその行為に荷担するのがイヤだったからです。あくまでも普段通りの生活をしてダメになることを望んでいたんです」

目を伏せた梨絵は寂しそうな表情で淡々と喋り続ける。

「……彼はまだ今年大学に入つたばかりなんです。彼は産んでもいいよつて、大学を辞めて働くからつて言つてくれたけど、彼の家庭環境とかを考えるときつと彼に責任は取れなかつたと思います。でも私はたつた一人で未婚の母になる勇気は無かつた……。毎日どうしよう、どうしよう、と思いながら学校に通つてました……」

梨絵の田からپロپロと大粒の涙がこぼれだし、その涙はバスケットの花の上に落ちて朝露のように光る。

「先生、私あの時バーに向かつて走りながら思つてたの……。『いやでやつと樂になれる』って……」

「笹田……」

「『みんなさい、先生……。わ、私、先生にまで迷惑をかけちゃ……つて……！』

誠吾は嗚咽する梨絵の背中を安心させるように一度優しく口いてやつた。

「笹田……体大事にしろよ。後のことは俺にまかせておけ」「は……い……」

しばらく梨絵は顔を手で覆い泣き続けていたが、やがてドアが開いて梨絵の母、ささる やすえ 笹田康江かとう やすえ が入ってくる。

「まあ矢貫先生！」

康江が誠吾を見て驚いた顔をする。昨日病院から康絵に連絡を入れた誠吾は軽く頭を下げた。

「梨絵、どうしたの！？」

娘が泣いていることに気が付いた康江が慌てて泣きじゃくる梨絵の側に駆け寄る。

「あの、今は笹田一人にしてやつて下せ……」

誠吾はそう言つと康江に田で合図をして廊下に連れ出した。康江は周りに人気が無いことを確認するとすぐのような田で尋ねる。

「矢貫先生！ 梨絵は、梨絵はカノンを退学になつてしまつのでしょつか！？」

誠吾は苦しそうな表情でその問いに答えるのに一瞬躊躇する。

「それは……まだ分かりません……」

「なんとか先生のお力での子をカノンに残して下さる事はできないのでしょうか！？」

「……俺はただの一介の教師でなんの力もありません……。ですが、今回 笹田がこんなことになつたのは俺にも責任があります。だから 笹田のために精一杯尽力をつくします」

「どうかお願ひします矢貫先生！ このままカノンを退学になつてしまつたらあの娘は一体どうなつてしまふのでしょうか！？ 先生、どうか、どうか梨絵を助けてやつて下さー！」

康江の言葉に誠吾は黙つて頷いた。

「では俺はこれで失礼します……」

「どうかお願ひ致します、矢貫先生……！」

体を半分に折り、康江は深々と頭を下げた。哀れな娘の行く末を中心配する必死な母親の訴えは、誠吾にとつてとてもなく大きな重圧となつてのしかかる。

康江を安心させるようにもう一度大きく頷くと、誠吾は病院を後にした。駐車場から梨絵の病室を見上げた誠吾の視界に、たつた今自分が置いてきた花籠が窓際に飾られているのが小さく見える。

(絶対助けてやるからな 笹田)

誠吾はそう固く決意すると重いプレッシャーを胸に足早に車に乗り込んだ。

ケダモノな彼氏 <1>

「おっしゃー、終わったあーー！」

綺麗に磨きあげられた体育館の床を眺め、冬馬は満足げに額の汗を拭う。桃乃に告白して見事OKの返事を貰った冬馬の気分は昨夜からハイテンションのままだ。

「お疲れさん」

潤一が体育館の中に入ってきたホールを磨き終えた冬馬に声をかける。

「あ、キャプテン！」

「ちゃんと真面目にやつたみたいだな」

「はーっ！」

「よし、じゃあもうちょっと付き合ひでもりつか

潤一は持参していたマイボールを潤一は冬馬の鼻先にスッと差し出した。そして素早く制服の上着を脱いでネクタイを外し、Yシャツの一番上のボタンも外しだす。

「どうだ西脇？ せつかくだから綺麗になつたホールで 100-1 でもやってみないか？」

「は、はいっ！」

すでにYシャツ姿だった冬馬も慌てて同じように一番上のボタンを外した。

「じゃ俺からな」

新海潤一はキャプテンを務めているだけあってバスケ部の中で当然その実力は折り紙つきのプレーヤーである。入部早々その潤一と100-1をしてもらえるチャンスに冬馬は興奮した。

潤一は持っていたボールを手から離し、軽快にドリブルを始める。

「お願いしますッ！」

冬馬がそう叫んだ瞬間、一気に潤一がゴールめがけてダッシュをする。

さすがにその動きは俊敏だ。しかしその素早い潤一の動きに冬馬はすぐに反応し、「マークを強く踏み鳴らしてその行く先を阻む。が、潤一はレッグスルーの後、クルッと背を向け身軽に半回転すると、そのままゴールめがけていきなりショートを放つた。ボールはまるで自らの意思のようにゴールのリングポストの中にあつけなく飛び込んでいく。

(やつぱすげえ……)

まったくといっていいほど動きに無駄が無い。潤一の実力は分かっていたつもりだが、開始わずかであっさりとゴールを決められ、冬馬はあらためてそのバスケセンスに驚愕する。そんな冬馬の内心を盗み見たかのように潤一が激を入れる。

「西脇、気合入れろよ？」

「ハ、ハイッ！」

突き放されないよう冬馬は必死で喰らいつくが、点差はジリジリと離されて行く。突つ込んでくるかと思えばいきなり引き、スリーポイントラインの外から華麗にゴールを決めてくるため成す術がない。

三十分後、大きく息を切らしている冬馬を見た潤一が、ドリブルを止めて制服の上着を手に取る。

「だいぶバテてきたな。今日はこんなところで勘弁しといてやるか

「ま、まだ大丈夫です！ お願いします！」

潤一に倍以上のポイント差をつけられている冬馬は食い下がった。

「お前なかなか負けず嫌いなんだな、西脇」

熱くなっている冬馬を見て潤一は笑いながら上着を肩にかける。はだけられたシャツの襟元の間から銀のローンネットクレスがキラリと光った。

「でもその姿勢、バスケットマンとしては合格だ。ま、でも今日はもう止めとけ。お前、コート磨きで疲れてるはずだぜ?」

「あれくらい全然ですよ! お願いします!」

「……まあ西脇、お前バスケ始めて何年になるんだ?」

潤一はふと思いついた、という感じで冬馬に尋ねる。

「え? えっと、小学五年の時からだから今六年目です」

「俺は小三の時からで十年目だ」

潤一はその場で一度だけボールをコートに強く打ちつける。

「たぶん今のお前じやまだ俺に勝つことは出来ないな。経験と実績が違すぎる」

決して認めたくはないがやはり潤一の言つ通りだと冬馬自身も思つた。

悔しそうに唇を噛む冬馬に潤一は再び笑いかける。

「でもな、今日お前とやつてみてわかったよ。西脇、お前なら一年レギュラーも夢じやないかもな」

「ほ、本当ッスか! ?」

「ああ。だが死に物狂いでやれよ? ここで一年がレギュラーを取るなんて今まで例が無いんだ。俺以外ではな」

潤一は手にしたボールを素早くバスする。

「期待してるぞ、西脇」

「ハイツ!」

体育館に気合の入った返事が響き渡る。潤一からの激励とボールをしつかりと受け止め、冬馬は全力で頷いた。

その頃、倉沢家では一家総出で物置の整理が始まっていた。

「あらあら、もう使わなそうな物つて結構あるものね」

予想以上の沢山の不要物の数に、頬に手を当てた千鶴が驚いている。そんな妻の様子を見ながら雅治がやれやれと言いたげに呟いた。

「千鶴はなんでも仕舞いこむ悪いクセがあるからな」

「だつて、また使うことあるんじやないかと思つてついつい……」

両親と一緒に整理を手伝っていた桃乃は物置の奥から綺麗な模様がついた小さな缶を見つけた。

(わあこの缶懐かしい……！)

缶を開けると直径四センチほどのほんのりとピンク色の石が一つ入っていた。

その石を手に取つて見る。見ようによつては微妙なハート形に見えるその小さな石は桃乃の手の中でコロコロと踊つた。

(これ 確か幼稚園の頃に冬馬が見つけて貰つた石なのよね)

「これももういらしないな？」

雅治が千鶴を呼び次の決断を促す。

「そうねえ……」

千鶴は雅治の前にある屋外用大型バーベキューセットについて判

断を決めかねていた。

「もう今更家族でバーベキューなんて」ともしないだろ？ これが一番場所を食つてゐるんだ。な、千鶴、これ捨てような？」

「そうねえ……これ一昨年に西脇さんのお宅と一緒に行ったキャンプの時以来、全然使つてなかつたものねえ……」

「よし、じゃあ捨てるぞ」

雅治がよいしょ、と言いながらバーベキューセットを物置から出す。

その後を一緒について出た千鶴は急に何かを思つたように嬉しそうな声を出した。

「ね、じゃあ今晚はこれを使つて庭でバーベキューしましょ」

「庭でバーベキュー！？」

「ええ！ 桃乃や葉月がもつと小さかつた頃はよくやつてたじゃないの。捨てる前に最後にもう一度使つてあげましょ」

「用意が面倒じやないか。材料切つたり炭をおこしたりさ……」

「材料は私がいつも用意してゐるでしょ。雅治さんは炭をおこしてくれるだけでいいわよ」

「うーん……」

乗り気ではない雅治はなんとかこの面倒な事態を回避しようと娘達に同意を求める。

「なあ桃乃、葉月、お前たち庭でバーベキューなんてしたいか？ したくないだろ？」

しかし雅治の思いとは裏腹に、「あたしやりたーい！ 面白いもん！」と葉月が真っ先に手を上げる。

「桃乃はどうなんだ？」

「私はどっちでもいいけど？」

「そ、そつか……」

雅治の思惑は完全に外れてしまった。反対に賛同者が増えた嬉しさで千鶴が声を弾ませる。

「じゃ決まりね！ あつ、それじゃせつかくだからお向かいの麻知ちゃん達もお誘いしてみようかしら？」

「H Hエッ！？」

「あらどうかしたの桃乃？」

「う、ううん別に！」

桃乃は慌てて手を振った。

昨夜力ノンからの帰り道の途中、冬馬から好きだと告白されてキスされたことが一気に頭の中を駆け抜ける。昨日の今日で顔を合わすだけでも恥ずかしいのに、お互いの家族を囲んでバーベキューをすることになりそうな事態に桃乃は動搖した。

（あ～こんなことならどうちでもいいなんて言わないで反対しておけばよかつた……！）

しかしさつきまで面倒臭そうだった雅治は冬馬の父、啓一郎と飲めるかもしれないと思つて急に上機嫌になる。

「それはいいな。啓さんと飲むのも久しぶりだ」

「じゃあ私、ちょっと麻知ちゃんの家に行つてお誘いしてくるわー！」

千鶴はレースのエプロンを外すと向かいの西脇家に小走りで走つていった。

「神様、どうか冴人兄ちゃんが来ますように……！」

向かいへ出かけた千鶴の後姿を見送りながら小さな手を合わせ、葉月が祈るような声で呟いた。

「冬馬！？　いい所に帰ってきた！　あんた今日の夜、なんか用事あるの！？」

「ゴート磨きを終え、自宅に戻ってきた冬馬に気付いた麻知子がリビングから飛んでくる。

「何だよ帰ってきていいきなり！」

「今晚ね、倉沢さん家の庭でバーベキューやるんだって！　それでウチも良かつたら一緒にどう？　ってお誘いがきたのよ」

その瞬間、玄関先で靴を脱いでいた冬馬の体が小さく反応する。

「それで材料を用意する都合があるからさ、我が家への参加人数を千鶴ちゃんに連絡しなきゃならないのよ。冬馬はどうする？」

「い、行く行くっ！」

「肉好きのあんたなら絶対参加すると思つたわ！」

勢い込んで即答した息子の様子に噴き出ると、麻知子はすぐに倉沢家に電話をかけた。

「あ、千鶴ちゃん？　あたしよ。あのね、ウチは三名参加させていただくわ。……え？　ああ行人よ。今ケータイに連絡したら今日帰り遅くなるって言われたわ。また夜遊びよ、きっと。あ、それで材料の方はさ、…………うん…………うん…………。じゃあそれは後で割り勘にしてね。絶対よ？　あ、あとお酒はウチで用意させてね。…………ううん全然。ちょうど頂き物の日本酒とビールがあるのでよ。…………うん、六時スタートね。じゃあ後でね」

麻知子はそう喋り終えると電話を切つたが、すぐ側にまだ冬馬が立っていたので不思議そうに息子を見る。

「どうしたの冬馬？」

「俺、なんか手伝う」とある？」

「ああそうね……、でも今回は千鶴ちゃん家からのお誘いだから。材料もあちらで用意するつていうし。あ！ 冬馬、あんた買い物の荷物持ちでもしたら？ 七人分の材料だから結構な荷物になると思うのよね」

「分かった。今シャワー浴びて着替えたらすぐ出られる用意する」「じゃあ母さんはもう一回千鶴ちゃんに連絡しておくれわ」

「ああ！」

冬馬は弾むような足取りで一階へと上がつていった。

（冬馬つたら昨日の夜からスゴく機嫌がいいわよね……何かあったのかしきり）

「――最近、何かに苛々していた冬馬の姿を見てきた麻知子はそう思いながら再び倉沢家に連絡を入れる。一回メールの後、すぐに千鶴が出た。

「はい倉沢です。あら、麻知ちゃん？」

「あ、千鶴ちゃん何度もごめんね。実はわ……」

麻知子は手短に用件を伝える。

「あらそこの？ いいえ、助かるわ。買い物は桃乃に頼もうと思つてたから一人で行つてもらいましょ。じゃあ待つてるわね」

千鶴は受話器を置くとまた台所に戻つた。三十分後、インターフォンが鳴ると千鶴はそのまま玄関に向かい、扉を開ける。

「――これは

玄関に立つていた冬馬を見て千鶴は微笑んだ。

「冬馬くん、わざわざ悪いわね。ちょっと待つててね。今桃乃を呼んでくるから」

千鶴は一階へ上ると桃乃の部屋をノックする。

「桃乃、ちょっといい？」

中から返事があつたので千鶴はドアを開けた。机に向かつて予習をしていた桃乃が振り返る。

「なに？ お母さん」

「あのね、バーベキューの材料買つてきてほしいの。お母さん、今他の準備してゐるし手が離せないから」

「うん、いいよ。じゃ行つてくる」

「それで冬馬くんが一緒に買い物行つてくれるんだって。今、下で待つてるわ」

「エツ！ 冬馬が下にいるの？？」

「ええ。冬馬くんつて優しいわね。荷物持ちを買つてくれたみたいよ。じゃお願ひね」

千鶴が部屋を出していくと桃乃は慌てて一階の洗面台に向かつた。そして自分の服装を簡単にチェックした後、急いで階段へと走る。玄関内で待つていた冬馬が降りてきた桃乃を見て「よつ」と手を上げた。側に千鶴もいるので何とか平静を装つて一定のリズムで階段を降りる。

降りてきた桃乃を見て千鶴はあら、と呟いた。

「あなた達今日はお揃いの格好ね。ペアルックみたい」

「は……？ ただジーンズにTシャツっていうだけじゃない！」

時代錯誤な母の言葉に呆れと恥ずかしさが同時にこみ上げてくる。しかし千鶴は穏やかな口調で、「でもお母さんにはペアルックに見えるんだもの」と微笑んだ。

「も、もうお母さんつてば……！」

このやり取り自体が恥ずかしくてたまらない。冬馬がどんな顔をしているのかが気になり、そつと玄関先を目で追つた。すると冬馬は肩を震わせ、片手で口で覆つて必死に笑いをこらえている。それを見てますます恥ずかしさが増した。

「さ、行つてらっしゃい。早めに準備したいから一人とも急いで帰つてきてね」

「は、はーい……」

こんなことなら今日もつと可愛い服を着ていればよかつたな、と思いつながら千鶴に見送られ、冬馬と近くの大型スーパーへ向かう。

「手でも繋ぐか？」

歩き出していくの言葉に桃乃の顔は一気に赤くなつた。

「イ、イヤよ。こんな人通りの多い所で……」

「別にいいじゃん、手繋ぐくらい。冷てえなあ桃乃は。俺らせつかくのペアルックなのにさ」

「も、もうー、冬馬つたらわざと言つてるでしょ！？」

「でもさつきのあれはサイゴーに傑作だつたよ。後で思い出したらまた笑つちまいそうだ」

顔を赤らめて怒る桃乃をからかつた後、冬馬は右手で眠そうに目をこする。

「……桃乃。俺さ、昨日なかなか寝付けなかつたよ」

「え、どうして？」

「どうしてつて……決まつてんじやん！ 昨日のこともひ忘れちまつたのかよー？」

冬馬は驚いた顔で素早く桃乃の方に体を向ける。

「俺ら昨日キスしたじやん？」

「バツバカッ！ こんなところで何言い出してんのよー！」

しかし冬馬は叱られたことなどまったく意に介していない様子で、まだ充血気味の目を何度も瞬かせる。

「……でさ、明け方にやつと寝付けたんだけど、朝起きたら昨日の」と全部夢だつたんじゃねえかと思つて一人でビビッたりしてんの

冬馬はバカみてえだよな、と言いながらハハッと無邪気な顔で笑つた。その屈託ない笑顔に胸の中心が締めつけられるような気持ち

になる。

機械的に前に足を進ませながらしづらぐの間桃乃はためらつてい
たが、やがて勇気を出して冬馬の手にそっと自分の手を絡ませてみ
る。

「……こ、これでいいの？」

桃乃の手が骨ばった大きな手にあつという間に包み込まれる。

「上出来ッ！」

そう言って桃乃の手を握った幼馴染は心の底から嬉しそうな笑顔
を見せた。

「土曜なのに結構空いてんじゃん」

週末昼夜下がりの大型スーパーは思ったより閑散としている。

「まだお昼過ぎたばっかりだもの。夕方になつたらもっと混むわよ」

「へえ、そんなもんなんのか」

「んつと、まず野菜を買わなくつひや」

「あ、カゴ俺が持つてやるよ」

「ん、ありがと」

桃乃は冬馬にカゴを預け、早速今夜のバーべキューに必要な野菜を選び出す。熱心に野菜を手に取つては棚に戻し、また別の物を手に取る桃乃に、

「そんなのどれ取つても同じじゃねえのか?」

と冬馬が呆れたように尋ねる。

「だつてここにあるの全部が今日仕入れた物ばかりじゃないのよ? どうせお金出して買うなら新鮮なのが欲しいじゃない」

「ふうん……」

理由に納得した冬馬は桃乃が野菜を吟味する光景を黙つて眺める。

「じゃあ次はお肉ね」

「桃乃、神戸牛にしようぜ、神戸牛! 松坂でもいい!」

青果スペースから精肉スペースへ移動すると俄然、冬馬が張り切り出した。

「何言つてんの、そんなに高いお肉買わないわよ

「頼む!」

「ダメーー! あ、冬馬、そつちの一番上の棚にあるあのパック取つてくれる?」「これが?」

「そう。ありがとう」「

七人分の材料ともなると、購入する量もかなり多い。最上段の陳列棚に鎮座する高級牛肉にまだ未練たっぷりな様子の冬馬の腕を「ほら行くわよ」と引っ張り、桃乃はレジへと急いだ。

スーパーからの帰り道、二人は手を繋がなかつた。

繋がなかつた、というより繋げなかつた、という方が正しかつたのだが。なぜなら冬馬の両手はたっぷりの買い物袋で塞がつてしまつていたのだ。

「冬馬、私ひとつ持つつてば！」

「いっての、何のために俺ついてきたか分かんないじゃん」

冬馬は大きく身をよじり、買い物袋を持とうとする桃乃の手をかわすように歩く。

「ね、そういうば冬馬、さつき書店で何買つてたの？」

「欲しかつた雑誌」

「どんな雑誌なの？」

「ん、それはちょっとな……」

答えをばぐらかされ、桃乃は「ふーん……」と呰くと探るような視線で冬馬の横顔をチラッと見上げる。その疑惑の視線に気付いた冬馬は焦つた顔になつた。

「あつお前、今エロ本かなんかだと思つただろッ！？」

「エッ！？ やっぱりそつなの！？」

「そ、そんなモン、買ってねえよ！」

「じゃ何買つたか教えてよ」

「……それはちょっと言えない」

「ホラやつぱり！」

「だから違つてーのー！」

行きと違つて帰り道は口ゲンカをしながらの帰宅になつた。

倉沢家の玄関に入ると千鶴が笑顔で出迎える。

「二人ともご苦労様。暑かつたでしょ。冬馬くん、上がつて冷たいものでもいかが？」

「あ、じゃ遠慮無く」

スニーカーを脱いで家の中に上がつた冬馬に千鶴が驚いたように言つ。

「あらつ冬馬くん、また背が伸びたんじやない？ 今何センチあるの？」

「今、百七十八です」

「もう衍人くんより大きいんじやない？」

「いや、兄貴は百八十だからまだ負けてます」

「フフツ、きっとあなた達の背がそんなに高いのは啓一郎さんの血筋なんでしょうね」

冬馬と衍人の父、啓一郎の身長は息子一人よりも更に高い。

「さあ上がる上がるって。……あつそいえばリビングのテーブル、今晚の用意で埋まっちゃつてるんだつたわね……。じゃあ桃乃の部屋に上がつてもらいましょ。桃乃、いいでしょ？」

「う、うん」

「今飲み物持つていつてあげるから待つてて」

一階に上がり、桃乃の部屋に入った冬馬は物珍しそうに室内を見まわす。

「桃乃の部屋に入るのって久しぶりだな。何年ぶりだ?」「中学入つてからはないんじゃない?」

「そんなに経つてたか? そういうえば部屋の感じもだいぶ変わったような気がするな……。女っぽいつーか、なんか落ち着かねえな

やがて冬馬は机の上に広げてある物理の参考書とノートに気付き、「予習やつてたのか?」と桃乃に尋ねた。

「うん。月曜日の物理、簡単なブチテストやるみたいなのが分かんねえとこあつたら教えてやるよ。どつかあるか?」「全部分かんないんだけど」

その返事を聞いた冬馬は苦笑する。

「桃乃は理数系苦手だもんな。試験前に公式を無理矢理丸暗記するパターンだろ?」

「うんそう。それに物理つて元々公式の羅列ばかりじゃないの」「まあな……。でも物理つてよ、俺らの身の回りでごく普通に起ころてる現象を数式で表せるのが面白いなあと思つぜ? 関澤先生の授業も分かりやすいしな。ああ、でもあの先生は物理マニアだからちょっと立ち入つたことを聞くとすぐに話が脱線していくちまつの玉にキズだけどさ」

その時ドアがノックされ、お盆にグラスを一つ乗せた千鶴が入ってくる。

「冬馬くんゆつくりしていつてね

「あ、はい。ありがとうございます」

千鶴が部屋を出て行くと桃乃はアイスティーグラスの片方を冬馬に差し出した。

「はい」

「サンキュー」

「ね、冬馬。これ覚えてる?」

桃乃はさきほど物置で見つけた缶を手に取り、開けて中を見せた。

「なんだ、この石?」

「覚えてないの?」

「全然」

桃乃はもう一つのグラスを手にベッドに腰をかけた。

「それ幼稚園の時、冬馬が見つけて私にくれた石じゃない」「そう言わるとなんとなくかすかに記憶が……っていうか、まだこんなもん大切に持つてたのか!?」

「今日、ウチの物置を片付けていたら出てきたのよ」

冬馬はピンク色の石を手に取ってしげしげと見た。

「あ~そうだそうだ、思い出した! 僕が見つけたこの石、桃乃が欲しい欲しい」って大泣きしたんだったよな

「ええっ、そうだっけ! ?」

「そうだよ。そんで慌ててやつたらお前「口ッ」と泣き止んでし、『とうまちやん、ありがとう!』なんでもう笑ってんの。ありやあ絶対嘘泣きだつたな」

「そ、そうだっけ……」

「で、この石どうすんだ?」

「うん、綺麗だし、嘘泣きまでして貰つた石みたいだからこのまま取つておく」

「そつか……」

何かを言いたそうだったが結局冬馬はそこで言葉を止めた。

オレンジ色のカーペットの上に直に腰を下ろした冬馬に桃乃が声をかける。

「冬馬、机の椅子に座つていいよ」

「いやここでいい」

そしてアイスティーを一気に半分ほど飲むと急に真面目な顔になつて切り出した。

「桃乃。あの柴門要の」となんだけどな……」

「うん」

「よく分かんねえんだけど、『いつせりあこつ、俺に何か恨みがあるみたいなんだよ』

「恨み……？」

「ああ。だからじつじくお前につけまつたりしてんだ。あいつ、そうすれば俺が頭にくることが分かつてわざとやつてるんだらうな

「冬馬、の人になにかしたことあるの？」

「それが全然心当たりがねえんだよな……」

冬馬の手の中にあるグラスの氷が溶け、カララン、と崩れる音がする。

「あいつ、七海中出身らしいんだ。それで俺が七海にバスケの試合に行つてた時、ちょくちょく試合を見に来てたらしこんだよ。でも俺、あいつと顔合わせた記憶が一度も無いんだよな」

「じゃあどうしてなのかしらね……」

「分かんねえ。でもこのままだとあいつまた桃乃に何かしそうだしな。だから俺、来週あいつ呼び出して聞いて詰めることにしたよ」

桃乃は慌てて止める。

「ケンカはダメよ、冬馬……」

「一応しない方向では考えてる」

「ダメッ！ 絶対ダメだつてば！ 沙羅も言つてたでしょ？ 学生

審問会議つていうのにかけられたら大変なことになるんだから！」

強い口調で念押しすると、冬馬は「分かった」と言つ代わりに違うことを尋ねてくる。

「沙羅つてあの背の高いハーフっぽい子のとか？」

「うん」

「しつかりした感じの子だつたな。……そういうやあの子、昨日柴門と一緒に帰つたけど大丈夫だつたかなあ」

「あの日帰つてから連絡を取つてみたんだけど、沙羅、あの人のこと気に入っちゃつたみたい」

「へえ……なんかおかしな展開になつてきてんな。でももつあいつを桃乃の側には近寄らせないようにするから何も心配すんな」

そう言つと冬馬は急に立ち上がり、飲みかけのグラスを桃乃の机の上に置く。

「桃乃、そのグラスもちょっと貸してみな？」

「どうして？」

「いいから」

冬馬は桃乃が持つっていたグラスも取り上げて同じように机の上に並べる。その行動の意味が分からぬ桃乃は、机の上に仲良く並んだ二つのグラスを不思議そうに眺めた。

次の瞬間、ベッドの上に座っていた桃乃にいきなり冬馬がガバッと覆い被さってきた。

「と、冬馬ッ！？」

ベッドに押し倒された桃乃は思わず大声を出した。

上になつた冬馬は悪戯っぽく笑いながら桃乃の口に自分の人差し指を軽く押し当てる。

「……おばさんに聞こえちゃうぜ？」

「な、なにするつもり？」

「決まつてんじゃん……」

冬馬はそう言つと人差し指を避け、あつといつ間に桃乃の唇を塞いだ。

「んつ……」

ベッドの上で桃乃はもがいたが形勢はどうみても桃乃に不利だった。

そのままの体制で冬馬は何度も桃乃にキスをし続ける。やつと離れたと思えばまたすぐにキスされる。その繰り返しだった。

何度も田かのキスの時に冬馬の手が桃乃の胸に触れる。

「イヤッ！ 冬馬どこ触ってるのよ！」

桃乃は冬馬の腕をピシヤリと叩いた。

「痛てえなあ……。そんなに怒んなくてもいいじゃん」

「怒るわよつー！」

「……悪い」

冬馬は素直に謝った。そしてボソリと今的心情を話す。

「なんかまだタベのこと本当かどうか信じられなくつてさ……。つい確認したくなつた

「確認しうぎよー！」

「俺さ、お前と一人つきりになるとどうも自分を抑えられなくなるんだよなあ」

「そつ、そういうのをケダモノつていつのー！」

「ひつでえなあ、仮にも彼氏を獸扱いかよ……」

冬馬はガツカリした声を出し、桃乃の上から起き上がつた。そして引っ張たかれた腕をさすりながら尋ねる。

「な、桃乃。来週からゴールデンウィークだろ？ なんか予定あるのか？」

「うん。一田の田に沙羅のお家に遊びに行く約束があるの」

「一日ならいいや。でも何があつても五日は絶対空けておいてくれよ？」

それを聞いた桃乃の心臓がドキリとする。五月五日は桃乃の誕生日なのだ。

「な？」

冬馬が笑いながら返事を促す。

「う、うん……」

そう答えた桃乃の頬がほんのりと桜色に染まった。

アイツには言わない

倉沢家と西脇家の合同バーべキューは予定時刻を前倒しにして午後六時前から始まつた。鉄板の上では緑黄色野菜や牛肉が所狭しと並べられ、威勢よく油が弾ける音と豪快な白煙がダブルで競演中だ。銘酒の一升瓶から啓一郎のコップに冷酒を注ぎつつ、雅治が尋ねる。

「啓さん、最近仕事のほうはどうなんだい？」

「うーん、僕の方は何も変わり映えしないなあ。景気もあまり関係ないしぃ。ま、役所勤めなんてそんなもんだよ」

雅治と啓一郎はまずビールを一缶空けた後、今は日本酒を酌み交わしながらお互いの仕事の話に夢中だ。千鶴と麻知子はそれぞれ別ルートで仕入れた近所の噂話に花を咲かせている。

「桃乃、お前全然肉食つてないじゃん。ほら」

桃乃の紙皿の中の内容物が野菜ばかりなことに気付いた冬馬が牛肉を放りこむ。

「あ、ありがと」

周りにお互いの家族がいるせいで桃乃の態度はぎこちない。

「冬馬兄ちゃん、お姉ちゃんがお肉食べないのってダイエットしてるからだよ」

この場に行人がないのでビニンぐまちらなそうな葉月が横から口を出す。

「桃乃、お前そんなことしてんの？」

「ち、違うつたら。ちょっと食べる量をセーブしてるだけ」

その返事を聞いた冬馬は眉間に大きく皺を寄せた。

「つたぐ、しょうがねえな……」

といつや畳や鉄板の上にあつた牛肉をすべて取り、それを桃乃の皿の中に勝手に全投入した。

「ちよつ、ちよつとこんなこいつないばー。」

「いいから食え」

「なんで勝手に仕切るの?」

「ダイエットする必要なんて全然ねえじやん。それ以上痩せられたら困る」

「ねえねえなんでお姉ちゃんが痩せたら冬馬兄ちゃんが困るの?」

「いー?」

葉月の鋭い質問に冬馬の箸が空中で一瞬止まる。

「……そ、それはだな……、やつ、痩せすぎは健康に良くない」と思うからさ。な、なあ桃乃!?

「わ、私に聞かないでよつ!」

そんな二人の様子をじつと葉月が食い入るように見つめる。

「なーんかおかしいなあ……」

「な、なにがよ?」

「なんかおかしいよ、二人とも」

「い、いいから葉月も肉食べろ!」

冬馬は場をこまかすように葉月の皿にも新しく焼けた肉を入れてやつた。まだ納得していない表情で箸を再び手に取った葉月はその肉を見た瞬間、文句を言つ。

「もう冬馬兄ちゃん! ホラ、この肉まだ生焼けだよー!」

「マジ! 悪イ悪イ!」

「もうお姉ちゃんの面倒ばかりみてるからだよつ。ちやんと新しいお肉で焼き直してよねつ」

「分かつた分かつた、責任持つて焼くから機嫌直せ」
冬馬は葉月のために鉄板に新しい肉を置いてやる。そして「桃乃、
それ全部食えよ?」と再度念を押した。

一時間半後、バーべキューが終了する。後片付けを終え、西脇家の面々が向かいの家に帰りはじめた。

「千鶴ちゃん、今田はお誘いありがとう。楽しかったわ」

「うん、じゃあいいや」

帰り間際、冬馬が「じゃな」と声をかけてくる。桃乃も「うん」と返事をし、遠慮がちに手を振った。

すると一旦は倉沢家の玄関先まで出でていた冬馬は急に踵を返し、急ぎ足で桃乃の側に戻つてくるとその耳元に口を寄せ、「……もうダイエットなんかすんなよ?」と囁く。冬馬の低い声が直接左の鼓膜に響いてきて、桃乃の胸がドキリと小さく波打つた。

「わ、分かつたわよ」

その返事を聞いた冬馬は満足げに「コッ」と笑うと再び「じゃーな!」と言つて啓一郎達と一緒に自宅に戻つていった。

心を落ち着かせるためにふうと息をつき開放したままの玄関扉から家の中に入ると、葉月が一階から自分を呼ぶ声が聞こえてくる。

「お姉ちゃん、ちょっとあたしの部屋に来てーー。」

「どうしたの葉月ー?」

桃乃はそのまま一階の葉月の部屋に向かつたが、室内を見て驚く。

「どうしたのこれ?」

なんとフローリングの床一面にビッシリと葉月の服が並べてあったのだ。

「明日あたし袴人兄ちゃんといつてじゃない? 明日はどの服にしたらしいと思う?..」

「あー……そういうわけね……」

呆れつつも真剣な妹のために桃乃は明日の服を一緒に選んでやつた。ようやく着ていく服が決まり、床に座り込んでいた葉月が嬉しそうに立ち上がる。

「よし！ これで明日のコーディネートは完璧！ ありがとね、お姉ちゃん！」

「いえいえ、どういたしまして。明日はいい天気みたいだからきっと楽しいドライブになるんじゃない？」

「行人兄ちゃんとなら何をしたって楽しいんだけどね！ あ、そうだ、ねえお姉ちゃん、それよりちょっと聞いてもいい？」

「なに？」

「やつぱりダイエットって男の人は喜ばないのかな？ 冬馬兄ちゃんさつきちょっと怒つてなかつた？」

「あ、ああ？ 冬馬は女の子の気持ちなんて分かんないのよ、きっと」

「でもさ、お姉ちゃんのこと心配して怒つてた感じがしたんだけど」

「そっ、そっ？ 葉月の気のせいじゃない？」

「そうかなあ……」

恋愛事に関しては異常に勘の鋭い葉月の追及をかわすために桃乃是話題を逸らす。

「葉月、お風呂入るでしょ？ 先に入つた方がいいんじゃない？」

「うんつ先に入るー！ あたし今日早く寝なきやいけないもんつ。

明日に備えなくっちゃ！」

葉月はそう叫ぶと元気良く部屋を飛び出して行つた。その姿を見送り、葉月の部屋を出て自室に戻るとベッドに腰をかけ、そつと自分の唇に人差し指を当ててみる。つい数時間前にこの場所で冬馬にされたように。

元々幼馴染で気心も知れているとはいえ、昨日冬馬からの告白をOKしてからはまるで水門を開け放つた直後のように冬馬は一気に

心の中に入り込んできている。

自分の中の冬馬への想いが、昨日よりも確実に、そして急速に大きくなっていることに、桃乃はほんの少しだけ動搖していた。

「たつだいま～つと！」

今夜のバーべキューを欠席した衍人は今日も新車生活をたっぷりと満喫して上機嫌で帰ってきた。

「衍人！ もう十一時過ぎてるのよ！ 家の前で空ぶかしは止めなさい！」近所迷惑でしょ！

寝ようとしていた麻知子が玄関に出てきて衍人を叱る。

「あ、ああ。分かったよ、母さん」

「まつたく夜遊びばっかりして……」

ブツブツ文句を言う麻知子を背に、衍人はさりげなく一階へ避難した。

階段を昇り終えて自分の部屋に入ろうとする、反対側の部屋のドアが小さく開き、その隙間から冬馬が顔を出す。

「兄貴。話しがあるんだけどいいか？」

「話しつ！？ なつ、なにかなあ！？」

冬馬の気持ちや裏話の数々を桃乃に喋つたことがバレたと勘違いした衍人が大きく一步後ずさる。

「いいから来てくれよ」

しつこく促され衍人は仕方なく冬馬の部屋に入った。

(ああどうかぶん殴られませんように……)

何事にも平和主義な衍人がそう願いながら恐る恐る部屋に入ると、冬馬は素早くドアを閉めて勉強机の椅子にドカリと座った。

「な、兄貴。俺、ネックレス買いたいんだけどさ、どっかいい店教えてくんない?」

「ネックレス?」

「ああ。俺そーいうのよく知らないからわ」

「どうすんだよ、そんなもの買って?」

「あげんだよ」

衍人の勘が即座にピン、と働く。

「もしかして桃乃ちゃんにか!?」

冬馬はちょっと照れたよう」「ああ」と頷いた。同時に衍人は困惑した顔になる。

「おいおい冬馬、いきなりプレゼント攻撃か……。いや確かにその手の攻撃が思い切り通用する女の子もいるよ? でも桃乃ちゃんはどうかなあ……。俺はむしろ逆効果で引いてしまうような気がするんだけどなあ」

「なんで桃乃が引くんだよ」

「だつてさ、いきなりそんなのあげたって桃乃ちゃん驚くだろ?」

「だから驚かせたくてやるんだよ」

「いやだからさ、その前に物事には順序があるだろ? いきなりプレゼントなんかしないでさ、ちゃんと自分の気持ちとか、そういう

のを伝える方が先だと俺は思つよ?」

すると冬馬は頭の後ろで手を組み、余裕混じりの表情を浮かべる。

「俺、伝えたぜ?」

「伝えた? 桃乃ちゃんに?」

「ああ」

「で、で、OKだつたわけ?」

「OKじゃなかつたらプレゼントなんかするかよ」

「あ、そつか! うなのが…… うかうか…… 」

すべてを理解した衍人は納得の表情で一度頷くと、冬馬の肩に片手を置く。

「よかつたなあ、冬馬!」

「サンキュー」

「今日だけ特別だ! お祝いに一本どうだ?」

衍人はジャケットのポケットから煙草を取り出し、冬馬に勧めた。

「いや、いい。もう煙草は止めたんだ

「へえ変われば変わるもんだなあ……」

衍人は煙草を再びポケットに戻しながらしみじみと弟の変化を囁み締める。

「じゃあ俺の知ってる店、幾つか教えるよ。とにかく冬馬、お前、金の方は大丈夫なのか?」

「ああ。俺バイトしようと思つてんだ」

「なんだ金無いのか? なら俺が貸してやるよ」

「いや、いい。手持ちの金は多少あるんだ。でもそれって親に貰つた小遣いだろ? それじゃあ意味ないんだよ。自分で稼いだ金でいいに貰つてやりたいんだ」

冬馬は今日書店で買った雑誌に目をやつた。

その雑誌の表紙にはアルバイト情報誌の大きなポップ調のロゴが踊っている。

「なるほどね。感心な心がけだな。それに自分でバイトした金でプレゼント買ったこと伝えたらきっと桃乃ちゃん、すごく感激するだろうな」

「あいつにそんな事わざわざ言つかよ。俺の気が済まないからそうするだけで、んな事いぢり言つてプレゼントなんかやつたら滅茶苦茶カッ」「悪いし、すげえ押し付けがましいじやん」「

「そりゃ、桃乃ちゃんにはバイトのことを黙つてか……偉いッ！」

「でも冬馬、カノンってバイト関係はつるさくないのか？」

「実は届け出が必要なんだ。そんでもちゃんとした理由ないとなんだかんだと色々うるせえらしいんだよな……。だから黙つてやつちまおうと思つてる。どうせ短期間のバイトだし、たぶんバレねえだろ」

「お前が大学生だつたら家庭教師のバイトの口を色々紹介してやれるんだけどなあ」

「いや、どっちにしても家庭教師なんて普通長期間だろ？」「一、三

日だけなんてムリじやん」

「まあなー。じゃあ冬馬、短期間でそこそこ金が入つてくるつてバイトつて言つたらさ……」

「肉体労働しかないんじやねえの？」

「なんか勿体ないよな。お前せつかく頭いいのになあ」

「ま、でも俺基本的に体動かすの好きだからそれはいいんだ」

冬馬はアルバイト情報誌を手に取るとパラパラと中を見る。

「五日までになんとか金貯めて買いに行かないとな……」「

「あれ、五日つて桃乃ちゃんの誕生日だつたっけ？ ちゃんと桃乃

ちゃんの予定押さえといったか？」「

「その辺は抜かりねえよ」

「お前にしてはやるじゃん！」

兄弟はお互いの顔を見てニヤツと笑う。

「そういえば兄貴、明日葉月とドライブに行くんだって？」

「ああ そうだった！ うつかり忘れるところだったよ。それで明日の午前の予定入れてなかつたんだ。助かったよ冬馬。すっぽかしたら葉月ちゃん激怒しちゃうからな」

「葉月、すっげー楽しみにしてたぜ。今日のバーベキューも兄貴来ないからつまんなそうだったしな」

「ハハッ、モテる男のつらさ、お前には分かんないだろうなあ。なにせ年齢問わず、色んな女性に好かれちゃうもんでね」

「別に分かんなくともいいぜ、そんなもん」

「お前は昔つから桃乃ちゃん一筋だもんなあ。でも上手くいって本当によかつたよ」

「それと兄貴、俺がバイトする」とは桃乃には絶対言わないでくれよ？」「

「分かってますって！ ジャおやすみ」

自室に戻った衍人は、着ていたジャケットを脱いでクリーニングブラシで丁寧に埃を払つた後、クローゼットの扉を開ける。

(冬馬が桃乃ちゃんから〇〇の返事貰えたのはたぶん俺の功績だな……。ま、アイツが喜んでるところに水を差すのもなんだし、今回は裏方に徹しておいてやるか)

クローゼットにジャケットを片付けながら衍人はそう決める。

襟元のボタンを外しながらローテーブルの上に目をやると、今朝持つて行くのを忘れた煙草が、封も開けられず手付かずの状態で置かれてあつた。

術人はその新品の煙草に優しい眼差しを向けるとフツと微笑を浮かべ、「俺も負けてられませんね」と陽気に呟いた。

嵐の予兆

バーべーキューの夜から一日経ち、またカノンの一週間が始まった。

冬馬はいつも通りバスケ部の朝練に汗を流し、桃乃と沙羅はこの日の朝、テニス部に入部することを決める。今週の後半からゴールデンウィークになるとあって、カノンの学生達もどこか浮き足だつ一週間の始まりだつた。

理事長の黒岩は毎朝七時きつかりに理事長室へ姿を現す。

この日も黒岩は定刻通りに中央塔三階の理事長室の扉を開けた。しかし開けた瞬間、普段は滅多に表情を変えない黒岩の眉が訝しげに動く。中の人があいたのだ。

「そこ」で何をされているのですか……？」

逆光でその人物の顔がよく見えない。

黒岩の声でオフィステスクの前に立つていたその人物が振り返る。

「……矢貫先生でしたか」

理事長室の中にいたのはスーツを着た誠吾だつた。

「お話をあつて来ました」

いつもは遅刻魔と呼ばれているこの男がこんな朝早くに真剣な表情で現れたのを見て、黒岩は誠吾が何の用件で来たのかを瞬時に察した。

「まあそこにおかけ下さい」

黒岩はデスク前にある応接セットのソファに座るように勧める。

「いえ、ここで結構です」

「そうですか……」

黒岩はゆっくりと自分の椅子に座り、デスクの上に両肘をついて手を組むと自分の前に立つ誠吾を見上げる。

「……お話とは先週の事故の件ですか？」

「はい」

「やはりですか。しかしこの件では矢貫先生とお話しても平行線のままだと先週申し上げたはずですが？」

「理事長、先週の定例会議を途中で退席したことは謝罪します。しかし、笛目の処分にはどうか恩情をかけてやつていただけませんか。お願ひ致します！」

誠吾は体を二つに折つて大きく頭を下げた。

予想通りの陳情に黒岩はゆっくりと大きな息を吐く。

「……矢貫先生、一つだけお分かり頂きたいのですが、私もその流産した女生徒には憐憫の情を催しております。しかし、学園に規律がある以上、そしてその規律に従つている多くの生徒達がいる以上、規律を乱す生徒に処分を下すのは理事長としての私の役目なのです」

「理事長の仰ることは俺にもよく分かります。ですが、笛目のまま外へ放り出す事に俺は納得できないんです！」

「矢貫先生……、あなたはなぜそこまでその笛目という女生徒のために必死になるのですか？『ご自分の担当クラスの生徒だからですか？それとも受け持つていた授業中の事故だからですか？』

黒岩はここで一息言葉を切つた後、静かに核心に触れる。

「……あるいは一年前のこととまだ引きずつていらっしゃるからですか……？」

誠吾の顔色が変わった。

青ざめたその顔色を見て黒岩はまた大きく息を吐いた。

「……矢貫先生、私はあの当時も申し上げたはずです。あれは矢貫先生のせいではありません。先生が笹田といつ女生徒をここまで庇うのは、あなたが勝手にお持ちになっている罪悪感を、この女生徒を助けることで少しでも軽くしようと思い込んでおられるからではないですか？」

誠吾はガックリと肩を落とした。

室内にしばしの間、静寂が訪れる。

やがて誠吾は弱々しい声で黒岩の発言を認めた。

「…………そうですね。その通りです。」

「矢貫先生、処分に私情を入れることは相成りません。私は私の信念に基づいてその女生徒の処遇を決定したいと思います。」

黒岩のその宣告を聞いた誠吾は打ちひしがれた顔でスーツの内ポケットから一通の封書を取り出した。

封書の表書きを見た黒岩が怪訝な顔で眉をひそめる。

「…………理事長、確かに理事長の仰る通り、俺は笹田を助けること自身の中にヘドロのように溜まっているあの時の罪悪感を少しでも減らしたかったかも知れません……」

封書を手にしたまま、誠吾は低い声で今の気持ちを吐露する。

「…………ですが、俺は一昨日笹田の見舞いに行つた時、あいつが泣きじゃくりながら迷惑をかけてごめんなさい、と俺に謝った震える背中や、笹田の母親が、どうか退学させないで欲しいと必死にすがつてくる姿を見て俺は決心したんです。絶対に笹田を退学処分にはさ

せない、と

誠吾は自らの手で「辞職願」と書いた封書を黒岩の前に静かに置いていた。

「そしてそれが出来なければ俺はここを辞めよう、とその時決めたんです。……理事長、ここに赴任したばかりの頃、理事長には随分と「迷惑をかけて申し訳ありませんでした。そして俺は柳川先生にも迷惑をかけっぱなしでした」

誠吾は一步後ろに下ると黒岩に向かつてもう一度深く一礼をした。

「黒岩理事長、今までお世話になりました」

そして誠吾は失礼します、と言つと静かに理事長室を出ていった。

残された黒岩はたつた今誠吾が置いていった辞表を手に取った。そして眼鏡を外すとそれをデスクの上に置き、長々と深い息を吐いた。

その日の昼休み、桃乃は沙羅からチクチクと責められていた。

「ああ、あたし、モモとは親友になれたと思つてたのになあ……。親友に彼氏のこと教えないなんてありえないよ

「だ、だってあの時はまだ彼じやなかつたもん……」

「それは金曜に電話で聞いたけどさ、じやあなんで今まで全然冬馬

のことを教えてくれなかつたの？」

「だ、だつてそれまではただの幼馴染だつたわけだし……」

「あたし前にモモに聞いたよね？『男子校舎に知り合いはいる？』つて。そしたらモモ、『いないよ』つて言ってたじやないのよ～！」

「そ、それはね、わざわざ『いつ』とでもないかな、と思つて……」

「ホラ～！ そこが親友じやないつてことなのよ～！」

「分かつたから、これからはちゃんと『いつから』……ね？」

桃乃がそう言つた途端、沙羅は「ヤツター！」と大声を出しながら手を合わせて喜び、桃乃の側にズイ、と顔を寄せる。

「モモのその言葉を待つてたのよ！ ジャ早速教えてちょーだい！ ねえねえ、三日前の金曜の夜、冬馬はなんて告白してきたの？」

「えつ！ そ、それは言えないよ沙羅……」

「あつズルーライ！ だつて今『これからはちゃんと『いつ』って言つたじやないの』

「で、でも、そういうのつて自分の心の中だけに仕舞つておきたいもん……」

沙羅はふーん、と言つと口を尖らせて腕組みをした。

「うーん、まあその気持ちも分からぬいてもないけど…………、ううん、やつぱり分からぬ！ だつてさ、もしあたしが要から告白されたら喜んで全部モモに話すと思うもん！」

「ねえ沙羅、本当にあの人のこと好きになつちやつたの？」

沙羅は元気一杯で「うん！」と返事をする。

「実は要が最初モモと喋つてるの見た時はなんかお調子者っぽくてあまり好きじやなかつたんだ。でもね、その後あたしと一緒に帰つてる間、ずーつと愛想悪かつたの。そんな要の素の部分見たら急に興味湧いてきちゃつたんだよね」

「沙羅つて愛想悪い人がタイプなの？」

「ううん、そーじゃなくて、なんて言つたらいいのかなあ……。要つてさ、きつと寂しがり屋だと思うんだよね。でもそれを何とか隠そうとしてわざと強がつたりしてゐる。そこが可愛いなあ、と思つたわけね」

「そ、そつ……」

桃乃は箸で鳥唐揚げをつかんだまま呆気に取られて沙羅の話しきを聞いていた。

「でも困つたよね、モモ」

「えつ何が?」

「だつてさ、モモの彼氏の冬馬と、あたしの好きな要つてなんだかすつしよく仲悪そうじやない?」

「あー」

桃乃は思わず叫んだ。その拍子に鳥唐揚げが弁当箱の中に落下する。

「どしたのモモ?」

「そういうえば冬馬言つてたの。今週中にあの柴門つて人に話しきをつけに行くつて……」

「エエツー? それ危険だよモモー!」

「沙羅もやつぱりそう思う…………?」

「思つ思つー モモ、なんとかしなきやー!」

「うん。今日の夜、冬馬にもう一度話して止めてもうつとうつに言つわ

「

「そのほうがいいよ! もし先生にケンカしてゐ所なんか見つかつたら停学は絶対に間違いないもん!」

しかし一人が冬馬と要の身を案じて話しかけている頃、すでに冬馬はそれを実行に移していた。

昼休みに入り、また机の上に足を投げ出して座つてゐる要の前に冬馬が無言で近寄る。

「なんだよ」

三日前に思ひきつい面子を潰された要が下から冬馬を睨みつける。

「今日の放課後、屋上に来い」

冬馬はそういう捨てると教室の外へと一人出ていってしまった。

吐き捨てたルサンチマン

毎日寒いくらいに感じている職員室内が、今日はなぜか暑く感じる。備え付けのエアコンの温度はいつもと同じ二十一に設定してあるのにだ。

いつもなら左隣の暑がり教師がバサバサと縁の髪型まで乱れるくらいの勢いで、団扇を扇いで風を送つてくるのに今日は朝からこの席は空っぽのままだ。

縁は嫌な予感がしていた。

先週の金曜日、定例会議を途中退席してしまった誠吾。
そして今朝の欠勤。

珍しく黒岩が朝に職員室に現れ、「矢貫先生は本日急用でお休みします。今日の一年体育は申し訳ありませんが高崎先生にお願い致します」と一年体育担当の教師に依頼していたのが気にかかっていた。

今日の授業をすべて終えた縁は職員室でしばらく考え方をしていたが、その間にも他の教師が一人帰宅し、二人帰宅し、いつのまにか誰もいなくなる。

一人になった縁は席を立ち、窓際に寄ると燃えるような夕日を眺めた。

中央塔の職員室からは男子校舎、女子校舎、両方の建物が共によく見える。もうどちらの校舎の教室にも生徒の姿は見かけられない。部活動に所属している生徒はすでに部活に行き、帰宅部の生徒はとつぶに下校したのだろう。

「あら……？」

縁は男子校舎の方を見て呟く。

男子校舎の屋上に人影を見たような気がしたのだ。

胸ポケットから携帯用の眼鏡を出し、それをかけてもう一度屋上方を見てみた。眼鏡をかけたため一気にクリアになつた視界の中に一人の男子生徒の人影を確認する。

(一体あんな所で何をやつて居るのかしら?..)

縁は教師の顔に戻ると靴音を鳴らしながら職員室を出て急いで男子校舎へと向かつた。

「やつと他の奴らもいなくなつたな。……で、話しつてなんだよ。」「こじケンカつていう話なら願つたり叶つたりなんだがな」

誰もいなくなつた屋上で要は片手を田の前に出し、わざと大きな音で指の関節を鳴らしてみせた。しかしそんな要の挑発にも冬馬はまつたくひるむことなく淡々と言つ。

「もう桃乃に近づくな。用件はそれだけだ」

「またそれか。この間も言つただろ? お前に描図される」とじゅねえよ」

「ところが状況が変わつてな」

冬馬はスラックスのポケットに片手を突っ込んで胸を反らし、勝

ち誇つたよつて囁つ。

「桃乃は今は俺の彼女だ。だから手を出さうとしたら絶対許せねえからな。覚えとけよ」

「お前告つたのかよ！？」

「ああ。OKの返事貰つた」

要の目が急にギラギラとした光を帯び出す。

「……どうしてお前ばかりが……！」

しかし要はその先の言葉を飲みこみ、クックッと声を抑えて笑いだした。

「へえ～、あの子お前と付き合つてしたのか！　じゃあ、計画変更するまでだ。今度またあの子を待ち伏せて捕まえて、そんで無理矢理ヤツちまつなんてどうだ？　なかなかスリリングな展開だろ？」

何とか冷静を保つていた冬馬の顔つきが、二日前のあの時と同じように再び変わる。

「……お前それマジで言つてるのか……！？」

「お、やるか？　俺は構わないぜ、お前が大怪我するだけだしな」

屋上でお互い一触即発の臨戦体制になつた時、屋上扉が開いた。

「あら、あなた達だつたの」

「先生！」

緑がいきなり現れたので冬馬と要が驚いて叫ぶ。

「こんな遅くにこんな所で何やつてるの？」

「いえ、別に……」

まさに今殴り合つたところでした、とは間違つても言えるわけもない

い一人は、それぞれあらぬ方向に顔を向けてそう呟く。

「さああなた達、いつまでもこんなところにたむろってないで帰りなさい。あらそつてえれば西脇くんは部活動に入つてたんじやなかつた？」

「……ハイ」

「行かなくていいの？」

「今行こうと思つていたんです」

冬馬は渋々とそう言つた。しかし本当のところは要と話をつける

ために今日は部活を休んでいたのだ。

「さあ、柴門くんもここから降りなさいね。部活動以外で残つているのはもうあなたぐらうよ？」

「あそこにも誰かいりますよ、先生？」

要は屋上の手摺に寄り掛かりながら男子校舎のグラウンドを指差す。

「えつ？」

縁は手摺に近寄ると要の指差す方向に目をやる。

今日の陸上部と野球部の外練習は終わつたようで、もう男子グラウンドは暗くなつていた。

そのすでに誰もいないグラウンドに一人の人間が立つていて、いくつかの照明がそのシルエットをぼんやりと浮かび上がらせている。かなり遠目だったが、その人影を見た縁は思わずあつと小さく声を出していた。

(矢貫先生だわ……！)

縁は身を翻すと小走りで階段へ向かい、勢いよく扉を開ける。

「あなた達、私は用事があるから先に行くけどすぐここから降りる

のよ？ いいわね？

二人の返事も聞かずに縁は階下へと駆け出して行ってしまった。

「……運のいいヤツだな、お前」

要が憎々しげに言つ。

「どういう意味だよ」

「柳川に俺ら一緒の所見られちまつたんだぜ？ これで明日にでもお前がボコボコの面で来てみろよ、犯人が俺だつてすぐに分かちまうじやねえか」

「犯人はお前じゃなくて俺が、の間違いだろ？」

縁が現れたことによつて冷静さを取り戻した冬馬が冷たく切り返す。

「なんだと……！」

「なあ柴門、お前俺になんの恨みがあるのか知らないけどよ、それに桃乃は何も関係ないだろ？ あいつに手を出すのはだけは止めてくれ。卑怯な真似は止めて俺に直接ぶつければいいだろ？ が」「……しかしお前は昔からいけすかないヤツだぜ。いつもやつやつてヒーローぶりやがつて……」

「柴門。俺、あれから当時の七海中のことを色々思い出してみた。だけどどつしてもお前のことを思い出せない。お前、俺にどんな恨みがあるんだ？」

しばらぐ要は黙つていたがやがてボソリと呟く。

「…………椎名杏子（しになきょう）って覚えてるか…………？」

「椎名？」

冬馬はその名前を頭の中に浮かべる。

「…………ああ、思い出した。七海の生徒会長だった人だろ？」

以前、白杜中バスケ部が七海中に親善試合に行つた時、当時三年

でキヤプテンだった冬馬に一度挨拶にきたのが七海中で初の女性生徒会長を務めた杏子だった。その物静かでとても大人びた雰囲気で自分と同じ年には見えないと当時の冬馬は思っていた女生徒だ。

「……西脇、椎名がお前のこと好きだったの知つてたか？」

「俺、あの椎名って子とは一度しか顔合わせたこと無いぞ！？」

「一度会つただけでも好きになることなんかよくあるじゃねえか

「じゃあ椎名さんが恨みの原因なわけか」

要は悔しそうに顔を背ける。

「……俺が椎名に告つたらアイツ言つたんだ。 “ 私は白杜中学の西脇さんが好きなの ” ってな」

要の声は屈辱に滲んでいた。

そして冬馬の顔を見据え、今までずっと胸に溜めてきたものを続けて一気に吐き捨てる。

「それまで女なんて遊ぶためだけに引っ掛けた。でも椎名に出会つて俺は女つてモンに初めて本気で惚れたんだ。その本気で惚れた相手に振られた気持ちがお前に分かるか！？」

要の恨みの理由を知つた冬馬は呆れた口調で言つた。

「なんだよ、結局お前のハつ当たりなのかよ」

そう指摘され、要は声を荒げる。

「お前に分かるわけねえよ！ ちょっと目立つスポーツが得意だからって女にもてはやされていい気になつていたお前にはな！」

「別にいい気になんてなつてねえよ」

「カノンの合格発表で偶然お前の名前を見つけた時、俺は思った。絶対お前も俺と同じような目に遭わせてやるうつてな

「……それで桃乃に近づいたのか」

冬馬の顔が再び険しくなる。

「そう、そんであの子を」

要是は再びニヤリと笑う。

「最初は正門でお前があの担任と話していたのを見た後、あっちの方かと思ってカマかけてみたがお前全然ノッてこなかつたな。だけどあの子のことをちょっとと言つただけでお前の目の色が変わつたのを見て、あの子がお前の弱点だつてことが分かつた」

「……しつかし情けねえヤツだなお前つて」

「どういう意味だ！？」

「だつてそうだらうが」

冬馬はイライラした態度を露にしながら、もう片手の手も乱暴にポケットに突っ込む。

「そんなに惚れきつた女ならなんで一度振られたぐらいであつたり諦めてんだよ？ こんなウジウジ下らねえことをやつてるヒマがあつたらもう一度告つてみればいいじゃねえか。俺ならそうするぜ？」

結局ただの腰抜けだよな、お前つて」

腰抜け、と呼ばれて要はギリギリと歯噛みする。

「悔しいか？ お望みなら何度でも言つてやるぜ、お前はただの腑抜けなんだよ」

そう言つと冬馬はその大きな手で要を指差した。

「いいか、桃乃には絶対近づくな！ 今度近づいたらぶつ飛ばすからな！」

そして冬馬はクルリと背を向けると乱暴に扉を開けて校舎に戻つていった。

「畜生……つー！」

誰もいなくなつた屋上で要是は手摺を思いきり蹴飛ばした。手摺が

どこか哀しげにわななく音が屋上にむなしく響く。

要はやがて静かになつた手摺に背中をもたせかけ、

「……カツコ悪いな、俺……」

とやるせなさそうに呟くと、一刻一刻と暗さを増してきている夜空をゆうべつと見上げた。

それぞれの告白

間違いない、あのシリエットは絶対にそうだ、そう思いながら緑は階段を駆け下りる。

いつも好んで履いているヒールの高さが今は邪魔で恨めしい。

(もう生徒もほとんどいないし……)

思いきつて緑は校舎内用の靴を両方脱いで手に持ち、階段を一気に駆け下りた。

靴を履き替えて玄関を飛び出し、誠吾の姿が見える前にかけていた眼鏡を外して胸ポケットへ戻すとグラウンドへ急ぐ。息を切らせて辿り着くとグラウンドの中央で咥え煙草をしている誠吾の後ろ姿が見えた。

「矢貫先生！」

振り返った誠吾は緑を見て驚いた顔になる。

「…………柳川先生…………！」

「矢貫先生、今日はどうなされたんですか？」

「ハハ……、無断欠勤です」

「嘘言わないで！ 理事長が今朝あなたの授業の代わりを高崎先生に頼んでいたのよ？」

緑から顔を逸らすと、誠吾は「そうだったんですか」と呟き、再び紫煙を大きくくゆらす。

「矢貫先生、こんなところで一体何をなされてたんですか？」

「……」と最後の別れを惜しんでいたところですよ
縁の胸にまた嫌な予感が走る。

「そ、それどういう意味なんですか？」

「……俺、今朝理事長に辞表を出しました」

「……！」

的中した予感に縁は一瞬言葉を無くした。

「ど、どうして？なぜ今カノンを辞めるんですか！？」

「先週の事故の責任を取ります」

「う、受け持ちの生徒の一人が退学になるからって、どうして矢貫先生まで辞めなくちゃいけないんですか！？あなたの受け持つクラスはまだ他に何人も生徒がいるのよ！？その子達を放り出して身勝手だとは思わないんですか！」

誠吾は力無く笑いながら縁の方を見た。

「……いつも痛いところを突きますよね、あなたは」

誠吾はため息と共にフウッと大きく煙を吐く。

「たとえ俺がいなくなつても新しい先生が来れば、残つた生徒達は何も変わりなく学園生活を送ることができます。でも笹田は俺が助けてやらなきゃ他に誰も頼る奴がないんですね」

「でつ、ですが、なぜあなたが辞めることになるの！？」

「……でも結局俺は笹田を助けられなかつた……。柳川先生、俺は決めてたんです。笹田の退学が覆らないのなら俺はここを辞めようと」

「そ、そんな……。黒岩理事長は辞表を受け取ったのですか！？」

「ええ。その時理事長に言われましたよ。俺が笹田を必死に庇うのは俺が勝手に持つている過去の罪悪感を、笹田を助けることで軽くしようと思いつ込んでいたからだと

それを聞いた縁はハツとし、かすれた声で言つた。

「……それはあの時二年五組だった織田志穂さんのことね……？」

誠吾は小さく頷いた。

「そうです」

「矢貫先生……」

縁はなぜか悲痛な表情で俯く。

「……わ、私、今まで噂でしか聞いていませんでしたが、先生の口から本当のことを探つていただけますか……？」

視界の端に誠吾がまた頷くのが見えた。

縁は振り絞るように声を出す。

なぜかその体は小さく震えはじめていた。

「……に、妊娠した織田さんが、病院に出した墮胎手続きの用紙に……、その用紙の胎児の父親欄に……、や、矢貫先生のサインがあつたところは本当なのですか……？」

誠吾は指に煙草を挟んだまま、俯く縁の姿をじばりぐる間じつと見つめ、静かに言つた。

「……本当です」

それを聞いた緑の両田から一気に涙が溢ってきた。

どうしても赤いボタンが押せなかつた。

何度も何度も親指はそのC a l l ボタンに触れているのに。

男子校舎の屋上で一人携帯電話を握り締めながら、要は押せないボタンを見つめていた。

青く光る液晶ディスプレイには「シイナ キョウ」と表示されている。

(……これじゃあ西脇が言つたように俺は本当の腰抜けじゃねえか
……)

冬馬に指を差されて「ただの腰抜けだ」と言われた悔しさが胸に甦る。

何度もかのチャレンジでやつと要はC a l l ボタンを押した。

慌てて片耳に携帯を当てる。

六回目の「ホール音の後づき」という音がし、「はい」という物腰の柔らかそうな女性の声が聞こえてきた。

「し、椎名か？」

「……え？ もしかして柴門くん？」

「そ、そうだ。久しぶりだな」

「本当に久しぶりね。柴門くんって私の携帯の番号知っていたから？」

「あ、ああ。ほら、椎名が生徒会の時、緊急で連絡取ることがあるかも知れないから俺の携帯番号教えてくれって言つたじゃないか。その時椎名の番号も教えてもらつたんだよ。まだこの番号生きてて良かったぜ」

携帯の向こう側からクスクスと笑う声が聞こえてくる。

「やついえばショッちゅうになくなる副会長だったものね、柴門くんは」

「まあな……」

立つてこると緊張がとれないので要は屋上のコンクリートの上に座りこんだ。

「今話しても大丈夫か？」

「ええ、大丈夫よ」

「……元気そうだな椎名」

「ええ柴門くんも。柴門くんカノンだったわよね。どう？ 学園生活は？」

「まあぼちぼちとやつてるよ。椎名は華丘女子に行つたんだよな」はなか

「ええ。中学の時と違つて女子高だから雰囲気が全然違つて面白いわよ」

「そつか……」

「なにか私に用があつたのかしら？」

要は「ぐつと睡を飲み込む。これから告げる事実を聞いた杏子の反応がどうなるのか知りたかった。

「し、椎名。俺、あの西脇冬馬と同じクラスなんだぜ?」「

「えつ西脇くんってあの白杜中学の?」

「ああ。椎名、お前西脇のこと好きだったもんな」

「え、西脇くんのこと?」

「言つてたじやないか、昔俺に」

「あつ……」

携帯の向こう側はなぜか困った声になり、少しの間沈黙した。

「どうした椎名?」

「あのね、柴門くん……。『めんなさい』、それ嘘なの」

「ハアツー?」

思つても見ないそのままの言葉に要は思わず携帯を持ったまま大声を出す。

「実はね、あの当時断つても断つても付き合つてくれつていう同級生が数人いて、あんまりしつこいから西脇くんのことが好きだから、つてきつぱり断つたの。そしたら皆すんなり諦めてくれて……。西脇くんとは中学が違うし、たくさん女の子に人気があったから私が好きつて言つても迷惑はかかるないと思つたのよね……」

「それマジかよ……」

「それ以来、交際申し込まれてお断りする時の常套句になつちやつてたのよ。ね、柴門くん、まさか西脇くんに私が好きだったなんて言つたわけじゃないでしょ?」

「ううん、言つてねえよ」

要は咄嗟に嘘をついた。

「良かった。ならいいんだけど……」

安心したような声が要の耳に響く。

そしてこの時要は一つの決心をした。

「……椎名、頼みがあるんだ」

「なに？」

「これから俺の言つことをしばらく黙つて聞いてくれるか？」

「いいけど……なにかしら？」

「頼むから俺が話し終えるまで何も言わないでそのまま黙つて聞いててくれ」

要はそこまで言つと一度スウ、と大きく息を吸つてから話し出した。

「俺……お前のことが本気で好きだつた」

「……！」
「昔、俺が先生方から成り手のいない副会長に推薦されちまつた時、俺は最初絶対に断るつもりだつた。会長ならまだ受けれる氣も多少はあつたがなにせその会長が女だつていうんだからな」

「……」

「冗談じゃねえ、つて思つた。内申書が上がるのは確かにちよいと魅力だつたけど女の下になんかつけるかよ、つて反発した。だけど結局無理矢理やらされることになつちました」

「……」

携帯の向こう側は言われた通りに沈黙している。
しかしあまりにも静かなのでちゃんと聞いていてくれているのだ

るうかとこう不安を胸に、要是自分の気持ちを包み隠さず語り続けた。

「でもな、椎名と一緒に生徒会を運営していく内に俺の中でお前に対する見方が変わった。お前はいつも凛として、しつかりしていて、そんでも誰にでも公平で、しかも先のことまできちんと見ることのできるヤツだった。俺はそれまで女なんて皆、ただキャーキャー馬鹿みたいに騒ぐしか能の無い、頭の空っぽな生き物だと思つていた。そんな偏見を取つ払つてくれたのが椎名、お前なんだ」

「…………」
「……まにか椎名を好きになつていて。だけど俺はそれまで遊びでしか女に声かけたことがなかつたから、どうやってお前にこの気持ちを伝えたらいいのか分からなかつた」

一気呵成まで喋つた要是フウ、と息継ぎをする。

「…………やつと一大決心をしてあの時お前に告白した。でも照れがあつた俺はわざと軽い感じを装つて告白しちつた。“ なあ良かつたら俺と付き合えよ、椎名？” ってな」

「…………」

「お前の返事は “ 白杜中の西脇くんが好きなの ” だった。
俺、すげえショックだった」

「…………」

「ショックでお前のこと忘れようとした。でも忘れられなかつた……。椎名、俺は今でもお前が好きだ。今日携帯に電話したのは真面田じお前に告白しようつと思つたからなんだ」

「…………」

「椎名、返事を聞かせてくれ。今度は嘘をつかないでお前の正直な気持ちで」

携帯の向こう側はまだ沈黙していた。

要は携帯を耳に押し当ててじっとその返事を待つ。

「…………あいがどい…………」

囁くような声だった。

「柴門くんが私のことをそんなに想つていてくれていたなんて全然知らなかつた……。柴門くんは色んな女の子と付き合つていたみたいだつたし、あの時も気軽に声をかけてきただけだと思つてたわ」

「あの当時の俺を見てたらそういう思ひのも無理ねえよな…………」

「柴門くん、あなたは今まで女性に持つていていた偏見を無くすことができたのは私のおかげだ、って言つてくれたけど私の方こそ柴門くんに今教えられたような気がするわ」

「俺が？」

「ええ。私、柴門くんは頭も良くてなんでもできる人だと思つてたけど、同時に柴門くんの毎日の態度を見つけていて軽薄な人だとも思つてた。私、そう決め付けてた。……でもね、今あなたからの真剣な告白を聞いて私あなたのことを見かけで勝手に判断していたことに気がついたの。だから私のほうこそ柴門くんにお礼を言わなくちゃ」

「おい、よしてくれよ。俺が軽薄だつたことは事実なんだからよ」「要は居心地悪そうな声を出す。

「…………でも」「めんなさい…………。あなたの気持ちに今は応えられない

わ……

「…………」

沈黙した要に、杏子は静かな声で自分の気持ちを語る。

「今氣になる人がいるの。もちろん西脇くんじゃないわよ。想いはまだ伝えてないけど、こいつが伝えられたらいいなと思つているわ」

「…………」

「…………ごめんなさい…………」

これがこいつの前で張る最後の虚勢だな、と思いながら要は携帯を握り直す。

「いや、椎名が謝ることなこぜ。そこのと上手くいけばいいな」「ありがとう…………。柴門くんからのこの電話で沢山の勇気を貰ったよつの気がするわ」

「俺の分まで頑張れよ、椎名」

「ありがとう柴門くん…………」

「じゃ……な

「ええ。ちなみに……本当にあつがとつ…………」

ゆっくりと通話ボタンを切り、携帯電話を手にしたままで、要は冷えた灰色のコンクリートの上に仰向けに寝転んだ。

「…………やつぱカツ「悪いな俺…………」

寂しそうな笑顔を浮かべ、光を失った携帯電話を田の上にかざしながら要は一人呟く。

屋上のコンクリートの上から見上げた灰色だつたはずの空は、いつのまにか完全な夜空になっていた。

「……本当に」

誠吾のその言葉を聞いた縁はグラウンドで立ち廻っていた。溢れ出る涙が俯く頬を次々に伝い、乾いた土へと幾つも落ちていぐ。

誠吾はスースのポケットからハンカチを出すと縁にそっと差し出した。縁はそれを受け取ったが、ただ受け取つただけで涙を拭おうとはしない。

織田志穂の事件は誠吾がカノンに赴任して半年後に起きたトラブルだった。

当時三年だつた志穂が妊娠三ヶ月目に入院としていることが発覚したのだ。

志穂は無論、学審会にかけられた。

しかし志穂は子供の名前を言つことを頑なに拒否し、学審会が退学処分を決定する前に自ら学園を去る道を選ぼうとした。そんな志穂の身を案じた誠吾は志穂に何度も説得に行き、裏ではなんとか退学にならないで済む方法は無いかと学内を駆け回った。

黒岩にも何度も直談判に出向き、その度に煙たがられた。

そのうち、誠吾のあまりにも熱心なその姿勢に、「もしかしたら織田志穂の子供の父親は矢貫先生ではないのか」という陰口が教職員の間で盛んに叩かれるよくなつた。

そんな中、カノンの教職員達に信じられないような噂が一気に広まる。

志穂が病院に行き、子供を堕ろしてしまったというのだ。
しかもその際、病院に提出した墮胎手続き用紙の胎児の父親欄に、矢貫誠吾のサインがあつたというのである。

緑は当時の噂を聞いて愕然とした。

なぜならそれまで緑は誠吾から様々なアプローチをされていたからだ。

その一番最初のアプローチは誠吾の歓迎会の席でのことだった。

「皆様！ 本日よりこのカノンでお世話になることになりました、矢貫誠吾です！ よろしくお願いしますっ！」

当時の緑の第一印象は「顔はまあまあだけど頭を使うことは少々苦手そうな、典型的な熱血単純タイプの体育教師」だった。
貸し切りの座敷で裏もたけなわの頃、アルコールが回ってからに陽気になつた誠吾が緑の前にドカッと腰を下ろし、緑の手をいきなり握りしめる。

「結婚してやれーー！」

手を握られいきなりのプロポーズに、緑は返事も出来ず狐につままれたような顔をした。

しかし赤ら顔の誠吾は構わずに突っ走る。

「あなたに一日惚れしました！ 結婚を前提にお付き合いくして下さい！」

それまでザワザワと賑やかだった宴が急に静かになつた。黒岩が険しい顔で「ひから」を見ていることに眞がついた縁は慌てて言ひ、「や、矢貫さん、あなたお酒入りすぎてるのね？」

「いいえ違います！ 酔っ払ってはいますが俺は真剣です！ あなたが好きになりました！」

縁は本気で慌て出した。

「や、矢貫さんはまだこちらに来たばかりで」「存知ないでしちゃうけど、Jの学園では職員同士の恋愛は禁止されているのよ？」

「職員同士の恋愛禁止？ ハツ、そんな下らない規則なんてクソくらえですよ！」

黒岩の眉が小刻みに痙攣し始めたのを見た数名の教師達が、手にしていた徳利や瓶ビールをかなぐり捨てて立ち上がり、さりげなく誠吾を縁の前から引き離して大事にならないようにツオローリする。「ま、ま、ま、矢貫さん、たあたあこちらにどうぞ、ひから！」

しかしその甲斐もなく、明くる日誠吾は赴任そうそう黒岩に呼び出され、理事長室で厳重戒告処分を受けてしまった過去があったのだ。

Jの処分を受けて以来、誠吾は縁に対してあからさまなアプロー

チをすることは無くなつた。

だが、時々学園内で一人きりになると氣をくに縁に話しかけたり、一緒に食事に行きましたと誘い続けた。

カノンの規則で禁じられている以上、縁はその誘いに応じる」とは無かつたが、軽いアプローチをされる度に決して悪い氣はしていなかつた。

いつしか縁も誠吾のことが本氣で氣になり始めたそんな頃、この織田志穂の事件が起つたのである。

「……いやはや、これでなぜあんなに矢貫先生が必死になつていていたかが分かりましたな」

「しかし仮にも生徒に手を出すとはなんてことをしでかしたんでしょうな、矢貫先生は……」

「これでもう矢貫先生のクビは確実ですね」

職員達が噂する誠吾の誹謗中傷の数々は、どんなに縁が必死に耳を塞いでも容赦無く、そして呑ききる事無く入りこんできた。

結局、志穂が墮胎したという噂は偽り無い事実と判明し、志穂は自主退学という扱いになり、なぜか誠吾はカノンをクビにならずそのまま学園に残つた。

そして縁はその時から変わってしまった。

もう誰も信じられなかつた。

学園内で笑うこともほとんど無くなつた。

その日から誠吾の前ではいつも田には見えない鉄のバリケードを張り続け、誠吾が話しかけてきても冷たくあしらひようになつた。やがて学園内で付き合つている生徒達を厳しく取り締まるようになり、代償として“破壊魔”といつ影の蔑称がその背中につく。

つい数週間前に中央塔の屋上で誠吾から本氣で告白された時も、緑はその告白を“あなたを信じられない”とこう言葉で思いきり跳ねつけた。

しかしそこまで全身で拒絶しているくせに、誠吾が苦境に立たされる場面に遭遇する度につい助けてしまわざにはいられなかつた。

緑はそんな自分が嫌で仕方が無かつた。

それはその度に自分はまだ誠吾のことを好きなのだとこうとこ氣付かされてしまふからだつた。

「……それ、使ってくれませんか

誠吾の静かな声が聞こえる。

しかし緑はまるで石になつたようにその場に立ち竦むばかりだつた。

誠吾は吸つていた煙草を携帯灰皿に押し込むと緑の手からハンカチを取り、そつと涙を拭いてやつた。しかし拭つても拭つても緑の

涙は溢れ出でくる。

「……柳川先生、最後に俺の話を聞いてくれますか？ 多分、ただの言い訳になるとは思います。でも最後にすべてをあなたに話してから俺は行こうと思います」

縁は目を伏せたままで返事をしなかった。

誠吾はそっと縁の手を取り、ハンカチを再び握らせる。

「……お願いです、もう泣かないで下さい。俺も辛くなります……」

そう言ひと誠吾は縁に背を向けた。

「……先生、……俺、人殺しなんですよ」

「エ……？」

“人殺し”といふ衝撃的な言葉に縁は思わず涙に濡れた顔を上げた。

「もう一人の人間を殺してしまつてるんです……」

誠吾は星が瞬く夜空を見上げる。

“人は死んだら星になる”つていいますよね。この夜空の中のどれか二つが俺のせいで星になつたんですね

「お、仰っている意味が分かりませんわ……」

誠吾は星の一つ一つを眺めながら、今まで隠匿されていた織田志穂の事件の真相をぽつりぽつりと語り始めた。

「……織田の子供の父親は早乙女先生だつたんですね。」

驚いた縁は涙声で繰り返す。

「……早乙女先生！？　一昨年急にお辞めになつたあの早乙女先生ですか…………！」

「……早乙女先生！？　一昨年急にお辞めになつたあの早乙女先生を壊したという理由ですでにカノンを退職している。

「そうです……。当時、織田が頑として子供の父親の名前を言わなかつたのは妻帯者だつた早乙女先生を必死に庇つていたんです……。俺は当時学内で織田の処分をなんとか軽く済ませるために必死で黒岩理事長に掛け合つっていました。その合間を縫つて織田の見舞いにも行つていました。そんな俺の行動を見ていた織田は俺に次第に心を許すようになりました。そしてある日、織田は俺に告白したんです。子供の父親は早乙女先生だと……」

縁はハンカチを手に呆然と誠吾の広い背中を見つめる。

「俺は驚きました。そして同時に織田と生まれてくる子供が可哀想でなりませんでした。俺は早乙女先生を呼び出し、激しく責めました。なぜ認知をしてやらないのか、と。早乙女先生は苦しそうに“認知だけはできない”と繰り返すばかりでした。そんな早乙女先生の態度に頭にきた俺は毎日のように早乙女先生を責め続けました……」

「矢貫先生…………」

「そして俺は織田から急に呼び出されました。織田の家に行くと織田はいきなり俺の顔を引っぱたき、目に涙を浮かべながら言いました。『先生は人殺しよー』と……。訳が分からず呆然とする俺に織

田はやうにこう言いました。今日病院で子供を堕ろしてきた、だからもうこれ以上早乙女先生を責めるのは止めて下さい、と

知らずつむに大きなはずの誠吾の背中は小さく丸まっていた。

「織田の話によると早乙女先生は奥さんの家に婿入りしていて、奥さんのご実家は有名な旧家なんだそうです。奥さんとの間に子供がいなかつた早乙女先生は、立場上どうしても織田との間の子を認知するわけにはいかなかつた。相続、遺産問題があるからなんだそうです……」

先程の煙草を押し消してからある程度の時間が経つたが、ヘビースモーカーなはずの誠吾は次の煙草を咥えようとはしない。

「でも織田はそんなこと全然気にしていなかつた……。早乙女先生が認知できない理由を彼女なりにきちんと理解し、その上で自分一人でもその子を立派に育てようと決意していたんです。それを、事情を知つた俺が早乙女先生を責め続けたので、織田は結局子供を堕ろしてしまつたんです。早乙女先生がもう苦しまずにするように……」

…

「一人が立つグラウンドの照明の光が少しづつ弱々しい光へと変化しあげていて。それはあともう少しでこの場所の照明の光が完全に落とされてしまう前兆だつた。

少しずつ、少しずつ、誠吾の姿が闇に溶け出していくようで、縁は言い知れぬ不安を感じ始める。

「……子供を堕ろすには墮胎手続きの用紙がいるらしいんです。その用紙には墮胎手術を受ける本人の他にその胎児の父親のサインも必要で、織田はその父親のサインを俺の名前で出したんです。」

先生が何もしなければ、あんなに早乙女先生を責めなければ、こんなことにはならなかつた。だから私は墮胎の書類を矢貫先生の名前で書いた”と織田は泣ながら言いました。そして織田は最後に俺に向かつてこう叫びました。『忘れないで、先生は人殺しなのよー』と……

辛そうな声で咳くよひに語る誠吾のその声は自責の念に溢れていた。

「……それは止どめの一言でした。その後、俺はどうやって自分の家に帰つたのか覚えてません。ただ頭の中に『人殺し!』と叫んだ織田の声だけが残つていました……」

縁は今初めて知つた真実に呆然としていた。
そして消え入りたいくらい恥ずかしかつた。

好きな相手を信じられず、周囲の噂だけを鵜呑みにしていた自分がたまらなく恥ずかしかつた。

「……早乙女先生も相当苦しんだようです。結局その後、理事長にすべてを話し退職なされました。そして俺は理事長に呼ばれ、この件は決して他言しないように言われたんです……」

誠吾は心配そうな顔で一度振り返つたが、縁の涙が止まつているのを確認し、安心した表情を見せる。

「……そして今回の笛田の件です。俺が笛田を強引に体育に参加させたせいで笛田も結果的には流産してしまいました……。腹の中の赤ん坊だって立派な一人の人間です。これで俺は一人の人間を殺し

てしまつたんです」

「いえ！ それは決して矢貫先生のせいではありませんわ！」

「でも俺の中の良心が俺を許さないんです。しかも俺は笠田すらも助けることが出来なかつた……。先生、俺は力ノンを辞めます。今まで色々と、迷惑をおかけました……そしてありがとひびきまし

た……」

「ダメッ！ ダメよ！」

再び縁の目に涙が浮かぶ。

その涙を見た誠吾は縁の側に歩み寄ると、その肩にそっと手を置き小さく笑つた。

「先生、どうかもう泣かないで下さい。そしてお願ひですからあなたはもっと笑つていて下さい。俺はここに来たばかりの頃、あなたが他の教師と何かを喋りながら笑つてゐる顔を初めて見た時、あなたに一目惚れしたんですよ」

「先生！ 私、理事長に辞職願いを受理しないように言ひますから考え方直して！」

「……本当はもっとあなたの側にいたかった……。でもこれできつといいんです。これがきっと最善の方法なんです。柳川先生、どうかお元氣で……」

誠吾は静かに縁の横をすり抜けた。

「待つて！ 矢貫先生ッ！」

その時グラウンドの照明がすべて落ちた。

縁が自分を呼ぶ涙声にも一度と振り返らず、誠吾は暗闇へとまぎれ、見えなくなる。

誠吾の姿を見失つた縁はグラウンドに膝から崩れ落ちた。ウツウツという嗚咽が何度もその口から漏れる。

(私が……私があの人に信じよつとしなかつたから……)

誰もいなくなつた真つ暗なグラウンドで誠吾のハンカチを握り締め、一人大きな後悔に苛まれながら縁はいつまでも身を震わせていた。

アイツは俺のもの

「ホールテンウェイーク」田田の脣過ぎ、倉沢家の玄関先に現れた冬馬はそのままインターフォンを押す。応答は無かつたが、代りにすぐドアが開き、中から桃乃が出てきた。

今日の桃乃はオレンジのホルターネックのキャミソールに同系色の半袖ニットカーディガンを羽織り、下は白のカプリパンツにミニコール、とくに可愛らしい服装だ。

「おひ、その服いいなつ！」

開口一番の冬馬の言葉に、桃乃は顔を赤らめて胸元の辺りを慌てて手で覆い隠す。

「や、やだつ、あんまりジロジロ見ないでよ…」

「なあなあこの首の後ろの紐、ほどけたりしないのか？」

「しないわよ！ 冬馬、引っ張らないでよ！？」

「ああ」

と言いつつも冬馬はさりげなくその紐下の部分を触る。

「バ、バカッ、触らないでよッ！ こんな所でほどけちゃつたらどうすんのよ…」

「それもそうだな。俺以外の関係ない奴に見せたくねえし」

「冬馬も同じなのつ！」

「ケチだなあ 桃乃は……」

「そういう問題じやないでしょつ！？」

桃乃と冬馬が何やら言い合いかながら連れ立つて出かけて行くのを、リビングの窓ガラスから葉月が興味津々の眼差しで見送る。

「……ねえお母さん、お姉ちゃんと冬馬兄ちゃん、どういへ行への?」

「今日から始まる恋愛映画観に行くんですって。桃乃、前から見た
がつてたじやない? 冬馬くんが一緒に行つてくれる」とになった
みたいよ」

「ウソツ! それって思いつきり、デートじゃない!」

「えつ、やうなの? 冬馬くん優しいから、映画一緒について行つ
てくれたのかとお母さん思つてたけど……」

食器を片付ける手を止めて驚く千鶴に、葉月はけらけらと笑い出
した。

「やつぱつお母さんつて鈍いよね~。だつてさ、一緒に映画を観に
行くなんてまさにデートの王道だよ? それにこの間のバーベキュー
の時もさ、お姉ちゃんと冬馬兄ちゃん、なうんかおかしかったん
だから!」

映画館は今日が封切りとあって混んでいた。

「ほら、桃乃」

桃乃是冬馬がすでに用意してくれていたチケットを申し訳無さで
うに受け取る。

「私が観たい映画なんだから私がお金出すつて言つたのに……」

「いいんだって。初デートなのに彼女に金出させられるかよ。む、
行ひづぜ」

冬馬は桃乃の手を引っ張つて映画館の中へ入る。

「席はEの三十と三十一だる…………」
「こだな。あれつ？」

先を歩いていた冬馬は番号が該当する座席を見て少し驚いた声を出した。

「この席くつついでんだな」

冬馬の後ろから席を覗きこんだ桃乃が言つ。

「これつてもしかしてペアシート……？」

(さすは兄貴か……)

「ひついう事には本当に気が回るよな、と思いつつも冬馬は内心で兄に感謝する。

今日のチケットは行人が代りに取ってくれていたのだ。

「さ、座ろうぜ。桃乃はそっちの奥のほうな

「どうして？」

冬馬は自分の片足を軽く一度叩く。

「俺、足はみ出しちまうから通路側の方がいい

「あ、そうね」

ペアシートに腰を掛けた冬馬は、自分と桃乃の間に肘掛がないのがいたく気に入つたようだ。

「ここに仕切りが無いのがいいなあ！ な？」

冬馬は大きく足を広げて座り、片足を桃乃の膝にわざとトン、と当てる。

「し、知らない」

桃乃は両膝をピッタリ合わせて座り、恥ずかしさを隠すためわざとつれない返事をした。

通路側の肘掛に左肘を置き、頬杖をつきながら心底つまらなそうに冬馬が呟く。

「相変わらず冷たいねえ……」

やがて上映が開始され、ゆっくりと場内が暗くなり始めた。秒刻みで時を追うごとに、館内は漆黒の闇に包まれてゆく。

一人が観に来た【魂が魅かれあう彼方で】という映画は、深く愛し合ったテツとヒトミという恋人同士がある事件がきっかけで離れになってしまふ所から始まる。

互いの安否もまったく分からぬまま無情にも数年の歳月が流れ、しかしそれぞれ相手のことが忘れられない主人公達はまるで何かの運命に引き寄せられるように、同じ日に同じ思い出の場所で偶然に巡り合うというラブストーリーだった。

一人が離れ離れになる日の朝、その思い出の場所で主人公、テツは恋人のヒトミに向かつて告げる台詞がこの物語の最初のクライマックスだ。

「……大丈夫、心配しないで。きっと僕らの魂はいつかまた必ず魅かれあうよ」

この時点で映画はまだ前半部分しか終わっていないのに、すでに館内のあちこちから女性の啜り泣きの声がかすかに漏れ始めている。桃乃の涙腺も、ハンカチが目元から片時も離れられないくらいに完全に開ききっていた。自分のすぐ隣で何度も涙を拭う桃乃が気になつてしまたのない冬馬は、何度もその様子をチラチラと横目で眺める。

(しつかしなんで「トイツつてこんなに可愛いんだろうな……）

すぐ横で、その大きな瞳に一杯の涙を溜めながらスクリーンを見つめている桃乃の表情を見ているだけで鼓動が意思に反して勝手に

早まり始める。

早まる鼓動は抑え難い衝動へと変化し、その溢れ出る衝動が体中を巡り出し始めた冬馬は無意識に人差し指で自分の足をせわしく叩き始める。

やがてそれまで流れていた哀しげな音楽が止まり、スクリーンはテツとヒトミが最後の一夜を共にするシーンに切り替わった。きわどいベッドシーンが惜しげも無くスクリーンに大写しになり、館内にヒトミが切なく喘ぐ声が大音響で何度も響き続ける。

すぐ横に冬馬がいるせいでスクリーンを直視するのが恥ずかしくなった桃乃は、思わず軽く目を伏せた。

(……こういう時、平気な顔して観ていた方がいいのかな……)

そつと視界の端で密かに左側を見てみる。

背の高い幼馴染の整った横顔が、瞬くスクリーンの蒼い光で何度も照らされている。通路側の肘掛に片肘を置き、頬杖をついたままの冬馬は無表情でスクリーンを見つめていた。

冬馬が堂々と観ているのでなんとなく安心した桃乃はもう一度スクリーンの方に目を向けた。するとその瞬間、膝に置いていた片手がいきなり暖かくなる。

「!?」

一瞬の動揺の後、膝の上に視線を落とすと自分の左手が冬馬の右手に包まれていることを桃乃は知る。

だが、上映中なので声が出せない。驚いた声を飲みこんで通路側を見上げた。しかし冬馬は桃乃の方を見ようともせず、先程とほとんど同じポーズでスクリーンを黙つて見続けている。

まだスクリーンではベッドシーンが続いていた。

相変わらず冬馬はスクリーンの方を見たままで、驚きで硬直してしまっている桃乃の手をすっぽりとその大きな手で覆い、緊張を優しく解きほぐしてやるよつに時々軽く指を動かして桃乃の手を何度も握り直す。

五本の長く骨ばった指が、優しく絡まつてくる。

まるで今スクリーンの中でテツから愛撫を受けているヒトノのような気分になり、桃乃の胸が大きく波打ちはじめた。

「と……」

桃乃は小声で冬馬の名を呼ばつとしたが、冬馬は一瞬だけ桃乃の方に目を向けると反対の手の人差し指を素早く自分の唇の前に立てる。

もちろん“上映中だから静かにな”といつ合図だ。

仕方なく声を飲み込んだ桃乃は再び俯く。

段々と強く熱を帯びていく自分の両頬に戸惑いながら。

やがて長く激しいベッドシーンがよつやく終わり、スクリーン上は別のシーンに切り替わった。

しかし結局最後のエンドロールが流れまるまで、桃乃の左手は冬馬にしつかりと握られたままだった。

「なあ桃乃、あの映画、面白かったのか？」

映画館のすぐ近くにあるオープンカフェでアイスコーヒーを飲みながら、冬馬がたつた今観てきた映画の感想を桃乃に尋ねた。注文したアイスカファーラテにストローを差しながら、感動と興奮がまだ覚めやらぬ状態の桃乃は当然、と言わんばかりに瞳を輝かせる。

「もちろんよ！ すっごく切なくて素敵なラブストーリーだつたじゃない！」

「へえ～あんなのがねえ……。桃乃、途中から最後までずっとボロボロ泣いてたもんな」

「冬馬、面白くなかったの？」

「俺ラブストーリーとか苦手なんだよ。背筋がムズムズする。それに男でああいうのが好きなヤツなんか滅多にいないと思うぜ？」

「……『メンね、つきあわせちゃって』

桃乃が済まなそうな顔で謝ったので冬馬は慌てた。

「いや違うつて！ そういう意味で言つたんじゃねえぞ？ ほら、映画はちょっとあれだつたけど映画館はすごく良かつたしな

「言つてる意味がよく分かんないんだけど？」

「だからさ、映画館つて中が真っ暗になるじゃん？ その点が色々いいなあと思つてさ！」

映画の途中からずつと私の手を握っていたことを言つてゐるんだ、と即座に桃乃は思った。

そしてあの時自分の中に湧き起しつた感情を思い出し、恥ずかしくなつた桃乃は冬馬をなじる。

「あつ、ああこう」と止めてよねつー。

「なんでだよ？」

「な、なんでつて……」

空のストローの袋を意味も無くいじりながら桃乃は口元もる。

冬馬はストローを使わず口を尖らせて直接グラスからアイスコーヒーを啜った後、平然と言つた。

「あれぐらい別にいいじゃん。桃乃は見てたか？俺らの斜め前のペアシートのカップル、映画の途中から何度もキスしてたぜ？」

「え！？ 私知らないよ？」

「桃乃は映画に夢中だったからな……。実は俺も密かにチャンス伺つてたんだけどさ」

「とつ、冬馬つてば映画の最中にそんなこと考えてたの！？」

「だつてヒマだつたんだ。映画つまんねーんだもん」

「……もう冬馬と恋愛映画観に来ない……」

「あつ嘘！ 嘘！ あの映画、超面白かつたぜ！？」

「またそんな嘘ばっかり言つて！」

二人のテーブル近くを通りすぎようとしていた男の三人連れが桃乃の声に気付き、立ち止まる。

「……あれっ西脇！？ それに倉沢さんじゃない？」

通りがかつたその面子を見て、思わず冬馬が椅子から立ち上がつた。

「おっ、野々山じやん！ 横田と榎本も久しぶりだな！」

野々山智樹、横田治、榎本章弘の三人は冬馬や桃乃と同じ、白杜中学時代の同級生だ。

「あららっ？」

田の前の光景を見た智樹は上品な有閑マダム口調で冬馬をからかう。

「あのー、もしかして西脇さんつてばお、デート中だったので、『どういましょうか？』

「一ヶと笑い、冬馬もそのノリに合わせる。」

「ああまんまとおの「テー」ト中だぜ？」

「おおっ！ とつとうやつたのか西脇！」

「やつたじやん西脇！ 苦節何年だつけ？ とにかく良かつたなつ

！」

治と章弘も冬馬に同時にねぎらいの言葉をかけ始める。

四人の会話の意味が分からぬ桃乃はポカンとしながらその光景を眺めていた。そんな桃乃の様子を見た智樹が桃乃に話しかける。

「ね、倉沢さん。西脇の奴さ、中学の時からずーっと倉沢さんのこと好きだつたんだよ？」

「違うつづーの。もつと前からだよ」

心外そうな顔で冬馬がすかさず訂正をする。

「あつ悪い、そうだつたのか！」

智樹は慌てて軽く謝った後、話を続けた。

「でね、倉沢さん。倉沢さんつてすごく可愛いのこひに、中学時代、俺らクラスの男子が全然寄つていかなかつたの、なぜか知つてた？」

しかし桃乃の返事を待たずにその回答をすぐに治が引き継ぐ。

「それさ、実はこの西脇のせいなんだ。」
「いつわ、修学旅行一日日の夜にね、部屋でクラスの男子全員でワイワイ騒いでいる時にいきなり言い出してんの。『俺は倉沢桃乃が好きだからお前ら余計なちよつかい出すなよ？』って。あれは驚いたよなあ？」

治は次に章弘の方に同意を求め、その言葉に「ああ」と深く相槌を打ちつつ、章弘がさらに詳しく述べ當時の状況を語る。

「あの時突拍子も無くいきなり西脇があんなこと言つ出したからさ、部屋中が一瞬シーンとしたよな。あれは西脇が『アイツは俺のもんだ』って俺らの前で堂々と宣言したようなもんだったからな。な

？」

再び智樹に解説の順番が回る。

「ああ、勿論してたつて」

「あつ、そういえばお前、まさか今もまだ倉沢さんのことへんな名前で呼んでるわけじゃないだろうなあ？」

デリナの邪魔どからもうあつあつに行ひだ行ひた

「ハハツ、西脇にとって俺らは招かれざる相手、つてことだな」

冬馬に追いたてられ、智樹が笑いながらテーブルから一步離れる。

「じゃ、俺達かなりお邪魔みたいだからまたな。あ、そうだ西脇。
お前もうケータイ持つてんだろ？ 番号とメアド教えてくれよ」

一
あ
あ

少年達はお互に携帯情報教えあひ

じや倉沢さん、お邪魔してごめんね。またね！」

「なん、またね」

三人が去つていつてしまつと冬馬はポケットに携帯を突っ込みながら尋ねた。

「桃乃、お前ケータイまだ持つてないよな?」
「うん」

「なんで持たねえんだよ？」お前と連絡取りたい時すぐー不便なん

だよな

「お父さんが許してくれないの」

「なんで？」

「ん、中学生がケータイで犯罪に巻き込まれた事件があつたのを前にテレビで見て、それで心配だからまだダメだつて」

「桃乃のおじさん、メッチャ心配性だからなあ……」

小さい頃から雅治のことをよく知る冬馬は溜息をついた。

「おじさんの気持ちも分かるけどさ、でもそろそろ必要じゃね？」

「そうなのよね……。葉月もずっと欲しがってるんだけど、うちのお父さん、『ううう』とには頑固だから……。そ、それより冬馬

「なんだ？」

「さつき野々山くん達が言つてたこと、本当なの……？」

「ああ修学旅行の話しか？」

微塵も照れた様子の無い冬馬はへへッと明るく桃乃に笑いかける。

「マジマジー あの当時お前の事好きな奴も何人かいただようだしさ、そろそろクラスの奴らに一発、釘刺しとこいつと前々から思つてたんだ。おかげで野々山達みたいに協力者も出来てさ、あの時あいつらに気持ちをぶちまけといて良かつたよー」

それを聞いた桃乃はグラスから手を離し、赤くなつて俯く。

この背の高い幼馴染は「遠慮」という言葉なんてまったく知らないかのように、今日もグイグイと桃乃の心を押し開けてきていた。

「桃乃さ、五日は空けといてくれてるんだろ?」

家路につく一人の背中を橙色の夕日が同じ色に染めている。

「う、うん。何も予定ないけど」

つぶらな瞳で佇むピンクのミニーディベアを抱えながら桃乃是頷いた。JFOのキャッチャーで冬馬が取ってくれた本日のキュートな戦利品だ。

「俺、明日から用事あるんで五日まで会えないんだけど、夕方五時に百合ヶ丘公園の噴水のどこで待ってるから。余裕時間遅くなつちまうけど『メンな』

「ずいぶん長い用事ね。家族でどこか旅行に行くの?」

「ん? いや違う違う。部活とか色々」

「そう……」

そう答えた桃乃の顔を見た冬馬の声が弾む。

「おー……ちょっと寂しいな……なんて思つたなつ、その顔は……！」

「えつ？」

冬馬の指摘で心の奥底にある気持ちがストレートに表情に出でしまっていたことを知つた桃乃是、恥ずかしさのためにわざと素つ気無い返事をする。

「べつ、別に?」

「おい、あつさり否定すんなよ……」

映画館内に引き続き、またしてもつれない返事をされた冬馬は小さく諦めの吐息を吐く。明らかに気落ちしているその口調に、素直になりきれない桃乃の胸がチクリと痛んだ。

「ホント冷てえよなあ。大体……」

そこまで言いかけた冬馬は前方にいる人影に気付くと急に足を止め、桃乃の右腕をグッと強く掴む。

「ど、どうしたの？ 冬馬」

桃乃が声をかけても冬馬は険しい顔で前方を見たままだ。不思議に思った桃乃はその視線の先を追つてみた。

「あっあの人……！」

西脇家の堀に寄りかかっていたその人物も帰つてきた一人に気がついたようだ。

「桃乃、お前ここにいる！」

冬馬はそう叫ぶと桃乃の腕から手を離し走り出す。
堀に背中を預けていた細身の男はジャケットの両ポケットに突っ込んでいた手を出し、駆け寄つてくる冬馬を見ると堀からゆっくりと身を起こした。

つい数週間前のカノン正門前での小競り合いのように、冬馬は声を荒げて詰め寄る。

「おい！ 何しに来たんだお前！？ なんで俺の家知つてんだよ！？」

「……学校じゃなかなか言ひ機会が無くなつてな、だからお前の住所をクラス名簿で調べて来た」

夕日を真正面から浴びる立ち位置になつた要是、眩しいのか伏し目がちに答える。

背後に桃乃が追いついてきた気配を感じ取つた冬馬は、左腕を後

ろに下げる桃乃をガードする姿勢を取り、要を威嚇する。

「俺、言つたよな？ 今度桃乃に近づいたらぶつ飛ばすぞって」
背中越しにその言葉を聞いた桃乃は驚き半分、呆れ半分で冬馬の後姿を見上げた。

（冬馬つたらやつぱりこの人を呼び出してそんな事言つたんだ……。
月曜日に話した時は「分かつた」とて言つてたのに嘘ついたのね）

要は冬馬の方に体を向け、少しだけ頭を下げる。「悪かった」と静かな声で告げる。

「済まない。全部俺の勘違いだった」

いきなり要が謝罪してきたので冬馬は呆気に取られた顔をする。

「勘違い！？」

「ああ……」

下降気味の視線を三十度程上昇させて要はその先を話そつとしたが、冬馬の後ろに桃乃がいるのに気付くともつ一度さつきよりも深く頭を下げる。

「君にもへんな真似して悪かった。もつつきまとつたりしない、約束する」

「……それ本当だらうな？」

桃乃の代わりに冬馬が返事をし、まだ疑惑の残る目で要を見る。

「ああ、もちろんだ。それで西脇、お前にちょっと話しがあるんだけどや…………」

要はそこで一度言葉を切り、桃乃の方を気にかけながらその先を言い淀む。

冬馬は何秒か黙考していたが、やがて親指を立てて自分の家を指

した。

「……ああ、じゃ俺ン家に入れよ」

「いいのか？」

「話しがあるんだろ？」

冬馬はそこで後ろを振り返り、心配顔の桃乃の方に視線を移すと安心させるようにニーッと笑った。

「じゃ桃乃、次は五日な！」

「う、うん……」

「そんな顔すんな。大丈夫だつて！」

「うん……」

「……あの子向かいに住んでたのか

向かいの自分の家の門を開け、心配そうに冬馬の方を振り返りながら中に入つていった桃乃を見て、要が呟く。

「ああ、幼馴染なんだ」

「ふうーん……」

「じゃとにかく入れよ」

冬馬が玄関を開けると、出かける様子の行人が二階から下りてきたところに出くわす。

「お、冬馬の友達か？」

衍人の声を聞いてリビングから麻知子も出てきた。

「あら、冬馬やつと帰ってきたの。柴門くん、ずっと外で冬馬が帰つてくるの待つてたのよ。中に入つて待つてればって言つたんだけど、どうしても表で待つつて言つから……。じゃ、今なにか飲み物持つていつてあげるわね」

「ああ。」口ちだぜ

冬馬と要が連れ立つて一階に上がつていくのを見送ると、麻知子は側にいた衍人に話しかける。

「ね、衍人、今の男の子カツコイイでしょ？」

「うん。名前なんだつけ？」

「柴門要くんだつて。ねえ柴門くんつてさ、なんとなく見た感じアンタに似てない？」

「確かに雰囲気はちょい似てるかもな」

要の姿を思い返し、衍人が頷く。

「その点、俺と冬馬は微妙に違うんだよなあ。いい男に向かうベクトルの進む方向がさ」

「しかも冬馬は真面目だしね、誰かさんとは違つて…」

「母さんはすぐそうやって俺をけなすんだから……」

「そうそう、それに夜遊びもしないしねー！」

「またまた……キツイな母さんは」

「（）」は一発大きな話題を出さないと今から夜遊びに出かけにくくと判断した衍人は、とつておきの話題を出すことにした。

「母さん、実はここだけの話しなんだけどさ」
「なによ、急に小声になつて」
「……冬馬さ、桃乃ちゃんに告白したらしいよ」
「エッ！？ 桃乃ちゃんに！？」

「シーツー、母さん声がでかいよ」

麻知子は慌てて自分の口元を手で覆った。

「ゴ、ゴメン。……で、どうなったのよ？」

「桃乃ちゃんOKしたらしごぜ。今日一人で映画観に行つてきたみたいだよ」

「本当ー?」

「本当本当。だつて俺チケット取つてやつたもん」

「あらまあ……じゃあ近いうちに倉沢さんのお部屋へ挨拶にいかな
くつねー。やけひー。」

麻知子の返事を聞いて衍人は呆れた声を出す。

「母さん、別に結婚するわけじゃないんだぜ？　ただ付き合つ」と
になつたぐりいでなんでわざわざ桃乃ちゃんの家に挨拶に行くんだ
よ?」

「だつて千鶴ちゃんのお宅とまも近所付合い長いしねえ……」

「ちょ、ちょっと待てってば母さん！　それじゃ俺が喋つたこと冬
馬にバレちゃうじやん！　それならせめて冬馬から母さん達にその
話しが出てからにしてくれよ、な?」

「……そうね。冬馬からきちんと話しがあつてからの方がいいわね

「そりゃー、じゃ、俺ちょっと出かけてくるから……。あ、晩御
飯はいらないよ」

「まあーた夜遊びー?」

「夜遊びつて……俺も冬馬達が觀てきた映画を觀に行くんだ

「あつ、もしかして【魂が魅かれあう彼方で】ー?」

「そうそれ

「いいなー！　私もそれ観たいのよねー」

「オヤジと行けばいいじやん」

「あの堅物男があんな恋愛映画と一緒に觀に行つてくれると思つ?」

「ハハツ、天地がひっくり返つてもありえなさそうだな」

衍人は軽い笑い声を上げながらシューズボックスから綺麗に手入れされた茶色のローファーを取り出すと、靴べらを手に取る。

「じゃちょっと出かけてくるよ」

「家の前で空ぶかしは絶対ダメだからね！」

「はいはい。了解です」

外に出た衍人は胸ポケットからチケットを取り出し、自分も間違いないペアシートチケットなことを確認すると満足そうに車に乗り込んだ。

その二十分後、夕田が斜に差し込む西脇家の二階で、自分の勘違いの顛末を要がようやく説明し終わる。

「……といわけなんだ」

話を聞き終わった冬馬は椅子の背に大きく寄りかかり、片膝を立てて床に座っている要にあらためて確認する。

「じゃ椎名さんは別に俺のこと好きでもなんでもなかつたってことなんだな？」

「そうだ。お前の名前借りただけだって言つてた。ホントに済まん

「つたく勝手に勘違いされて、勝手に恨まれてか。いい迷惑だぜ」「……俺は完全に悪いが、椎名に悪氣は無かつたんだ。それは分かってくれ」

冬馬は不機嫌な表情でしばらく黙っていたが急に椅子の向きを大きく変え、正面から要を指差した。

「柴門、念のためにもう一度確認していいか？」

「何をだ？」

「桃乃に近づいたのは俺に嫌がらせをするためだけで、お前は桃乃のことを別に好きでもなんでもないんだな？」

「ああ。その通りだ。そりやもちろん、すぐ可愛い子だとは思つぜ？　こんなことがなけりや普通に声かけて口説いてたかもな」

この最後の言葉に瞬時に反応した冬馬は固い視線を要に向ける。

「やつぱり気があるんじゃないのか……」

「いやだから、それは氣があるっていうか、普通に出来つていればそうこうこともあったかも、つていうレベルの話しだぜ？　今は西脇の彼女なんだし、もう俺は一切手出しする気はない。本當だ」

「……信じていーな？」

「ああ、もちろんだ。……そういえばあの子、どうかしたのか？」

「何がだよ？」

「田元が泣いた後のような感じがしたからだ。ケンカでもしたのか

？」

冬馬の左肩がピクリと小さく動く。

不機嫌の度合いをさらに大きく増した顔で、冬馬は一言「違う」とぶつきあらぼうに答えた。

「……俺、なんかマズイ事言つたか?」「いや」

しかし態度にはしつかりと出でていた。椅子がギシギシと鳴り出し、冬馬はイラついた様子で貧乏ゆすりを始める。

「なあ柴門」

「なんだ?」

「お前、この間屋上で俺の事を“ いけすかない奴だ ” って言つたよな?」

「あ、ああ……。済まない」

「いや、構わねえよ。俺も似たような感情をお前に持つてたからな。理由ははつきりと分からなかつたんだけどさ。でもその理由が今分かつたよ」

「へえ。で、理由は何だよ?」

冬馬は短く断定的に言つ。

「お前、兄貴に似てるんだ」

「兄貴? もつき下で会つたあの人か?」「ああ」

「なんだ、お前実の兄貴が嫌いなのかよ」

「そういう意味じゃねえつての!」

映画を観終わった直後に会つた野々山達ですら誰も気付かなかつたのに、と思いながら冬馬は仏頂面で続ける。

「なんていえばいいんだろうな……。お前、桃乃が泣いたことに気が付いたる？ あんなわざかしか顔を合わせてなくて、しかも桃乃は俺の後ろにいたのにも。なんつーか、お前のそういう細かい事にすぐ気付く部分がさ、似てるんだよ、俺の兄貴に」

「ふうん……」

要は曖昧な返事をした後、立て膝を崩して姿勢を変える。

「正直お前の言いたいことはよく分からぬが、でも西脇は本当にあの子のことが好きなんだな。俺もそれはよく分かった」「まあな。昨日、今日で急に好きになつたわけじゃねえし」「あの子のこと、いつから好きなんだ？」

「今年で十一年目だ」

「十一年！？」

「ああ。あいつとはお互^{シシテ}に引っ越して來た時からの幼馴染で、幼稚園から今までずっと一緒にいたんだよ」「じゃ当然初恋もある子なんだ？」

「ああ。プラス一日惚れ」

「……なるほど。そりゃ大したものだ」

要はひとしきり感心した後、「本当に済まなかつた」と頭を下げた。

再度の謝罪を聞いた冬馬はフウと息を吐き、感慨深げに呟く。

「……まあ今となつてはお前に感謝しなきやいけない面もあるんだけどな……」

「どうこつ意味だ？」

「本当はあの日にするつもりじゃなかつたんだけどさ、お前がああやつて桃乃にちよつかい出してきたから俺、焦つてすぐに桃乃に告

つたんだ。その後結局桃乃はOKしてくれたから、ある意味お前のおかげで今俺は桃乃と付き合っているんだよな

「ナニ言つてもいいやれば迷惑かけた俺としては少しは心が軽くなる」

「ところでそいつはなんだ？ その椎名をどこもつ一度告つてみたのか？」

「……あ

「で、どうだつたんだよ

「見事玉碎だ」

男子校舎の屋上で杏子に携帯電話で告白したあの夜のことと思つて出したのか、要は少し寂しそうな顔になつた。

そんな要を見た冬馬は、悪いことを聞いてしまつたところの表情で「……そうか」と呟く。

「おこおこ、同情はやめてくれよ？」

「いや、せうこつもじじやないんだだけじゃ……

「俺さ、今すぐスッキリしてゐるんだ」

要はあの屋上の時とは一変して清々しい表情で言つた。

「前に椎名に告つた時な、軽い調子で告つて失敗したからさ、それがずつと心残りだつたんだ。あの時ちゃんと真面目に告つていたらもしかしたら……」つていう考へがいつまでも消えなくつてな。でもこの間屋上でお前に言われてよ、思い切つてもう一度、マジで椎名に告つてそれで玉碎したから完全にふつきれたよ

「そうか……。でもお前、あの沙羅つて子に入られてんだろ？」

「なんで西脇が知つてるんだ？」

要がわずかに驚いた様子を見せる。

「桃乃がその沙羅つて子から聞いたらしくつて俺もそれで知つた

「ああそういうことか。あいつ、すげえ積極的でさ。話してるとべ

一ス乱されっぱなしになる

「でもしつかりした感じの子だつたじゃん」

「俺はああいつ常に喋り捲つていそうなタイプが一番苦手なんだよ」

「厄介事を抱え込んでしまったと言わんばかりの要を見て、杏子の雰囲気を思い出した冬馬は一人納得する。

「お前、どっちかっていうと物静かなタイプが好きなんだろう？」

「ああ」

「そんでどうか控えめでつつましくて」

「それに加えてミステリアスな雰囲気を持っていると最高だな」

「ふーん、ミステリアスねえ……」

色鮮やかな西田が深く差し込む部屋で、ついこの間まであんなにいがみ合っていた両名はそのまま長々と話し込み、結局要が西脇家を辞したのは麻知子の強い誘いで夕食を共にした一時間後のことだった。

貴女は小ちなお姫様

「ホールディングス」。

「」の日、桃乃は沙羅の家を訪問していた。

沙羅の家はカノンがある谷内崎駅から電車で最終地点の中和泉にある。駅からすぐ近くの高層マンションに沙羅は母親のエリザと一緒に住んでいた。父親は航海士のため、年中ほぼ不在状態らしい。

「ようこそモモ。あなたのことば沙羅からいつも聞いています。会えて嬉しいわ」

見かけは青い瞳に白い肌の外国人だが、エリザはとても流暢に日本語を喋った。

はじめまして、と桃乃も挨拶をし、沙羅がエリザを紹介する。「モモ。ママはね、若い頃、貿易会社の通訳兼秘書の仕事をしていたの。だからこんなに日本語が上手いのよ。今は進学塾で英語の講師をしているの」

エリザは明るい若草色のソファに桃乃を案内すると自分はその正面に座る。

「モモ、英語はお得意？ 沙羅のお友達ならいつでも喜んでレッスンさせていただくな」

「ありがとうございます！」

「さあじゃあまずお茶にしましょうか。ついさっきパイが出来上がつたところだから」

「あ、じゃああたしが用意するね、ママー！」

「ありがとう沙羅。じゃあお願ひね」

綺麗なガラスの器に盛られたエリザお手製のストロベリーパイを

食べながら女三人の会話は弾む。桃乃はエリザのパイを手放しで誉めた。

「「」のストロベリーパイ、とっても美味しい！ こんな美味しいパイ初めて食べました」

「ありがとうモモ。でもそんなに褒められるとなんだかくすぐったいわね」

エリザはそういつと役目を終えたパイカッターをキッチンに戻すために席を立つた。

「良かった！ ママのパイをモモが気に入ってくれて！ あ、でもモモのママも確かお菓子作りは上手なのよね？」

「うん。毎日のように作ってるけど、でもこんな感じのパイはまだ作ったことがないと思うわ」

キッキンから戻り、ソファに座りついたエリザはそれを聞いて中腰の姿勢で動きを止める。

「モモ。よかつたらこのパイのレシピをあげましょつか？」

「えっ、いいんですか？」

「ええ。私のレシピで作るパイが広まつたらこんな嬉しいことはないわ」

エリザは再び席を立つと、書棚の最上段にある数々のクリアブックから背表紙に『 Sweet 』と書かれているファイルを取り、中からストロベリーパイのレシピを取りだして桃乃に手渡した。

「ありがとうございます！ お母さん喜んで作ると思います！」

「ねえねえモモー！ ちょっと待って！」

とそこで沙羅が桃乃に一つの提案をする。

「モモのママに作つてもうよりモモがチャレンジすればいいんじゃない？」

「あ、そうね。最近お菓子作りなんて全然していなかつたから私が

「」のパイ作ってみようかな

「で！ その出来たパイ、冬馬にあげるんだよね！」

桃乃の腕をつつき、すかせず沙羅がからかった。

今の提案は「」の台詞を言いたいがためだけに出したらりじー。

「トウーマー」

「一人の会話を聞いていたエリザが少しおかしなインテントネーションで冬馬の名を口にする。

「ううん、ママ。『トウーマ』じゃなくて『トウマ』よ。モモの彼氏なの。バスケットやってね、背が高くてカッコイイんだー！」

「沙羅より高いの？」

「うん、もちろんだよママー！ 背はこれぐらいだったかな？」

冬馬の背丈を沙羅は空中に手で指示示す。

「じやあきっとトウマことって、モモは大切なリトルプリンセスなんだよしうね」

エリザは祝福するまゝに優しく微笑み、沙羅がその言葉に強く同意する。

「やうやうさつすがママー！ まさにこの通り！ 傍から見るとね、冬馬つてモモのこと“もう好きで好きでしようがない”って感じなんだよねー！ この間あたしとモモが違う男の子に送つてもらおうとした時もね、冬馬がすごい勢いでつぶ飛んで来て、モモに“頼むから俺と一緒に帰ってくれ”って言つたんだよ。あれカッコよかつたな～！」

「え、沙羅、もづめでよ……」

恥ずかしさのあまり、桃乃は小声で抗議をする。

「モモは幸せな女の子ね」

エリザはティーカップを手に押しあげたりと微笑む。

「女性はね、自分が愛するよりも男性に深く愛された方が幸せになるものなのよ」

「おおっと見事に出ましたあーっ！　ママの十八番の決め台詞～～つ！！」

その元気なパフォーマンスに桃乃とエリザがクスクスと笑う中、沙羅は急に真剣な声に戻るとエリザに尋ねる。

「でもねママ。女人の方が男の人を一杯好きになる場合もあるでしょ？　その場合は幸せになれないの？」

「そうね……」

エリザは透き通った青い瞳を瞬かせて娘の質問に答える。

「幸せにならない、なんて乱暴なことは言わないけど、でもママは女の立場や経験から言えば、やっぱり男の人の愛情が強いほうが円満にいくと思うのよね」

それを聞いた沙羅のテンションが急激に落ちた。

「…………うん…………そのままの理屈じゃ、あたしの恋は思いつ切り前途多難じゃない…………」

「力ナメって男の子のこと？　ママ一度会つてみたいわね。今度連れていらっしゃい」

「え？　要を連れて来いつて！？　ダメだよママ！　だつてまだ全然まつたくなんにも進展してないもん！　片思いで終わる可能性もありなんだからウチに連れてくるなんて無理だよ～！」

エリザはティーカップをソーサーに戻すとなぜか楽しそうに話す。

「でもあなたに好きな男の子ができたことをパパが知つたら一体なんて言うかしらね？」

「そんなの決まってるじゃないママ！　パパなら大きく頭を抱えて

「…………」

『 unbelinevable.』

明るい口差しで一杯なリビングに沙羅とエリザの声が反響する。完璧な英語で綺麗にハモった母娘は同時に笑い出した。

「ちよつと沙羅、真似しないでちよつだい」

「ママ」

沙羅とHリザの楽しそうな会話のやり取りは続く。

「じゃあそう叫んだその後、パパはどうなると想ひ、沙羅？」

「わうだなあ……。パパならそのままこつまでもおひおひしてそう！ で、ソファの角辺りに小指をぶつけ『Oto-Myo Go!』って呻くの…」

「パパならしあうよね」

「だからママ。まだパパには要のこと何も話しちゃダメだからね？」

「はーはー。分かってるわ。この事はまだ一人だけの秘密にしてしましょ」

沙羅とHリザはまた声を合させて笑った。

(沙羅のお家つてあつたかいな……)

ストロベリーパイのレシピを手にしながら、素敵な親子関係を築いている沙羅とHリザの母娘を桃乃はソファの上で微笑ましく眺めていた。

五月五日

五月五日。この日は桃乃の十六回目の誕生日だ。
母の千鶴は朝から上の娘のバースディケーキ作りに精を出していた。

（でも桃乃、今日家にいるのかしら……）

千鶴は一階を見上げると生地作りの手を止め、桃乃の部屋へ向かう。

「桃乃、入るわよ？」と声をかけてからノックをして部屋に入ると、クローゼットを開けていた桃乃が振り返った。

「なに？ お母さん」

アラインのワンピースを手にしている娘の姿を見て千鶴は微笑む。

「あらあら、まるでこの間、祐人くんと出かける前の葉月みたいね」

「そ、そう？」

「今日、冬馬くんと会うんでしょ？」

「お、お母さん知つてたの？」

「お母さんは何でもお見通しよつ」

本当は葉月に教えられて知つたのに、千鶴はちやつかりと自分の手柄にする。

「冬馬くんとお付合いしてるんでしょ？」

「……うん」

恥ずかしそうに桃乃は頷く。

「いいじゃない。お母さんは大賛成よ？ だって冬馬くんは優しくて素敵なお子さんですもの。でもお父さんは桃乃に彼が出来たって知

つたら、きつと慌てるでしょうね

千鶴はその時の雅治の様子を勝手に想像し、一人笑う。

「……お父さん怒るかな？」

「怒りはしないわよ。ただね、ほら、男親にとつて娘つて特別な存在だから、そういう意味で心配するとは思ひけどね」

「ふうん……」

「桃乃、今晚は家で誕生日祝えるの？　お母さん今ケーキ作っているんだけど」

「うん。七時くらいには帰ってくるわ。冬馬がきっと家で誕生日祝う用意してるだろからって……」

「冬馬くんつてやっぱり優しいわね。うつむいて氣を使ってくれてるのね。あ、その服、お母さんにも見せて」

桃乃の手からワンピースを取ると千鶴はそれを丹念に眺め出す。

「今日は何時に出かけるの？」

「冬馬が夕方まで用事があるみたいだから五時に待ち合わせ」

「あらそんなに遅いの？　でもそれじゃあ大して一緒にいられないわね」

「うん……」

桃乃は軽く俯いた。

「そうね、どうしたらいいかしら……」

千鶴は頬に手をやりながら考え込んだ。

「じゃあ桃乃。今日の桃乃の誕生日は八時からにしましょう。雅治さんたら今朝、頑張つて早く帰つてくるなんて言ってたけど、どうせ七時になんて絶対帰つてこられないわ。だから八時までに帰つてらっしゃい」

「うん、分かったわお母さん」

桃乃是恥じらいながらも微笑んだ。千鶴が冬馬と付き合つこと全面的に賛成してくれたことが嬉しかったのだ。

「今日着ていく服、これに決めちゃったの？」

「ううん、まだだけど」

「じゃあお母さんに選ばせて…」

張りきってクローゼットの中の服をチョックしばじめよつとする千鶴を桃乃は必死に押し留める。

「い、いいってばお母さん！　だつてお母さんの選ぶ服つて決まってフリフリの服なんだもん！」

しかし千鶴は全然気にする素振りも無く、「いいからお母さんに任せて！」と言いながら意気揚々とクローゼットの扉をさらに左右に大きく開け放つた。

その日の夕方、桃乃の家の前に一台の車が急ブレーキ氣味の音を響かせて慌しく停車した。

急いで様子で運転席から降りてきた行人は倉沢家のインターフォンを押す。

「はい、どちら様ですか？」

インターフォンに出たのは千鶴だ。

「あつ 術人です！　あのつ、桃乃ちゃんはもう出かけちゃいましたかつー？」

時刻は四時半をとうに過ぎている。

「あら 術人くん？　ええ 桃乃なら少し前に出かけたわ。冬馬くんと約束あるんですって」

「あ～間に合わなかつたかあ……」

「どうかしたの？」

「いえ、いいんです、じゃまた！」

「衍人くん？」

身を翻し、衍人はまた車に乗り込むとエンジン音を鳴らして去つて行つてしまつた。

「一体どうしたのかしらね……」

千鶴は受話器を置くとおつとりとした声でそう呟いたが、オープンドで焼いているケーキのことを思い出してまたいそとキッチンの中に戻つていつた。

車は百合ヶ丘公園を目指して疾走する。

公園の駐車場に車を停めた衍人は、冬馬から聞いた噴水の場所へ小走りで向かつた。

今日は祝日でまだ完全に日も暮れていない時刻なので、公園内には大勢の人人がいる。

(桃乃ちゃん どこかな……)

衍人は噴水の近くにいるはずの桃乃を探す。しかし噴水の場所には姿が確認出来なかつた。

グルリと周囲を見回した衍人の目に、タイル舗装された道の上で何やら取り込み中のグループが映る。

(あ、いた！…………あれ？)

やつと桃乃の姿を見つけた衍人は怪訝そうな顔をして足を止めた。

桃乃の両横を二人の若い男が取り巻いていたのだ。男達は代わる代わる桃乃に声をかけている。

「よかつたら俺らとこれから遊びにいかない？」

「なあなあ行こうよ？俺らで、けつこ一面白い所色々知つてんだよね」

(なんだ ナンパされてんのか)

桃乃の置かれている状況を飲み込んだ衍人は苦笑した。

「い、行きません！」

男達に挟まれて桃乃は脅えているようだつた。右側の男が素早く桃乃の腕を押さえ込む。

「そんな冷たいこと言わないでさ」

「やだつ、離して！」

「おい、そんな大声出さないでくれよ、俺らまるで無理矢理あんたを誘つてるみたいじやん？」

「思いつきり無理矢理じやん」

「あ？」

背後から声をかけられた男達が振り返る。

「あつ衍兄イ！」

桃乃がホッとしたように叫ぶ。

「な、なんだよ、お前？」

長身の衍人に上から見下ろされて多少氣後れしながらも、左側の男が肩を揺すりながら虚勢を張つてきた。

「俺はこの娘のお迎え役ですが？」

衍人は目の前の二人の男の顔をそれぞれサラリと見比べると、穏やかな微笑みの中に優越感をたつぱり混ぜた表情で言つ。

「ううん……キミ達のその顔じゃあ、この娘とは全然釣り合いが取れないなあ。悪いけどさ、他を当たつてくれよ？」

二人組は憎々しげに舌打ちをしながら、「やっぱり男待ちだつたのかよ」と負け犬にありがちな捨て台詞を吐いて去つていった。

「桃乃ちゃん、大丈夫？」

「衍人は喉元を押さえている桃乃を見て心配そうに言った。

「怖かつた……強引にどこかに連れていかれるかと思った……」

「そうだね。良かったよ、間に合つて」

「……でも衍兄イ、なんでこんな所にいるの？」

「ああ、そうだそうだ！」

用件を思い出した衍人は途端にまた慌てだす。

「実はついさっき、俺の携帯に冬馬から連絡あつてさ」

「冬馬から？」

「うん、五時に冬馬とここで会つ約束してたんだろ？　あいつさ、ちょっと用事が長引いて間に合いそうにないんだって。だから桃乃ちゃんにそれを伝えて、ついでに自分が行くまで桃乃ちゃんと一緒にいてくれつて言われたんだよ。公園で桃乃ちゃんを一人で待たせておいたら心配だからって。でも冬馬の心配、見事に当たったね」「冬馬、なんの用事で遅れるの？」

「ああそれはさ……」

と衍人は続きを言いかけたが、一旦言葉を切り、手の中についた愛車のマークが彫られたキーリングを人差し指にかけて遠心力でくるりと回す。いくつかの鍵がついた束が互いにぶつかり、しゃらん、と音を立てた。

「……知りたい？」

「う、うん。知りたいっ」

「よし！　百聞は一見にしかずだ、じゃこれから行こっ」

「行くつてどこへ？」

「もちろん冬馬くんがいるところへですよー。」

子供が悪戯を企むような幼い笑顔を見せ、術人は「おいで」と言うと駐車場に向かつて歩き出す。

急いでその後を追うと、先を行く銀のキーリングが桃乃を誘うようになに、しゃらん、とまた小さく鳴つた。

彼女の位置、そして彼の位置

「しつかしウチの冬馬くんにも参りますよ」

桃乃を助手席に乗せ、赤光が充満するトンネルの中をスローペース氣味に運転しながら衍人が愚痴り出す。

「いきなり携帯に電話よこしてきてさ、” 兄貴っ！ 悪いけど桃乃のどこに行つてくれ！ ” だよ？ 僕、デートに向かう途中だったのにさ

「ええっ！？ ジャあ衍兄イ、” デートをすっぽかしてきちゃったの！？”

「まさか！ 連絡取つて時間をずらしてもうらつたよ。でもこの埋め合わせ、後で高くつきそうで怖いけどね」

「大変だね、衍兄イも」

ため息をつく衍人の姿に桃乃是同情の視線を送った。

「もしかしてその相手って、この間 “ まだ落とすのに時間がかかる ” って言つてた女人の人？」

「よくそんなこと覚えてるね！ 桃乃ちゃんは記憶力がいいんだなあ」

前方に固定していた目線を一瞬だけ助手席に切り替え、衍人は感心した面持ちで言つ。

「でも残念！ その娘じゃないですよ」

「……衍兄イ……」

視線の種類を “ 同情 ” から “ 軽蔑 ” に変更し、

桃乃は運転席の主を見上げた。

「なに？」

「好きな人がいるのになんでそつやつて他の女人と簡単にデートできるの?」

「……ん~……、そう正面切って問われちゃうと返す言葉が無いんだけどさ…………」

背筋を正し、衍人はハンドルを握り直す。そして前方に視線を向けたままで答えた。

「……たぶん俺、本氣で女の子を好きになったことがないからだと思うんだ」

驚いた桃乃は衍人の横顔を見上げる。

「エツ！？ ジャ衍兄イは別に好きじゃないのに色んな女人の人と付き合つてるの！？」

「いやいや違う違う！ もちろん今まで付き合つた女の子達は皆好きだつたよ？ だけどさ俺、“どうしてもこの娘じゃなきゃダメだ” つて思える娘とまだ出会つたことがないんだ。だから今みたいに色んな女の子とたくさん付き合えるんだと思つ

「ふうん……」

そんな曖昧な返事をした後、ほんのわずかの間だけ車内は静かになつた。

助手席の窓から後方に流れ続ける赤い光を眺めていた桃乃はここである事実に気付く。

「衍兄イ、この方角つてカノンと反対方向じゃない？」

「カノン？」

衍人は不思議そうな顔で逆に問い合わせる。

「なんで桃乃ちゃんの高校になんか行くんだい？」

「だつて冬馬は今日部活でしょ？」

「部活？…………ああそつか……なるほど、部活ね…………」

口元に手をやり祐人はそう呟く。しかし車の進路にも速度にもどちらにも変化は起きない。

「えつ違うの？」

「うん、とりあえず行き先は俺に任せてくれないかな？　あつそれよつた、この間のアレ、どうだった？」

「アレって？」

「ホラ、【魂が魅かれあう彼方で】や」

「あああの映画！？」

つい数日前に観たその映画の感動がまだ冷め切っていない桃乃は、声を弾ませて即答する。

「すつぐ良かった！　ラストが特に！」

「ラストってあのシーンだろ？　あの廃墟の跡地に一人で佇んでいるヒトミのすぐ後ろに、いつのまにかテツがそつと立つていてさ、ヒトミの名前を呼んで言つんだよな」

祐人は軽く咳払いをすると、クライマックスシーンのテツの台詞を器用に真似る。

『ほら　僕の言った通りだろ？…………僕達の魂は必ずまたここで魅かれあうって』

口調も声色も主人公のテツにあまりにも良く似ていたので、桃乃は思わずはしゃいだ声を上げた。

「わあっ 衍兄イ、すつ『』く似てる～！ 衍兄イもあの映画見たの？」

「うん、桃乃ちゃん達が見に行つた日と同じ日にね。ペアシートだつたろ？」

「じゃ、あのチケットつて、もしかして衍兄イが……」

「そう、俺が取つたよ。冬馬は部活で毎日帰り遅いしさ、チケットを代わりに取るの頼まれたんだ。俺もあの映画を観に行くつもりだつたからまとめて『』用意させていただきました。良かつたでしょ？」

映画も座席も^{シート}」

そして桃乃の頬が赤らんだのを見て衍人はフフツと笑う。

「あれ？ もしかして冬馬の奴、映画の最中になんかイタズラでもしてきた？ いきなり触つてきたとかさ」

「……！」

「あら～り、その顔は図星みたいだね。ハハッ、しょうがないなあ、冬馬くんは」

車はトンネルを抜け、上空に空が戻る。
少しずつだが夕暮れ空は夜空に切り替わり始めていた。

「で、その時怒つたのかい、桃乃ちゃんは？」

「ううん……。だ、だつて上映中だつたし」

「ああ そうだよね。“ 止めて ” なんて言えないか。映画館の暗闇つてかなり使えるからなあ……。冬馬の奴、そこまで計算してたのかな。どう思つ、桃乃ちゃん？」

「し、知らないつ」

「でもさ桃乃ちゃん、できれば冬馬のちょっとぐらいのイタズラは寛大な心で許してあげてくれると兄としても嬉しいな。なんせやつと桃乃ちゃんとお付き合いできるようになつてさ、あいつとにかく嬉しくてしようがないんだよ。不器用で今まで自分の気持ちを上手く伝えられなかつた分、ここぞとばかりに一気に大解放しているん

じゃないかな」

術人は笑いながらそう言つた後、珍しく少しだけ真剣な表情を見せた。

「でさ、さつきの話にちょっと戻るんだけど」「さつきの話って？」

「【魂が魅かれあう彼方で】のこと。あの映画のテツとヒトミもさ、お互いに“この人じやなきや絶対ダメなんだ”っていう関係だつただろ？俺もいつかああいう恋愛をしてみたいよ。残念ながら俺、そこまで大切に思える女の子にはまだ出会ったことがないんだよね」

術人は上着から煙草を出したが、桃乃を見て思い出したようにまたポケットの中にそれを戻す。

「ね、桃乃ちゃんはどう? 冬馬は桃乃ちゃんの中でテツの位置にいるかい?」

「えつ……？」

いきなりのその質問に桃乃は答えられなかつた。戸惑うその様子を見て術人はまた優しく微笑む。

「……さすがにまだそこまではいってないか。でもね桃乃ちゃん。冬馬にとって、桃乃ちゃんは思いつきりヒトミだよ。いや、もしかしたらそれ以上の存在かもしれないな」

しばらく車は市内を走り続け、車内には一度目の静寂が訪れてい

た。

桃乃は今の衍人の問いを何度も胸の中で反芻する。

(……私にとつての冬馬の位置……?)

しかし考えは上手くまとまらなかつた。

やがて車はある場所からは死角になつてこちらが見えにくい場所に隠れるように静かに停まる。

「ほら、あそこ見てこらん」

衍人が指差す方角を見た桃乃はその光景に驚きの声を上げた。

幹線道路の一部を大幅に壊して「工事中」の黄色のランプが何度も点滅している。

赤いコーンが行儀よく一列に並び煌々と輝くその様は、テリトリー内外に外部者の侵入を頑なに拒む、作業現場からの強い意思表示だ。至る所で激しいドリル音が響き、電気仕掛けのマネキン人形が赤く光る警告灯を無表情で左右に振り続けている。

作業着に身を包んだ男達は、ある者は声を嗄らして叫び、ある者は土を掘り起こし、ある者は重機の操作と、それぞれが全神経を集中させて作業に没頭していた。

「冬馬……！」

ウインドウ越しに見た光景に、桃乃は車内で小さく叫んだ。
街外れの工事現場の一角に冬馬はいた。

上の作業着を脱ぎ、黒のランニング姿で真剣な表情で荷押し車を

押している。

荷車の中身は大小様々の碎かれたコンクリートの破片が山のように積まれていた。

冬馬の顔にはあちこちに土埃が付き、おそらく元は白色だったはずの軍手も今は炭のようだ。真つ黒だ。

「ガラ拾いつていうらしいよ、あれ」

ハンドルに深く覆い被さり、桃乃と同じように外の光景を見ていた衍人が説明する。

「ガラ拾い……？」

「うん。“ガラ”ってああやつて削りだしたコンクリートのことなんだって。冬馬が言つてた」

「冬馬はなぜこんな事をしているの？」

「だって今日桃乃ちゃんの誕生日だろ？　あいつさ、親に貰つた小遣いじやなくて自分で稼いだ金で桃乃ちゃんの誕生日プレゼント買いたいって思つたらしくってさ、この連休中ずっとこの短期バイトに明け暮れてたんだ」

「……！」

衍人の説明に桃乃は絶句する。

「数日間だけの条件で探していたから、なかなかバイト先を見つけるのがやっとだけどね。そんでさ、こういう肉体作業のアルバイトって高校生でもOKのところが多いらしいんだけど、大抵が高三からなんだって。だから困った冬馬は俺になんて言つたと思う？」

“兄貴頼む！　名前貸してくれ！”って頼み込んできたんだ

その時の事を思い出し、衍人は小さく笑う。

「あいつも相当切羽詰まつてたんだろうね。でも結局ここは現場作業のアルバイトで使つてもらえることになつたらしいよ」

「じゃ、じゃあ冬馬は連休中、ずっとこのアルバイトをしてたの……？」

「うんそうだよ。部活が終つたら即行でここに通つてたみたいだねだからここにこなとこ家に帰つてきて飯食つたら、早々に部屋に引っ込んで死んだようになつて寝てたよ」

「……私には部活の用があるって……」

「そりや言えないよ。黙つてハイクオリティなプレゼントを買って桃乃ちゃんを驚かすつもりなんだからさ」

断続的に続いていた耳をつんざくような削岩機の音がやつと止んだ。

「今日はバイト最終日で桃乃ちゃんとの約束もあるから三時であるはずだつたんだつて。でも工事が大幅に遅れててなかなかあがれなくてさ、気付いたらもう四時を過ぎてたらしいよ。それで俺の携帯に焦つて連絡してきたんだよ」

「……そ、そうだったの……」

「あ、冬馬なんか言われてるぞ」

行人の声で桃乃は急いで冬馬の方を見た。

黄色のヘルメットをかぶつた現場監督らしき中年の人物に向かつて何度か頷くと、冬馬は一礼をして軍手を外した。

「終わったみたいだな。後は日当貰うだけか」

しかし冬馬はそのまま「工事現場の脇に建ててある仮設事務所の方には行かず、工事現場の隅に走るとポケットに突っ込んでいた携帯を取り出した。

数十秒後、衍人の携帯が鳴り出す。携帯のディスプレイには「冬馬」と表示されていた。

「ようやく来ましたか。桃乃ちゃん、ちょっと声出さないでいてね

衍人はそう桃乃に伝え、携帯を片耳に当てる。

「冬馬か？ 終わったか？ ああ、今桃乃ちゃんと一緒にいる。うん、今車の中にいるよ。俺は外で煙草タイム中。…………ん？ ああ、安心しろ、バイトの事は何も言つてないよ。…………えつ？ 俺の用事？ ああ、大丈夫だ。相手の子に時間ずらしてもらったから心配するな。そうだ、それとお前の心配、当たつてたよ。俺が百合ヶ丘に行つたらさ、桃乃ちゃん、男一人にナンパされてる真つ最中だったよ。そいつらに強引にどこかに連れていかれるところだつた」

桃乃是焦り気味の表情で電話をかけている冬馬の横顔を見つめる。視界の中央にあるその横顔は微かに揺らぎ、ぼんやりと滲み始めていた。

「…………ああ大丈夫だつて。その前にそいつら追つ払つたから。…………うん、…………うん。分かつた。そうだな。お前焦らないで顔くらいちゃんと洗つてからこいよ？…………うん。…………ああそうなのか。じゃあそうしろよ。すぐ済むだろ？…………うん、分かつた。携帯に連絡くれたらさ、桃乃ちゃんを百合ヶ丘に連れていくから。…………ああ、じやな」

衍人は携帯を切ると愉快そうに桃乃に告げる。

「桃乃ちゃんがナンパされて危なかつたこと話したら、冬馬の奴、すごく焦つてたよ！」

しかしこの衍人の言葉は、ほとんど桃乃の耳には入つていなかつ

た。仮設事務所に一目散に走つて、いく冬馬の姿だけをひたすら目で追う。そんな桃乃の心の揺れを把握しているにもかかわらず、行人はさりげない口調で先を続けた。

「冬馬さ、事務所にあるシャワー室で泥を落として、桃乃ちゃんのプレゼント買つたらすぐ向かうつて。どれ買つかもう決めてるみたいだから一時間もかかるないと思うつてさ」

冬馬に関してのすべての情報を言い終わると、行人は車内のデジタル時計に目をやつた。

時刻は五時四十分を表示している。

身じろぎもせずに、ウインドウ越しからずつと仮設事務所を見つめている桃乃を見た行人の唇の両端が小さく上がった。

「……さてさて、どうですか桃乃ちゃん？　冬馬は少しはテツに近づいたかな？」

車のエンジンキーを回しながら涙目の中乃の顔を覗きこみ、行人は意味深に微笑んだ。

すべてを彼女は理解した

冬馬から再び衍人の携帯電話に連絡が入った時、時刻は六時半を過ぎていた。

「ああ冬馬か。準備OKか？　じゃあ今から桃乃ちゃんを連れて行くよ。……そうだな、今ちょうど近くを走っているから、たぶん十分以内にはそっちに着けると思う。……ああ、分かった」

そう告げると車外で煙草を吸っていた衍人は携帯電話を切り、周囲に目をやる。

「……なーんて言つて、本当はとっくに現場でスタンバイ中なんだけどね」

桃乃と百合ヶ丘公園の駐車場で待機していた衍人は、携帯をジャケットのポケットに戻すと、運転席のドアを開けて中にいた桃乃に声を掛ける。

「じゃ桃乃ちゃん、冬馬から連絡來たから、あと五分くらいしたら行つていいからね。あつ、そうだ。それとさつきも話したけどさ、くれぐれも冬馬のバイトのことを知つてゐる素振りを見せちゃダメだよ？　あいつ、今回のバイトのことを桃乃ちゃんに言つ氣は全然無いみたいなんだ。実は俺、冬馬に固く口止めされてるしね。だから俺の身の安全のためにも、桃乃ちゃんはこの事を一切何も知らないことにしといてほしいんだよ。いい？　できる？」

「……分かった……」

「あらら？　桃乃ちゃんなんかテンション低いなあ。その顔、これから彼氏に逢いに行く女の子の表情じゃないですよ?」

「だつて……あんなとこ見ちゃつたら私……」

「あ、もしかして胸がいっぱいなんだ？」

顔を伏せたままで桃乃は小さく頷いた。

「うん、気持ちはよく分かるけど、でも感動するのはちょっと待つてやつてよ。冬馬のためにもね。あいつ、桃乃ちゃんを驚かせるためにあんなに頑張つてたんだからさ。ね？」

桃乃はもう一度コクン、と頷く。

再び運転席に乗り込んだ衍人は車のエンジンをかけるとハンドルを握り、前方の灯りを眺めながらしみじみと言つ。

「俺、冬馬が羨ましいよ」

「……どうして？」

「ハハツ、どうして？　ときましたか！」

その素直な問いに、（やつぱり桃乃ちゃんはまだ分かつてないな）と思ひながらも、衍人は優しくその理由を説明しはじめた。

「あのさ桃乃ちゃん、この世界には何十億つていう数の人類がいるだろ？」

「う、うん」

「だけどそれだけ多くの人類がこの地球上にいてもさ、限られた人生の中で何もかも忘れてしまうくらい無我夢中になれる相手をその中から見つけ出す事つて、実はかなり至難の技だと俺は思つているんだよね。でもさ、冬馬は桃乃ちゃんつていう、ここまで一生懸命に好きになれる女の子にこんなに早く巡り会えて、しかも今はめでたく両思いになつたから、衍人お兄さんはとっても羨ましいわけですよ」

運転席の上でフウ、と青い吐息が漏れる。

「あーあ、俺って勉強面だけじゃなくて、とうとう恋愛面でもありますに抜かされちゃったんだなあ……兄の立場としては少々悔しいですよ」

衍人は無念そうな声でそう言い終わるとハンドルをピンと人差し指で弾き、再び時刻を確認した。

「…………もつそろそろいいか…………。よしつ、じゃあピンチヒッターの騎士ナイツの役目はこれでおしまい！ も、冬馬待ってるよ、行っておいで。あ、あと十六歳のお誕生日おめでとづ、「

「ありがと、衍兄イ…………！」

桃乃は衍人の車から急いで降りると一度も振り返らずに真っ直ぐに噴水の方角に走つて行つた。

走り去つてゆく桃乃の背中を車内から見送り、本日一番の功労者は安堵の息を吐く。

「…………さて、今度はこちらの番ですね」

携帯で女友達にこれから迎えに行くと連絡した後、衍人は軽やかに車をスタートさせた。

空に夜の帳が降りた。

百合ヶ丘公園にも様々な光が溢れ出し、公園内中央に作られた、ライトアップされた噴水が橙色の光を纏い出す。

夕食時の時間帯のせいか、公園内は今はまばらな数しか人影がない。噴水の近くのベンチに腰をかけていた冬馬は走ってきた桃乃の姿を見つけ、自分も慌てて立ち上がり駆け寄った。

「悪イ桃乃！ こんなに遅くなっちゃって！」

冬馬が片手で揉むようにして謝る。反対の手には水色の小さな紙袋が握られていた。

「…………ううん、いいの……。よ、用事があつたんでしょう？」
自分を待っている冬馬の姿を見た瞬間からこんなに胸が苦しいのに、蝶るとさらに桃乃の胸の苦しさは増してゆく。

「マジで」めん！ でももう桃乃を家に送らなきゃいけない時間だな……」

「あのね、今日お母さん八時までに帰つてくればいい、って言われてるの」

「マジ！？ それじゃあと一時間くらいは話せるなー、びつかで暖かいもんでも飲むか？」

「ううん。ここでいいよ」

「よし、じゃあもつと上の方に行こうぜー！」

冬馬は桃乃の手を取り噴水の奥にある階段を昇った。水色の袋がグラグラと楽しそうに揺れている。

丘の部分に上がり、綺麗に刈られた芝生の上に一人は腰を下ろした。この公園 자체が高台の上に作られているので、眼下には一人が住む街の夜景が煌いている。

「ほら桃乃。これ誕生日プレゼントだ。誕生日おめでとう。先に一
コ上になつちまつたな」

十一月生まれの冬馬は桃乃に水色の紙袋を渡す。

「ありがとう……」

桃乃は胸一杯の感謝でそのプレゼントを受け取った。
「開けてもいい?」

「ああ」

紙袋と同じ水色の包みを中から取り出すと桃乃はそれを丁寧に開ける。

やがて「カワイイ……」といづ嬉しそうな声がその口から漏れた。

プレゼントの中身はシルバーのネックレスだつた。

その真ん中には小さな一つのハートが絡まりあつてついている。

「ほら、桃乃見てみろよ」

冬馬は自分のシャツの上を少しあだけて桃乃に自分の胸元を見せる。そこには桃乃と同じ型のネットレスがつけられていた。

「俺の方にはそのハートマークの飾りついてないけどな」と言いながら冬馬ははだけたシャツを元に戻す。

「俺知らなかつたんだけどさ、カノンじや指輪や装飾品つて禁止されてるんだつて? でもネットレスならシャツ脱がなきゃ分からないからこつそりつける奴、結構多いらしいぜ。ウチのキャプテンから聞いたんだ。でさ、キャプテンも彼女とお揃いのネットレスつけてるらしくつて、それ聞いてプレゼントはこれにしようと思つた

んだ。俺、桃乃には今まで大したもんをやつたことなかつたからなあ。あんな石口口ぐらいでぞ」

冬馬はそう言ひと満足そうに笑つた。そしてそのまま夜空を見上げる。

「な、桃乃。覚えてるか？ 昔この公園に星空観察に来ただろ？」

「……うん。小学生の時よね。シリウスがすごくきれいに光つてたのを覚えてる」

「確かあれ、四年の時で理科の野外授業じゃなかつたか？ 天体望遠鏡や双眼鏡を先生が持つてきて、真冬の時期だつたからすっげー寒くてさ。桃乃、鼻の頭やほっぺを真つ赤にして夜空を見てたよな」

そう言われて当時のある光景が懐かしくも不思議な記憶とともに甦る。

小学四年の野外星空観察。

白い息を吐きながら青白く輝くシリウスを見上げていた桃乃の前に冬馬が駆け寄ってきた。

「ほら桃乃。これつけてろ」

当時十歳の冬馬が自分が巻いてきていたマフラーを外し、同じく十歳の桃乃に差し出す。

「え？」

「顔、真つ赤だぞ。お前すぐに風邪引くからな。ほら

「ううん、いいよ。それ冬馬ちゃんのマフラーなんだから……」

そう言われた冬馬は急にムツとした表情になり、遠慮する桃乃の首に生成り色のマフラーを強引にグルグルと巻きつけた。

「いいからつけてろつて！ それと俺の事を “ 冬馬ちゃん ” って呼ぶのはもう止めろよなー 」

そう乱暴に言い放つと、冬馬は他の男子と共にさうに公園の上に登つて行つてしまつた。

階段を駆け上がっていく冬馬の後姿を、マフラーにくるまれた桃乃は戸惑いながら見送る。

今まで “ 桃乃ちゃん ” と呼んでいたのに、この星空観察の夜を境に冬馬は桃乃を呼び捨てにするようになった。そしてもう自分の事を “ 冬馬ちゃん ” と呼ぶなと言つてきたこの夜の事は、襟元に巻きつけられたマフラーの暖かい感触と相まって、五年以上経つた今でも桃乃の記憶の中に不思議な感覚としてぽんやりと残つていた。

「桃乃、それ、俺がつけてやるよ」

冬馬の言葉で過去の回想が中断され、桃乃はハツと我に返る。手の中にあつた水色のギフトボックスから大きな手がネックレスを掴み取つた。

冬馬は身を寄せて桃乃の首に手を回す。

反射的に一瞬桃乃は身を硬くした。

顔の横を両腕で覆われ、冬馬の大きい手の感触が体越しに伝わってくる。すぐ目の前のその広い胸を見るともうお互い十歳の小さな子供ではないことを桃乃は改めて感じていた。

「この金具ちつちつやくて付けずらーいな……」

胸が痛かった。

冬馬が何かを言つたびに、押し潰されるように、締め付けられる
ように、桃乃の胸は痛む。
このプレゼントを買つ為に冬馬がどれだけ努力したかを知つて
る桃乃は、真下で揺れるネックレスを見るともう何も声が出せなく
なっていた。

「よし、ついた！」

冬馬が嬉しそうな声を出す。しかし俯いたままの桃乃を見て急に声
のトーンが落ちた。

「桃乃、これ気に入らなかつたか……？」

桃乃は黙つて冬馬の両手を取つた。

そしてその掌をそつと自分の方に向ける。

その手はとこりじりじり豆が出来ていて、中には切れて血が滲ん
だ跡もあつた。

「…………これどうしたの…………？」

「ああこれが？ バスケの練習でキャプテンにめっちゃじごかれて
た。でも全然大したことないよ

掌を隠すように下に戻しながら冬馬はさりげなく嘘をつく。ついに我慢し切れなくなつた桃乃の肩が小さく震え出した。

「……冬馬の……」

「ん？ なッ！？ な、なにお前泣いてんだよ！…？」

桃乃の両頬からは感動でポロポロと涙がこぼれ始めていた。

「冬馬の嘘つき……！」

桃乃はそう言いながら冬馬の胸にトン、と体をもたせかけた。

「嘘つきって……だからなんで泣いてるんだよ！…？」

「私……、私、分かつたの……！」

「あ？ 分かつたって何がだよ？」

桃乃は泣きながらその先を口にした。

もうなにもかも分かつていたつもりだったのに、あらためて桃乃は氣付く。

風邪を引かないようにマフラーを貸してくれたあの時だけではなく、いつも冬馬は自分の事を気に掛けていてくれたことを。例えぶつきらぼうでも、少々押し付けがましくても、いつもこの幼馴染は、自分だけにとても優しかったことを。

冬馬の胸に体を預け、しばらく桃乃は声を出さずに泣き続けた。

「なあ桃乃、今はどういう意味だよ？」

しかし桃乃はただ泣き続けるだけで、その問いには答えない。桃乃が泣いている意味が全く分からぬ冬馬は、困惑した顔で震えるその背中をただ抱いていてやることしかできなかつた。

その日の深夜零時を過ぎた頃、帰宅した衍人にまた部屋のドアを開けて冬馬が呼びとめる。

冬馬の部屋の中に入った衍人は上着を脱いで手に持ちながら心配そうに弟を見た。

「まだ起きてたのか冬馬。お前今日バイトで疲れてるだろ?」

「帰つて来てからちょっと仮眠とつたんだ。それより兄貴今日サンキューな

「ああいいよいよ。気にするな

「相手の人、怒つてなかつたか?」

衍人は余裕の表情で笑う。

「大丈夫、大丈夫！ 女性の扱いには長けてるから俺。それに実際桃乃ちゃん危ない目に遭つてたからさ、やっぱり俺が行つて良かつたよ」

「兄貴、そいつらどんなヤツだつたんだ？」

「もう覚えてないな。顔も全然イケてなかつたしさ。それに桃乃ちゃんも脅えてたし」

「……俺そこにいたら絶対そいつらぶん殴つてた」

「ハハツお前ならそうだろうな。俺は平和主義者だから彼らには簡単に引きとつてもらつたけど」

「あ、あとで……」

「ん？」

冬馬は術人から視線を外し、言いにくそうに尋ねる。

「……お、俺が行くまで兄貴達どこに行つてたんだ？」

「どこの、つて、公園付近を軽くドライブしていたよ。それがどうかしたか？」

「で、桃乃と何喋つてたんだよ？」

「何つて、別にとりとめもない話題ばかりだつたよ？ 学校のこととかさ」

視線を外したまま冬馬の質問は続く。

「……桃乃は俺と付き合つことになつたこと、兄貴に何か言つてたか？」

「んー、その話はあまりしなかつたなあ。お前と付き合つことになつたばかりだし、桃乃ちゃんも恥ずかしかつたんじゃないかな？」

「ふうん」

冬馬は落胆した声を出さないよう必死に平静を装つた。

「あ、それと俺のバイトのことは言つてないよな？」

「ああ もちろんだよ。だつてこの間お前と約束したじゃないか」

ポリグラフにかけても恐らく針は微塵も触れないのではないだろうかというぐらいの完璧さで、術人は巧みに嘘をつく。

「それよりどうだ、桃乃ちゃんはネックレス喜んでくれたか？」
その話題が出て冬馬の顔が再び困惑氣味の表情に変わった。

「ああ、一応喜んでたみたいなんだけど……、でもなんか桃乃の様子がおかしかったんだ」

「へえ、どんな風だつたんだ？」

本当は心当たりがあるくせにわざと術人はそう尋ねる。

「それがアイツ途中でいきなり泣き出してさ、俺に“嘘つき”とか、“冬馬は私にとつてテツなんだつて分かつた”とか言つんだ。俺、桃乃がなに言つてんだかサッパリ分かんなくつてさ」

するとそれを聞いた術人は驚いた表情で一、二度瞬きをする。

「へえ…… そうか……、桃乃ちゃんがそう言つたか……」

そう感慨深げに呟くと術人は二口シと大きく微笑み、祝福代わりに冬馬の背中を左手で勢いよく叩いてやつた。
「いやあ～おめでとさんつ！」

「痛てッ！」

右手を後ろに回し、叩かれた背中をさすりながら冬馬が顔をしかめる。

「な、なんだよ兄貴！　いきなりぶつ叩きやがつて！　それどうい

う意味だよ！？」

「えーとですね、冬馬くん、君はもう一度【魂が魅かれあう彼方で】を一人で観に行つたほうがいいな。以上です！」

そんな心優しくも少々不親切なアドバイスを残し、自分の部屋に戻ろうとした衍人の背中越しに畠然とした声で呟く冬馬の独り言が聞こえてくる。

「……やべえ……兄貴の言つてる意味も全然分かんねえよ……」

衍人はこみあげてくる笑いのために震えそうになる声を必死に絞り、「おやすみ」とだけ答えると廊下に出る。そしてその笑いを噛み殺す代わりに小さく両肩を揺らしつつ、静かに自室に戻つていつた。

破られた規則【前編】

長い連休も終わり、休みを満喫した生徒や教師達が再びカノンへと戻つてくる。

早朝七時。

この日の天候はみなみと真水が入ったバケツを盛大にひっくり返したかのような大雨だったが、黒岩は定刻通りのこの時間に理事長室のドアを開けた。

しかし中に一步足を踏み入れた瞬間、眉間にわずかな立て皺を寄せて目を凝らす。

先々週の時と同じように、またしてもデスク前に人影を確認したのだ。

「お前か……」

黒岩の声に振り返ったのは縁だった。

「おはよう」ぞこます、黒岩理事長

「おはよう」

十日前の朝、誠吾が単身でここへ現れた時とよく似たこの光景に、黒岩はかすかなデジヤ・ヴを覚えながらも縁を応接セットのソファへ座るように促す。

「いえ、ここで結構です」

戻ってきたその返答までもが誠吾の時とまったく同じ事に、黒岩の既視感が益々肥大してゆく。

「そうか……じゃあここで聞こつ

黒岩は自分のデスクに座った。

「なんの話しだ？」

「これを受け取つて下さご」

縁が差し出したものは「辞職願」と書かれた封書だつた。

田の前の光景全でが十日前のあの状況を逸れるところなく忠実になぞり続けてゐる展開に、黒岩の背筋にゾクリと冷たいものが走る。

「ハ、これはどういう意味だ？」

「どうこう意味も何もありません。カノンを辞めます。今までお世話になりました」

縁は軽く一礼をすると理事長室を出よつとした。

「待ちなさい、縁！」

歩き出していた靴音がピタリと止まつた。

強い口調で呼びとめられた縁は振り返ると黒岩を睨み、声を荒げる。

「黒岩理事長！あなたは仰いましたよね？カノンの中では必ず“理事長”と呼ぶよつてーとー、そつ仰つたあなたがなぜ私のことを縁と呼ぶのですか！？」

鋭い声で指摘され、普段は無表情な黒岩の表情がほんのわずかだけ歪んだ。

「理事長はどんな時も『自分の決めた規則に従うのじゃつー』？あなたは今その規則を自ら破つたのですよー。」

「……原因は矢貫先生か……？」

黒岩はボソリと誠吾の名前を口に出す。

縁は誠吾の名前が出ると落ち着きを取り戻し、静かな声に戻った。

「そうです。私はあの人を勝手に誤解し、勝手に遠ざけていました。でも理事長が口止めしていた本当の事実を私は知つたんです」

「……それは早乙女先生の件だな……？」

縁が頷くのを見ると黒岩は銀縁の眼鏡を外して軽く目を閉じ、眉間を指で押さえた。

そしてしばらく間を置いた後、低い声で問う。

「……縁、お前あの男が好きなのか？」

縁は黒岩の前ではつきりと誠吾への想いを肯定した。

「はい」

「……ここを辞めてどうするつもりだ？」

「黒岩理事長、私は今までこのカノンの、いえ理事長、あなたの規則に従つてきました。理事長の規則はいつも正しく、絶対なものだと思つていました。しかし、今は違います」

縁は黒岩を見据えて続ける。

「ですが理事長の考え方全てを否定しているわけではありません。若く、この社会をまだ理解しきっていない生徒達に、正しい方向を指示する程度の規則は必要だと思います。でもある人が理事長に言ったように、一辺倒で杓子定規なやり方だけでは解決できない問題は、この社会にも、そしてもちろんこのカノンの中にも存在すると私も

思こまか

「…………」

縁にそつ告げられた黒岩は無表情に戻り、沈黙する。

「私、あの人気がここを去つてから今まで色々考えました。そしてあの人人が自分の良心に従いこのカノンを去つたように、私も教師の立場を捨てて女の立場を取ろうと決めたんです」

「……考え方ではないのか……？」

「ありません」

縁はあつぱりとそつ面言すると踵を返し、理事長室の扉を開けた。

「理事長、お世話になりました。今日は最後まで授業を受け持ちますので代わりの先生を頼まなくても結構です。では失礼します」

黒岩は何も言わずに、縁が退室するのをその場から見送った。廊下を歩き去つてゆく高らかな靴音は段々と小さくなり、窓ガラスを叩きつける強い雨音だけが広い理事長室内に留まる。

黒岩は強く目をつぶり、椅子の背もたれに身を投げ出すよじによりかかった。そして誠吾が去つて行つた時よりも重く深い息を長々と吐く。

眉間から手を離し、反対の手に持つていた眼鏡をデスクの上にゆっくりと置いた時、金属のフレームがデスクと触れ合つ冷たい音が黒岩の鼓膜に寂しく響いた。

定例会議の日を除き、特別な用事が無い限り必ず午後六時まで理事長室にいる黒岩は、珍しく五時前にカノンを後にする。

外は相変わらず叩きつけるよがりなさやぶりの雨だった。

黒岩はタクシーを拾い乗り込むと、一枚のメモを見て自宅とは違う住所を告げる。

フロントガラスを滝のように流れる雨を見ながら黒岩は真っ直ぐに背筋を伸ばし、微動だにせずに後部座席に身を置いていた。

やがてタクシーは比較的まだ築の新しそうな一階建てアパートの前に着く。

その作りから見て1DKか2DKのみの一人暮らし対象の建物の前で、タクシーの運転手にきつちりの乗車料金を支払うと黒岩はその中へと入った。

上下階しかないアパートなので当然エレベーターは無い。

階段で一階に上がり、ドアにく205とナンバーが打たれた部屋をノックする。

数秒後、応答無しでいきなりドアが開いた。

咥え煙草で出てきた人物は田の前に佇む黒岩の姿を見ると相当に驚いた様子を見せる。

「黒岩理事長ッ！？ ど、どうして俺の家に…？」

「誠吾の口の端からまだ火のついていない煙草が音もなく落ちた。

「今お邪魔してもよろしいですかな……？」

「あつ、ビツ、ビツぞ！」

玄関先に落ちた煙草を慌てて拾い上げ、誠吾はこの突然の来訪者を部屋の中へと通す。

黒岩は誠吾が勧めた座布団の上に座ると、湿り氣を帯びたページのレインコートを裏返して置み、脇に置いた。

「今日はすごい雨ですね」

「はつはい！ あつあの理事長、インスタントコーヒーしかないんですけどいいですか？」

「ああどうぞおかまいなく、矢貫先生」

誠吾がインスタントコーヒーを淹れている間、黒岩は誠吾の部屋の中をゆっくりと見回した。

男の一人暮しらしく、適度に乱雑な室内に、テーブルの上にあるガラスの灰皿が吸殻で山盛りになっている。その二口チンの残骸を見た黒岩が一言苦言を呈した。

「矢貫先生は少し煙草をお控えになつたほうがよろしいですね。お吸いになる本数があまりにも多すぎるような気がするのですが」「大きさも形も揃っていない」一つのマグカップにインスタントコーヒーを淹れ、その一つを黒岩の前に置きながら誠吾が決まり悪そうに言葉を濁す。

「俺、ペースモーカーなもので……」

「今日はアポも取らないでいきなり訪ねてきてしまつてすみませんでした」

黒岩は自分の非礼を丁寧に詫びた。

「いえ……何か俺に用でしちゃうか？」

「ええ」

黒岩は大きく息を吐く。

「……実は今朝、縁が辞表を出してきました」

「え？ 縁って……もしかして柳川先生のことですか？」

「そうです」

「柳川先生がなぜ辞表を……」

そう言いかけた誠吾はハッとすることに気付き、勢い込んで尋ねる。

「いつ、今なんで理事長は柳川先生のことを “ 縁 ” って呼んだんですか！？」

黒岩は誠吾と視線を合わせると静かに言った。

「……縁は私の姪なんですよ」

「め、姪！？」

「そうです。私の妹の一人娘です」

「柳川先生が理事長の姪……」

呆然とした様子で誠吾は呟く。まだその言葉の意味を完全には理解し切っていないようだ。

「柳川というのは縁の父方の姓なのです。私の妹の夫、つまり縁の父親は縁がまだ小学生の時に病氣で亡くなってしまいましてね……。それ以来、私はあの子の父親代わりとして色々と手助けしてきたのです。おかしな話かもしれません、小さい頃からあの子の面倒をずっと見てきているせいで、今では私は縁の本当の父親のような気分でいるのですよ」

誠吾はこの衝撃の事実を口をあんぐりと開けて聞いていた。

黒岩はフウとため息をつき、続きを語り始めた。

「……その後、私は成長して教職の資格を取った縁をカノンに呼び、英語担当の教師にしたのです。カノンでの縁は規則に忠実で私の言うことに今まで一度も異を唱えたことはありませんでした。しかし……」

黒岩はそこで一寸言葉を切り、正座をしている誠吾に足を崩すようになに言った。

「あなたが現れて縁は変わってしまった……」

黒岩はかすかに寂しそうな表情を見せる。

「矢貫先生、あなたは『ご自分の歓迎会の時に縁に結婚してくれ、と迫りましたよね?』

「は、はい」

誠吾は正座のままで話しが聞こえている。

「あの時からですよ、縁が変わったのは……。しかしカノンの規則で教職員間の恋愛は禁止しています。私はカノンの理事長として當時あなたにはもちろん、縁にも厳しく指導しました。しかし縁を幼い頃からずっと見てきている私には分かつたのです。縁が矢貫先生のことを好いていることを」

黒岩はそう言つと大きなマグカップを取り、かなり濃い目のインスタントコーヒーをブラックのままで一口飲んだ。

「しかしあの厳重戒告以来、矢貫先生は縁に表立つて何もしなくな

りましたし、私としてももうそれ以上何もすることができなくなりました。ですが、縁があなたに惹かれ始めているのは事実でした……

窓の外で大きな雷が何度も不気味に鳴る音が響く。

「……そこにあの早乙女先生の事件が起きました。当時は私も他の教職員の方達と同じように矢貫先生が織田志穂の子供の父親かと思つたこともありました。しかし早乙女先生の告白で真実が分かり、すべてが解決しました。そして私はあなたにこの件を絶対口外しないよう念を押しましたね？」

「は、はい」

と再び誠吾は頷く。

「それは退職、という形で責任を取られた早乙女先生をこれ以上晒し者にする必要は無い、と判断したのと、もう一つは私の身勝手な気持ちからでした……。当時、職員の間では織田志穂が病院に出した墮胎用紙に矢貫先生の名前があつたという噂で持ちきりでした。この時私はふと思つたのです。ここで矢貫先生に真相の口止めをし、噂をそのままにしておけば、縁の矢貫先生への気持ちが冷めるのではないかと……」

黒岩は中身が冷めはじめているマグカップに視線を落とす。
かすかに手が震えたのか、カップの水面に揺らめきながら映るその顔は罪の意識で大きく歪んでいるように見えた。

「その後、縁は矢貫先生のサインの噂は本当か、と私に訊きにきました。実際それは事実でしたし、私は“そうだ”と答えました。しかしその後の真実を敢えて縁には教えませんでした。縁には恋愛などにうつつを抜かさず、いざれは私の後を引き継ぐ教職者としてカノンで生徒をしつかりと指導してもらいたかった……。そ

して私の思惑通り、縁の気持ちはあなたから離れていったよつて見えました。でもそれは違つたのです」

「ち、違つたつてどういうことですか……？」

「縁はそれでもずっとあなたのことが好きだつたようです。ただ私が織田志穂の子供の父親を矢貫先生だと思い込ませたことによつて、自分の気持ちを封じ込めていただけだつたのです。今朝、縁は辞職願いの届けを私に渡しながら言いました。矢貫先生が自分の良心に従い、このカノンを去つたように、私も教師の立場を捨てて女の立場を取る、とね」

「柳川先生が理事長にそんなことを言つたんですか！？」

「ええ……。私は理事長という職に対し、不適格者だつたのかもしません。生徒や教師には自ら決めた規則を押し付け、それでいて自分はその規則を自分の都合の良いように利用していたのですから……」

そう言い終わると黒岩は薄っぺらい座布団の上で居住まいを正す。

「……矢貫先生、ひとつだけお聞きしてもよろしいですかな？」

「はつ、はい」

同じく居住まいを正しながら誠吾は緊張した声を出した。

「あなたはまだ縁のことが好きなのですか？」

なぜか誠吾は俯き、その返事をためらつた。

そんな誠吾を見た黒岩がやんわりと諭す。

「矢貫先生。あなたの縁に対する今のお気持ちだけを素直にお話して下さればよいのですよ。先生がお持ちになつてゐる良心の痛みや罪悪感などは一切加えずに、です」

それを聞いた誠吾はスッと顔を上げ、すぐに答えを口にする。

「好きです」

「そうですか……」

黒岩は静かに咳き、視線を下に落とす。
カップの水面に再び大きな乱れは起らなかつた。

破られた規則【後編】

静まり返った室内の中で雷音と激しい雨音だけが響き渡る。短い沈黙の後、黒岩が次の言葉を発した。

「……矢貫先生、笹田梨絵の処分の件ですが十四日間の停学処分に致します。学審会にかけた後ですがね」

「ほ、本当ですか、理事長！？」

誠吾が信じられない、というように叫ぶ。

「ええ。一週間は少々長い停学とお感じになるかもされませんが、本人の体調の面を考えればちょうど良いでしょう」

黒岩はゆつくりと噛み締めるように言葉を繋ぐ。

「矢貫先生、定例会議であなたが私の机を叩き、“規則でしか物事を考えられないのか”と仰った言葉は本当は内心とても堪えていたのですよ」

「もつ申し訳ありません！」

誠吾が慌てて頭を下げた。

「いえ、矢貫先生が謝ることではありません。確かにそれは事実だつたのですから。今回あなたや縁がカノンから去つていこうとしているこの現状を見て、私は規則というもの自体にあまりにも頼り過ぎ、そして重きを置き過ぎていたことが分かったのです」

黒岩は座布団から下り、再びレインコートを手に取った。

「先生、今夜この後は何か」「予定はありますか？」

「い、いえ。何もないですが」

「では少々お時間を頂いて私に付き合つていただいてもよろしいで

すかな？」

「はつ、はい」

「では参りましょ。支度をなさつてトセー」

黒岩は部屋から誠吾を連れ出すと外で再びタクシーを停め、乗り込む。

タクシーは雨の降りしきる街を三十分程走った後、指定された場所で停まった。

「一緒にいらしてトセー」

黒岩はタクシーをそのまま玄関先に待機させると、誠吾を引き連れてその建物の中に入る。

「矢貫先生、申し訳ありませんがもう少々そちらに下がっていただけますか？あなたが部屋のモニターに映ってしまいますので」誠吾が監視カメラのファインダーに入らないよう、斜め後方に立つように指示した黒岩は、インターフォンのボタンを押して部屋の主を呼び出す。数秒後に応答があり、監視カメラが作動し始める音がした。

「縁、私だ」

インターフォンに向かつて黒岩が答える。

「……伯父さん……」

「話があつて来た。開けてくれるかい？」

少しの沈黙の後、「どうぞ」という声がしてインターフォンは切れた。同時に自動ドアのロックが外れ、ドアは静かに横に開く。黒岩は後ろを振り返り、誠吾を促した。

「さあ、では行つて来て下さい」

「おっ、俺だけですか！？　あの理事長は……？」

「私はここで失礼します」

「ええっ！？　で、でも俺が一人で行つても……」

「矢貫先生、あなたは先ほど私に仰いましたよね。縁のことが好きだと。縁も同じ気持ちです。今まで私はカノン理事長の立場からあなたと縁の仲を認めない立場を貫いてきました。しかし今の私は縁の父親代理としての立場であなたをここにお連れしたのです。ですから……」

「で、でも……」

「……」で黒岩は初めて軽く微笑み、縁の部屋番号を伝えると誠吾をドアの内部側へ立たせた。

「矢貫先生、あなたは本日まで有給休暇扱いにしております。ですから明日からまたカノンへ来て下さい。それと遅刻は絶対にしないように。そろそろ遅刻魔の汚名は返上して下さい」

黒岩はゆっくりと一步後ろへ下がる。

「縁にもこの事を伝えておいて下さい。あなた達の辞職願はもう焼却処分しました。では……」

ガラス扉が音も無く再び閉じられ、待機させていたタクシーに足早に乗り込み、黒岩は去っていく。

（理事長……）

雨の中、赤く光る一つのテールランプに向かって誠吾は頭を下げ、その場で深く一礼をした。

縁はオートロックを解除すると、静かにモニター ボタンを押して通話を切る。小型画面に映っていた黒岩の顔が即座に消えた。

(今日の辞表を受け取れないとでも言いにきたのかしら……?)

しかしカノンを辞めるという縁の意思是固く、揺らぐことはなかった。

あの時誠吾と最後に話した情景を思い出すだけで目に涙が浮かびそうになる。

自分がカノンを辞めても何も状況は変わらないかもしねれない。
あの人はもう私を受け入れてくれないかもしねれない。

そんな不安に脅えながらも縁はカノンを辞めることを決断し、そしてカノンを辞めた今、一日も早く誠吾の元に行こうと決意していた。

先程とは少し違ったトーンで来客を知らせる音が鳴る。

縁は玄関に向かい、一旦視線をドアノブに落とすと鍵を外してドアを開けた。視線を正面に戻し、廊下に立っている人物を見た縁は驚きで口に手を当てて小さく叫ぶ。

「矢貫先生ッ！？」

「ど、どうもこんばんは……」

誠吾は大きな体を小さくしながら照れ臭そうに挨拶をする。

「どうして矢貫先生がここに…？ 黒岩理事長はびつたされたのですか！？」

「り、理事長はお帰りになられました」

「なぜ！？」

「そつ、それが話すと少し長くなるんですが……」

そこで縁は自分達が話している場所が玄関先だといつこと思い出す。

いきなり誠吾が現れたことで思わず取り乱してしまった自分を恥らいながら、縁は「とりあえず中にお入りください」と促した。部屋の中は女性の部屋とは思えないほど無駄な物が何一つ無く、そのシンプルさにこの部屋の持ち主の性格が表れていた。縁がコーヒーを淹れている間、手持ち無沙汰になってしまった誠吾はそんな部屋をビートなく遠慮しながらも物珍しそうに見回す。

「どうぞ」

縁は湯気のやらめく暖かいコーヒーカップとソーサーを誠吾の前に置いた。

「あ、いただきます」

田頃インスタント物しか飲んでいない誠吾にとつて、ドリップしたコーヒーはとても美味しく感じられた。

「これすぐ温いです！」

「矢貫先生はいつもインスタントばかりお飲みになつてらつしゃいますものね」

縁はそう言いながら小さく笑つた。

久々に縁の笑顔を田の井当たりにした誠吾は、無意識に正直な気持ちを口にする。

「俺、先生が笑うところ久しぶりに見ましたよ

縁はそれを聞くと少し寂しそうな声で顔を逸らした。

「もう先生と呼ぶのは止めて下さい。実は私、今日……」

「辞職願を出したんですね？」

驚いた縁は逸らしていた顔を再び誠吾に向ける。

「なぜ矢貫先生がそれをご存知なの！？」

「黒岩理事長から聞きました」

「えつ……理事長から……？」

「あなたは黒岩理事長の姪っ子さんなんだそうですね」

カツプとソーサーが不自然にぶつかる音がした。

自分と黒岩だけしか知らない、隠していた事実を誠吾が知っていることに驚いた縁が息を呑む。

「さつき、俺の家に突然理事長が来ましてね、俺にそのことを話されたんです」

「な、なぜ……！？」

しかし誠吾はそれには答えず、次の決定事項を伝えた。

「そして笹田は一週間の停学処分になるそうです」

「停学？ 退学じゃないのですか？」

「はい」

「まさかあの理事長が……一体どうして……？」

「あなたのためですよ」

「私のため……？」

「理事長は仰つてました。“自分は縁の父親代わりだ”と

「…………」

「理事長は俺とあなたがカノンに戻つてくる」とを希望されます。

俺達の辞職願は焼いてしまったそうです」

誠吾は暖かいカップをソーサーの上に戻し、黒岩が言つた言葉を
できるだけ正確に伝える。

「俺をここへ連れてきた後、理事長はお帰りになられました。そし
て俺に言つたんです。今まで自分はカノンの理事長の立場からあな
たと俺の仲を認めない立場を貫いてきた、しかし今はあなたの父親
代理としての立場で俺をここに連れてきた、と」

「伯父さんが……そんなことを……？」

「柳川先生。俺は今回あの人人がカノンの理事長としてではなく、あ
なたという一人の女性の父親代理として、俺に自分の気持ちを隠す
ことなく話して下さったことに感動しました。それに筈目が退学処
分にならない以上、俺がカノンを辞める理由はもうありません。理
事長から戻れと言われた以上、俺は明日から戻ろうと思います」

「本当ですか！？ 本当にカノンへ戻られるのですか！？」

「はい。俺は今まで理事長のことを、「」自分の決めた規則の枠内で
ないと何も出来ない冷徹な人間だと思っていました。しかし、理事
長は規則の枠外を超えてまでも誰よりもあなたのことの大目に思つ
方でした。充分すぎるほどそれが分かつたんです」

誠吾は緑の方へ大きく体を向け、ゆっくりとソファから立ち上がる。

「でもこれで筈目がカノンに残ることができても、俺の抱えた罪が
すべて消えるわけではありません。ですが……、ですが俺は、この
先それを背負つたまま、前を見て生きていこうと思います」

日に焼けた右手が緑の前に差し出される。

「柳川先生、戻りましょう。俺と一緒に」

高熱に浮かされたかのように呆然と自分の手を見つめる緑を見下
ろし、誠吾は三度目の告白をした。

「あなたが好きです。いえ、愛しています」

「……矢貫先生……」

乾ききつていた心の砂漠にその言葉は急速な勢いで染み込んでゆく。

緑の両目からあの夜のように涙が溢れ出した。

目の前に差し出された手にかすかに震える自分の手を重ねると、浅黒い手はたちまちのうちに緑の手を握り締め、力強く引き寄せる。

「お、お願い、もう一度と私を置いていいとしないで……！」

それより先は口にすることが出来なかつた。

誠吾は引き寄せた緑の細い腰を力強く抱き締め、顔を上に向けさせると返事の代わりにゆっくりと唇を重ねる。

一切の余計な装飾のないこの部屋で物音までもが消えた。

やがて口付けを終えた後、溢れてくる緑の涙を誠吾は指で丁寧に拭い、場の空気を変えるためにわざと陽気な口調で言つ。

「あの、頼みますからもつ泣かないでくれませんか？俺、この間も言いましたよね？あなたはもつと笑つていて下さって！」

しつとりと濡れた長い睫を瞬かせた後、愛しい相手の要求通りに緑は涙顔で精一杯微笑んだ。

「こうですか？」

その濡れた笑顔を見た誠吾は「いいですね」と頷く。

一瞬の間の後、二人はお互いの顔を見合させて小さく笑いあつた。

同じ皿線の二人

カノンの年間行事予定の中で、五月は比較的大きなイベントのない月だ。その中で唯一、校外で行う“グリーン・スケッチ”は、今月の最大行事でもある。

その名の通り皿の前の自然をスケッチするという、教科で分類すれば美術が該当するこの行事は、学年毎に皿にさをずらして毎年行われているものだ。

本日は一年生が参加する日で、桃乃と沙羅は女子クラス一組と一緒に組合団のバスで隣同士に座り、お喋りに興じていた。

「モモ、あれからママのストロベリー・パイ作ってみた?」

「ううん、まだ。沙羅のママにレシピを貰った後に作ってみようかなって思つたんだけど、お母さんが喜んじゃつてもう先に一度作られちゃつたの」

「美味しかつたー?」

「うん。でも沙羅のママの味にはまだちょっと及ばなかつたかな」「ママはあのパイの達人だからね。で、モモはいつチャレンジしてみるの?」

「うへんどうしよう、この間食べかけつたばかりだからなあ……

「モモが食べるんじやなくて、冬馬にあげればいいじゃない?」

と沙羅は桃乃の腕を突つく。

「……なんか最近の沙羅つて冬馬のことばかり言つよね……

「だつてさ、モモと冬馬が今どこまで進んでいるのか気になるんだもんつ」

「ど、どいめでつて……

座席シートの上では桃乃は小さくたじろぐ。

「まあ当然キスぐらこまではもつしてると黙つただけで、その先はー？」

「さつ、沙羅つてば！」

慌てて桃乃は周囲を見回す。

「これだけ周りがうるさかつたらあたし達の会話なんか聞こえてないってば。現にあたし、いつもより小声で喋つてるでしょ？」

確かに女子ばかり満載のこのバスは、周囲のやかましいほどの嬌声がサラウンド効果をプラスして見事な大音響を奏でている。

「でもさ、冬馬つて本当にカッコイイよね。背はあんなに高いし、スポーツマンだし。顔だつてもちろんいいもん。あとは性格がよければパーフェクトじゃない？ 冬馬つてどうじつ性格なの？」

「冬馬の性格？」

桃乃は少しの間考え込む。

「うーん簡単に言つとね、とつとも単純で、すつじく強引で、しかもケダ……」

「つかり『ケダモノ』と言いつになつた桃乃は慌てて口をつぐみ、残りの言葉を飲み込んだ。

「ケダ？ それ何？ なんかの造語？」

「なんでもないっ！」

「……？」

沙羅は青みがかつた瞳を数度瞬きさせた後、妙に自信ありげな態度で大きく胸を反らす。

「でもねつモモ！ あたしこの間冬馬を見て思つたんだけども、奥手でおとなしいモモにはね、ああいう冬馬みたいなちょっと強引なタイプが絶対お似合いだと思うよ！…」

「さつ沙羅！ 声が元に戻つてゐるつてば！」

車中で沙羅の一方的な恋愛話を繰り広げつつ、やがてバスはカノンから約五十キロほど離れた森林公园に無事到着する。

バスを降りた生徒達は全員森林公园前の広場に集合し、一年担当教師代表となつた誠吾が、生徒達の前で各注意事項を簡潔に説明した。

「注意事項はそんなどこだ！　じゃあ皆ここからボード一枚ずつ持つてけな！　昼になつたら各自で勝手に飯にしていいぞ！　絵を描く道具はちゃんと持つてきてるな？　一時半になつたら、またここに集合だ！」

「時間は厳守！　絶対に遅れないでね！」

用意した画材の入つたダンボール箱の前で縁も最後の指示を出す。

一年美術担当の塚本信也つかもと のぶやもこじれとばかりに自分をアピールすることに余念が無い。

「皆～！　今日の画材のアクリル絵の具、使い方がよく分からなかつたらいつでも僕に聞いてくれよお～！」

「よしつ、じゃあ解散！」

誠吾の号令で生徒達はそれなりイラストボードを片手に公園内に散りはじめた。

「モモ、ボード持てる？」

「うんなんとか……。このボード大きいよね。持つの大変」

片手に昼食の入つたバッグを持つているため、空いたもう片方の手だけでA2のボードを小脇に抱え、画材道具も持たなければならぬ。小柄な桃乃には少々大変そうだ。

「じゃ早速景色いい場所探しに行こうか！」

沙羅が元気一杯な大声を出すとふいに後ろから声がかかる。

「おひー、一緒に行こうぜー！」

桃乃と沙羅が振り返るとそこには冬馬と要が立っていた。
沙羅は田の前に現れた冬馬を見て叫ぶ。

「あ　っ！　噂をすれば冬馬だあつー！」

「おま、デカい声だな……！」

まだ一度しか面識が無いにもかかわらず、大声でいきなり呼び捨てにされた冬馬は面食らっている。「冬馬つ、この間一度会ってるけど自己紹介がまだだつたわね！　南沙羅よつ、よろしくね！　あたしのこととは絶対に沙羅つて呼んでよね！　OK？」

「お、おつ……よろしくな……」

沙羅からほとばしるパワーにまだ気圧されている冬馬に向かつて、要がこいつそりと囁く。

「……な、こいつ相手にするヒペース狂うだろ？」

「あれつ？　冬馬と要つて仲悪かつたんじやなかつたつけ？」

以前とは違う男一人の様子を不思議に思つた沙羅がそう尋ねた。

「まああれから色々あつてな……」

「そうそう。女には関係ない話だよな、柴門」

「へえー、じゃあもう完全に仲直りしたんだ？」

「ま、そんなことはいいじやん！　ここじや昼夜休みか、こんな行事の時じゃないと男女一緒になることがないからや、せつかくだから四人一緒に行動しようぜ？」　桃乃、それに沙羅

早速希望通りに冬馬に名前で呼ばれた沙羅は、嬉しそうに右手に持つていたバッグを高々と掲げて呼応する。

「うんつ！　行こ行こ！　モモも勿論OKでしょ？」

「うん」

「倉沢さん」

要が桃乃に顔を向ける。

「西脇なんか昨日からすゞく楽しみにしてたみたいだぜ？」

「そ、そつ……なんだ」

どう返答していいのか分からず、桃乃が曖昧な返事をしたところに、ダンボール箱を抱えた誠吾が通りがかった。誠吾は「ヤーヤ」と笑いながら固まっている四人に向かって「おーい、西脇と柴門！」と声をかける。

「なんスか、先生？」

返事をしたのは冬馬で、要は無言で視線だけを面倒臭そうに誠吾に向けた。

「お前達、そのまま倉沢と南を草陰に連れこんで変な真似をしようとするなよ？」

その誠吾の物言いに両名はカチンときたらしい。

「しないツスよ！」「

「……誰がするか」

それぞれの性格が如実に出た二人の台詞に、桃乃と沙羅は思わず笑い出す。

「それなら結構結構！　男女交際は清く正しく健全にな！　我が力ノンのモットーだ！」

誠吾は高笑いをしながら余った画材の入った箱を抱え、バスの方へ去つてゆく。

「つたぐ、有給を目一杯使って帰つてきてからなんか妙に張り切つてるよな、矢貫先生」

「まあまあ冬馬、気にしない気にしない！　それより皆で張り切つてスケッチ場所を探しに行こうよ！」

沙羅の主導で四人は公園内に足を踏み入れる。

「桃乃、ほら、それ貸せ」

歩き出しまもなく、桃乃のボードを冬馬が横からヒョイと取り上げた。そして自分のボードとまとめて持つ。

「あ、ありがと」

「これでそっちの手空いたな」

冬馬はニッコリ笑うと、空いた桃乃の手を上から包み込むようにさりげなく握る。すぐ前を沙羅と要が歩いているこの状況で手を繋ぐといふ、冬馬のこの大胆な行動に桃乃の顔は瞬時に赤くなった。

「と、冬馬つ……！」

桃乃は小声で牽制したが、冬馬はビヨン吹く風といった様子で、「スキンシップ、スキンシップ」と軽やかに答え、さらにつっかりと手を掴む。

「どしたの、モモ？」

沙羅が急に振り返る。

「なつ、なんでもないよつ？」

引きつりそうになる顔を平常モードに強制固定しつつ、桃乃はそう答えた。沙羅が振り返るよりも一瞬早く冬馬の手を振り払ったので、二人が手を繋いでいたところは間一髪のところで見つかからなかつたのだ。

「ふ〜ん……」

沙羅はそう言いながら再び前方に体を向けようとしたが、そのまま前でいつのまにか特大ボードから解放されて身軽になつていて桃乃に気付く。

「モモ、ボード持つてもらつたの！？ うわあ～冬馬つて優しく！」

羨望の声は木立の奥に吸い込まれていった。

そして沙羅は何かを言いたげな視線をすぐ隣を歩いている人物に

向けて頻繁に送り出す。自分に向けられたそのあからさまな熱視線に、当然の事ながら要もすぐに気が付いた。

「な、なんだよ？」

「あのさー、あたしの記憶に間違いがなければ、要つて確か紳士なんだよね？」

要は一瞬ひるんだ様子を見せた。

「お前、よくそんな事覚えてんな……」

「記憶力にはかなり自信あるほうなんだよね、あたし」

カノン正門前で初めて出会った時に、要が口にした紳士発言をまだ覚えていた沙羅は、尚もこの件に関して追求の姿勢を見せる。

「仮にもジョントルマンを名乗ったことがあるなら、普通にうつ時はさー」

「分かつたよ！ 代わりに持てばいいんだろ、持てば！」

「これはおとなしく要求を呑んだ方が賢明と判断したのか、要は足を止めて会話を切り上げると沙羅の画材を取り上げた。

「やつたあー！ ありがと要ー！」

(俺、やつぱりコイツが苦手だ……)

要は内心でそう思いながら自分と同じ目線を持つ、背の高い沙羅をちらりと見る。

そして喜ぶ沙羅を横田に渋々と一つのボードを小脇に抱えると、再び冬馬に「な？」と同意を求めた。

今の人やり取りを黙つて見ていた冬馬も小さく頷き、わずかに同情を含ませた声で「そうだな」と答える。

「ねえねえ要。なに？ 今の冬馬に言った “ な？” つて？」

「なんでもないっての」

「ダメ！ 気になるから教えてよー。」

「いいから行くぞ」

要は大きな歩幅でわざと先に歩き出した。

「あー、待つてよ要ー。」

沙羅が慌ててその後を追いかける。そして隣の位置にまで追いつくと、

「ねえもつたじぶらないで教えてよー。」

と食い下がった。

「何をだ」

「だから、やつきの “な？” の意味ー。」

「別に深い意味は無い」

「ウソ！ ケチケチしないで教えてつてばー。」

「俺は元々僕約家だ」

「ちがーう！ そういう意味じゃなくてー！」

約七メートル先を揉めながら並んで歩くほほ同じ背丈の要と沙羅。

(もしかしたらあの一人つて結構お似合いかも……)

桃乃が一人に対してそう思つた時、冬馬が「あいつら、何ケンカしてんだ」と呴きながらまた桃乃の手を握る。相変わらずのその強引ぶりに桃乃是小声で文句を口にした。

「と、冬馬っ、沙羅たちに見られけりつてば……。」

「別に見られたっていいじゃん。なんで隠そうとするんだよ？。」

「だ、だつて恥ずかしいもんつ」

「恥ずかしがることじやねえだろ？ 反対にあいつらに見せつけや

やろひぜー。」

振りほどけないほどに強く手を握られ、せつかくおさまりかけていた頬の熱がまた一気に急上昇する。

とんでもないことを気軽に言い出すこの幼馴染の笑顔が憎らしく

ほど爽やかのが、さらに桃乃の頬を紅潮させていた。

伝えられない本音

「……いいんじゃない？」

沙羅が足を止めた場所は、遙か遠くにぼやけた稜線が見える広い平原だつた。

森林公园のほぼ最奥部に位置するこの大きな平原はひたすら何も無い広大な景色で、遠くには野生植物が咲き乱れている。一面に生える短い雑草たちがそよ風で揺れるその様は、鮮やかなグリーンの絨毯が優雅になびいているように見えた。

「しかし俺ら結構歩いたな。帰りにバスの所まで戻るの大変だぜ？」

沙羅に続いて足を止めた要は、肩越しに今まで歩いて来た林道を振り返る。

「でもその分、他の生徒も全然いなくつていいじゃない！　この場所貸切りしたみたいで気分いいもん！」

「貸切ってなんだ。ここは宴会場か」

そんな要の冷静な突っ込みも、相手が沙羅では意味を成さないどころか逆に援護しているようなものだ。

「あつ要、それってナイスアイディア！　今日はあたし達四人が初めて一緒に行動した記念すべき日だもんねつ、お弁当もあるしね、お昼はここで宴会しようよつ、大宴会ー！」

「……もう勝手してくれ」

ここまでの道すがら、はしゃぐ沙羅のマシンガントークに長時間エンエンと付き合わされ、すでに精神的にかなりのダメージを負わされている要はグッタリとした様子で顔を伏せる。

そして沙羅が提案したこのスケッチの候補場所に、一番最初に同

意したのは冬馬だった。

「そうだな、ここだと描き易いな。半分は縁でバーツと塗つて上にチョイチヨイと花みたいなモン描けばいいしや。沙羅の言ひ通り、ここにしようぜ！」

「……冬馬、全然絵描く気ないでしょ」

隣にいた桃乃は呆れた口調で言ひ。

「当たり前じやん！ 大体、なんで高校に入つてまでこんな小学生みたいな写生大会があるんだつての。そっちの方が純粋にスゴいだろ」

「でもや、冬馬はその写生大会のおかげでいつもモモといられるんだよ？」

沙羅の指摘に「あ、そうだな」と冬馬はあつさり納得する。その返答のあまりの速さに沙羅は我慢しきれずに声を上げて笑つた。

「さつすが冬馬！ モモが単純つて言つてただけあるね！」

「なんだよ桃乃、沙羅にそんなこと言つてんのかよ？」

冬馬はこたえか気分を害したようだ。 沙羅は「うん！」と頷くと明るく先を続ける。

「あのね、あたしが“冬馬つてどういう性格？”ってモモに聞いたの！ そしたらモモは、単純でー、強引でー、そんでもつて“ケダ”なんだつて言つてたよー」

「ケダ？ なんだそれ？」

「さつ沙羅つてばっ！」

桃乃は慌てて沙羅の口を封じた。

「桃乃、なんだよ、ケダつて」

「さつ、時間が無くなっちゃうから早く描こつ！ ほら沙羅ー！」

桃乃は冬馬の質問を無視し、沙羅の手を取つて平原に座ろうとする。

「その前に皆ちょっとといいか？ 僕にいい提案があるんだけじゃ」

冬馬は小脇に抱えていた一組のボードを草原の上に置いた。

「な、桃乃と沙羅はいつも学内で一緒にいるんだろ？ だからさ、今日は天気もいいし、せっかくだから男女に分かれて絵描かないか？」

？」

間髪いれずにはっと噴き出す声がする。

「冬馬つて本当に分かりやすい人だね～！」

その提案を聞いた沙羅が再び大笑いをはじめる。

「それってさ結局、“モモと俺を一人っきりにしろ”ってことなんでしょう？」

「へえ、沙羅つて頭の回転速いんだな」

笑い声はさらに大きくなつた。

「あたしがスゴイんじゃないのー。だから冬馬が単純すぎるんだって！」

笑いすぎて沙羅の目尻には涙が浮かんでおり、話題に中心になつている桃乃是恥ずかしさで声も出せない。しかし一方の冬馬は恥ずかしそうな様子などまったく見せず、要にも同意を求める。

「な、いい案だと思わないか、柴門？」

「ああ、了解した」

要是一旦草むらに置いた自分と沙羅のボードを再び手にする。

「じゃあ西脇と倉沢さんはここに残れよ。俺らはもう少し向こうの方に行く。昼は一緒に食うんだろう？」

「そうだな、じゃあ時間決めるか。今十時だろ……、十一時半にそれでかい石の所に集合でどうだ？」

「OK。じゃ俺とあんたはあっちの方に行こうぜ」

と要は沙羅を促す。

「か～な～め～……！」

急に機嫌が悪くなつた沙羅はふくれつ面で要に詰め寄つた。

「いい加減にちゃんとあたしの名前呼んでよー。なによ、さつきから

ら “ あんた ” とか “ お前 ” とか！」

「はいはい……」

かつたるそつと要はそつ返答して背を向けると、またしても一人で先に歩き出す。

「あー！ だから待つてつてばー！ 紳士なんじょーー！？ なら女子にはもつと優しくしなさいよーー！」

数百メートル先でも余裕で聞き取れそうな甲高い声で叫びながら、沙羅も両脇の長い髪を揺らして駆け出して行つた。

要と沙羅がいなくなると冬馬はドカッと平原の上に腰を下ろし、嬉しくてたまらなそうな声で言つ。

「やつと邪魔者追つ払えたな！ な、桃乃？」

顔を赤らめながらも、桃乃は冬馬の隣におとなしくペタンと座つた。

「で、どうする？ やつぱ先にスキンシップだよな？」

「……ッ！」

顔の血流の流れが一気に早くなる。この言葉で即座に桃乃の警戒レベルは一秒でMAXに達した。

「なつ、なにがスキンシップよつ！ えつ、絵を描くに決まつてるでしょ！？」

瞬時に警戒体制を敷いたせいか、すんなりと言葉が出てこない。

「だつてよ、今せつかく誰もいんだぜ？ 後で誰か他の奴らがここまで来たらまた桃乃はいちいち気にしそうじゃん？」

「ちょつ……！ 冬馬、私の話聞いてるつ！？」

「聞いてるつて。だから桃乃はまず先に絵を片付けて、後でゆっくりスキニシップがいいんだろ？」

「違うつてばっ！」

ああ、と黙り冬馬は自分の膝を叩く。

「そういうや、桃乃はお楽しみは後に取つとくタイプだつたよな。給食でお前の好きなフルーツサラダが出るとさ、必ず一番最後に食つてたもんな。でも俺の場合は分かるだろ？ 好きなもんが出たら真っ先に食つちゃいたいタイプだからさ、やっぱスキンシップが先がいい……」

「だからスキンシップはいらぬいつてばー！」

一瞬、冬馬の呼吸音が消えたような気がした。

「……桃乃、やっぱり俺と付き合つのは嫌か？」

あれほど冬馬の表情からこぼれていた笑顔が今は完全に消えている。

「なあ、もしかして触られたりするの、すげー嫌だつたりしてた？」

「な、なんで急にそんなこと言い出すの？」

「……」

冬馬は無言のまま、今までの強引さからは考えられないくらいに遠慮がちな仕草で、桃乃の白い喉元に向かつて手を伸ばす。

首筋に冬馬の指先が触れた時、勝手に体がビクッと反応し、桃乃はわずかに身を反らしてしまった。

「やっぱりつけてねえ……」

顔を曇らせ、冬馬は低い声で呟いた。

長く、骨ばつた指先はほんの少しだけ桃乃のカッターシャツの襟元を左右に押し広げている。

そのわずかな隙間から見えるのは華奢な鎖骨だけだった。

「もしかしてあの後一度もつけてないのか？」

そう寂しげに言つと冬馬はそつと指先を離す。

プレゼントしたネックレスのことを言つてゐるんだ、と気付いた桃乃は、何度も首を振つて答えた。

「つうん！ つけてるっ！」

「……じゃあなんで今つけてないんだよ？」

「だ、だって、学校でのネックレスをつけているのもし見つかつたら没収されちゃうもん！ そんなの絶対に嫌だから！ だってあんなに冬馬が頑張つ……」

うつかり “ 頑張つて働いて ” といつ言葉を言いかけた桃乃は、不自然に言葉を切り、言い直す。

工事現場のアルバイトの件は行人との約束で口には出来ない。

「せ、せつかく冬馬に貰つたプレゼントを没収されて返してもらえたくなつたら嫌だから……」

「そつか」

そう呟くと冬馬は笑つた。

しかしその笑顔は先ほどまでのものとは違い、ビートなく寂しげなのが桃乃には気になつた。

傷つけてしまつたかも、と心配になつた桃乃は念を押すよつて繰り返す。

「ホントだよ？ ホントにそつと思つたからつけてなかつたの」

「ああ分かつた。じゃ、面倒だけど絵でも書くか」

「ごめんね冬馬……」

「謝るなよ、別に全然気にしてねえし。ほら、桃乃も準備しろ。パツと終わらせて昼寝しようぜ」

横で冬馬がスケッチの準備をし出すのを桃乃は痛む胸を抱えながら眺める。

単純な性格の冬馬だからこそ、桃乃にはよく分かっていた。

例え “没収されるのが嫌だつたから” という理由がまったく嘘偽りないものであつても、それでも今自分の首元にネックレスが無かつたことが、たぶん冬馬にとっては十分すぎるほどの傷つく理由になつていることを。

話題を変えるべきか、それとももう一度自分の気持ちを伝えるべきか、桃乃は悩む。

しかしあまり何度も同じ事を言うと余計に言い訳がましく聞こえそうな気もしていて、口に出すことをためらつてしまつた。

そんな桃乃の気持ちを察したのか、冬馬は「あ、そうだ」と言つとスケッチの準備をしていた手を止め、よりもよつて桃乃が一番触れられたくない話題を出してくる。

「ところで桃乃、さつき沙羅が言つてた『俺がケダ』ってどういう意味だよ？」

またしても心臓が跳ね上がる。

「しつ、知らない……！」

「知らないわけねえじゃん。自分で言つたんだろ？」

「も、もう忘れちゃつたよ。バスの中で話してた事だし……」

「嘘言え。バスの中ならついつきの事じゃん？ 絶対言わせてみせるからな」

乾いた絵筆を指の間に挟み、白い筆先を桃乃に向かながら冬馬はそう宣言する。

その様子はもういつもの冬馬に戻つており、桃乃はホッと胸を撫

で下りないと自分もよづやへスケッチの準備を始めた。

「これぐらい離れればもういいだろ」

「やうだね！」

要と沙羅が足を止める。桃乃と冬馬の姿は今は遠くに離れ、小さな一つの影にしか見えない。

「でも要つてばずいぶん素直に冬馬の提案をのくしたよね。要もモと冬馬の仲を応援してるの？」

「いや、西脇に借りを作つちまつてるからな。だからあいつと倉沢さんを一人きりにさせるために俺があんたのおもりを引き受けたんだ。これも罪滅ぼしの一つってことだ」

「へえ……つて、ちよつと待つて！ むもりつてなによ、むもりつて！」

鼓膜直撃のその音量に要は顔をしかめた。

「おい、頼むからもう少し声のボリューム落とせよ。そんなにテカい声ださなくとも十分聞こえるって」

しかし沙羅はもう一つの別の理由で怒り心頭状態なので、その頬みを聞く気はまったくない。

「要つ！ それとあたしの名前、むやんと呼んでつてつきから言つてるでしょ！？ そう、それにどうしてモモを苗字で呼んでるの？ じの間は “ 桃乃ちゃん ” つて呼んでたじやない

要は黙つてイラストボードを沙羅に押し付けたと、そのまま地面に腰を落とす。

「……あの時帰り道で言つただろ、あれは営業だつたつて。あの時の俺はどうかしてた

「確かにね。今の要と全然キャラが違つてたし！」

ボードを受け取った沙羅也要の左側にストンと座る。

「あの時は自分が見えなくなつてた。今にして思うと何かに取り憑かれてたようだつたな」

「ええっ、取り憑かれた！？」なんか怖いなあ、そんな言葉聞くと

。 実はあたし、幽霊とか怪談話とか大の苦手なんだよね……」「…………」

「何してんだ？」

「要の背後に今すつゞへ怖い悪霊がいるって想像したら鳥肌立つてあぢやつた」

「勝手に想像すんなよ」

不愉快そうにそう言い放つた要は、やがて沙羅の背後にいぶかしげな視線を漂わせて「おい…」と呟く。

「なに?」

「お前の隣に隣をつける野の隣が呪
なにか……」

ちょっとからかっただけのつもりが、またしても超高音の絶叫声

をせんに鼓膜に食いこみ、要は慌てて三分の腫脹を手で塞いた。

「やだやだ つ！ 惡い つ！ ！」

背後に怨靈がいる、と脅かされた沙羅はものすごい勢いで要の首

「しがみつく」

お、おい、何でぐだお前」「

を離し、焦り顔で叫んだ。

「怖い！ 要、取つて！ 早く取つてつまはつー。」

「虫じやあるまいし取れるかっ！」

要の首にしつかりと巻きつけられた沙羅の白い腕は悲鳴と共にぐいぐいと締め付けをエスカレートしていく。要の顔が少々赤いのは抱きつかれているせいか、それとも窒息しそうなためか、まったく判別がつかない状態だ。

「お、お前、俺を殺す気か……！」

「だつて悪靈が つ！」

「いねえよ、そんなもん！『冗談だ』『冗談？』」

「じょ、『冗談？』」

それを聞いた沙羅はやつと両腕の力を緩める。

「要！ それっていくらジヨークでも悪趣味すぎやがれ…… つ！？」

しがみついていた腕をほどいて要に抗議しようとしたその声が急に途切れる。

すぐ目の前、今にも触れそうなぐらいの至近距離に要の顔があつたせ이다。こんな近くで初めて要を見た沙羅の顔がカアツと赤くなる。

「……頼むからこの距離で叫ぶのだけは止めてくれよ？ 次は間違いない鼓膜が破れる」

すぐ間近で聞いているせいか、要の声は今までと違つて聞こえ、それが余計に沙羅の動搖を誘つた。

「『ジヨーク』めんねつ！」

沙羅はあたふたと身を離し、要はたつた今強烈に締め上げられた首元をいたわるようにさすつた。

「あんた、女の割にすげえ力あるんだな。なんか筋トレでもやってんの？」

「ううん、特にやってないよ？ 每日寝る前に簡単なエクササイズはしてるけどね」

「エクササイズ？」

「うん、あたし小学生の頃テニススクールに通っていたことがあったんだけど、その時のコーチが言つてたの。女の子は将来のために大胸筋を鍛えておきなさい、って。大胸筋を鍛えるつてことはどういうことか分かる、要?」

本当は分かつていたが、その回答を口にしたくない要は敢えて知らないふりをする。

「さあな」

「じゃあ教えてあげる! あのね、大胸筋を鍛えるとバストアップするんだって! こうやってやるんだよ!」

嬉々としながら沙羅は自分が日々行つているエクササイズを座つたままで実践してみせる。

「本当は寝てやるんだけど、まず両手にバーべルを持つて手を横に広げてね、こうやって胸の前でクロスさせるの。で、またゆっくり元に戻して……の繰り返しなんだ。それにね、このエクササイズをすると年をとつた後もバストの形をキレイに保てるんだって! だからあたし、頑張っちゃってるんだ!」

「……本来はそういう目的で鍛えるものじゃないけどな……」
沙羅を横目で見ながらボソリと要は咳く。

「あ つー」

「……うるせえな。今度はなんだよ?」

「要、今あたしの胸見たでしょー?」

「みつ、見てねえよつ!」

「ううん、絶対見た! 今チラツてこの辺を見た! 間違いなく視線が落ちたよ!」

「きょつ、興味ねえよつ、お前の胸なんて!」

必死で完全否定しつつも、実際は指摘通りに一瞬だけ沙羅の胸元に視線を下げてしまつた自覚のある要の様子は、どもりがちで明らかにおかしい。

「やつぱり要つてムツシリタイプだったんだね！ 要の性格ならたぶんそうじやないかとはなんとなく思つてたけど…」

迷宮入り寸前の謎がようやく解けた名探偵のよつな重厚な仕草で、沙羅はふむふむと何度も頷く。

「だつ、だから勝手に決めつけんなつてのー！」

なんとかこの話題を強制終了させるべく、要は水入れを掴むと勢いよく立ち上がる。

「おー、時間無くなるぞー。帰りまでに絵が出来てなかつたら補習になるんだからなー？」「

「あ、そうだねつ。じゃあさつきボードを持つてくれたお礼にあたしが水汲んでくるよー。それ貸してー。」

沙羅は要の水入れを素早く取りあげると、「じゃ行ってくるねー」と叫び、少し離れた水飲み場に向かつて風のよう走り去つていった。

やれやれと溜息をつき、その場に取り残された要は草原に両足を投げ出して田の前に広がる草原風景をぼんやりと眺めた。そして頭の中でのど辺りを描くかの検討を始める。

やがて一つの水入れを抱えた沙羅が小走りで戻ってきた。

「はーー。」

水入れの一つを差し出され、「サンキュー」とだけ礼を言つと、要是それを受け取つた。

「あれ要、まだ描き始めていなかつたの？」

要のイラストボードはさながら降り積もつたばかりの雪原のよう にまだ真つ白な状態だ。

「あー もしかしてあたしが帰つてくるのを待つてくれたとか？」

「……違う。どの辺りを描くかを考えてただけだ」

「よーしー。じゃあはつきって描こいつ…」

つべづべおめでたい思考のヤソだ、と思いながら要は鉛筆を握る。

それからしばらくの間、二人は田の前の風景を黙々とワフスケッチすることに専念する。

沙羅の絵を描く目は真剣だが、要は淡々と鉛筆を動かしてはいるものの、その態度にはあまり真剣味が感じられない。

やがて先にアクリル絵の具に手を出したのは要で、少し遅れて沙羅も後に続く。樹脂パレットに絵の具を出した沙羅は、その顔に意外そうな色を浮かべた。

「あれ？ ねえ要、このアクリル絵の具ってイヤな匂いあまりしないね」

「アクリルは油絵の具と違つて乾きを早めるために薄めてあるし、有毒な溶剤を使ってないからだろ」

「へえ～要よく知ってるね、そんなことまでさ」

「何言つてんだ。美術の教科書にちゃんと書いてあるだろ」

「あ、そりなんだ？ あたし、美術の時つて教科書あまり見てないからなあ」

要は沙羅のイラストボードを一瞥する。

「……その絵を見たらなんとなく分かるけどな

「あっ、ひどーい！ 要、あたしの絵が下手だつていうのー？」

「悪いけどお世辞にも上手いとは到底言えない。もつと右脳を使って描けよ」

キヨトンとした顔で沙羅が復唱する。

「ウノー？」

「ああ、絵を描くならもつと右脳の空間認識を活性化させてこの光景を立体的に眺めてみろよ。絵を描くつてことは、描きたいものを

右脳にイメージで焼き付けてさうにそれを膨らませてこへつて」んだ
だら」「

自分の絵の拙さを理論的に責められて沙羅はむくれた。

「つー……な、なにやー、カッコイイことばかり言ひぢやつて。じ
やあそこのう要の絵はどうなのよ?」

沙羅は要の方に身を乗り出し、描いている絵を覗きこんだ。

「…………Wao…………す」「こ上手…………!」

要の絵の出来映えに沙羅は絶句した。

纖細なタッチで描かれた要の絵はまだ彩色初期の段階だが、まさ
に田の前の風景をそつくりと『』取つたようだつた。

「要ー！」の絵売れるよー！」

「売れるかよ、こんなもん」

「売れるつじば！昔パパと行つた画廊でこんな感じの絵あつたも
のー！要つて絵が上手なんだね！」

“パパ”という言葉に、要は今思いついたことを沙羅に尋
ねてみる。

「そりいえばあんたの親つてさ、どつちが外国人なわけ？」

「ママだよ。イギリス人なの。で、パパが日本人

「ふーん……オヤジさんつて何やつてんの？」

「航海士だよ」

「へえ、航海士か。どこの学校出てるんだ？」

「えつ学校ー？」

「そう。航海士ならどつかの海洋学校出てるよな？」

沙羅はなぜかその返事に詰まつた。

「え、えつとそれは……「ーんどどこだつたかなあ……」

沙羅は必死に思い出すやつと、眉根を寄せている。

「……

「忘れたんなら別にいいぜ。特別興味があつたわけじゃないしな」「う、うんっ。なんか度忘れしちゃったみたい！」

そう答えた沙羅を要はじつと見つめる。その視線は静かで、そしてすべてを見透かすような視線だった。

「な、なに？」

「……別に」

要はそう呟くと彩色作業に戻った。

自分に向けられたその最後の視線が気になつたのか、沙羅は落ち着かない様子を見せる。空氣の気配でその様子を察知した要は手元のボードを見たままで口を開いた。

「この辺に住んでたんなら、もしかして国際日本海洋学校じゃないか？」

沙羅は顔を上げ、弾んだ声を出す。

「あー そうそう！ 思い出した、それそれっ！ さすが要！ 色んな事に詳しいんだね！」

「……」

要は一瞬だけ沙羅を見ると、またボードに視線を戻す。

「オヤジが航海士なんて嘘だろ」

「どう、どうしてそんなこと嘘ついてるのー?~」

すると要はボードに視線を落としたままで答える。

「そんな海洋学校なんて無い」

沙羅の顔色が変わる。

「ひつどい要！ そんな嘘ついてー!~」

「先に嘘ついたのそっけじやん」

「あ……」

要にそう指摘されて沙羅は視線を落とし、黙り込んだ。

「おい、そんな困った顔するなよ。別に俺にはなんの関係もないし、俺に本当の事を言わなくていいけどさ、もしかして倉沢さんにもこの嘘ついてるわけ？」

困った顔のままで沙羅は小さく頷く。 そんな落ち込む様子を初めて見た要はとりあえずフォローに回った。

「あのさ、嘘つくなもつときちゃんと背景を作つて嘘ついたほうがいいぜ？ 今回みたいに父親が航海士つて言うのならせめてどの海洋学校出身かぐらいまでは決めておけよ」

要はそうアドバイスすると再び絵を描き出す。 沙羅は絵筆を止めたままで呟いた。

「ねえ要……。モモ、あたしが嘘ついてること知つたらショック受けるかな……？」

「さあな。俺、倉沢さんじやねえし」

「あたしね、この間モモに “ 親友なのに隠し事してた ” つ

て文句言つたんだ。それなのに、あたしが嘘ついてたの知つたらモ

モはきっとショックだよね……」

「ああ、それならショックかもな」

要はオリエンタルグリーンの絵の具をパレットに足しながら沙羅の質問を適当に受け流す。

「やっぱりそうだよね……」

しかし横で沙羅が本氣で考え込んでいるのを見て要はその動きを止めた。

「……今もしかして倉沢さんにカミングアウトしようとか考へてる最中か？」

沙羅は心底驚いたように叫ぶ。

「要つてすごい！ エスパーみたい！ なんであたしの考へていること分かるの！？」

「今までの話しの流れからいつたら普通誰でも分かるっての」

「うん決めた！ あたし、やっぱりモモに言つことにする！ だってモモはカノンで初めてのベストフレンドだし、この間は家にも遊びに来てくれたし……！ 実はずっとモモにこの嘘ついていたの気になつてたの。でもなかなか言い出すキッカケがつかめなかつたんだよね。ありがとね、要の言葉で決心ついた！」

「おいおい、決心つて……そんなにヘビーな話なわけ？」

「うーん、ヘビーかどうか分からぬいけどモモみたいに普通のアットホームな家庭で育つた子にはちょっと理解しづらい話しかなー、と思つて」

「へえ……」

それを聞いて急に要の好奇心がうずいだ。

「な、やっぱりその話し俺にも教えてくれないか？」

「うん、いいよ！ あたし要のこと大好きだし、やっぱり好きな人には自分のことを包み隠さず知つておいてもらいたいし！」

沙羅がいきなりまた告白めいたことを言い出したので要は慌てて

顔を逸らした。

「あのね要、あたしのパパね、航海士じゃなくて社長さんなの。『サウス・トレーディング』って貿易会社の。知ってる?」

「聞いたことがあるような気もするな。社名の由来は苗字からか?」

「うん、そう。ちなみにパパは一代目社長なんだけどね」

「ふうん、じゃ、あんたは大会社の社長令嬢つてことを隠していたわけだ」

「ううん。違うよ」

沙羅は絵筆を再び取り、絵を描きながら続きを話しだす。

「あたし、厳密に言えば今は南沙羅じゃないしね」

「それどういう意味だ?」

「パパとママって結婚してあたしを産んだ後、まもなく離婚しちゃつたんだよね」

沙羅の絵筆は言葉と共に淀みなく動き続ける。

「パパのお父さん、つまりあたしにとっては一応お爺さんになるんだけど、そのお爺さんがサウス・トレーディングっていう貿易会社を興したの。パパがまだ専務だった頃、その会社で働いていたのがママ。で、一人はその内愛し合うようになつて、やがてママはあたしを身ごもつたらしいの。でも周りの人々が、特にそのお爺さんが、パパ達の結婚を絶対に認めなかつたんだって。でもパパは強引にママと籍を入れて結婚しちゃつたの。そしてあたしが産まれたんだ」

要も同じように絵筆を動かしながら黙つて沙羅の話を聞いている。

「だからあたし、パパ達が離婚した後もそのまま南の姓を名乗れて

るんだよね。もしママが未婚であたしを産んでいたら、たぶんあたしの名前は『Sarah・Oliver』になっていたと思う

「なんで親は離婚したんだ？」

「お爺さんがパパを勘当しようとしたから。本当は当時パパの結婚相手はもう決められていたんだって。でもパパはそんな決められた結婚よりママを選んだの。そしたらお爺さんはパパを勘当して会社からも追い出す、と言ったの。パパはそれでもいい、と突っぱねたけど、それを抑えたのがママだったんだ。ママは“実の親子が争うのはもうこれ以上見たくないから”って言つてパパと離婚することを選んだの。“私には沙羅がいるから大丈夫。だからあなたは立派に会社の跡を継いで新しい家庭を築いて下さい”って言つたんだって」

沙羅は汚れた絵筆を水で洗い、次の彩色に取り掛かる。

「パパは最初断固それを拒否したんだって。でもママの決心が変わらないことを知つて、最終的にはママと離婚することに合意したの。これがあたしの生い立ちの経緯」

「……確かに少々ヘビーな話しだな

そう呟く間に沙羅は明るく笑つた。

「でもね、身を引いたママも偉いけどパパも凄いんだよ！　ママと離婚してその後会社に戻ったパパは結局その決められた人との結婚を断つて、今でもずっと独身のままなんだよ！　前に会つた時にパパ、言つてたわ。“愛しているのは生涯ずっとママ一人だけだ

”つて

「両親、再婚はしないのか？」

「うん。その辺は子供のあたしにはよく分からない。パパは今は社

長になつたけど、まだお爺さんが会長として会社にいるしね。だから出来ないのかも」

「ふうん……」

「それであたし、パパとは会えるのはせいぜい年に二三、四回なの。パパの仕事がすつゝ忙しいせいもあるんだけどね。でもこんなこときなりモモに言うのも気が引けて、つい、いつも他の人にも話してきたように『航海士してる』なんて嘘言ひちやつただよね……」

「でもよ、今あんたの話を聞いた限りじゃ別にあんたの両親は憎しみあって別れたわけでもないみたいだし、倉沢さんがそれで引いたりするようなことはないと思うぜ？ 嘘をついたことが気になつているんだつたら思いきり話したほうがいいんじゃないか？」

沙羅はこつもの沙羅らしく、「うん、そりあるー」と元気よく答える。

「あ、後ね、あたしにとつてこの“沙羅”って名前つてとっても大切なんだ。この名前をつけてくれたのつてパパなの。だからね、ちゃんとあたしの名前呼んでよ。それに男の人に呼ばれるとなんだかパパに呼ばれてるような気になれるんだよね！」

「……それでそんなに名前を呼ぶことにこだわつてたのか。なるほどな。しかしそんなこと聞いちまつたらますます呼びづらい」

「ダメー！ こういうことは最初が肝心なのー。後回しにすればするほどドンドン恥ずかしくなつていつちやうもんだよ？ さつきの冬馬みたいに最初にパツと言つちやつた方が言いやすいんだから！ じゅ要、早速練習ねー。ホラ、沙羅つて呼んでみてよー。ほらほらー！」

要は少し沈黙した後、自分の絵筆を乱暴に水入れに放りこんだ。

「……ま、それはまた今度な

「もう、要つたら～！」

沙羅は悔しそうに大きく頬をふくらます。

(面白いヤツだな、コイツ)

からかうと自分が予想した通りの反応を次々に取るので、要は内心で密かに面白がり始めていた。

しかしガツツのある沙羅はまだ諦めずに食い下がる。

「いいからさつさと呼びなさいよ～！　“　せ　”　と　“　ら　”　のたつた二文字だよ？　ほりー！」

「ああ、また後でな」

「か～な～め～！」

要はハハツと笑いながら沙羅の絵筆を取り上げる。

そして「少し手伝つてやるよ」と言いながら勝手に沙羅の絵に修正を加え始めた。

本当は分かつてた

「なあ桃乃、いい加減に教えてくれって。気になつて絵に集中できないじゃん?」

「何言つてるの。じつせ冬馬は眞面目に描く派なんていじやない」

二人は絵の製作に取り掛かかりつつも、先ほどの「ケダ」の意味についてまだ無益な押し問答を続けていた。

「これだけ問い合わせても口を割らないことは相当な悪口なんだな」

「そつ、そんなことなつ……きやつ…?」

草原に桃乃の焦り声が響く。

西の方角からかなり強めの突風が吹き、両膝を軽く曲げて座つていた桃乃のチェックスカートが風の悪戯でフワッと大きく捲くれあがつたのだ。

「お、ラッキー!」

「とつ、冬馬! 今見えたの!?」

桃乃は恥じらいで頬を染めながら慌ててスカートを押さえる。

「いや実はギリギリで見えなかつた。かなり際どいところまでいったんだけどなあ。惜しかつたぜ」

下着を見られたのかと思った桃乃はそれを聞いてホッと胸を撫で下ろす。

「しかしほつそい脚だよなあ。ちゃんと食つてんのか?」

紺のハイソックスから太もものラインにかけて不羨な視線が飛ぶ。桃乃はボードをピッタリと膝の上に乗せて前かがみになり、その

視線をブロックするのに必死だ。

「じりじり見ないでよっ」

「まさかまだダイエットなんかしてるわけじゃないだらうな？」「し、してないつてば」

「ならいいけどよ」

2Bの鉛筆を取り、冬馬は諭すように言った。

「いいが、桃乃は充分に細いんだからへんなことすんな。それにダイエットするとまず胸の肉から落ちてくるつて言うだろ？」

「ええっ、そんな理由で私にダイエットするなって言つてたの！？」

「ちつ、違うつて！」

冬馬は慌てて手を振った。

「どつちかつていうと胸は無いよりあるほうがいいような気がしたからさ、つい、言つてみただけだつて！」

「……ふうん」

ふつふつとこみ上げる怒りを抑えつつ、桃乃は顔を背ける。

「じゃ、冬馬は柳川先生みたいに胸が大きくてスタイル抜群の人 gt; タイプなのね」

カノンに登校した一日目の朝、緑が冬馬の胸をネイルで軽く突いたシーンを思い出した桃乃は、軽いやきもちからわざとそんな言い方をしてしまった。

「何言つてんだよ！ 僕のタイプは桃乃で、お前以外絶対にありえないの！」

分かつてねえなあ、と呟くと冬馬はボードに向かつて適当に絵を描き始め、ラフスケッチもそこそこにアクリル絵の具に手を出す。

「えつもうそれで下書き終わりなの！？」

「ああもういいや。面倒だ」

「しょうがないわね……。美術赤点になつても知らないからね？」

「しょうがないわね……。美術赤点になつても知らないからね？」

桃乃は親切心からそう注意をしたが、冬馬は黙つてパレットに絵の具を次々に出し続けている。

「……冬馬、『めんね

「なんで謝るんだよ」

「だつて冬馬ちょっと怒つてるもん」

「別に怒つてねえよ。ただ、桃乃はなんにも分かつてないんだなあと思つただけや」

軽い苛立ちのせいか、ギュッと力をこめて冬馬は絵の具の蓋をきつく締めた。

「私が分かつてないつてどうこう」と…

冬馬は持つていた絵の具をすべて箱に押し込むと桃乃の方に顔を向ける。

「……桃乃、初めて俺らが出会った時のこと覚えてるか？」

「うん覚えてるよ。この街に引っ越してきた時、先に引越し終わつてた冬馬の家に私達が挨拶に行つた時でしょ？」

「覚えてたか。俺も、幼稚園の頃の記憶はもうだいぶ薄れちまつてるけど、桃乃と出会つた時の記憶は今でも鮮明に覚えてる。おじさんとおばさんが俺ん家に来てさ、おばさんはまだほんの赤ん坊の葉月を抱いてたな。そんでおばさんの後ろに隠れながらお前がおどおどここつち見てて、俺とお前の目が合つてさ」

「私小さい頃引っ込み思案だったから……」

「あの時、お前の顔見た瞬間一田惚れしたんだぜ、俺」

「えつ、そうなの！？」

「ああ。桃乃が初恋なんだ、俺のな
そして冬馬はいきなり大声を出した。

「で！ それからずーっとお前のことが好きなんだっ！ 分かつた
か！」

そう叫ぶと冬馬は視線をボードに戻し、ザカザカと大胆に絵筆を走らせてボードの下半分を黄緑一色に塗り潰し始める。桃乃是今初めて知ったその事実に驚いて、ただただ呆然と冬馬の横顔を見つめていた。

(冬馬……そんな前からずつとずつと私のことを好きだつたの……
?)

適当に絵筆を流して彩色をしていた冬馬は、やがて桃乃が自分の横顔を見上げていることに気付いた。

「だからさ、柳川先生がタイプじゃないかとか、頼むからそういう訳分かんねえ事を言わないでくれよ。俺はお前しか見てないんだからさ」

「う、うん」

桃乃是頬を染め、素直に頷いた。

しかし冬馬は少しも嬉しそうな顔をせず、代わりにフウとため息をつくと低い声でボソリと尋ねる。

「……なあ、桃乃の初恋の相手って誰なんだよ？」「わ、私の！？」

「俺じやないよな？」

探るような冬馬の視線を避け、桃乃は目線を下に落とす。冬馬はそんな桃乃を見ながら思いきつたように言った。

「当てるやうか？…………兄貴だろ？」

「…………！」

桃乃の体がピクンと小刻みに揺れ、反応する。

その反応を見た冬馬は膝の上のボードを脇に投げるよつに置き、手を頭の後ろに組んでドサリと草原に寝転がった。

「やっぱそうか……」

「む、昔のことだつてばー！」

「…………いつ頃から好きだつたんだ？」

「しょ、小学校に入つてしまはしてから……かな。 衍兄イはもひ中學に行つてた頃」

「ふうん……」

「ほ、ほら、衍兄イつて優しかつたから……。 もちろん今も優しいけど」

冬馬は寝転んだままで空を見上げ、ゆっくりと流れの綿雲の群れを眺める。

「桃乃は俺やクラスの男子なんかまるで眼中に無さうだったもんな。なのに兄貴と話してる時、いつもお前すごく嬉しそうなんだ。 そうだ、今の葉月にそっくりだつたぜ」

「…………」

幼い頃、衍人と話している時の胸の高揚感や、姿を見ただけで嬉しかった気持ち。

そんな当時の自分と妹の葉月の姿を重ね合わせ、その通りだと思った桃乃は黙り込む。

冬馬は上空の雲から視線を外さず、ためらいがちに聞いた。

「……お前、もしかして今も兄貴の事……」

「違うつてばッ！」

寝転ぶ冬馬に向かつて桃乃は大声で否定する。

「今言つたでしょ？ 昔のことだつて！ 確かに衍兄イの事は好きだつたけど、私中学入つてすぐにそんな気持ち無くなつたもん」

「なんでだよ？」

「衍兄イが色んな女人の人といつぱに付き合つてゐるのを毎日見てたらなんとなく冷めちゃつたの」

「ふうん……」

「昔のことだからね？」

「ああ」

しかし冬馬は空を見上げたままだ。

「冬馬、ショックだつた……？」

すぐ横で吐息が一つこぼれる。

「分かつてたんだけどな……、分かつてたけど、実際にこいつやって桃乃の口から聞いちまつとやつぱダメージでかい」

「冬馬……」

冬馬の瞳に抜けるような色の青空が映りこんでいた。

本来なら爽やかなはずのその色は、今の冬馬の瞳に映ると悲しみの色に変わってしまっているようで、桃乃の胸は切なくなる。

ちやんと言わなくっちゃ、と桃乃は決意する。

さつきは言いそびれてしまつた今の自分の気持ち。冬馬に抱いている想い。

そして自分にとって一番大切な人は誰なのかを。

桃乃は一呼吸置くとボードから手を離し、そつと草の上に置く。

「冬馬、あのね」

オレンジのクロスバイクの後ろに乗り、広い背中を見上げながら感じたあの時の風。

カノンの帰り道に抱きしめられ、震えながら交わした初めてのキス。

ふいに手を握られ、ドキドキしながら見た恋愛映画。

そしてあんな過酷なアルバイトをしてまでプレゼントしてくれたあのネックレス。

走馬灯のようによぎる彼らのシーンは、田田で数えるとまだほんの一ヶ月とわずかのことなのに、もひすつとすつと前の出来事のような気がしていた。

「私が今一番好きなのは冬馬だから……」

座つたまま体の向きを変え、そう伝える。

やつと素直に、そして本心から自分の気持ちを伝えたせいか、胸がスッと軽くなつた。

冬馬から告白され、「私も好き」と答えた時より、今は数倍も、

数十倍も、この幼馴染のことを好きになつていて。口を追う」と、そしてこゝにして側で時を重ねることに、自分の中でも冬馬への想いが揺らぐことの無いものに変わつていてのを桃乃は今はつきりと自覚していた。

冬馬はこの告白を聞いた途端、生氣を取り戻した目を輝かせてガバッと上半身を起こす。

「桃乃が俺に “ 好き ” って言つてくれたの、やつとこれで二回目だなつ！」

そう叫ぶ表情には満面の笑顔が戻つていた。
喜び勇んだ冬馬はそのまま桃乃の手を取り、その体をグイと引き寄せる。

瞬時にこの先自分の身に起る展開を察知した桃乃は、慌てて冬馬の体を押し返し必死に抵抗した。

「ダ、ダメッ冬馬！　こゝこんな所で！　誰かに見られたらどうするの！」

「誰も見てないつて。柴門達もあんなに遠くにいるしさ」

「ヤダ！　ダメッ！」

「いいから暴れんなつての」

この一人の場合、男と女だけではなく体格も違います。
結局小さな抵抗はものの数十秒で組み伏せられ、一人きりの平原で強引に抱きしめられた。

冬馬の顔がゆっくりと近づき、反射的に桃乃は強く瞼を閉じる。

「…………」

新緑の微風が触れ合っている二人の黒髪を優しく揺らす。

「Jの瞬間、周囲の時がすべて止まつたような錯覚すらした。

「桃乃……」

一度軽く唇を離した冬馬が桃乃の名を呼ぶ。
目を開けようと薄く視界を開くと「まだだ」といつ声が聞こえ、
再び唇が押し当たられる。
冬馬の唇から漏れる熱い息を感じ、桃乃の心臓の鼓動はこめかみ
に響くぐらの強さで、熱く脈打ち始めた。

「んんっ……」

まだかすかに抵抗していた力がJで完全に抜ける。
おとなしくなった桃乃を冬馬は愛おしそうに抱きし
めた。

触れ合ひ唇がお互いの体温と鼓動を敏感に感じ取る。
長い長い一度目の中からやっと解放された桃乃はその感覚に痺
れていた。

「おい桃乃？」

唇を離した後もまだ呆然としている桃乃に、心配した冬馬が顔を
覗き込んで呼びかける。

その声でやっと我に返った桃乃は顔を赤らめながら冬馬をなじつ
た。

「も、もうっ、本当に冬馬はいつもいつも強引なんだからっ……」「
これぐらい全然いいじゃん。今俺ら付き合つてんのだぜ？ Jの
間だつて桃乃に何も出来なかつたんだし」「
「Jの間つて……？」

「桃乃の誕生日の日だよ。俺さ、あの時最低でもキスの一つは絶対

してやるって思つてたんだけじゃ、お前、公園の上に行つたら泣いてばっかで全然そんなことできるような雰囲気じゃなかつただろ」「あ、あれは、だつて……！」

あの夜、冬馬の胸で大泣きした自分の行動を思い出し、桃乃は恥ずかしさで俯く。

「そういや、なんであの時あんなに泣いたんだよ」「な、なんであって……」
あのアルバイトの件は絶対に言つことは出来ない。
「だつてすごく嬉しかつたの、あのプレゼント」「そう言つ割りにつけてないのな」「だつ、だからそれは没収されたくないからつて言つたでしょ？」
冬馬はまた草原に寝転がつた。

田の覚めるような青い色が再びその瞳の中に宿る。

「……没収されてもいいからつけてほしかつた」

その言葉は鋭利なナイフのように桃乃の胸に突き刺さる。
「今、俺の事を好きだつて言つてくれたけどさ、たぶん俺と桃乃つてお互いを好きな温度が全然違つんだろうな。いつも俺一人が空回りしてる感じがする」

「ううん、そんなことない！　ただ私は冬馬とはもうひとつゆつくりお付合いしたいな、つて思つてるだけだよ」

その桃乃の言葉を聞いた冬馬の顔がまたわざかに曇つた。

「……兄貴の事を完全に忘れるまで、か……？」

メビウスの輪のようにループする」の話題。

「だからセリフという意味じゃないってば！」

もう一度桃乃は大声でそれを否定した。

「あのね、私達確かに小さい頃からの幼馴染だけど、お付合いはまだ始まつたばかりでしょ？　なのに冬馬つてば私の気持ちなんて全然考えないで、いつも今みたいに強引なんだもんつ。それがイヤなだけなのつ！」

「……俺、強引か？」

「すつごく強引！」

「ふうん……」

さつぱりとそう断言され、冬馬は自分の今まで取ってきた行動を思い返して見る。

「桃乃、それってようするに　“　すぐに獣になるな　”　ってことなの……」

そこで冬馬は何かに気付いたらしく、あつ、と叫ぶと、片肘をついて半分ほど身を起こす。

「さっきの『ケダ』ってよ、もしかして　“　獣　”　ってことか！？」

「そう」

「クリと頷いた桃乃を見て、失意の冬馬は草原にバッタリと大の字に倒れ込む。

「おい、また俺をケモノ扱いかよ……。勘弁してくれって……」

冬馬の憮然とした表情とは反対に、桃乃はくすくすと楽しそうに笑いだした。

参ったな、と咳きながらも、冬馬はその笑顔に完全に視線を奪われている。

「冬馬」

笑い終えた桃乃は片手を冬馬の胸の上にそっと乗せた。
トクントクンと一定な鼓動が右の手のひら全体に静かに伝わってくる。

「あのネックレス、明日からちゃんとつけるから。でも没収されないように気をつけるね」

「……ああ」

自分の胸に置かれた桃乃の手を包み込むように握りしめ、冬馬はそう答えると安心したように微笑んだ。

突きつけられた難題

「おい 術人ーッ ！」

宰条大学のキャンパスを悠々と歩いていた術人に、同じ学部で悪友の加賀美孝太郎がかなりの慌てた様子で駆け寄る。

「どうした孝太郎、そんなに焦つて？」

六月下旬の初夏の風を身に浴び、術人は涼しい顔で足を止めた。ようやく追いついた孝太郎は息を切らしながら早口で捲くし立てる。

「おいヤベーよ！ 今度の合コン、流れちまつかもしれないぜ！？」

それを聞いた術人はこれ以上ないくらいの爽やかな笑顔で微笑んだ。そして身長差を活かし、百六十六センチの小柄な孝太郎の首に素早く片腕を巻きつける。もちろん顔は依然として微笑んだまま。

「ぐはっ！ ゆつ 術人、何すんだよ！？」

「おいおい、ひどいな孝ちゃん！ 今回は君が手配してるんだろ？ 合コン隊長の名が泣いちゃうよ？」

「バツバカッ！ 何言つてんだよ！ 合コンが流れそうなの、お前のせいなんだぞ！？」

術人に後ろから抱え込まれた形になつた孝太郎はジタバタともがきながらも必死で叫ぶ。

「俺の？」

驚いた術人がロツクしていた腕を離す。

軽い酸欠不足に陥つていた孝太郎は慌てて何度も深呼吸をし、新鮮な空気を肺の隅々にまでたっぷりとまんべんなく送り込んだ。

「「ゴホッ……、つたく自分は合コン王のくせによく言ひやが。しかし相変わらず女が絡むと容赦ないよなあ 術人は」

「それより孝太郎、俺のせいってどうじうことだよ？」

「それがさ、今回の合コン、女の子の手配しているの桜子なんだよ

「えつ、それマジ！？」

「 術人の声のトーンが変わる。

「マジだよ。お前が昔あつさりと振っちゃつたあの桜子さ」

「 術人は「参ったなあ……」と言つと頭に手をやる。

安部 桜子あべ さくらこは宰条大学の英文科一年に籍を置く学生で、以前、 術人も参加した合コンで知り合つた女性だ。

その合コンで 術人をいたく気に入つた桜子は猛烈なアプローチをしたのだが、それまで美人の誘いを断つたことのない 術人がなぜかその時は桜子の誘いをつれなく断つてしまつていたのだ。

「あいつさ、合コンのメンバーの中に 術人がいるつて知つたら、急に“ 気が乗らないから止めようかしら ” なんて言い出してきてんだよ。どうする？」

「どうするつたつて……」

「なあ、なんとか合コンやれるようにお前が桜子を説得してくれよ」「俺が！」

焦つた 術人は半歩後ろに下がる。

「無理無理ッ！ クラッシュして黒煙が燻つて いる車に大量の純正オイルを浴びせかけるようなもんだよ！」

「ハハッ、なら豪快な火柱が立つて ちょっとしたキャンプファイヤー状態になるだろうな。 術人、なんなら俺、お前らの側でマイムマイムでも踊つてやろうか？」

「茶化して いる場合かよ、考太郎……」

消沈する 術人を十五センチ下から見上げ、考太郎は幼児のように

口を尖らす。

「でもよ、どつちにしたつてこのままじゃ女の子集まんないぜ？お前ほゞじやないにしても桜子の顔の広さは術人もよく知ってるだろ？俺が声かけた他の奴らもすげえ楽しみにしてるんだ。だからここはひとつ、お前が桜子のご機嫌とつてさ、なんとか合コンできるようにしてくれよ？」

「う～ん……」

術人は唸りながら腕組をし、本音を吐露する。

「俺、あの人苦手なんだよな……」

「分かるぜ術人。美人だけど性格超キツイからなー桜子は……。でもよ、俺達はお前と違つて、久々の女の子達との魅惑の一時を一日千秋の思いで待ちわびているんだ。だからとにかく頼むわ。第二の方で桜子を待たせているからさ、今すぐ行つて説得しててくれよ、な？」

「…………」「…………」

やがて観念したような小さなため息が孝太郎の耳に届く。

「……まあとりあえず話してみるよ」

「よしつ、よく言つたあ！ 桜子に引っぱたかれそうになつても、お前は逃げ足速いから大丈夫だ！ もし万一の時は俺がお前の骨を拾つてやる！ だから安心して特攻して来い！」

「お前、人事だと思つて好き勝手なこと言うなよ……」

「でも術人、お前も今回の場合に相当賭けてんだろ？ 桜子の火炎地獄から無事に生還できたらよ、その後に待つてるのは夢の桃源郷だぜ！ なつ！？」

孝太郎なりに考えた必死の励ましも、今の術人にとってはまったくの逆効果だ。

段々と気が滅入ってきた衍人は片手で顔半分を覆う。

「孝太郎、もし話が流れても恨まないでくれよ……？」

「いや、お前ならやれるツ！俺は信じてるぞ！いつもの必殺絶妙トークで一発ビシツと決めてこいツ！頑張れ衍人ーツ！」

「じゃあ行つてくるよ……」

考太郎の励ましを背に衍人は嫌な予感を抱えつつ、学内にあるパ

ーラー、第二カフェへと足を向けた。

宰条大学の第二カフェは天井が低めの作りなので、中に入った衍人は一層背が高く見える。

ウッド調のカフェ内には明るい木漏れ日が窓枠からふんだんに降り注ぎ、まるでスポットライトのように衍人の顔を照らしていた。各テーブルでお茶をしていた女性達は誰もがお喋りを中断して、自分達の側を通り過ぎる衍人に見惚れている。

「あ、これ君の？」

テーブル脇に落ちていたハンカチに気付いた衍人は足を止め、それを拾い上げると近くにいた女性に差し出した。

「は、はい！ありがとうございます！」

ポーツと頬を染めてハンカチを受け取った女性に「どういたしまして」と優しく微笑みかけるとさらに先を進む。やがてカフェの一番奥でエスプレッソを飲んでいる一人の女性の姿を見つけた術人は、その側にスッと近寄った。

「……あら、お久しぶり」

かなり短めのショートカットで氣の強そうな女性が冷たい声をかけてきた。

「ども、桜子さん」

術人は多少引きつりながらもにこやかに顔に笑みを浮かべ、挨拶をする。

「今見てたけどあんたって相変わらず女にだけは愛想がいいわよね」
さつそくの容赦ない言葉だ。その隅々にまでに棘がある。

「そんな……。落ちていたハンカチを拾つて渡しだけだよ」

この南極ばりの極寒な雰囲気をなんとか緩和しようと、術人は精一杯優しく切り出した。

「あの、実は桜子さんに話があるんだけど……」

「あら、あなたが私に？ 何かの間違いじゃないの？」

その言い方はまだ意地悪さがかなりの幅をきかせている。

「またまた桜子さん、俺を苛めないでよ」

「あら苛めたのはあなたの方でしょ？ この私を振るなんて失礼な真似をしたの、あなたが初めてなんだから」

「ハハ……敵わないな桜子さんには……」

「衍人、最初に言つとくけど今回の合コンは無しよ」

冷たく、しかし威厳を感じさせる声が響く。まるで女王のような声だ。

桜子は小さなカップを手に、衍人を弄ぶようにニヤツと笑った。
「あんたの恋愛成就のお手伝いをするなんて真っ平じめんだからね」「桜子さん、俺以外にも参加する奴いるし、皆すげく楽しみにしてるんだよ。そこをなんとかお願いできなかな？」

桜子はフン、と言わんばかりに顔を斜めに向ける。

「嫌よ。大体あんたの魂胆、とつくに分かつてんのよ？」「俺の魂胆？」

「ウツキーの歐州文化概論」……」

桜子が言い放ったこの言葉に衍人は内心でギクリとする。

“ウツキー”とは宰条大学で教鞭をふるう、浮田教授の学生間ニックネームだ。

「衍人。あんた、確かにこのゼミ取つてるわよね」

「う、うん」

「あんたの今回のターゲットはこの特殊ゼミドー緒の真里菜でしょ。どう？」

「あ……」

桜子にピタリと当てられて衍人は言葉に詰まった。

「やっぱりね。おかしいと思つたのよ。あの孝太郎がさ、今回の女性メンバーに、秘書課の楠木真里菜くすのきまりなも絶対呼んでくれつてうるさかつたからね。問い合わせたら男のメンバーに衍人がいるって聞いてさ、それでピンときたのよ」

「さすがです、桜子さん……」

「まずはそこに座りなさい。そつやつて上から見下ろされると氣

分悪いわ」

桜子は視線で自分の田の前の椅子を指した。
衍人がおとなしく座ると桜子は急に冷たい表情を緩めてフフッと笑い出す。

「……でも交換条件次第では女の子集めてもいいわよ？ もちろん真里菜も呼ぶわ」

「えつ本当に？」

「ええ。この桜子さんに一言は無いわ」

桜子はもう一度フツと笑い、衍人に向かって流し目線を送った。
そのねぶるような妖しい視線に、現在、女豹に捕らえられた哀れな小動物の位置にいる衍人は硬い椅子の上で身を竦ませる。
「で、その交換条件とはなんでしょうか……？」

「いい！？ 私の交換条件はただ一つッ！」

桜子はその強烈な目力で衍人を射る。

「衍人、あんたには弟いるのよね？ その弟と一緒に連れてきなさいつ！」

「えつ！ 弟を！？」

「そ。あんたの弟ならきっと可愛いでしょ？ 私、最近年下にも興味出てきてんのよ。あんたが弟を連れてくるって約束するのなら、女の子は責任持つて集めるわ。どう？」

「ど、どうつてそれは困るよ！ 弟にだつて都合あるしさ。それに

俺の弟には今カワイイ彼女ができたばかりなんだ」

「彼女がいたつて別にいいわよ。二股三股かけてる奴なんか一杯いるじゃないの。衍人、あんたを筆頭にね」

「ちょっと待つてよ桜子さん！ それは誤解だよ！ 僕は彼女が出来たらその子としか付き合わないよ？ 色んな子と遊んでるのは彼女がない時だよ」

「なんですかー！？」

その術人の台詞を聞いた桜子の右眉が、即座に斜め四十五度に吊り上がる。

「術人、あんた私を振った時、確か彼女いなかつたわよね！？ ジや何ツ？ 私はあんたの遊び相手の価値も無かつたと、そう言いたいわけねツ！？」

ニースが綺麗に塗られた櫻の木のテーブルが小さく震えた。憤った桜子がその表面を激しく両手で叩いて立ち上がったせいだ。

今にも自分に掴みかかりそうな桜子の前で絶妙トークを繰り出す暇も与えられない術人は、焦りつつも必死にフォローを開始する。「いやいやいや！ そういうことじやない、そういうことじやないんだよ桜子さん！ 確かに桜子さんはすごく美人だと思うし、素敵な人だと思うよ？ ただ……」「ただ！？」

「お、俺のストライクゾーンではなかつたといふか、その……」「つまり、私はあんたの好みのタイプではなかつたっていうことね！？」

「…………う、うん。まあ平たく言つとそういう感じかな……？」

桜子は苛立ちを露骨に表情に出し、再び椅子に腰をかけると足を高く組み変える。

「そうよねつ、術人つて髪が長くつておとなしそうなタイプの女が

お好みだもんね！ 真里菜もそつだしさ！」

「少し落ち着いてよ、桜子さん……」

桜子は横に顔を背けたが、視線はしっかりと憎い相手を捉えたま
まだ。

「でも衍人、いくらあんたでも真里菜はそう簡単に落ちないとと思
わよ？ 噂で聞いたんだけど、真里菜って典型的な箱入り娘でさ、
中学から高校まで一貫して女の園で過ごして来たせいで男の免疫ゼ
ロみたい。だからガードの固さは鉄壁らしいわ」

「ああそな……なるほどね……」

今までの自分のアプローチに対する真里菜の反応の数々を思い
出して、衍人は一人納得する。

「じゃ、私は用があるからこれで失礼するわ。あんたが弟を連れて
くるつて約束するなら、合コンはめでたく開催よ。ダメなら今回は
お流れ。決心ついたら早めに連絡ちよついだ。あ、それとこのお
勘定お願ひね」

桜子は伝票を衍人の前にパサッと放り投げるよう置くと、さつ
さとカフェを出ていった。

「……例えるなら “ 行くも地獄、戻るも地獄 ” ってところだ
な……」

カフェに残された衍人は張り詰めていた緊張を解くと、テーブル
の上の伝票を手に取りながら大きくため息をついた。

迫られる決断

その日、術人はいつもより早く帰宅した。そのおかげで帰宅早々に麻知子から、

「あらあら、ずいぶんお早いお帰りね！ 明日は空から槍でも降つてきちゃうんじゃないかしらあー？」

と皮肉が混じった嫌味の洗礼を受ける。だが、本日の桜子との交渉でダメージを受けている術人に反論する気力は残されていなかつた。

「ああ母さんの言つ通り、たぶん明日はこの世の終わりだよ」と答えて自分の部屋に戻った術人はそこである事実に気付く。

（ 分かつた 僕なんで桜子さんが苦手なのか ）

桜子の少々きつめの性格やベリーショートの髪型が、母の麻知子にどことなく似ているせいで無意識に恋愛対象から外し、敬遠していたのだ。

（ 冬馬を合コンに参加させる、か…… ）

術人はべつに寝転がり、突然我が身に突きつけられたこの難題を解決する妙案は無いかと模索し始めた。

今回の合コンがご破算になれば、真里菜を狙っている自分はもちろん、女性陣との楽しい一時を待ち焦がれている孝太郎達も皆一様にガッカリするだろう。

やうかといつて冬馬を誘い出す上手い口実も思いつかない。

しかも今の冬馬には桃乃といつ彼女もいる。一人の今までの経緯を知っている身としては、できれば冬馬を合コンには出したくなかった。

それにこんなことを頼んでも冬馬も多分承知しないだろうということは、今までの桃乃への並々ならぬ想いを見てきている衍人には充分過ぎるほどよく分かつている。

(どうしたもんかなあ……)

窓の外に広がる藍色の空を眺め、色々と考えている内につたた寝をしてしまっていたらしい。

誰かがそつと自分の肩をゆさぶつていてことに気付いた衍人は目を開けた。

「起きたか兄貴」

薄暗い室内に部活を終えて家に戻ってきたばかりの冬馬が立っている。

「メシだから兄貴を呼んで来いつて言われたんだ。兄貴疲れているみたいだから寝かせとこつかとも思つたけどさ。電気つけるぜ?」

「あ、ああ」

部屋の照明が冬馬の手でつけられる。

暗闇に慣れきっていた視界を上空から光の洪水が襲い、衍人は片手を顔の前にかざすと眩しそうに瞬きを繰り返した。

「でも珍しいな、兄貴がこんな時間に家にいるなんてさ」

「お前まで母さんみたいな事言つなよ。帰ってきて考え方してたら

眠つちまつたみたいだな

「今日は兄貴の好物ばかりテーブルに並んでるぜ？ 久しぶりに兄貴が早く帰ってきたから、母さん張りきったのかもな」

それだけを伝えると、冬馬は部屋を出て行く。

衍人もすぐにベッドから立ち上がり、そのまま一階には下りずに冬馬の部屋へ足を踏み入れた。

「どうした兄貴？ 僕もメシ食いに下りるぜ？」

室内に入ってきた兄に、冬馬は背負っていたスクールバッグを下ろしながら振り返る。

「冬馬ッ！ 済まないがお願ひがあるつ！」

衍人が選んだ戦法は弟の温情を期待した泣き落としスタイルだった。

思いつめた顔で両手を合わせ、悲痛な声を出す。

「な、なんだよ急に！？」

いきなり自分を拝み出した兄を見て、冬馬はかなり驚いた様子だ。
「頼むッ！ 悪いが何も言わずに来週俺の大学仲間でやる合コンに
出てほしいんだ！」

「合コン？ 僕が？」

「ああ、実は相手の女の子達がどうしても俺の弟が見たいってきかないんだ。で、連れてこないなら合コン取り止めるって言い出してさ。合コンが中止になると、俺もそうだけど仲間も皆ガツカリするし、正直なところ、両方からの板挟みですごく困ってるんだよ。だからここは一つ、俺を助けると思って！ 頼む、冬馬！」

部屋の中に一つ、パシンと拍手を打つ音が景気良く鳴り響く。

明神さながらに恭しく拝まれた冬馬はしばらく動きを止めて沈黙した。そしてその数十秒後、制服のジャケットを脱いで椅子の背に

かけ、ブルーのネクタイを外しながら口を開く。

「……別に出るだけでいいんなら、それに出てもいいんだけどさ。兄貴には最近色々と世話になってるし、兄貴が俺に頼み事するなんて滅多にないしな」

「マジで！？」

思つても見なかつた色好いその返答に衍人の声が弾む。

「でも兄貴。今の俺には桃乃がいる」

冬馬は言葉の一つ一つにはつきりと自らの意思をこめる。

「兄貴、俺のポリシーの一つに“自分がされて嫌なことは自分も絶対にしない”っていうのがあるんだ。もし、桃乃が誰かに頼まれて仕方なくでも合コンに出たとしたら、俺はやっぱりそれは絶対に嫌だし、許さないと思う。兄貴を助けてやりたいのは山々だけど、だから俺は行くわけにはいかない。悪い、兄貴。役に立てなくて」

結局ほほ予想通りだつた弟の答えに衍人は力なく微笑んだ。

「そうか……。いや、無理な事を言い出した俺が悪いんだよ。済まなかつたな……」

「元気出せよ兄貴！」

冬馬は力づけるように衍人の左肩を強めに叩く。

「今回が最後の合コンってわけじゃないんだろ？ 兄貴ならまたいくらでもそんなモン出るチャンスあるんだろうし、そんなに落ち込むなつて！ サ、メシ食いに行こうぜ！」

冬馬は先に一階に下りて行き、一人残つた衍人はその場でしばし

思案に暮れる。そして冬馬の後を追つて部屋を出て行く間際、独り言を呟いた。

「……仲間に責められるのを覚悟して潔くすべてを諦めるか、それとも奸計を巡らせて何とか冬馬を抜き出すか……。いずれにしてもどちらかを選ばないとなあ…………」

部屋の照明が静かに落ちる。

蒼ざめた室内の中で、迷う行人の残した言葉が漂いながらゆつくりと消えていった。

四人の約束

力ノン周辺の新緑もますます色鮮やかになつてきた七月第一週、金曜の昼休み。

「あ～早く夏休みにならねえかなあ」

中央塔中庭の大木に寄り掛かりながら冬馬がぼやいた。右隣に座つている要がすぐに「同感だ」と相槌を打ち、「でもそんなに待ち遠しい予定があるのか?」と尋ねる。

すると冬馬は一ツと笑うと反対隣に座つている桃乃を親指で指した。

「いや別に大きな予定はないけどよ、夏休みになつたら桃乃と田一杯一緒にいられるからさ!」

「あ～ら、またまた冬馬のノロケが始まっちゃつたみたいよ～?」
沙羅が呆れたように言い、桃乃は頬を朱に染めてその場で小さくなる。

中庭に降り注ぐ初夏の日差しが眩しい。

五月中旬に行われた「グリーン・スケッチ」で行動を共にして以来、昼休みはこの場所で四人一緒に昼食を取るようになつていた。

「今さらだが、お前つて本当に倉沢さんが好きなんだな」

「ホントホント! あたし、男の子にこんなに好かれるモモが羨ましいよ!」

恥ずかしがる桃乃とまったく照れない冬馬を交互に見ながら、要と沙羅が感想を漏らす。

「ハハツ 悪イ悪イ、つこまた本音が出ちまつたなつ」

「冬馬はいつでも本音が出すぎなのよねつ」

「それでいつもその場の空気が読めてないのが特徴だ」

「W a o ! 要、良い事言つー！それ冬馬を表すのにピッタリの表

現だよ！ ね、モモモモモモ思わない？」

「……うん、同感」

「おー、桃乃までなんだよー！？」

笑い声が一気に湧き起つた。

その声が収まると沙羅が田の前の冬馬と顔を見でしみじみと言つて出す。

「でもあたしね、ここに入学する前はカノンの男の子達とこんなに仲良くなれるとは正直予想していなかつたよ」

「まあな、ここは校舎もグラウンドも完全分離だし男女の交流に厳しいからな」

田にかかる前髪を要が邪魔そつにかきあげる。

「しかもよ、ここは男女交流の規則つて下らないことばかり細かく取り決めてあるんだよな。休み時間に互いの校舎に行くのは禁止で昼休みのみOKとかよ。あとノートの貸し借りも確か駄目だつたな。意味分かんねえよ」

「でもさ、今こいつやって四人でお皿こじりでランチ食べるの、すつゝく楽しいよねつ？」

「そうだな！」

「もうつ！ 今のは冬馬に聞いてないんだけどー！？」

要に相槌を求めたのに、先に冬馬に返事をされてしまい、少々むくれた沙羅が突っ込む。

「それに冬馬は単にモモに会えるから楽しいんじょー？」

「分かつてんじゃん！」

パック牛乳のストローの袋を破りながら冬馬は清々しい顔で答え

る。まつたく動じる事のないその様子に沙羅は肩をすくめ、完全に降参しました、というジロスチャーを出した。

「“恋の病につける薬なし”とは昔の人はよく言つたものだよね。……それにして冬馬、今日はいつにも増して随分ご機嫌じゃない?」

「相変わらず鋭いな沙羅は」

ストローを口に咥えているせいで返ってきたその声は少々くぐもつている。

「うん、だつて妙にテンション高いんだもん。なんかいい事あつたの?」

「ここに来る前に保健室に寄つてから来たんだ。で、保健室に身長測定器あるだろ? それで身長測つたら、背が伸びていたんだよ」「へへ、何センチになつてたの?」

「やつと百八十のライン到達だよ。あともう一息だ

「あと一息?」

「あ、いや、なんでもねえ。」Jリーチの事

冬馬は少し慌てたように沙羅に向かつて手を振った。

「それより冬馬、保健室に用事つて何だつたの?」

そう尋ねた桃乃の表情には少し心配げな色が浮かんでいた。

「ん? いや大した用事じゃないんだ。さっきの体育、サッカーだつたんだけどさ、ちょっと腕にかすり傷出来たからバンドエイドもらいにいっただけさ」

冬馬は左肘を桃乃に向けて見せる。バンドエイドで覆い切れていない、赤く擦れた傷口が痛々しい。

桃乃はそつとその部分に軽く手を触れた。

「……痛くないの?」

「全然」

そのやり取りを乙女モードに入った沙羅が田をきりきりさせながら見つめ、はしゃいだ声を上げる。

「Wao! モモは冬馬の背が伸びたことより、なんで保健室に行

つたかの方が気になつたんだ？ さすが彼女になつた女の子は気の付くポイントが違うねー！」

その沙羅の指摘に冬馬まで顔をほほりぱせ、同じよつて田を輝かせる。どうやら伝染したようだ。

「なるほどな！ 桃乃は俺が心配だつたつてことかー。」

「良かつたね冬馬！ それって愛だよ、愛ー。」

「そうだよな、これつて愛だよなー。」

「ちよつ、ちよつと……！」

と赤くなる桃乃。

(しつかしここいつら三人を見ると本当に飽きねえな)

田の前に展開される二者三様の光景に、要は笑い声を殺すのに必死だ。

「それで冬馬、今週末はモモとビーフィートに行くの？」

新たに湧いて出た次なる好奇心に、再び田を輝かせた沙羅が胸の前で手を組み合わせる。これは毎週金曜日に必ず沙羅が冬馬に尋ねる、もはや恒例と化しつつある質問だ。

「お前毎週同じ事聞いてくるよな」

と半分苦笑しながらも冬馬はその問い合わせにすぐに答えた。

「土曜は牟部神社の祭りに行くぜ。な、桃乃？」

「あーついいなあ！ そつか、明日は七夕だもんねつ

「ねえ沙羅も一緒に行かない？」

と桃乃が誘う。

「ええつー？ いいよいよ！ デートのお邪魔になっちゃうもん

！ ねーつ、冬馬？」

「いや、別に構わないぜ？」

飲み終えた牛乳パックを潰していた冬馬はあっさりと答える。ま

つたくの予想外だったその言葉に、沙羅はポカンと口を開けた。

「うわあ～……」

「なんだよ沙羅？」

「だつて冬馬がそんな事言うなんて信じられないよー。絶対モモと二人きりになりたがると思ったのに！ 一体どうこう風の吹き回し！？ 何か悪いものでも食べたー!?」

「食べてねえよ」

遠慮のない沙羅のストレートな疑問に冬馬は再び苦笑する。

「実はこの間桃乃と話してたんだけどさ、俺らってまだプライベートで遊んだことないだろ？だからちょいとうどい機会だと思つてさ。だから要も来いよ。明日の夜、都合つくか？」

要は少し考える素振りを見せる。

「明日か……。一応空いてるけどな

「じゃあ決まりだな」

「あつ、ちよつと待つて冬馬ー。」

沙羅が慌てて手を上げる。

「ごめん！ 実はあたし明日予定あるんだ。久しぶりにパパとデートなんだよね。でも牟部神社の七夕祭りって確か明後日もあるよね？ みんな日曜日はダメなの？」

すると桃乃が申し訳無さそうに言ひ。

「ごめんね沙羅。私、日曜は予定があるの

「モモ、どうかに行くの？」

「うん。日曜は日帰りでお母さんの実家に行かなくちゃいけないの。お爺ちゃんの七回忌で」

「そつかー……」

「あ、日曜なら俺も予定があるからバスだ」と要も口を挟む。

「え、要も日曜ダメなの？ うーん……。じゃすつじく残念だけど、

あたし今日は諦めるよ！ 土曜は三人で楽しんできたり？「いや、それなら俺も遠慮しどぐ。一人で楽しんでこいよ」沙羅と要にそう言われ、冬馬は考え込んだ。

「今日はダメか……。じゃあよ、比良敷の花火大会はどうだ？」

沙羅がパチンと指を鳴らす。

「あつ、冬馬それナイスアイディア！ あの花火大会つていつだけ？」

「八月に入つてすぐじゃなかつたか？」

「確かに土曜日だつたよね？」

「じゃ、今度こそ決まりだな。要、そこの予定空けておいてくれよ？」

「ああ分かつた」

要が参加する事になり、沙羅のテンションがますます上がつた。「やつた～！ あたし絶対その日は浴衣着ていじりつと～！ モモも着るでしょ？」

「うん。楽しみだね、沙羅」

「ホントだね！ でもモモはまず明日に全力投球しなくっちゃ！ 明日も浴衣着ていくんでしょ？」

「うん。そのつもりだけど」

「そうだよね～」

と言いながら沙羅はHへへと笑い、意味ありげな視線を冬馬に送る。

「ねつ、冬馬！ 明日、モモの浴衣姿を見るの、すごく楽しみでしょつ？」

「ああ。明日が待ち遠しいよ」

照れない男は未だ健在だ。

「あははっ、相変わらず正直だよねつ冬馬は～。ねつモモッ、こうなつたら明日はヘアスタイルにもメイクにもしつかり気合入れてさ、

冬馬を思いつきつ惱殺しありやうとこよー。」

「のつ、惱殺つて……」

「いいね惱殺！俺、明日すげー楽しみにしてるぜ桃乃！」

「バ、バカじやないの！？ 惱殺なんてするわけないでしょっ！」

(「こつらのやり取り見るとマジで面白い。インスペクレーション
が刺激されるな）

冬馬と沙羅にからかわれ、真っ赤になつて否定している桃乃の正面で、要是声を殺して笑う。そして脳内にいくつか浮かんできた今 の詞のフレーズを忘れないよう、次々に海馬の中に叩き込みだして いた。

七月七日、夏の宵。

水平線めがけて滝のように流れる銀河を挟み、織姫と牽牛が逢瀬すると伝えられる七夕の夜だ。しかし新暦のこの日では、織姫星ベガはまだ東の空の半分ほどの位置で、牽牛星アルタイルにいたつてはまだ東の空に昇つて間もない。

そんな少々見栄えの劣る夜空の代役を務めるかのように、牟部神社の境内では様々な色が満ち溢れていた。
所狭しと軒を連ねる露店。

その先に吊り下げられた色鮮やかな提灯や小型電飾が、祭りに訪れた人々的好奇を誘う。

そんな眩い光が照らす石畳の上を楽しげに行き交う群衆の中に、桃乃と冬馬も完全に溶け込んでいた。

桃乃の右手は冬馬の左手の中だ。しつかりと握られている。

カラ、口口と軽やかな音。

赤い漆塗りの下駄は石畳の上で上品な音を奏でる。
その音が耳に届く度、普段着慣れていない浴衣を着ているせいもあつて、桃乃の心は落ち着かない。

「桃乃、金魚すくいでもやるか？」

夜店の一つで冬馬が足を止める。

「ううん、いいよ。だって金魚取つても家に水槽ないもの」「じゃあクレープ食うか？」

すると桃乃は困り顔で左手で握つていいビールの袋を、ほんの少しだけ上に掲げる。

「だつて冬馬も「こんなに買つてくれてるじゃない。私こんなに食べれないよ?」

その中にはわた飴、ベビーカステラ、リンゴ飴などの食べ物勢に加え、冬馬が射的で取つた真っ白なネコのヌイグルミが袋から顔だけを覗かせ、すました顔で一人に行き合っていた。

「食いきれないなら葉月にやれよ。あいつなら喜んで食うだろ」

冬馬は笑いながら桃乃の手を引き、一人はさらに奥に進む。やがて田の前に広がつた光景に桃乃が思わず「綺麗!」と声を上げた。

境内の一一番奥まつた場所を中心て沢山の笹竹が用意され、色とりどりの願いをこめた短冊が吊り下げられている。それらがさわさわと夜風にはためいているその光景は、どことなく幻想的な雰囲気すら醸し出していた。

「しかしすごい数だな」

そう言いながら笹竹の群れを眺めていた冬馬は、上方で風になびいていたある短冊にふと目を留める。手を伸ばし、枝をしならせてその短冊を強引に手元に引き寄せるが、しばらくの間それをじつと見つめていた。

「なにが書いてあるの?」

下駄の先を斜めにして爪先立ちになり、冬馬のTシャツの袖に掴まるか横から覗き込む。

幼い子供が書いたのであるが、たどたどしい文字の一部が視界に入ってきた。天の川に向けたその願いを、桃乃は声に出して読み出す。

「えっと、『まくはおおきくなつたら…』

しかしそまだ桃乃が読んでいる途中なのに、冬馬は掴んでいた短冊から手を離してしまった。しなつていた枝が戻る反動で、短冊は元あつた高さにあっけなく急上昇してゆく。

「あ！」

慌てて上を見上げたが、たくさんの笹の葉に隠れて桃乃の位置からその短冊は見えなくなつてしまつた。

「もう、私まだ読んでなかつたのに……。あれになんてお願ひが書いてあつたの？」

しかし冬馬はその質問には答えず、いきなり別の提案をしてきた。

「俺らも短冊書いてこりやせー。」

「え？」

「桃乃だつて願い事の一つか二つはあるだろ？」

「うーん……、でもほら、見て？」

桃乃は境内の右隅にある社務所を指差した。

「申し訳ありませんがこちらで用意した短冊はもう残りわずかです！」

と何度も叫んでいる声が聞こえ、そこには大勢の人が群がっている。

「あんなに混んでいるし、用意した短冊もあとわずかですって言つてるもの。小さい子もまだ並んでるし、譲つてあげなきゃ」

冬馬は残念そうな唸り声を上げた。

「短冊無いのかよ……。こんなことなら用意してくつやよかつたな

「そんなに叶えて欲しい願い事があつたの？」

「まあな。俺の最終野望みたいなもんだ」

そう言つと冬馬は腕時計に手をやる。

「もうこんな時間か……。そろそろ帰るか？　あまり遅くになるとじさんとおばさん心配しちまうだらうか」

「う、うん」

でも本当はまだ帰りたくなかつた。

しかし家の心配をしてくれている冬馬に、自分の気持ちを言い出せない。

「足、痛くないか？」

神社の鳥居を出たところで浴衣姿に下駄履きの桃乃を冬馬が気遣う。

はぐれないように、といつも田で繋いでいる手にわずかに力をこめられ、鼓動が早まる。

「うん、大丈夫」

「まだ歩けるなんなら」

冬馬が桃乃の手を引く。冬馬が進もうとしている道は一人の家に戻る道をわずかに逸れるルートだった。

「えつ、どこに行くの？」

振り返り、冬馬が笑う。

「ちょっとだけ遠回りして帰らうぜ？」

頬が染まる。

すぐにその言葉の意味を理解した桃乃は小さく頷いた。
少しでも長く一緒にいたいのは同じ気持ちだった。

「比良敷の川沿いの道を通るか」

この街で一番大きい河川、比良敷川の側を一人は手を繋ぎながら歩く。

川の上流から吹いてくる夜風が心地良い。

「楽しみだよな、今度こここの花火を見に来るのさ」

歩くペースを桃乃に合わせ、冬馬はゆつたりと歩を進める。

「沙羅なんかすげえテンション上がってたじゃん？ 絶対あれは要も来ることになつたからだぜ」

桃乃は「そうだね」と同意し、小さく笑う。

「でもさ、あいつら、結構似合いだと思わないか？」

「うん、一人とも性格が全然違つから初めは合わなそな気がしたんだけど、今は私もそう思つ」

「要が沙羅に振り回されちまうんだよな。でも最近じゃあいつも慣れたのか、沙羅に冷静にツツ「こんでる時があるじゃん」

「でも沙羅にはあまり通じてないような感じだけど……」

「ああ、それは言えてる」

川べりをゆつくりと歩く二人はやがて花火を打ち上げる中州のポイントに差し掛かる。

「桃乃是去年見に来たのか？ 比良敷の花火」

「うん。見に行つたよ」

「誰とだよ？」

「クラスの女の子達と。総勢六人で」

「いいよな……、俺も一緒に見に行きたかった」

「冬馬、去年見てないの？」

「ああ。俺部活があつたし」

その返事に桃乃是心中でそつと思つ。

(じゃあ冬馬は知らないんだ、あの花火の噂のこと)

去年、この街の夜空に四百メートル級の大輪の華が咲いた。

それは比良敷の花火大会のクライマックスに華々しく打ち上げられた新作花火。

“ロマンスフラワー”だ。

この新作花火が観衆に披露された明くる日、各新聞では夜空に咲いた満開の様子を一面で大々的に掲載し、その規模と美しさは大いに話題を呼んだ。

そして夏も終わり、この花火の話題が人々の脳裏から消え去ろうとする頃、大勢の観客の心に残したあの夜の感動が形を変えて新たな都市伝説として甦る。それは、

“ロマンスフラワーを恋人同士で見に行くと、その一人は将来結ばれる”

というものだった。

(今年は冬馬と一緒にこの花火を見るんだ……)

今度は頬だけではなく、顔全体が熱くなつてくるのを感じる。桃乃は顔の火照りを落ち着かせようと胸元に手を当て、冬馬に気付かれないように何度も小さく深呼吸を繰り返した。

「そうだ桃乃。俺、お前と付き合つてること、この間親に言つたよ

空に滲むように浮かぶ細い三日月を見上げながら冬馬が口を開く。ドキリと波打つ胸を抱えて隣を見上げると、川べりを吹く夜風が冬馬の前髪を静かに揺らしていた。

「おじさんとおばさん、なんて言つてた……？」

「それが拍子抜けするぐらいあつさりとしてんだ。母さんからは“いい娘なんだから絶対大切にしなさいよ”って言われて、

オヤジは一言 “ そうか ” って言われただけだった

「 そりなの……。良かつた」

「 桃乃は俺と付き合つていること言つてるのか……？」

「 うん。でも話す前にお母さんに先に見抜かれちゃったの。それでお母さんからお父さんに話したみたい」

今度は冬馬の顔が心なしかわざかに強張る。

「 も、それでおじさん、なんか言つてたか……？」

「 ううん、特に何も。今日も冬馬とお祭りに行く時にお父さん家にいたんだけど、何も言われなかつたし」

「 そつかあ……」

冬馬は心の底からホッと息をつく。

「 実は付き合い反対されたらどうしようかと思つてたんだよな……」

「 全然大丈夫だよ？ お母さんなんかすっごく喜んでるし」

「 俺の母さんもだ。」(つづき)時、親同士が知り合つていつのいいよな

よな

「 そりだね」

密かに気になっていた相手の親の反応をそれぞれ知り、安堵した
一人の顔に自然と笑みがこぼれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4883x/>

トライアングル・スクランブル

2011年11月21日16時46分発行